
パンツ脱いたら通報された

烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツ脱いだら通報された

【Nコード】

N6663Y

【作者名】

烈火

【あらすじ】

俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言っちゃって、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。あれだぜ？俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いんだからな。19歳になっても少女で押し通してる凄人なんだからな。……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。これで逮捕されるの何回目だよ。

1・俺、無職

「時というものは残酷なものである。9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのここぞというときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいがなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。おまえらのエースこれでいいのか？」

「ニートの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましたが帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。ここ、俺の部屋なんだから……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。あまり変なことしないでね？」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと？」

「ちょっとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちよつとした冗談のつもりだったが、意外になのはは怒ってきた。

「もう……そういう冗談は禁止だって言ったでしょ？ まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなっていてまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちよつとなんで知ってるのッ!？」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。地味に首が絞まって痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。俺の親となのはの親 土郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていまもそういった関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？ 今日19時に帰ってくるとメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちよつと帰りが遅くなりそうだから」

らそれを伝えようと思って」「

「そんなことでここまで？ あいかわらずやるのがすげえな。え〜っと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」「

「そうそう、機動六課だよ。ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよな〜」

「いつもバタバタしてるじゃん。俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。まあ、そういうことからだからちよっとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。ごめんね！ 夕食用意しようとしてたんでしょ？」「

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ！？」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。恐ろしいほどに無表情でこちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！！

「まあ、事情はわかったよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパーにでも買って食材買って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。一人分

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たところであるとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、初 ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

1・俺、無職（後書き）

どどもども、烈火です。基本的に息抜き投稿にはなりますが、きちんと仕上げていきたいと思えます。

一話あたり2000文字くらいを目処にしていますのでさっくり読めるかと。

2・ちょっといい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであつたのだが

「牛乳がないとなのはが怒るもんなー。どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。あーでも行きたくないなー」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしようがなく牛乳を買ってくることにした。落ち度は自分にあるんだししようがないよな。

「あ、そうだ。このひよつとこ仮面を装着していかないよ」

机の上に無造作に放り投げられていたひよつとこのお面をつける。そういえば昔はこれで泣いているのはに追い打ちかけたっけ。

ひよつとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買ってこなければあんなことにはならなかったのに……

「あ、あの！　なのはさん！」

「ふえ？」

ポツキーを食べながら仕事をやっている、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。もしかして書類仕事でわからないこともあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちよつと言いにくそうにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話するときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにした。やがて意を決したようでスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ！？」

「ぶっ！？」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。その場で残って仕事をしていた面々は面喰らったような顔をしてなのはとフエイトのほうを交互にみていた。みるとフエイトのほうも驚きのあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中であつた。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか!？」

どうすればいいのかはこつちが教えてほしい。なのははそう思った。一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のことの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思つていたのだが

「って、ちよつとまつて！ どうしてスバルがそんなこと知ってるの!？ 誰から聞いたの!？」

「そ、そうだよ！ 私もなのはも喋つてないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになつた書類をドライヤーにかけながらフエイトはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返つた。

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・はやて・リンフォースの計6人に視線を走らせるフエイト。そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちょっとまちいな！？　なんでいきなりうちって決めつけるん！？」

「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじやん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら凶星のようだ。

「ちょ、ちょっとまってーな！　いずれわかることなんやし、1年間ともに過ごす仲間なんやで？　やっぱりあまり秘密にするものどつかと思って、私はスバルに言ったんや。　うちもスバルがあんな行動に出るとは思ってなかったんよ」

「ほんとうに?」

「ほ、ほんとや!」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引っ張る。　フェイトが引っ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャロが

立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。もしかしてひよっこさんのことですか？」

キャラコがそう聞いてくる。

「えーっと、うん。ひよっこさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。確か自分が高校生のときに二人とも別々に彼に合わせたんだっけ。彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とか何とかいいながら、そばに置いてあったひよっこのお面をかぶって会いにいったんだ。それが二人にも受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。そうそうその他にも思い返せばいろんなことが

「僕もひよっこさんに女の子がいつぱいであるゲームももらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言い返せない自分が悲しい。　　とうかもつと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。　　お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしょっちゅうメールしてるみたいだし。　　母さんはお買い物まで一緒にいく始末。　　ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、ざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのはに合図して、みんなに着席を促した。

「君、その手に持っているブラを渡しなさい」

「そうやってクンカクンカする気だろう。　　貴様に嗅がせる匂いではない！　　去れ」

迂闊だった……。　　あ のとき、家を出るときに気付くべきであった。

フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。　　まず店内に入ってから他の客が俺のことを露骨に避けていた。　　そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……。　　もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思いきや……。　　まさか管理局員のおっさんに通報していたとはな。　　やることがあげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？　　俺も捕まえたくないの。」

今月で君のこと何回捕まえたと思ってるの？　こつやって俺と君が職務質問するの何回目か知ってる？　今月で10回目だよ？　なんで3日に1回は君のふざけたひょつとこお面を見なきゃいけないのわ」

「奇遇ですね、俺もなんで3日に1回の割合でおっさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だって同じだよ。　いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさつさとこい」

おっさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？　俺はひょつとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おっさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意！！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！　住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーっ……なるほどね。　こんなところに同志がいるとはな。もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおっさんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

2・ちよつとこい(後書き)

あのふざけた顔が結構好きです

3・おっさんと過ごす夜

「はい、それじゃ椅子に座ってー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。そこではおっさんと二人きり。みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。深夜におっさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがない。……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだつて深夜の密室という魅惑増量世界によつてその皮を脱いでしまっただけだ。

「あのかな……いつもはお前に冷たい態度をとってるんだけどよ……」

「ちょ、まてよ。俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかってる……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。どした、なにか嫌なことでもあったか？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症しまして。もう大丈夫です」

「そうか。まあ若いときは色々あるもんだからな。恋しかり友

情しかり」

「おっさんが言うときモイですね。そういえば、おっさんは結婚してましたよね？ 娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「まあな、これでも結婚してるぞ。娘は二人いる。長女が16歳で次女が7歳だ」

「離れてますね。でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やっぱお前もそう思うだろ！！」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんだ！ 家に帰ってくるのだって19時だし、この頃は化粧もしてる。それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けていいのを買ってくるようになった！ これは絶対男がいる！ 毎日毎日学校でプレイしとるぞ、絶対そうだ！ もしかしてお前か！ お前がその男か！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どことなく土郎さん

を思い出す。 土郎さんもなのはこのことになるとおかしかったからな。 授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。 父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも17歳なんですよ？ だったら19時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。 ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思ったただけかもしれないじゃん。 あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

頭垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。

「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど』

フェイトちゃんと二人で説明すること30分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんと伝わらなかつたらしい……

「やっぱりそうですよね！ なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っていましたんです。」

やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。
この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたら予想通りの答えが返ってきそつで聞けない。

「ち、違っつてばスバル！ わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだつて！ほんと奴隷みたいな扱いなんて断じてしてないから！ ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そうだよ！ どちらかというとな隷より主みたいだよ！」

確かにそれは間違つてないかも。我が物顔で家を占領してるし。

いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作るうとしてたし。あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だつたら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めたい。

「やめなさいよスバル。なのはさんたちも困つてるでしょ。それになのはさんたちは大人なのよ？ 男性と同棲くらいするわよ」

「そんな、ティア！？ ティアまでそんなこというの！ ティアだつてなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。けどね……だからつてなのはさんたちに当たつたら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスター。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きつとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは戻ってくるのよ」

「その手があつたか！」

訂正、この娘も暴走していた。というかい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまってください、こういうことは部屋に入った後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしなくていいよティア。絶対に思っていることと正反対のこという自信があるから。あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

フエイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。 なにか間違ったこと言っただかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるといっわけですね。流石なのはさん……これがエースというものなんですね……！」

「私勘違いしてました……！ やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方もお付き合いしないとダメなんですね！」

「とりあえずいまでのエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけどっ！？ 二人とも私が言ったことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが二人ははしゃぎながら席に戻る。

「ねえ、フエイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしつと抱き合いながら二人で呟く

「「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」」

こんなの絶対おかしいよ

「ただいま〜って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅していないらしい。日付だって変わったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38°で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけつたいなもの流行ったからだと推測する。それはともかく、目の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかというと……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはず。そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだってできてしまっわけである。流石だな、俺」

「ただいま〜、やっと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね〜……。あれから職場の空気がへんな空気になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐったりとした表情をしていていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいつてこいよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたの！ ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！ ただ、暇だったから沸かしたただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場に行く二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでもいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわってくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあつたことがないのである。

キャーーーーー！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた!!

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。

幼馴染が大変なことになっているんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！ そうだといってくれ！」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・テストアロツサがアヒルではしゃいでいた。……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知ってた？ 俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこっちをみてるんですけど。だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……?」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の
中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの
姿。

ああ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。

3 おっさんと過ごす夜(後書き)

／ つ ／ () ()

おっさんの使いやすさは異常です

4・無職の朝は早い

『おはよう、ひよっとこ。起きて、朝だよ』

「……………んあ？……………もうこんな時間か。せつかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……………」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジンジエルの目覚ましを止める。おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……………きょうはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューズを履き外へ出る。

うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。というより俺の朝は早い。まず起床時間からして頭がおかしいと思う。なんといつても5時起きだ。

といつてもこれにはちゃんとした理由があつてだな……………まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。

お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたるところだが、これは成長の証なんだと思う。なのはの胸は成長してないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。まあそれはおいといて

……………二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならぬ。ならもう少しだけ遅くおきてもいいじゃないかと思うだろ？けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。だから

らららつやっつて5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おつおつ……ひょっとこくんじゃないかえ……。 おはようなー
……」

「じいさんおはよう。 そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……」

ワンワン！ ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、じいさん。 じいさんが持つてるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ！？ わしとしたことがうっかりばーさんのTバックを持ってきてしもつた！」

ばーさん無理すぎだろ。 流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去ることにした。 じいさんはじいさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハ-

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。べつにシヤツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。あ、なのはとフエイトの下着発見。とりあえず分泌液でもつけておくか……。いや、さすがにそれはやめておこう。本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすっかな。意表をついて逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所にたつ俺。気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱい梅干しを敷き詰め中央に白米をそつと置いた愛情たっぷり逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフエイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサラダにミニスパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。とりあえずフエイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほど入れておきましょう」

作り始めて20分。　なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。　まあ、作り方は意外と簡単です。　まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。　コツはしっかりと粉吹きのとくに水分を飛ばすことと半熟卵のとりとろかんである。　これが意外と難しい。　それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？　お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。　食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。　お次はハムと目玉焼きを作って、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーブルの上へのせる。　ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

「ウルフ11　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいれていた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。　こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合って寝ている光景をみながらそう呟く。　なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいつてられない時間帯になってきた。　そろそろ二人

を起こさないと大変なことになる。

「ということで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！ 宗谷、もっとハゲしくう！』」

「……なにやってんの？」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝ごはんできてるからさっさと食べるぞ。そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。ほら、フェイトちゃん朝だよ」

「ううん……もっとお願い……」

「任せろ！ 『真奈美、僕も限界』」

「いや、そっちじゃないから」

フェイトからのアンコールに応えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする　ところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか

4・無職の朝は早い(後書き)

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパン通を使うことにします。あまり変わったようには思えませんが

「さて、二人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言ってみる。

「さあみなさん。現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テスタロッサの部屋でございます。みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。やはり女の子なんですね、とりあえずエロ本を置いておきましょう」

辺り一面にうさぎやカメ、猫に犬にカモメに白熊。どれもこれもチャームिंगな顔をしてやがる。こいつらが毎日毎日二人に抱っこされてると思うとうらやましくてしかたない。

「まあ、二人がいない間に物色するのもアレなんでさっさと掃除をしておおう」

クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。その心地よさにうっとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。まったく……可愛がってあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。さてと……
…今度こそ遊びに行くか

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様」

『お疲れ様です！』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。おつかれさま」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ！」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。 私たちのように。

「あ、そうだ。 みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか！？ もしかしてラブレターですか！」

「落ち着きなさい、スバル。 まだ早いわ。 もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。 ハア……ハア……テンション上がったわ……！」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 え
っと、これはですね」

「なのはさんの手垢！」

「汗が染みついてるわ！」

「ちょっと話を聞いてっ!？」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴って
くれる。 ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。 これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。
見る人は私とフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。
毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね？」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。 というか、
この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。 それでは解
散！」

「あ! なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう!」

「肌と肌をこすり合わせましょう！　大丈夫、なのはさんにならな
にされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見は!？」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよ!」

「うんそうだね、キャロ。　訓練でお腹すいてるだろうからいっば
い食べようね!」

「はい!」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか?」

「うんそうだよ。　彼が毎朝作ってくれるんだ。　これがなかなか
おいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸＝
間接キス。　間接キス……!」

「ちょっとまってスバル!? なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの!?!」

「スバル、まだ早いわ! 食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。ごめんね、ティア」

「あれ? 私には?」

なのはも大変だよ、家においても六課においても誰かに振り回されるような気がする……

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ! それじゃいただきまーす!」

パカッ

オープン 逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ 逆日の丸弁当

「あの……なのは?」

「……フェイトちゃん。一応、聞いておくよ? 今日のお弁当の中身になかな?」

「えっと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミートボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちょっと！ 逆日の丸弁当ってどういうことなの！？ なんでフイトちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの！」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領してる」

「ここまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわね」

「ちょっと聞いているの！ なんで逆日の丸弁当なのか聞いているの！ 私の質問に答えて！ って、留守電じゃん!？」

「落ち着いてなのは!?! 一人でノリッコミしてるよ!！」

怒りのあまりなのはが変になる。 というか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか？

「ん？ もう一つ箱がある。 あ、おにぎりが二つ。 それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな？ というか彼しかこんなことする人いないけど、それにしても

「許すまじ……!！」

「なのはさん、私のごはんどろぞー!！」

「むしろ私をどうぞ！」

タイミングが少しだけ遅かったかも

5・たのしいお昼(後書き)

なのは (#・・)

フェイト (*・・*)

弁当を開けたときの二人の表情

6 おっさんで遊ぼう(前書き)

今回のお話で行われる行為は絶対にマネしないでください

6・おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツッコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？　だってなのはだもん。　バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。　そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。　昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？　いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。　帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。　まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。　中央には噴水、そこから東にちょっといくと大きな芝生の遊び場があって、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。　いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカーボールでリフティングを開始する。　コ　ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままりフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。　ストラックアウトというものをご存じだろうか？　9つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。　一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。　　いまだ6枚抜き記録は破られていないらしい。　　いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。　　いったいどうしたもののか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。　　顔がバレないようにひょっとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるブラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。　　高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。　　現役という肩書が大事なのだ。　　高校を卒業してしまふとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。　　そう……なのはやフェイトのように。　　女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。　　アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。　　それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいに感じるがそんなことはない。　　線香花火が終わったあと

にやってくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わつたあとに彼岸の川で待つているであろう夫の元へと逝く。お別れのときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。もっとこう……ぶつけても怒られなさそうな人はいないものか。ん？ あそこにいるのおっさんじゃね？ いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理局員だよな、日本でいう警察官みたいなものだろ？ そのおっさんに向かってぶつけるということ、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。ただでさえブラックリストにのっている俺だ。こんなしょうもないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かとお世話になっているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも 男にはやらなければいけないときがある。こんなことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にさらせー！」

『うおッ！？ なんだいきなりボールが』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

全力で蹴ったボールは吸い込まれるようにおっさんの顔面へと熱いキスをしにいった。 おあついねえお二人さん。 ひゅーひゅー

俺はそのままダンス練習をしていた大学生の中に突っこんでいく

「ついに全国制覇だぞ、おまえら！」

『うおおおおおおおおおおおおお！！』

「次は国際大会だ！ てめえら、気合は十分かッ！！」

『よっしゃあああああああああ！！』

「おい！ その中学生、胸上げするからちよつとこい！」

「えっ！？？」

ノリのいい大学生に捕まって胸上げされる中学生。 なんか忘れていたような気がするがいまはこの幸せな気分を味わっておこう

「みんなありがとう！ みんなのおかげで俺はここまでこれた！ 本当、おまえらは最高の仲間だったよ！」

「……………そうかそうか、よかったな最高の仲間ができて。 大切にしろよっ。」

「うん！」

「いい返事だ。ところで、なにか重要なことを忘れている気はないか？」

「いや全然！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。貴様の現行犯逮捕の瞬間だ、ひよっとこ！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。おっさんいつの間人間皮を脱ぎ捨てたん？

「ごめんなおっさん、足が滑って」

「嘘つけ！ 貴様のセリフは聞こえとつたわあ！！！」

「きゃあああああああ！ おっさんが俺のケツ穴を狙ってくる
づづづづづづづづづづづづづづ！！！」

「逃げながらお前は何言ってるんだっ！？」

そこから始まるおっさんと俺の追いかっこ。残念だったな、おっさん。これでも俺は50m走で5.7を叩きだした男だぜ？

「待てといっておるだろつがあああああッ！！！」

アメンボ走法で走ってくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であった。

6 おっさんで遊ぼう(後書き)

／
（
ノ
／
（
ノ

おっさんの本気走り

7・MとMと ときどきsと

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。道行く人が振り返ってただこれからおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。今日の夕食はなのはが好きなものにします。でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまふからです。ごめんねフェイト。絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツッコミがはいていた。これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこそばと煮物でいこうと思います。では助手のミクくん、説明を」

「はーい！まずは材料の説明です！ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。お酒とお塩に包むための大葉と一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。あ、ベツにカイワレはなくてもいいです。そしてちよつとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありですね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるので、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。ミクには関係ないですけどー！」

「はっはーミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」

「そ、そんなっ！ て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていきますが、シンプルに大根だけにしときましよう。 ippそのことふるふき大根にするのもありだな」

ふるふき大根にするためには米のとき汁が必要なんだけどたっぷり水と少しのお米で代用しちゃうおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいれればいいからもうやることはないな。 久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。 とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。 正直俺も取るこ

とができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅここと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん　あっ！　くくく！　！」

フェイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。　今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもっと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ!？」

「ごめん、フェイトの胸見た。　ほんとムッチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！ リセットシユ取って！！」

「うん！」

「ちょっ！？ なのはかけるとこ間違ってる！ 俺じゃなくてバツクだろ、そういうときは！？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わ〜！ なのはが好きな料理だ！ やったあ！」

「へ、へ〜！ あんた、この料理好きだったんだ。わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ！ し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫？ 無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら！ 二人とも早く食べようよ！」

「うん、そつだね!」

「それじゃ手を合わせて、いただきます」

「「いただきます!」」

みんなでしゃぶしゃぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味入れた?」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つつこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだから。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。 犯罪者とかバツバツと捕まえられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。 私はインタビューするときなんていえばいいのかな?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」

「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの?」

報道される奴は俺から言わせれば一流に決まってんだろ。そんなへま犯すものか

「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね?」

「君は人生ミスだけどね」

「そのドヤ顔やめろ」

湯葉巻きを食べながらキリツとこちらをみてくるのは。ちよつと誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわかってるのか?

「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちよつと疲れたかも」

「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」

席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願いね」

「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！ 変態がいるっ!？」

「こっちに振ってこないでよ!？」

そんなに力いっぱい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの?」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ!？」

「ちなみにフェイトはSね。 自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちょっとまってっ!？ いまの話信じる要素どこにあるのっ!？」

フェイトがムキーってなってる間になのはが足を引っ込める。 パンツみえた！ パンツみえた！ 速報！ なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいつておいで。俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ!?!」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。

7・MとMと とまよきすと(後書き)

どちらかというところ、なのはがSでフェイトがMな気がする

8・コイキングなのは

ピピピピピッ　　ピピピピピッ

静寂な空間に電子音が響く。

ピッ　　ピピッ

自己主張をするように鳴り響く目覚ましは誰かの手によってその主張をかき消された。眠たげな眼をこすりながら高町なのは体を起こす。栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班に所属しており役職は戦技教導官。わずか19歳にして魔導師ランクSの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フェイトちゃん、起きて。朝だよ?」

「フェイトだと思った? 残念! ひよつとこちゃんでした!」

パキッ

「指がッ!? 指がああああああああ!?!」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。ベッドの中だといふのに器用にひよつとこのお面をつけているこの男性は、高町なのは・フェイト・T・ハラウン、八神はやてらの幼馴染である。

黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。高町なのは&フェイト・T・ハラウンが借りた家に所属しており役職は家事をすること。わずか19歳にして二人に寄生していないと生きていけない

く、ミッドで起こる小さな事件の大半の元凶を占めているミッドが嘆くエースである。

「あれ？　そういえばフェイトちゃんはどうしたの？」

「べつの仕事だつてさ。なんでもロリコン宗教団体の弾圧に向かったとか。だから朝早くから出て行ったよ」

「へー、そうなんだ。フェイトちゃんも大変だね。それじゃ今日は一人で仕事にいくのか？」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。昼の1時から出勤だつてさ。昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのっ!？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。今日はフェイトに合わせてサンドウィッチにしてみた」

「やったー!」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行った。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと10歳若ければ……』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ。って、どうしたの？」

「お、フェイトおかえり。サンドウィッチどうだった？」

「うん！　すごくおいしかったよ！」

「おかえりフェイトちゃん！　……そろそろ答えてくれないかな？　君」

「え？　なにが？」

「とぼけた顔しないでっ！　なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いているのっ！！」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひょっとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは / コイキング　LV31

「ぶっ！？」

「あ~~~~！ フェイトちゃんいま笑ったでしょ！」

「じ、ごめんねっなのはっ!?!」

「う~~~~！ ふんっ！ どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ!?!」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。 もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？ いまだっいたらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプションはいらなかな。 う〜ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケーオッケー。 ほんじゃなのはサクッと倒すからその間にとってくればいいよ」

「ちょっとまって。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてずつとやってきたんだからね！」

「いつけー、なのは！ はねる！」

「えッ！？ えっと……こっつ？」

「なにしてんの？ コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ！？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？ 二人の戦いは終わったの？」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを手持ちにいらてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいつている間に二人の勝負は終わってみたいだ。

「うわああああん！ フェイトちゃんあああん！」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「わーい！ フェイトちゃんーん！」

「ちよつと、近寄らないでっ!？ いやあっ!？ 質量のある残像残しながらこつちにこないでっ!」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ! もっと二人とも俺に優しくしてくれ! パフパフさせてくれ!」

「願望が漏れてるよっ!？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ!？」

二人で抱き合っているとその差がわかる。ミルタンクにフェイトとつけてもよかったかもしれない。

「んで、バタなのがポ モンやる気なくしたので俺とする? 大人のゲームする? つるのムチとか使っちゃう?」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あゝゝ! それじゃなのはマ オテニスしたい!」

なのはの提案でマ オテニスをすることに。

「あっ！」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度こそ！」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブなら！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「っ、次こそは！」

ガッ！ コードをひっかける音

ピターン！ なのはが転ぶ音

「……」

「もうやめるもん！」

「な、なのはっ！？ つ、次こそはできるから！ 私と一緒に手伝
うからっ！」

「こいつスポーツゲームできなさもSランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。
とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

8・コイキングなのは（後書き）

僕は9歳のころより19歳のほうが好きなんです、なかなか賛同を得ることができません。

9・高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「なのはさん、これお願いします!」

「はい。二人ともお疲れ様」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャラコが二人揃って出しにいつてるところであった。もともとこの感想を企画したのには理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみることによってちょっとした意見交換会の役割を果たせればと思つて企画したのだ。少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思つていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。それがなのはにとって嬉しいのかどうかは別問題だが、それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思ひながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください!』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよっ！？ なにこの嫌がらせ!？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？ 隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！ ちょっとこれみて！ 新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ!？」

「どれ……。 …… 大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどっ!？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。ヴィータは成長することがない（ひよつとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることになっている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そういえばはやてちゃんはどうしたの？ 見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまっ!』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど？ なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボってるじゃんっ！？
なんで、ゲーム>仕事なのっ！？」

「違うぞなのは。ゲーム>>>」「越えられない壁」>>>仕
事だろ。はやての中では」

「なんのために六課を設立したのさっ！？」

今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるのは。

「もういや……なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるっ！？」

「スバルっ！ なのはさんの涙をビンに詰めて！ 一滴もこぼすこ
とは許させないわよ！」

「わかった！」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあ
ったんですか？」

「現在進行形で起きてるよっ！」

「ブー！ ブー！」

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。名前を確認すると
彼の名が。何事かと訝^{いぶか}しむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし?」

『おお、なのは。唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思っただけど、どう思う?』

「うるさいよッ!」

携帯を床に叩きつける。

「お、落ち着いてなのはっ!? 深呼吸、深呼吸だよっ!」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイッたよ」

「どこにいるの? フェイトちゃん?」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

リンデイ・ハラオウンは大型デパートの地下食品売り場にきていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら？」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺となのはの仲ですよ？ 困難な事件に立ち向かった俺たちですよ？」

「ふふっ、よく覚えているわよ。プレシア・テストロッサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テストロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あときは死ぬかと思いましたね」

「いつそ死んでもよかったのよ？」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなっただけからというもの、彼はこうやってよく買い物に誘ってくる。大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。正直なところ、彼が下着売り

場に行くと言備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？ 最近会ってないですけど」

「エイミィと絶好調よ」

「明日速達でBL本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたいのだけど」

「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわよね。初めて会ったときもいまでも、変わることはない。フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！ 冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ！？」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。

9・高町なのはの憂鬱（後書き）

こうみえても僕はシリアスとか書くの好きなんですよね。けどこの作品ってギャグじゃないですか？　これはいかんと思ひまして、この作品でもシリアスを取り入れようと考えたんです。

けどいくら考えても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？　おちんちんランドでシリアスやれってことですか？　銀　だってシリアス回するときには真面目にやってますよ。それすら許されないんですか？　どうすればいいのかわかんないです。

皆様の紳士力のおかげで10万PV超えました。　ありがとうございます。　ざいます。　しょうもない作品ではありますが、クスリと笑って頂ける作品にしていきたいと思います。

10・白パン大好き スカリエッティ

仕事が終わりに就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでた。これでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいますかもだつてよ？」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だつてよ？」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ？」

フェイトの疑問によってなのはは考える。すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひよつとこのお面を被った男だった。のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれって人間なのかな？」

「分類上人間に入るかな。残念ながら」

ずっと傍にいた……というのかもしれないが彼は恋愛対象にはいらんのではないだろうか。だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。バレンタインのチョコとか女子全員から貰ったって聞いたよ？」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけだね。あのときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの1割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけじゃないのかな？」

少しだけ不憫に思うフェイト。

トントントント

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風によって彼女の元へといてくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思って振り向いた先に文字通り蝶がいた。

黒の触覚に黒い翅^{ほね}。鱗粉を真似ているのだろうかところどころラ

メがはいっている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のニ

ーソ。どっからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ!? 捕まる気満々じゃんっ!?
というかそれ私のニーソだよねっ!?」

「なのはただだと不公平だと思ってフエイトの髪を結びボンで蝶
ネクタイを作ってみました。蝶だけに」

「そういう問題じゃないからっ! いままで一気に不機嫌になった
よっ!」

「それお母さんに買ってもらったのにい……。ひどいよ! あん
まりだよ! もう捨てるしかなかったじゃないのっ!」

「そこまでいくのっ!?!」

流星のひょっとこも驚きのあまり声を上げる。フエイトは泣き目
でなのはによしよしされている。

「もういいもん! 二人が構ってくれないから遊びにいくもん!
このペチャパイ!」

「それ個人攻撃してるよね!? 二人じゃなくて一人に言ってるよ
ねっ!? というかペチャパイじゃないもん! ちゃんとするもん
!」

「っ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ!」

「はっはー!! そこらの二流と一緒にするではない!」

そういつてひょっとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

「とはいったものするのはないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。歩きたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？ あそこにいるのは誰だ？」

ひよっとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手にとって頬ずりする。どっかみても変態である。やがて何かに気付いたかのように男はそっと家を出てひよっとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひよっとこは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。 その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけないな。 何故その横にある縞パンツを取らなかった。 白と水色で可愛かったはずだ」

「ふんつ、縞パンだと？ 君は何をいつているのかね？ そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひょっとこは思わず距離を詰める。 蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。 まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。 これでも私は天才なんだ。 時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一步詰め寄る。 白パンツを手を持ったまま

「何を言ってるんだ。 縞パンはその人自身を若干幼くさせ口元に魅せる効果があるんだぞ。 白パンごときができると思ってるのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。 純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしょをしたことよって到達しているぞ」

「幼馴染……だとッ!？」

男の目の色が変わり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ！ モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ！ 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいつてると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がッ！ 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃっ幼馴染が君にはいるというのかねッ！」

「はっはっは、うらやましいか？」

「うらやましい!！」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのような人がいるとは、あなたとから趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティだよ。みんなからはアンリミテッドデザイナー、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解とっていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひよつとこと呼ばれていますね」

「ひよつとこくんか。それではひよつとこくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういつて、二人は固い握手を交わす。決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかったな、ひよつとこ。お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんって忍びの家系だったっけ？」

『はい、もしもし。 高町ですけど』

「あ、なのは？ 俺だけど……」

『ん？ なんで家の電話？ って、携帯置いていったのか。 それでどっしたの？』

「いや〜……うん。 大変言いにくいことなんだけどさ、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『ちよなひ』

「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきてから1時間。本気で来なくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらで慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろっ?」

「黙ってて」

「ぐふうっ!?!」

なのはのヒジがひよっとこのミゾに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの〜………すみません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで………」

「いえ、こちらでドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで………本当にすみませんでした」

「まともだっ! まともな人にやっと出会えたような気がするっ!」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。 目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。 えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「え〜っと、ウーノさんですか。 なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。 あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないですよ！？」

「いや、おびじりさん」

「後で付き合っただけだからっ！」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ!？」

いつきにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せつかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。　それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひよつとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おっ」

ひよつとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね？」

「わかったよ。　それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分してくよ。……なのはのニーソ……ハア……ハア……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ!？」

きっかりニートを回収しながらなのはは交番の前で叫ぶのだった。

10・白パン大好き スカリエッティ（後書き）

スカさん書いてて楽しいです

11・円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？ どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」

『うむ、ちよつと遊びにこないかと思つてさ。君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あゝ、ごめんね。いまから大事な用事があつてだな」

『その用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思つていたよ』
どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言つて、スカさんは電話を切った。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないって。……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るGoogle先生で調べるか」

「すみませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしておりました。こんにちは、ひよつとこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること10分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。これでもバイクの免許持つてるんだぜ？ おっさんはねたりしてるけど。華麗にキリモミしながら飛んでいくおっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。とっても優しくいい人みたいだ。(なのは談) ただ、こういう人ほどベツドで乱れると凄かったりする。

「よくきてくれたね、我が友よ。それにしてもよく来られたね。家の場所を教えてないというのに」

「Googleで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ!？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しはじめた。案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれるの？もしかしてあの秘蔵のエロ本のこと？ だったら持って帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。返してくれないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができると知ったいま、俺はスカさんに容赦などしない。つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「こっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんのほうが縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか？」

「誇ることではないぞっ!？」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオ「まるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。それで今日君を呼んだのはほかでもない。これを見てくれないか？」

「ふにゃちんですね」

「そこではないわっ!？」

そういつてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。なんだこりゃ？

「驚いたかね？ これはガジェットドローンといってね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うっわ、ちょっとこれ面白そうじゃん！ スカさん遊ばして遊ばして！」

「あ、これっ！ こころへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」

ポチッ

ゴゴゴツゴゴゴゴゴゴゴツッ！ ガジェットたちが自爆する音

「……」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。円環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうっ!？」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだった！ 私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」

「まあまあ落ち着けよスカさん。ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだろうっ!？ なに君が家からもってきたみ

たいになってるんだっ!？」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイル
をあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし? 警察ですか? ええ、ここに二人ほど変態が
いるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてくださいっ!？」」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに
向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ!？」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ! こ
こは自力で逃げるしかないぞっ!」

「化け物にもほどがあるぞっ!？」

「おいっ!?! おっさん多重影分身してないかっ!?!」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。 この
人は管理局の影のEースと呼ばれているに違いない。

11・円環の理に導かれたガジェットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

12・墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……………」

カシヤカシヤカシヤッ！

「……………」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなったの？ ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ！？ なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ！？」

「なのはさん！ その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ！！」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。 今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。高校時代に、ひよつとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやては横でペロペロキャンディを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかける。「そういえば、スバルはなのはちゃんに助けられたからあんなに慕ってるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとるかしつとるっ?」

「いや、全然。大方なのは萌えとかの狂信者じゃない? ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおつたな、あの変な団体。絶対に接触することなくなのはちゃんの危険になる存在であるう者たちを排除する、あの意味管理局の負の遺産やな。けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああッ!? ちょっと、それ私のリップ!?!」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうだなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおよそ六課では似つかわしくない服装である。若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。きょうは早いねって……その服装は？」

「あ、なのはさんおはようございます。その……今日はどうしても外さない用事があった」

そこまで言うとなのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そっか……月日が経つのは早いね。うん、わかったよ。あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね?」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。自分が変わった日のことを、なのはに出会った日のことを、そして兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えて
いる。そして変わることはない情報を前に崩れ去ったことも覚えて
いる。そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何
もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓の
中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。どん
なに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティード・ランス
ターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自分
の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。

ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こ
えてきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われも
ない罵倒を شدした。なかには諫めようとした者もいたが、しか
しながらその全てが無駄に終わる。腹が盛大に出たいかにもな男
性がその全ての言葉をかき消すのだ。ティアナは幼いながらも悟
った。この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。誰もが彼に
逆らえない。場を収めようとした男性もいまは黙って唇をキュッ
と結んで耐えているだけであつた。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ〜ん。 ちょっと通してください。 あ、ダメッ！ そんなとこ揉んだらアヒンツ！ おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。 なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ！？ いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかってるのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティード。 期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダッセーな。一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃないのかよ……」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。 やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分が^{あお}呷り

「おえッ！ 俺酒飲めないんだ……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ！？ もう少し我慢するんだ、すぐにエチケッ

やがてこの二人がミツドの名物追いかけてこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。 答えることができない。 少年もそれをわかつているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……!」

「ん？ お、すまんすまん。 つい話し込んだかった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。 そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティードにお世話になった身でさ。 ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。 違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ？」

「パンツ盗んだときにちょっと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなあっ!?!」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーター人だけ。

やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか？」

「……はい」

「そっか」

隣に座ったティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！ ものすごく！ お兄ちゃんは、優しくて強くて！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。 あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。 でもさ、そんなことティータは望んでいないんだよな。 それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。 そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ?」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は?」

「おまわりさん、この人です」

「おう」

「冗談ですからっ!?!? 手錠取り出さないでくださいよっ!?!?」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん?」

「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……! 執務官になって……見返したいです!」

ポロポロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです!」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才つてのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。それに引き替え凡人つてのは100%の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんだけどな。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかった奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくならないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちよつと挑発する。

「できますー!」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もうなのはケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！ ……って、これは」

「よお、なのは。前に話しただろ？ ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそっと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かかった。なのはは抱きしめたまま、そっと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランスターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！ ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！ あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！ ほんとうに、ありがとうございます！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言うていくる

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのははひと撫でて立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前つて、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って行った。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お客さん、到着しましたよ？」

「あ、すみません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。　テイアナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は？　そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は？　そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は？　そう聞かれたら兄のティード・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は？　そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会っていないのだ。　しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か？　そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先には

「悪霊退散ッ！　悪霊退散ッ！」

ひよっとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけて

いた

「なにやってるんですかー！ー！ーっ!?」

「おうわっ!?!」

男性は驚き大きくのけぞる。 ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかっ! 訴えますよ!」

「ち、違うんだよっ! スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って」

「その前に私があなたを退治しますよっ!」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした〜……嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え?」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。 スカさんとマ オカートする約束なんだよね」

「……へ?」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道に戻る　　寸前でふと何かを思い出したように
振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？　あのとときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の
少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。　きっと、これからも心配する
のかもしれない。

だからこそ　　いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ち
を持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！　とつても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒
にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。　まあ体のほうははまだガツカリボディだな」

「なっ！？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の
前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？　ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きなのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよね」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あつ……そうなんですか」

「というかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？」

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞いたそうにまってるよ」

「あつ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。　かけがえのない親友と、大好きな人。

厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。　いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。　だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カランッ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声
が。

12・墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もいい具合なのでここで一つ真面目な話を

13・六課へおでかけ！

『ユーノ、飯食い行こうぜ！』

『うん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじか……お前が欲しがってたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作るっ』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ」

なのは達が仕事についている間に、暇だったのでユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひよつとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい？」

「え〜っと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々と調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそう呟く

「というか、スカさんは何しにきたの？ 言っとくけど、なのはのパンツとかフェイトのブラは俺のだから渡さないよ？」

「いまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかっているかね？」

「ドクター、人のこと言えませんよ？」

スカさんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷ややかな声で言うてくる。 どうしてスカさんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はなのはとフェイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わったのでやることがない。 ポ モンのほうもあまり進め過ぎると二人が怒るし。 はっはっは、可愛いやつらめ。俺がネタバレしまくったせいだろうけどな。 そういえば、フェイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと嘘をついて誕生日プレゼントにあげたことがあったな。 バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。 あまりにもボコボコにされたんでクロノは怒る気がなくなって逆に介抱してくれたっけ。 誕生日といえばアしだ。 なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくって出したら美由紀さんが横から掠め取った事件もあったな。 あれ取った美由紀さんが悪いのにボコボコにされたし。

「……おれ、ボコボコにされた記憶しかないんだけど」

どうなってんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんが務めているという仕事場に行かれては？」

「それだッ!!」

ウーノさん、ナイスアイデアですよ！　いまのいままで気付かなかったけど、俺はなのはやフェイトの仕事場に行ったことがなかった。これは……幼馴染として行っておく必要があるのではないだろうか!!

「そうときまれば早速電話しよ」

携帯を取り出しはやてに電話をかける。

『ぬーべんどらすていーら?』

「あいぬすとんぺりいや」

『久しぶりやな、宇宙一のバカ』

「久しぶりだな、銀河一のアホ」

「いやいや、まちたまえっ!?!　その前の不思議な呪文はなんなんだっ!?!」

隣で聞いてたスカさんが指を突き付けながら問いただす

『ん?　なんや、誰かおるんかいな?』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや?』

「なのはとフェイトの関係かな」

『それは大変やで』

「いったい、はやての中であいつら二人の関係はどうなっているんだろっか？」

『それにしてもどうしたんや？ わたしいま仕事してんねん』

「はやてが仕事してる……だっつ！？」

「おいおいおいおいおい、冗談は変態性だけにしとけ。 部隊長が嘘なんてみつともないぞ？」

『ほんとうにしてるんやっつて。 シグナムの喘ぎ声を編集集中や』

「zipでくれ」

『だったらなのはちゃんとフェイトちゃんのパンチラ画像と交換やな』

「くっ……！」

「あの二人を人質にとるとは……いい度胸してるじゃねえか……！」

「あの……ドクター。 何故彼がそんな画像もっているのかは訊いたらいけないのでしょうか？」

「彼だからだよ」

その二人、うっさい。

『まあ、シグナムの喘ぎ声はちゃんと送るで。それよりどうしたんや？ 捕まったん？』

「お前らつて、俺見るたびにそれ聞くよな。そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

といいつつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。 どうしたものか。

「まあいいや。 いやまあさ、今日友人と六課に遊びにいこうと思ってるんだけどいいかな？ ちょっとサプライズ的な感じにしたい」

『サプライズ？ どんな感じ？』

「俺がニップレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『うちは友人を一つなくすんやな……』

「一つと言ってる時点で友人のカテゴリーから逸脱してるだろ」

『性奴隷？』

「いやらしい牡犬ですっ！ 思う存分ぶってくださいっ！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたとさ。

八神はやては耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいま〜！ ケーキ買ってきたよ〜！」

「おっ？ なのはちゃん、ちょうどいいところに」

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0.5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をする事になっている。何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのでこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろう。

「ん？ どうしたの？ はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや」

「なにする気ですかっ!？」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなのはの後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさんっ!」

「そついいながら胸揉まないでよっ!？」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払う。

「おゝい、なのは。あとがつつかえるから早く入ってくれよ」

「あ、ごめんね。 ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入って、席に座りシヤマルとなのはで人数分の紅茶を配り各々選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。 さっきの話なに？」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたって人がいるんや」

「え？ 私にも？」

チョコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「そうそう、ちなみに男性やで」

「男性ですとっ!!」

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粹で純白なのはさんに男性なんて似合いません！」

「そうですね、なのはさんはランスターの名を継ぐんですから!!」

「継がないよっ!?! いつの間に決まってるのっ!?!」

「そ、それで……なんで急に?」

フェイトが少しだけ視線をキツくしてはやてを射る

「いや〜……うちは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうすることもできなかったんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフェイトは近づいてそっとう抱きしめる。

「ごめんな、二人とも……」

「大丈夫だよ。相手側には私とフェイトちゃんて断るから」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですね、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになった

「ちなみに、その人の職業はなんなの？」

「やっぱり、はやてより権力強いならそうとうだよね……」

その二人の問いかけにははやては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隷や」

「「それ職業っ!?!」」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになった。

13・六課へおでかけ！（後書き）

ひょっとこはついに職に手に入れたのだった

14・コイキングの本気

機動六課　それは八神はやてがあらゆる知人の後押しによって作られた少数人数で動ける精鋭部隊である。SSランクの八神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・T・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面子が揃っている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というのは、建前であり実態は180。違うものだ。まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば“萌え担当”である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするとどうだろう？　お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によって疲労困憊のブラック企業並みの勤務時間。あげくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし　そんな管理局にも楽しみというものがある。それが六課の部隊長である八神はやてが週一で発行する六課の新聞

『乙女の秘密を覗いてみよう』

である。何故週一かというと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？　そう思う者もいるかもしれないが、これを取り入れたことによって管理局の中も大きく変わった。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなっていたのだ。そしてダイエツトするようになった。後者はどうでもいいので前者

のことだけ述べると、激務の最中、ちよつとうたた寝してしまつたせいで書類が終わつてない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。するといつもは怒鳴つてばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あるうことかAさんの仕事すらも引き受けたのだ。お偉いさんの心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はうなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になってくるのが当事者というか被害者になっている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

『イエス六課・ノートタッチ』

たまたま出会つたときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の二つがまっついているということだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

「だ〜か〜ら〜、俺たちははやてから了承貰ってるんだってば！
このすつとごどつこい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されている身だよ。
君は門番程度の権力でたてつこうというのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただかないかぎりにも
中へ入れることができないわけでありまして……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。

正直なところ、この門番の言っていることは正しいと思う。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被
った男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！ズボンだつて履いてるだろ！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかっているのですが……ここはあの有名な六課で
すので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言っているんだね、君は。わざわざ管理局に突っこんでい
くバカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワーギヤーギヤーと騒ぎ立てる二人を横目にウーノは携帯を取
り出す。

「あ、なのはちゃんですか？　いま六課の前にいるんですが」

「えっ！？　俊くん六課に来てるのっ！？」

ウーノから電話をもらったなのはは思わず普段は口にしない幼馴染の名前を口にだした。

「なのはちゃんがあのバカの名前言うなんて……よっぽどなことやで……」

長年一緒にいるはやては冷静にそう認識する。　普段は名前すら言わないのだから。

そんなはやてをよそに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら早口で電話の相手と話す。

「え〜……ちよつと本当に困るってば……」

『すみません……私が提案したばかりに』

「えっ！？　いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですけど……あのバカだと何やらかすかわかったものじゃなくて……」

なのはは、うーん、と唇をとがらせて考える。

「ちなみにいまなにしていますか？」

まあ、六課の警備は厳重だからおとなしく待っているとおもっけど……

『警備員殴って侵入したところです』

「本物のバカがいたっ!？」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え？ え？ なになに、どうしたの？」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでる場合じゃあないですってばっ! 誰かが六課に侵入してきたんですって!」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバルが叫びながら答えるのだが

「うーん……なのはが指鳴らしてるから大体侵入してきた人はわかるかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。私となのはがお世話している相手がくると思うから。……それより、なのはと私に会いたって人遅いね。一刻も早く断りたいのに」

そのはやてが言った男性が警備員を殴って侵入してきたバカだと知ったらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか？」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

バタンツ!!

「みんな、大変だツ!! 侵入者が出たみたいだぞ!!」

「アンタだよツ!!」

「ぶへあツ!?!」

『スカさー——————んツ!?!』

「……え? スカさん?」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かって打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違ったので、おそろおそろ自分が殴った相手を確認することに。

「スカさんっ! 大丈夫か、誰にやられたんだっ!?!」

「ドクターっ！ しっかりしてください！」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。
泣き目でゆすつている友人。 幼馴染が自分の存在に気付いたの
か、こちらをみていた。

「い、いらっしやい。 機動六課にようこそ」

「気をつけるー！ コイキングがギャラドスに進化したぞおお
おおおおおおお！！」

「ち、違うもんっ！ 不可抗力だもんっ！！」

片足を上げウインクしながら指をピンつと立てて可愛らしく言った
なのに対して、ひよっとこはスカリエッティを抱きしめながら大
声で叫ぶのであった。

14・コイキングの本気(後書き)

Bボタン連打

15・マスコット作戦

「えー……っ!? それじゃ、はやてちゃんがさっき言った私たちに会いたい男性ってコレ!?!」

「そつやで」

スカさんがギャラドスによってKOされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいつには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思っただ。だってスカさん殴ったじゃん。泡吹いて鼻血流してたじゃん。流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いや、おかげでなのはちゃんが本気で殴った映像も撮れたしよかったです」

「うう……あれは不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもりだったのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。スカさん、俺を救ってくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。コレも本気でなのはちゃん達を心配してきてくれたんやで?」

「そつだそつだ! もっと言ってやれ、はやて!」

「ごめんな、下から必死こいてパンツ覗こうとしている奴を弁護できんわ」

地に伏せながらなんとかスカートの中の楽園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひよっとこにはやては冷徹な目を向ける。その視線に気づきひよっとこは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるところだったぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよっ!? はやてちゃんのセリフ聞こえなかったのっ!？」

「え? どうしました、高町なのはさん。そんなに大きな声を出してはいけませんよ?」

「誰のせいだと思ってるのっ!？」

「ちなみに、そろそろいちごパンツは卒業しましょうね?」

「個人の勝手じゃんっ! というか、いつの間にパンツみたのっ!？」

「ごめん、当たるとは思わなかった」

「zzzうえxr d c t y 9 おいkじゅh y g r てs x d c f v g !
?」

なのははバインドでひよっとこの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。もしかしたら、今回のようなことがしょっちゅうあるのかもしれない。

「けど……どうしよう。ねえ、ティア、あの人が同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね……　つて、ティア？」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ……もしかしてお兄さん……？　お面も一緒だし、声も一緒え？　うそ？　あんな人類の最底辺をいつてるような人が私に気がなっていた人……？」

「あの……ティア？」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そっと触れようとする　と　ここでティアがいきなりひょっとこのお面をつけている人に向かって駆け出した。

「あの！　お兄さんですよ、ティアです！　お墓で会った！」

「ちょっとまってくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。　君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね!？」

「会ってないよ、俺は。君が会ったのは俺とは別の人だと思う。もっと恰好よくてもっと優しい……そんな素敵な男性だろう」

荒げるタイヤにひよっとこは冷たく引き離す。タイヤはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻っていった。

「……よかったの？ 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかもしれないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ?」

「寺生まれのTさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もう……そんなことしちゃダメでしょ。次やったら私が塩撒いちゃうよ?」

「潮吹いてくれるの?」

「死を撒いてあげようか?」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当ててくるのははやくザそのものです。ギャラドスからレックウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すことに。

「なんというか……アレだよな。六課って女多いな」

「せやなく、わたしがじきじきに選んだからなく」

「ああ、なるほど。それは女が多くなるわけだ」

はやてなら無駄な男なんていらないうし、いれないだろうな。

「しかしはやて殿、こう女子おんなが多いとマスコットなるものが必要ではないか？」

「マスコットならなのはちゃんがおるで。毎日毎日、かわいすぎて萌え死にそうや」

「まあ、なのはがマスコットなのは認めるかな」

「ねえ、それって喜んでいいんだよね？ ちなみにそのマスコットはどんな役をするのかな？ みんなに笑顔を振りまいちゃうとか…」

「オチ担当かな」

「ひどいよ二人ともっ!？」

まあ、いいじゃないか。見てる分には面白いし。

「どっせ、アレやる？ 自分がマスコットになりたいとかいうんやろっ」

「べつにそんなこと思ってないけど、マスコットにしてください」

いかん、願望が少し漏れてしまった。

はやては溜息をつく。

「ほな、わたしが満足するようなマスコットの案をだしてみい。それで判断するで?」

「こんなのはどうだろう? ひよっとこハム太郎とか」

「鳴き声は?」

「デウクシ」

「18禁verは?」

「ひよっとこハメ太郎」

「喘ぎ声は?」

「ヒギイツ!?!」

「うちの負けや、採用」

「大反対だよッ!」

はやてと互いに肩を抱き合いながら健闘を讃えているところではからストップがあった。やはりなのは遊ぶのはめちやくちやく楽しい。俺も息子も嬉しすぎて反り返っている。

「ところでスカさん、目を覚まさないね」

「それだけなのはちゃんのリストレートが強かったんや」

やはりギャラドスは伊達じゃなかった。

15・マスコット作戦（後書き）

なんか長くなりそうな予感がする。
あと土曜まで更新はなしです。

スカさんいまだ起きないし。

16・「速報」 スカさんが生還した

「スカさんが気絶してから1時間。そろそろスレ建てようと思うんだけど」

「ほうほう、どんなスレタイにするん？」

「「コイキングの逆襲」 スカさん余命1時間 「はねるコイは竜になり飛翔する」 みたいなスレタイでいこうかなと」

「よし、うちが建ててくる」

「やめてよっ!?!」

はやてとウキウキ気分でスレを建てようとしたところ、横から悲鳴混じりのなのは声が聞こえてきた。

「え? どうしたの、なのはさん。もといギャラドスよ」

「ちっ、ちがうってば! だ、だから……アレはそもそも間違いで……」

「ほんとに俺を殴る予定だった?」

「うん」

「おい、スレ建てよろしく」

「あいよー」

はやてが自分のPCでスレを建てようとする　　が、それをさせまいとなのはもはやての机に迫ってくるので後ろから俺が羽交い絞めすることだ。

「もうよせ……！　戦いは終わったんだ……！！　お前は頑張らなくていいんだよ！」

「ここで頑張らなかつたら私は大変なことになっちゃうよ!？」

「胸揉んでいいっ!？」

「人の話し聞いてよっ!？」

「ハア……ハア……なのはタソのおっばい……　　って、あぶなあっ!?　後ろからレバ剣飛んできたっ！　おっばい魔人がレバ剣飛ばしてきたっ!？」

「貴様を葬ればミッドの平和を守れるような気がしてな」

あながち間違いじゃないから反論できない。　　そうこうしている間になのははやての元にいつて、PCの電源を切ってしまった。
くそっ……！　このおっばい魔人め！

「俺となのはのスキンシップを邪魔するなっ！」

「それはセクハラというものだ」

「シグシグのおっばいだってセクハラもんだろっが　　謝るから、レバ剣を投擲しようとしないでっ!？」

昔から守護騎士たちは冗談が通じないんだよな。とくにシグシグなんて全く通じないし。

ふいにフェイトと視線が合う。逸らすフェイト、見つめる俺。

「……我が家のおっぱい魔人は俺と視線を合わすのも嫌なのか……」

「ち、違うよっ!?! でも、ここで視線を合わせると面倒なことに巻き込まれそうだったしっ!」

そっついながら、キャロとエリオを後ろに庇うフェイト。お前はどんだけ警戒してるんだよ。

「べつにー、ちょっとシグシグにフェイトの胸囲の脅威を覚えてあげようと思っただけなのに。なー、ロヴェータ」

「ここであたしに振るのは宣戦布告と受け取っていいんだな?」

守護騎士一のロリっ娘は俺に向かってアイゼンを構える。

「まあまで、ロリにはロリの魅力があると高校時代に もう言わないから振りかぶらないでくれ」

ブンブンと空を切り俺の頬にまで届いてくる風を受け、両手を上げ降参の構えを取る。

「そっついえば、お前はさつきからコイツのこと“スカさん”って呼んでるけどダレなんだ、結局のところ」

そついつてスカさんを指さすヴィータ。人に向かって指を指しちやいけないつて習わなかつたのかコイツは。

「こーら、ロヴィータちゃんダメでしょ。人に指を指しちや」

「うるさい」

ボキッ

「指があああああああああああ！？」

おかしい、あいつ絶対おかしい。思考がなのはと一緒だもん。絶対おかしいぞ。

急いでシャル先生の元へ

「シャル先生、助けてくださいっ！ おっぱいとロリの相乗効果が襲ってきますっ！」

「ま、まあ……二人とも会えて舞い上がってるだけですよ。たぶん……」

「ロリ巨乳なんて認めないんだよっ！！」

「そついつ話じゃないですよね？」

困惑しながらもシャル先生は指を治してくれる。やつべえ……シャル先生、便利すぎ。シャル先生いればフルボッコにされても大丈夫なんじゃね？

シヤマル先生から治してもらい、いまだに構える二人に向かってしゃべる

「スカさんはスカさんだよ。 下着泥棒してるんだ」

「おいちよつとまで、その紹介文がすでにおかしいだろ」

「発明者なのかな？ なんか家に行ったとき大量のロボットがあった。 全部壊しちゃったけど」

「よく仲良くできてるよな」

まあ、変態同士だからな。

ロヴィータの隣にいたシグシグが疑惑の念を向けながらスカさんを見る。 どうしたんだろう？

「どしたの、シグシグミシル」

「今度言ったら前歯折るからな」

「お前らは苦痛以外で俺とコミュニケーションができないのかっ！
？」

絶対アレだ。 はやてがアレなせいで守護騎士たちも頭がアレになってるんだ。

「けどよ〜…… “スカ” って聞いたら次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを思い出すんだよな〜」

ロヴィータの眩きにウーノさんの肩が一瞬ビクリと動く。　ロヴィータはそのまま視線をフェイトのほうに

「そういえば、フェイトはスカリエッティのことにに関して調べてるんだよね？」

「う、うん」

「まじで？　フェイトタソちょっと教えてよ」

「あ、ちょっとまって」

フェイトは自分の机に戻ると大きなファイルを引出から取り出し、戻ってくる。　それは大きく大きく膨れ上がっておりそれだけでフェイトがこれに真剣に取り組んでいるのだとわかる。　ロヴィータはスカさんのことを次元犯罪者だと言っていたが……あのスカさんがそんなだいたいそれたことできるのだろうか？

フェイトはファイルを一枚めくって紙に書いてあることを読み始めた。

「え〜つと、ジェイル・スカリエッティ・・・google検索で、間抜けな次元犯罪者は？　つと打ち込むとgoogleさんからもしかしてジェイル・スカリエッティ？　と質問される。　ミッド調べ　俺でも捕まえられそうな次元犯罪者　殿堂入り。　つい笑ってしまふ次元犯罪者調べ　殿堂入り。　ワンパンで捕まえられそうな次元犯罪者　殿堂入り」

『ぶふうっ！？』

そこにいた全員が思わず笑ってしまった。なのはとはやてに至っては痙攣を起こしてるほどだ。かくいう俺も笑いを抑えられない。いや、流石にgoogle攻撃は卑怯すぎるだろ。

なのはが痙攣しながらフェイトに問いかける

「フェ、フェイトちゃん……それを追いかけてるの？ あ、ダメ、笑いすぎてお腹痛い……！」

「う、うるさいなあっ！ 私だつてこんな人だとは思ってなかったよっ！？」

むしろそんな奴がどうやったら次元犯罪者になれるんだ？ フェイトが調べてるってことはアレ関係かな？

脳裏に浮かぶのは黒髪で俺のことを坊やと呼んだ女性。手を伸ばし、掴んだはずなのにそれを振り払われた女性。俺たちをフェイトに会わせてくれた女性であり、一瞬なほどの痛々しいほどの娘への愛情を魅せていた女性。あれからどうなったか分からない……けど、きつと幸せな夢を見てるんだと思う。娘さんと一緒に。

「どうしたの、気分悪い？」

「へ？ いや、なのはとフェイトとやってるところを想像してたんだ」

「頭力手割るよっ！？」

「なにいつてるんだよ。 あんなにも可愛い声で鳴いてたじゃないか」

「それ夢のことだよねっ!?　なんで夢のことを現実であつたかのように話しちゃうのっ!?!」

みるとフェイトのほうも、必死に誤解だと主張している。ほんとこいつらの困った顔をみるのは面白い　けど、脈がないというのも考え物だ。　ここで一発イケメンなところを魅せないといけないのではないだろうか?

ということとは置いていて、どうやらみんなには気付かれてないようで安心した。　ほら、なんか主人公みたいになっちゃうじゃない?

ウーノさんが顔を赤くして俯いている。　そりゃそうだよな、スカさんの世間に対するアレが180°別ベクトルで有名になってる人だしな。　ウーノさん頑張れ!

皆が笑っている最中、突然ドアが開いて声が室内を支配した。

『大変です!　ミッド郊外にて犯罪者が出た模様!　なお犯人は六課に対する侮辱を行い、六課が出動するのを狙っている模様です!　どうしますか?』

「侮辱って具体的にどんなことなん?」

冷静に聞くはやて。　流石は部隊長

『はい、六課はババアが多すぎる!　とのことですよ!』

「全員、出動用意!　塵一つ残さへんで!」

『了解!』』

声を荒げながら叫ぶはやて。 流石部隊長、目が殺意に満ちている。

俺が女性たちの並々ならぬ殺意に震えていると、その殺意に当てられたかのようにスカさんが起きてきた。

「ん……ここは?」

「おはよう、スカさん。 いまから六課による犯罪者公開リンチが始まるけど、どうする?」

「……どうやってたら管理局の萌え担当を怒らせることができるんだい?」

「まあ、乙女には色々と踏んではいけない地雷があるんだよ」

ギヤラドスなんか逆鱗に触ったようなもんだからな。

とりあえず比較的冷静だったシャマル先生に頼んで、見学することに。

「スカさん、そろそろ紙袋取ってくれない? 袋全体に血がこびりついてて怖いんだけど」

いまのスカさんは下手なホラーより怖いです。

16・「速報」 スカさんが生還した（後書き）

今週のめだかボックスが面白かったので、やっば更新する。

安心院さんかわゆす。 江迎は善吉とお幸せに

17・キレルはやてにっ用心

なんでもシャマル先生から聞いたところこれが六課初の出勤みたいだ。まあ、管理局の萌え担当だしふつつは出勤とかないよな。

ほんでもっていま俺とスカさんの目の前で繰り広げられている光景はなのはから新人達に贈るデバイス贈呈みたいなもんだね。このデバイスたちがこいつらの相棒になるわけだ。

「はい、これでみんなデバイスは渡ったね。これからはそれが相棒になるからみんな大事にしてね!」

『はい!』

……なんだろう、この幼稚園に訪れたような感覚は。

とりあえずみんなデバイスをもらってはしゃいでいるので、俺もなのはに近づいてデバイスをもらうことに。

「ねえねえ、なのは。俺のデバイスはないの?」

「丁度いいのがあるよ。はい」

つ綿棒

「これでアール開発しろっていうのかよ!」

「まったく違うよっ!?! どうして皮肉がつうじないのっ!?!」

「うん、普段の俊くんを見てるようだよ」

正直、俺がコイツと同レベルとか納得いかない。俺のほうがギリギリ下回ってるだろ。

「それにしてもフェイトちゃん。俊くん抱いてて大丈夫？ 重くない？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはが俺を抱いたまま空中制止してくれてるフェイトに声をかける。フェイトはそれに笑顔で答える。

「ごめんー、フェイト。どうしても近くて見たかったんだよ」

俺はこんな時じゃないとこいつらの活躍とか仕事ぶりとか見ることできないしさ。フェイトもそれがわかってくれるのか笑顔で首を横に振った。

「ううん、きにしないでいいよ。けど、あんまり無茶はダメだよ？ バリアジャケット着てないんだし」

「ユニクロのジャケットなら貸してもらったんだけど、それじゃダメなの？」

「いや、根本的に間違ってるから。ジャケットならなんでもいいわけじゃないから」

「というか、9歳の頃から俊くんジャケットがつけばなんでもいいと思ってるよね。ほんと成長しないよね」

「お前の胸もな」

「フェイトちゃん、落としていいよ」

謝るんで本気で離そうとするの止めてください。

「それよりさ……はやてどうにかしろよ」

右に視線を移すと、歯ぎしりと憎悪と怒りで暗黒化してるはやてがいた。 いや……まあキれるのはわかるんだけどな？ 下手したらこいつ犯罪者殺しかねんぞ。 せつかく、非殺傷という素敵なものがあるんだし部隊長が殺しなんてしたら目もあてられん。

「あゝ……ちょっと危ないね」

「危ないにもほどがあるぞ。 幼馴染から人殺しが出るなんて御免なんでどうにかしたほうがよくな？」

「たしかに、ちょっとかけあってくるね」

なのははそのまま水平移動してはやての近くまで行く。 あー……はやて言語失ってるわ。 とりあえずちよつと時間がかかりそうなのでフェイトとおしゃべりすることに。 新人たちとスカさんたちはヘリの中で見学。 デバイス渡した意味くない？

「ところでフェイトタソ。 エリオとキャラは元気にしてるかな？ せつかく会えたのに話しをしてないけど」

「うん、大丈夫だよ。 エリオもキャラも素直でいい子だし、結構

会えるの楽しみしてたみたい」

「え？ まじで？ それじゃ婚姻前の挨拶に行こうぜ」

「“それじゃ”の使い方が絶対あってないよねっ!？」

リアクションとるたびにフェイトタソのおっぱいが当たって俺のザンバーがフルドライブしそうだ。

「おまたせ、はやてちゃんと交渉してきたよ。私が代理で執行することになった」

「犯罪者　　！　　いますぐ逃げろおおおおおおおおおおお
お！　はかいこうせんがとんでくるぞおおおおおおおおおおお
おおおおお!！」

「ちよっ!?!　やめてよっ！　ギャラドスじゃないっていつてるで
しょ!?!？」

いや、お前は危険すぎるだろ。

「ほら、犯罪者なんか命乞いしだしたぞ」

「ちよっとーーーー!?!　なんて私が執行になった途端土下座して
るのーーーーっ!?!？」

「……人間は賢い生き物だからな」

「納得いかないよおっ!！」

もう！　なんで私だけいつもからかわれるのかな。　だいたい女の子に向かってギャラドスとかおかしくないっ！？　わたしまだ19歳だし、あんなに怖い顔してないんだけどっ！

なのはは一人犯罪者と対峙しながら幼馴染に憤慨していた。　後ろからはフェイトとひよっとこの能天気な会話が聞こえてくる。

だいたいなによ、ちょっとフェイトちゃんのアレが大きいからってフェイトちゃんに抱っこされちゃって。　ニヤニヤしちゃって。

そんなに私は嫌なんですかー！　すいませんねー、大きくなってー！　って話だよ。　それはアレだよ？　フェイトちゃんよりか大きくないけどはやてちゃんよりかはあるもん。　絶対平均だと思っもん。　それなのになにかにつけて私のこと苛めてきてさ、ほんっと小さい頃から変わってないんだから！　3歳の頃からずっと一緒なんだよ？　もっとこう……私に頼ってくるものじゃないの？　無職なんだよ？　普通私のことを頼ってさ、こう……『お願い、なのは！』　みたいな感じじゃないの？

釈然としない思いがなのはの中でふつつつと沸いてくる。

高町なのはという女性は俊がはじめて女の子と遊んだ相手である。　そしてそれからもずっと付き合いが続いている関係だ。　だからこそ知っている。　世界で一番彼のことを知っているのはだから知っている。　彼の泣き顔も怒り顔も笑い顔も膨れっ面も死のうと思っていたときの顔も絶望の中にいた顔も　全部知っている。

だからこそ、俊は自分を一番に頼ってくると思ったのだが　蓋を開けてみればそうでもなかった。それは幼馴染として嬉しいことであるのだが……どうにも面白くなかった。

あー、止め止め。　あんなデリカシーのない相手のことなんて考えでも無駄だよ。　さっさと終わらせてシャワー浴びよ。

なのは気付いていなかった。　溜息をついている隙に犯罪者が泣きながら聖母に祈りながら魔力弾を撃つたことに。

「避ける！！　ナツパ！」

「へっ？　うわあっ！？」

後ろからの声で現実に戻ったなのは目の前の魔力弾を慌てて避ける。　これでもエースオブエースだ。　これくらい造作もないことだ。

ズガガガガガガガガガガガガッ！！　ひよつとこ全弾命中

『アンタが当たるんかー！ーっ！？』

「……………わ、私は悪くないよ？」

遠巻きに見ていた新人たちの突っこみと、後ろを振り向いて冷や汗を流すのは。

やがて煙が晴れ、顔を下に向けているひよつとこと困惑したまま抱きかかえているフェイトが姿を現した。

ひよつとこは何もいわずフェイトの肩を叩き、シャマルがいる地点を指さす。

シャマルの所に降ろすフェイト。シャマルは既に治療の準備をしていた。

『え？ 本当は恰好よく避けて、ベータみたいになのはに言うつもりだった？ けど、フェイトと喋ってたらタイミングを逃して当たった？ そう……それは大変だったわね。予想以上に痛かったの？ ユニクロ訴える？ うん、確実に負けるからそれはやめましょうか』

どうやら本当に痛かったようでその後もシャマルが通訳のような形で会話をすることに。

『そもそもなのはが避けるとは思わなかった？ へっぽこの癖に？』

「……わたしも魔力弾当てちゃおっかな〜……」

小さくつぶやくなのはに聞こえないはずのひよつとこが小刻みに肩を震わせる。

それが少しだけ面白くて、なのははひよつとこに聞こえるようにしゃべりだした。

エースオブエース 高町なのは。 犯罪者すっぱかして幼馴染に日頃の恨みを晴らすことに専念する。 これが本当にエースオブエースで大丈夫なのだろうか？

一方犯罪者は

「誰かババアか言ってみいや！ おお？ はよ、いってみい！ 言った瞬間わたしがその唇引き裂いてミンチにしてぼっこぼっこしたるで！！」

キレたはやてにフルボッコにされていた。

17・キレるはやてに用心(後書き)

ちよつとだけ意地悪な、なのはでしたとき

18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！

六課の初出勤が終わり、ほとんどなにもしていない新人達や一方的に犯罪者をフルボッコにしたはやてたちがにこやかな笑顔を浮かばせながら職場で菓子を食っていた。

「いや、初出勤もちゃんとできて六課も幸先がええな」

「お前が一方的にボコって、新人たちはそれをみていただけだな」

「そういう俊くんは自滅して、シャマルさんに泣きついてただけだね」

……出勤から帰ってきてからというものの、どうもなのはからキツイ言動が飛んでくる。あれか？ りゅうのまいで攻撃力でも上がったのだろうか？

俺がシャマル先生に泣きついたことはかわらないのでここは黙って受け取っておくけど。

「にしてもあれだよな。魔力弾ってやっぱ痛いわ。19歳になったからもう大丈夫だろうと思ってたけど……これは成長するとかの問題じゃないよな」

「俊くんの頭は成長しないけどね」

……俺にはサッパリ理由がわからない。しかし……しかしだな。

こつ……好感度が下がっているような気がするのには確かなんだよ

な。

そっぽを向くのはにどうしたもんかと頭を悩ませていると、トッポを独り占めしていたはやてが急に顔を上げた。

「そや！ みんなで祝賀会やらへん！？ 初出勤達成おめでとう祝賀会や！」

『おおー！ー！ 部隊長がはじめて真面目なこと言った気がする』

「ちよつとまちいな。 わたしはいつだって真面目やったで？」

『……………』

「なんで黙るっ！？」

それはまあ、普段のお前がおかしいからに決まってるだろ。

「でも、祝賀会ってどこでやるの？ 私たちは19歳だからまだ大丈夫だけどキャロやエリオはまだ子どもなわけだし……………お店を貸し切ってやるのは反対だよ？」

「大丈夫や、フェイトちゃん。 場所はなのはちゃんとフェイトちゃんの家でやる！ 二人のペットが一匹おるけど大丈夫やる」

「おい、誰がペット。 もっとこつ……………愛玩動物とか別の言い方があるだろ」

「いや……………そういう問題じゃないよね？ 遠まわしに俊は人間じゃ

ないって言われてるんだよ?」

フェイトが可哀相な目で俺を見てくる。

「はっは、君と一緒にいられるのなら俺は人間なんてやめてやるさ」

「でも人間じゃないなら結婚とかできへんで?」

「やっぱりいまのナシでお願いします」

それは困る。めちゃくちゃ困る。どれぐらい困るかというところの息子が勃たたないくらい困る。この頃使っていないから最近スネてるんだよな、こいつ。

「というか、okを出すのは俺じゃないからなんともなく。フェイトとなのはがok出すのなら俺は何もいわないよ」

あくまで俺は居候の身。色々部屋を改造したり至る所に盗撮カメラを仕込ませたりしてるけど家長はフェイトとなのはだ。

「うーん、私は別にいいよ。キャロとエリオも行きたかったらうし。なのはは?」

「そうだね、私も別に」

『なのはさんの部屋に侵入できるなんて!! やば、私この場で絶頂しそつ!!』

『落ち着くのよ、スバル!! まだ早いわ! なのはさんが使っている枕やベット、小物用品で絶頂したほうが遥かにイけるわよ!!』

『流石だよ、ティア!』

「……わたしとフェイトちゃんの部屋に行くのは禁止でお願い。というか一階だけ開放ということだ」

「……打倒なところやね」

狂喜乱舞中の新人二人を見ながらはやては溜息をついた。

「え〜っと、なのはとフェイトとはやてとシャマル先生とロヴィー
タとシグシグとザツフィーと新人4人にスカさんとウーノさん。
うひゃ〜……結構な量を作らないといけないのではないか」

場所は移動して我が家の台所で、俺は人数を確認して悲鳴を上げていた。

家に帰るまでの間にも色々と問題が起こったのだが面倒なので省略することだ。

後ろのほうではパーティーゲームで盛り上がっている女の子たちの声が届いてくる。

『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』

『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!?!』

あ~~~~~!」

『ぐふふふ……さあ、脱ぐんや!』

「その役目、俺が受け持とう　　おい、なんで部屋に結界張つてんだよ!!　これじゃ見れねえじゃねえか!!」

鍋とか皮抜きとか千切りとか料理のこと全てを投げ出してエプロンを投げ出しズボンを脱ぎパンツを脱ぎ捨てながら部屋に突撃したところ、はやてがそれを先読みしていたかのように結界を張っていた。

「うおおおおおおおおおおおお!　燃えろ、俺の小宇宙^{コスモ}!」

力いっぱい殴るが結界はビクともしない

『さあさあ、フェイトちゃんも脱衣の時間やで~~~~!』

『ちよ、ダメええええええ!』

「なんで俺には魔導師としての力がなかったんだ!!　なのはとフエイトが裸で俺のことをまっけているというのに……!　こんなことじゃ、男失格じゃないか!」

「その前に人間失格じゃないのかね」

「服を着ろ」

「ひよつとごさん……」

結界の前で全裸になったまま膝から崩れ落ちていると、傍で呆れ声

と悲しそうな声が聞こえてきた。　前者はスカさんとザッフィー。
後者はエリオである。

「ああ、結界張る前に追い出したんか。　そこらへんはぬかりないんだな」

「さて、全裸のままこちらにくるな。　ぶら下がっているモノが左右に揺れて気持ち悪い。　まず人間として最低限の誇りを取り戻してからこちらにこい」

「そういえばザッフィーの毛でオ　ニーしたらどうなんだろう？」

「話を聞け馬鹿者っ!?!」

ワンコ姿のザッフィーに怒られた。　あとザッフィーの毛でオ　ニーしたらチ　コが絡まって大変なことになるかもしれない。　こう……飲み物を飲んだときに対外に出す所からスルリと毛がはいつてきそつだよな。

脱ぎ捨てたものを拾い履く。　流石衣服。　聖母マリア様に包まれているような気がして落ち着くぜ。

「にしても久しぶりだな、エリオ。　元気にしてた？」

「あ、はい!」

赤髪のエリオは子ども特有の笑顔で俺の質問に答える。　うんうん、この笑顔を見る限り大丈夫そうだな。

「ところでエリオはなに食いたい？　夕食作るの俺だし、特別に食

べたいもの作ってあげるよ」

「えっ？ いいんですかっ!?!?」

「うむうむ、可愛いエリオのためならお兄さん頑張っちゃっよ」

「あの……それじゃ……」

少し恥ずかしいそうに顔を赤くするエリオ。　「ごめん、エリオ。」

俺、そっちの毛ないんだ。

やがてエリオは何かを決断したように言う。

「僕、お肉がいっぱい食べたいです!」

「そっかー、肉かー。俺も好きだよ、肉。　うまいもんな」

もしかして肉を沢山食べたいことを言うのが恥ずかしかったのかな？

「うーん、それじゃ手羽先とトンカツにでもするか。　おっし、お

兄さんに任せなさい!」

ドンと胸を叩く。　それを聞いてエリオが嬉しそうな声を上げる。

まあ、流石にそれだけでは健康に悪いので洋風パスタやカルパッチョとかも作ってみようかな。

「ところでエリオ。　ここにゴスロリ服とウィッグがあるんだけど……ちよっと着てみない?」

一瞬にしてエリオの顔が戸惑いの表情に変わる。

「いや、ちょっとだけちょっとだけ。ほんと数秒でいいから、ね？」

「あの……ひよつとごさん、顔が怖いんですけど……」

右手にゴスロリ服、左手にウィッグをもってハアハア言いながらエリオに迫るさまは立派な犯罪者である。

「いやさ、なのはやフェイトに着てもらおうとわざわざ買ったのにあいつら俺の前ではきてくれないしさ。このさい、エリオに着てもらおうかと」

「ザフィーラさん、助けてください！」

ザフィーラの助けもあえなく、ひよつとごに捕まったエリオはゴスロリ服を着せられたのだった。

18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（後書き）

とりあえず男子パート

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（裏側）

時は少し前に遡る

「いや、ありがとうございます。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「べつにこれくらい大丈夫だよ。私もフェイトちゃんもこういうことしたかったし」

「うん、こういうのって面白いよね！」

ひよっとこが台所で食材の確認をしている頃、大きな部屋に集まってはやてはなのはとフェイトに頭を下げていた。三人のほかにもエリオやキャロ、ティアナやスバルや守護騎士の面々、そして何食わぬ顔で参加してきたスカリエッティとウーノがいた。

「それにしてもみんなお疲れ様！ 初出勤は全員怪我もせず終わってよかったね！」

「……なのは、ひよっとこのこと忘れてねーか？」

「え？ 何言ってるの、ヴィータちゃん。そんな人いないに決まってるじゃん！」

にこやかな笑みを浮かべるなのはにヴィータはそれ以上にも言えずに黙るだけだった。

「もしかして、なのはさん怒ってるんじゃないの？」

「……それはあるかもしれないよ。 どうしようティア。 なのはさんの機嫌がよくないと部屋に侵入する機会チャンスがなくなっちゃうよ」「いや、それより雰囲気自体が暗くなっただな……」

新人二人とヴァイターがコソコソと集まって会議をする。 他の者は困ったように苦笑い。 そんな空気をどうしようかと思案するはやて。

「あ、気にしないで。 普段もこんな感じの扱いだから」
そして事実を告げるフェイト

『もう少し扱いよくしましょうよっ!?!?』

「一般人のランクにまで上がったら私たちも扱い方をかえるんだけどね」

どうやら高町なのはという女性の中では彼の人間性は一般人以下のランクに位置しているらしい。 といってもそれはなのはだけに限ったことではない。 おおよそ、ここにいる女性陣は彼のことを一般人ランクだとは思っていないだろう。 せめてミカヅキモランクが打倒なところだ。

「けど、ひよっとこさんってなのはさんやフェイトさんのことが好きなんですよね?」

「どうせ口だけだよ、口だけ。 私がなんと俊くんの口車に乗せられたか」

「そういえば、なのはって子どものうちにビスコ食べてたら魔力量
が上がるって嘘話を一人だけ信じてたよね」

「うっ……フェイトちゃん。それはいわないでよ……」

顔を赤くしながらフェイトを睨むのは。その視線を受けて自分
がどれほど迂闊なことをしたのか悟ったフェイト。

「なんですか、その話っ！ 詳しく聞かせてくださいっ！！」

『私たちも聞きたーい！！』

ハイエナのようになのはの周囲をまわりながらインタビュアーのよ
うに手をマイク代わりにして押し付ける新人に、困った顔をしながら
らもなのははかわす。

「ふ〜む……それならちょっと試してみる？」

『ビスコを？』

「いやいや、ひよっとこのことや」

頭に？マークを浮かべる全員にはやてはどこから取り出した伊達
メガネを装着して女教師のように説明しはじめた。

「あのバカは夕食の準備をしている最中や。そこでわたしがこの
部屋全体に結界を張る。当然魔力を持たないアイツは結界に入る
ことができないわけや」

「あれ？ でも俊くん微量だけで魔力あるよ？」

「大丈夫大丈夫、あれは“ある”うちに入らんで。ランクにすらできんし。説明を続けるで、その結界の中であたかもパーティーゲームをしているふうにみせかけるんや。そしてあいつが私達の楽しそうな声に気付いた瞬間に一芝居うつ！ 私がなのはちゃんやフェイトちゃんに脱がそうとする芝居や！ あ、もちろん芝居だから声だけでええで。もつとも……脱ぎたいなら別やけど」

『ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！』

「ちよっ！？ 脱ぐわけないよっ！ しかも仮にも上司に向かってそれはあんまりじゃない、スバルとティアっ!？」

なのはの脱がない宣言に絶望しきった表情でフロアリングを転がるスバルとティア。 いったい彼女たちはどこに向かおうとしているのだろうか。

「まあ、そんなわけで演技に色をつけるために男には退散してもらうで。 もつとも、退散しなかつたらあのバカが厄介なことになるけど」

「ふむ、同士を怒らせるのは私としても反対なのでね。 ここは素直に従っておくでしょう。 では……エリオ君にザフェーラ君いこうか」

「さて貴様、いま卑猥な単語を口にしなかつたか？」

スカリエッティに手を引かれながら部屋の外へ出ていくエリオと自分の名前の一文字が変わっただけで卑猥な単語に早変わりしたザフェーラがスカリエッティを睨むながら出て行ったのを見届けてはや

てが結界を張る。

「さうて、まずは……本当にパーティーゲームしよつか！」

演技をするのにも限界がある。今回は音をあちらに届けないといけないのでどうしても本当にゲームをする必要がある。

「それじゃス ブラヤろうよ！ 私強いんだよ！」

やる気満々なのははやては挑発的な笑みで返す。

「ほ……なのはちゃんかねー。まあ、それならわたしが軽く捻ってあげようかな」

「へへ、はやてちゃんがなのはに勝てるっても？」

バチバチと火花を散らす二人。

かくしてパーティーゲームのはずが二人の真剣勝負へとかわっていった。

3分後、そこには自分のゲームの弱さを痛感しているエースオブエースの姿があった。

「えげつねえ……いつさい手を抜かなかったぞ……」

「……なのは涙目じゃないか……？」

「な、泣いてないもん！」

うっすらと目元に雫をためながらなのはが言う。

「な、なのはは頑張ったよ！ うん、すごく頑張った！」

なのはの姿をみてフェイトがさかさずフォローする。なのははそんなフェイトの胸に飛びついていく。頬に当たる豊満で豊潤な胸。それを顔面全体で味わいながら、なのははそっと自分の胸に手を当てる

「フェイトちゃんの裏切り者っ！」

「ええっ!？」

「ちょっとまで、なのは。なんであたしの所に真っ先にきた。自分の一部の膨らみを確認してからこっちにきたよな？」

「ヴィータちゃんがいるからまだ大丈夫だもんっ！」

「どっという意味だコラッ！」

自分より下の者のところにいく。人間の賢い知恵である。

「まあ、それはそれとして。そんじゃ実験はじめようか」

「そういえば、この実験でなにがわかるの？」

「……あいつの人間としての最低度かな」

その時、この場にいる誰もが思った。

『元から最低の部類だけだな……』

その空気を肌で感じたのかはやてが努めて明るい声でなのはに呼びかける。

「ま、まあなのはちゃん。とりあえず実験しとこか。色々面白いもんが見れるかもしれないし」

「え〜……それじゃあ」

「おっし、いくで〜。『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』
はい、このセリフ」

「う、うん。『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!?! あ〜〜〜!』 え〜つと、これでいいの?」

「おっけおっけー、上出来や。それじゃ、結界でうちら側だけ見れるように操作してあいつがどうしてるか見物しよか」

はやてが軽く指パッチンする。

そしてクリアになる視界。映し出される幼馴染の姿

オープン

ひょっとこ パンツを脱ぎ捨てようとしている最中

クローズ

「ごめんみんな！ あいつ予想以上にバカやった！！」

一瞬で結界をもどしたはやてがみんなに向かつて土下座する。それはまさに視界に映し出された化け物。凶器を持ちながら狂喜し幼馴染の裸を見れるということに狂喜した変態の姿。それはか弱い少女たちを絶望へ恐怖へどん底へ叩き落とすには十分であった。

ある者は自分の母の元へと飛び込み涙を流した。ある者はハンマーを取り出して彼の息子を叩き折ろうとしていた。ある者はこれにかこつけて最愛の人の胸を揉みだこうとしていた。ある者は顔を赤くしたまま自分の幼馴染がここまでの男だったのかと嘆き、悲しんでいた。

そうして彼が知らないうちに彼女たちの彼の認識が評価がかわっていった。

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！ (裏側) (後書き)

スカさんが逮捕されないのが不思議です。

真面目回をそろそろ入れるべきかどうか迷いますね。

50万PV達成したみたいです。ほんとうにありがとうございます。
した。

20・スカさんとお話し

大人三人がゆうに入れる台所で、男性3人とゴスロリ服を着た男の子1人の声が聞こえてくる。

指示を出しているのは黒髪に日本男子の平均身長をわずかばかり超えている男性である。その男は自分も手を動かしながら淀みなく他の者に指示を出していた。

「スカさん、トンカツ用の肉には八チミチを塗っておいて。そうすることによって冷めてもおいしく出来上がるから。ザッフィー、手羽先は二度揚げでよろしく。エリオはパスタもってきて」

自身はサーモンのカルパッチョを作りながら指示を出すと、そこに恐る恐るといった感じで、スバルとティアが近づいてきた。

「あのー……はやてさんが手伝ってこい、というので来たのですが……私達にできることありますか?」

「ああ、それはちょうどいい。それじゃ、このカルパッチョを運んでくれ。おーい、そろそろテーブルのほうに移ってくれ〜!」

『はいー!』

「うわあっ! ティア、このカルパッチョおいしそうだよ!」

「ほんとだ……!」

あくまで男性との距離を取りながら皿を受け取ると、二人は喜色満

面でテーブルへと皿を運んでいく。男性から呼ばれた者たちはゾロゾロとテーブルへと席についた。普段はなのはとフェイトとひよっとこしか座らないのでそこまで大きいのを買っておらず、テーブルには6人しか座れないのだが

「え〜っと、来客ようにもう一つだそっか。フェイトちゃん、どこにあるっけ？」

「え？ 私知らないよ？」

『なのは〜、右奥の部屋に来客用のあるから取ってきてー』

「あ、はい！」

二人でクエスチョンマークを台所から男性の音が飛んでくる。その声でようやくどこに置いたのかの場所がわかり慌てて取りに行くことに。

「……………なんで自分の家のことなのにわからないんだ？」

「まあ、家のことは大抵アイツがやってるし。アイツのほうが詳しいやろ」

ヴィータの眩きにはやてが答える。

「おまたせ〜、テーブルもってきたからみんな座ってー！」

「ところで、なのはちゃん。席順はどうするん？」

「あっ……………どっしりっか」

ここでようやくなのははその考えに至った。主席のテーブルは6人までしか座れない。そして今日来ている者たちは合計で14人。引き算すればわかると思うが、半数以上の者が主席テーブルには座れないのだ。

「まあ……こういうときは大抵年上に主席を譲るのが当然なんやけど……」

「なのはさんの横がいいです!」

「なのはさんの上がいいです! もしくは私がなのはさんの下で!」

「といってるように、新人二人が譲らるのでな」

はやて自体はこのことを嬉しく思っている。六課は自分の身内で固めた部隊だ。隊長陣たちは身内なので仲がいいのは当たり前なのだ。新人たちとの温度差がはやてには気がかりだったのだ。それもいまでは雲散霧消しているわけだが。なのはには悪いが、なのはに感謝しているはやてである。

「えっと……とりあえずティアとは一緒になりたくないかな」

「ひどいなのはさんっ!?! あの一夜はなんだったんですかっ!?!」

「どの一夜っ!?!」

ティアがなのはに突撃して抱きつく。

そうこうしているうちに、ザフィーラとスカリエッティが料理がの

った大皿を運んでくる。

『おおー！』

思わず漏らす感嘆の声。

「へへ、前みたときより結構レベル上がってそうやな」

「あいつ、料理にかんしては真剣に勉強してたもんな」

テーブルに置かれた料理をみながらはやたとヴィータが話し合う。

「……もしかして、ここまでの料理が作れるひょっとこさんて凄い人なんじゃ……？」

「うん……それは思ってきた」

新人二人が料理をみて呟くと、何人か首を縦に動かして同調する。

「こ、これっ！ か、カルボナーラです！」

『おいしいぞー、エリオ。 カルボナーラだよ』

「あ、カルボナーラです！」

若干緊張気味でぎこちない足取りで、エリオがカルボナーラを運んできた。

ゴスロリ衣装を身に纏いながら

「……もしかなくても、ここまで見境ないひょっとこさんって頭がおかしい人なんじゃ……？」

「うん……それは知ってた」

新人二人がエリオの姿をみて呟くと、全員が首を縦に動かして同調した。

ひとまず料理を作り終えたので俺もテーブルに着くことに。

「……あれ？俺の席がないんだけど」

「ああ、あっちにあるぞ」

律儀にみんなが待っている中で、ヴィータが窓の方を指さす。

そこにはダンボールで作られたテーブルがポツンと置いてあった。

コップに入ったお茶と一人分取り皿に乗せられたご飯が哀愁を誘う。

「いやいやいや、せめてそっちのテーブルに……」

『こないてくださいっ！』

「ええっ！？俺なにかしたかなっ！？」

料理を手を取ってなのは達が出したテーブルに移動しようとしたところで、そのテーブルに座っていたキャロ・フェイト・ヴィータ・エリオ・ウーノさん・スカさん・ザッファイに却下された。……あれ？ いまさっきまではここまで拒絶されてなかったのに。

そんなことを思っている間にはやてから、いただきますの音頭が行われる。それを皮切りに各々が嬉しそうに料理を食べてくれるのだが

「……うん、スバルとエリオの食欲は予想外だな」

勢いよく食べる二人を前に、俺が作った料理がどんどんなくなっていく。料理がなくなること自体はともうれしいことだ。なんたつて、料理は食べられてこそ意味があるんだし。しかしながら、ここまでの勢いで食べられると……

「……料理を作るほうに徹しようかな」

すでに消えつつある料理を眺めながら台所へと向かう。今回の主役は六課の面々だし、楽しんでもらえるならそれでいいや。

食べる側から作る側に早々シフトチェンジした俺のところにスカさんがやってきた。

「どうしたの、スカさん？ 酒とかタバコとかないよ？」

「いや、そういうわけじゃないんだがね。君一人では大変そうなので手伝おうと思ってる。それに、色々とあそこにいたら私も危ない身なのだよ」

「窃盗したから？」

「もっと大きなことさ」

そういいながらスカさんは隣にたつて、俺のかわりにジャガイモの皮をむいてくれる。それにしても窃盗より大きなことつてなんだろう？ 盗撮？ それとも小さい女の子に声をかけたとか？

手を動かしながらも思案する俺の頭の中に、スカさんの声が届く。

「君からみて、フェイト君やエリオ君はどうみえるかい？」

「どうみえるって？」

「こう……なんといえはいいのだろうか。その……人生を謳歌している、みたいな感じで」

「そうだなあ……二人の表情を見ればわかると思っけど、毎日楽しくそうに過ごしてるんじゃないのかな？」

「そうか……」

スカさんはそれだけ言って、作業に徹する。先ほどまでとスカさんの態度が違うのでこちらとしては驚くばかりである。何か悪い食べ物でも食べたのだろうか？

「スカさんどうしたの？ なにか悪い食べ物でも食べた？」

「いや……ちょっと思うところがあったね。君は考えたことないかい？ “もしここで〜ならば違う生き方もできたんじゃないのか

”と。 今日、六課のみんなを見ていたらそう思ってしまったね”

「まあ、それは考えたことあるけどさ」

そんなこと考えていても、仕方がない気がするけどね。 セーブやロードがついてるような生易しいゲームじゃないんだから。

「そんなこと言ってたら前になんか進めないよ。 それに実際、神様が出てきて『君は不幸な人生だったね。 私が昔に戻してあげるから、いまよりよりよい未来になるように、よりよい人生になるように頑張りたいまえ』なんて言われても困るよ。 単純に面倒くさいし、思い出補正もなくなってしまう」

「ふむ……そんなもんかね。 それにしても、君にも思い出というものがあるのかね？」

「失敬な、これでもなのは達と過ごしてきたんだ。 色々な思い出はあるよ。 嬉しかったこととか、悲しかったこととかね」

「ほう……差支えなければ教えてもらうことは可能かい？」

冗談なんか一切ない気配でスカさんが聞いてくる。

「よしてくれよ。 野郎の過去話ほどつまらないものはないさ。

どうせ聞くんだったらお話し大好きな女性陣の過去話でも聞くことだね。 ぶっ飛ばされる覚悟は必要かもしれないけど」

肩をすくめながらおどける俺にスカさんは苦笑を漏らす。 さすがのスカさんもあの女性陣のお話に突撃するようなことはしないみたい。

「確かに野郎の男性の過去話なんて私たちにはそこまで関係ないことだね」

そのとき、ウーノさんがスカさんを呼ぶ声が聞こえてきた。どうやらウーノさんが質問攻めにあってるみたいだ。流石は女の子だよな。

「ほら、ウーノさんがお待ちかねだぜ。頑張ってくるんだ、スカさん」

「ううむ……私はこういったことにあまり強くないのだが……」

トボトボと歩くスカさんの背中はいさだけくたびれたような、ゲソソとしてるよじに感じた。

広い台所に一人きり。後ろには華やかな女性陣の声。

もしも神様がいたら、神様は管理局の局員以上に忙しい身なんだと思う。だからこそ、あのときだって忙しかったからこそ、あんな事件が起こったのだ。

いまでも覚えている、モノクロ白黒の世界から色を取り戻してくれた彼女の笑顔。

いまでも覚えている、元気に手を振りながら飛行機にのった両親のことを。

21・初恋語

『白黒の世界でも、彼女だけは変わらずに俺の前で笑っていた』

祝賀会も時間が経つにつれ、終わりムードに達してきた。　　というか、一部の者から眠たいという意見が出たのでなし崩し的に終わりをむかえた。　　まだ眠らない者たちはゲームをしたりトランプをしたり好き勝手にしている。　　俺はそれを背中で感じながら食べ終わった食器を回収し、片付けることに。

今日はなんだか一人芝居をするのも面倒なので、ちょっとだけ昔のことを思い出してみよう。　　べつに誰に話すことでもないの、どこかにいる宇宙人に怪電波でも飛ばしながら。

突然だが魔法使いつて信じるか？　　少なくとも俺は信じるね。

俺の両親は魔法使いだっただ。　　正確にいうと父親が。　　“魔法使い”、そう言ってもなのはやフェイト、はやてのようにデバイスで魔法を使えるわけでもなく、かといって漫画のような不思議な超常現象を起こせるわけでもない。　　誰もが持っている、誰もが出すことできる魔法　　ありたいにいえば笑顔なんだ。

父さんは色んな国や色んな世界の人達を笑顔にしていた。　　紛争

地帯でもパンツ一つで突っこんでみんなを爆笑の海に巻き込んでく
だらない争いを止めさせてきた。いつも豪快に笑って失敗したと
きだって手を叩いて笑っているひとだった。そんな父さんが俺も
母さんも大好きだった。

当然、父さんは世界中のスターであったのでその分嫌われてもいた。
戦争が起こることによって儲けが出る者や、戦争を引き起こした連中か
らみれば当然のことだろう。父さんは目の上のたんこぶなわけな
んだからな。

父さんはそんなことを気にするほどの心を持ち合わせていないので、
“好き勝手にやらせればいい”。そう言っていた。

そんな時らしかった、土郎さんと出会ったのは。父さんも母さん
も土郎さんも詳しく話してくれなかったからわからないけど……結
果的に土郎さんの説得もあって俺たち家族は海鳴に引越すことにな
ったんだ。はじめてきたときは驚いたのを覚えている。ほど
ほどに自然があって空気がうまくて人柄の良い人たちが集まってい
たのだから。

引越してからすぐ、俺たち家族は高町家族に挨拶にいった。
その時だよ、なのはと出会ったのは。

「こ、こんにちは……高町なのは……です」

「え？ なに？ 聞こえないんだけど？」

「ひゃっ……」

「怯えさせてどうすんだよ、バカ」

父さんが俺の頭を叩いてくる。 いやいや、まじで声が小さくて聞こえないんだって。

「ごめんなー、なのはちゃん。ビックリさせちゃったよな。こいつは俺の息子で俊っていうんだ。なのはちゃんと同じ4歳だから仲良くしてくれるかな？」

「う、うん……」

父さんは、腰を下ろしてなのはと呼ばれた女の子と目線を合わせた後に頭をなでながらゆつくりと話す。なのはと呼ばれた女の子のほうも小さく頷いていた。

「え、俺男の子と遊びたいよ。ここらへんにも男の子いるんでしょっ？」

「男つてのはそこらへんにでも転がってるもんだが、女の子つてのは手を伸ばさないと届かないものなのさ。いいからお前も大事にしとけ」

ニヒルな笑顔で俺の頭をぐしゃぐしゃ撫でる。この大きな手が俺は大好きなんだ。

「はっはっ、まあ俊君も遊びたい盛りなんだろうな。俊君、うちの恭也と遊んできたらどうだい？」

向かい側にいた静観な顔つきのカツコイイ人が後ろに立っていた兄

ちゃんを前に出しながら問う。

「恭也、俊君と遊んでくれるかい？ 私たちはちょっと話し合いをしてくるから」

「はい、わかりました」

「あー、だったら私もなのはと一緒に遊ぼう。ねえねえ、みんなで遊ばない？」

恭也と呼ばれた兄ちゃんの隣でニコニコと見守っていた女の人が、あの小さい女の子の肩を抱きながら話しかけてきた。

「ん？ まあ、べつにいいが。俊君もそれでいいかい？」

「うーん、まあいいよ」

正直なところ、俺は恭也さんと男だけで遊びたかったけどここで俺だけが反対しても空気が悪くなるだけなので止めておいた。そして俺たちは何やら真剣に話す親たちを横目に公園に行って遊ぶことにしたんだ。

「もーいーかい？」

『まーただだよ！』

公園に遊びに来た俺たちはなののお姉ちゃんだという美由紀さん提案の元、かくれんぼをすることになった。

「もーいーかい？」

恭也兄さんの声が響いてくる。早く隠れ場所を見つけないと……！

そう思いながら辺りを見回すと、中が空洞になっている可愛らしい猫の遊具を見つけたので急いで入ることにした。絶好の隠れ場所だ。

「……………あ？」

「あーっと……………ごめんなさい、高町。すぐ出ます」

「あ、いいよ。もうおにちゃんさがしはじめてるし。いまだたらつかまつちゃうよ？」

どうやら、美由紀さんがサインを出したのだろう。きよろきよろとしながら恭也さんが公園内を散策していた。俺はそれに目を離さないように注意してゆっくりと遊具の中にはいった。

「お邪魔します……………高町」

「あ、うん……………」

高町が座っていたところに座る俺。二人とも何も喋らず、喋ろうともしない。

どれくらい時間が過ぎただろうか。ふいに横からか細い声が聞こえてきた。

「ねえ……なのほってよんで?」

「え?」

「おなまえで……よんでほしいの」

……ああ、苗字じゃなくて下の名前と呼べということか。確かに考えてみたらそうだよな、今後とも家族ぐるみでのお付き合いをしようだし、それなのに高町なんて呼んでたら誰がだれかわかんなくなっちゃうもんな。

「ああ、ごめん。その……きづかなくて」

「う、ううん。べつにいいよ。その……こんどからきをつけてくれるなら……」

「お、おう」

会話終了

この町にくるまでは全くといっていいほど女友達がいなかったのが祟ったのかまったくこの子との会話ができない。

焦る俺。なんとなくこの空気が嫌で状況を打破しようとなのはのほうを見る。なのは胸の前で大事そうに猫のぬいぐるみを抱えていた。耳は茶色で全身の色は白と黒で統一されている、可愛いけどちょっと配色がおかしくないか? そう言いたくなるような猫だった。

「あのさ……猫、好きなの?」

それからもののはのしるちゃん談義は続いた。やれ、どこらへんが可愛いだの、ここが気に入ってるだの。正直、同じことの繰り返しだったけど、嬉しそうにはしゃぎながら、楽しそうに笑いながら喋る姿をみているのはとても心地よかった。それと同時にこの子といると自分の心が温まるような、そんな……不思議な感覚にも陥った。

やがてなのはの談義が一段落すると、砂ジャリを踏みしめる音が聞こえてきた。見つかった……！ そう思ったときには時既に遅し。美由紀さんと恭也さんが優しい眼差しで俺たちを見つけていた。

「みつけたぞ、二人とも。これでかくれんぼもお終いだ」

「あう……みつかっちゃった」

「まあ……しょうがないよ」

あれだけはしゃいでいたんだし。見つかるのもしょうがないような気がする。もしかしたら恭也さんは俺たちの話をずっと傍で聞いていて頃合いをみて出てきたのかもしれない。そう子ども心に思ってしまった。

それから俺たちは4人で手をつなぎながら帰った。恭也さんと美由紀さんを端に置きなのはと二人で仲良く手をつないだ。

公園での一件いらい、俺は高町家族が好きになった。父さんの友達である土郎さんは剣道？ 剣術？ をやっているらしく、恭也さ

んと美由紀さんもそれを習っていた。何度も何度も、俺となのは通い詰めた。というか、なのはの場合は俺が引つ張りだしたんだ。木刀を振り交差に交わる姿は素直に恰好よかった。憧れてもいた。士郎さんはそんな俺の心境に気付いたのか、よく誘ってくれた。自分にはそんなことできないよ。そういう俺に士郎さんは笑いながら『できないのは当たり前だ。練習しなければ、握ってみなければできるかどうかなんてわからないからね』そう言っ
て背中を押してくれた。恭也さんと美由紀さんが模擬戦をしている横で一生懸命見よう見まねで木刀を振ったことを覚えている。はじめは振り方すら満足にできず木刀を落としたことも覚えている。それでもなんともなんともなんともなんとも挑戦して、ようやく振れたのを覚えている。振れた瞬間に士郎さんの拍手、恭也さんと美由紀さんからの言葉。なのははしやぎ方、そして少し前から観戦していた父さんと母さんの笑顔を覚えている。

いつまでも、こんな日が続くと思っていた。

家では父さんと母さんと遊んで笑っておしゃべりして、朝になって家にまで迎えに来たのはと公園で遊んで家で遊んで、士郎さんや恭也さん、美由紀さんと一緒に稽古して夜には両家族一緒に夕食を食べる。

そんな幸せがいつまでも続くと思っていた。

ただ、運命は残酷で小さい子どもの些細な幸せもいと簡単に奪ってしまった。

それは唐突に呆気なくなんの連絡も知らせもなく合図もなく準備も

なくやってきた。

遠い国で飛行落下事故、乗客全員行方不明

そんな文字に起こすと19文字程度の文で、幸せは音を立てて音もなく見る隙も与えず見せびらかしながら崩れ去った。

5歳の誕生日を迎えるときだった。

この瞬間、俺は孤独になったのだ。

なにもが茫然と佇んでいる間に終わった。遺体なんて見つかるはずもなく、葬儀は形だけ執り行われた。それでも、葬儀にはいろんな人が駆けつけてくれた……みたいだ。ありえないほど多くの信頼関係と交友関係をもっていた父さんは色んな人に悔やまれながらお墓が建てられた。

そして問題は俺をどうするか、という議題になった。

正直どうでもよかった。父さんと母さんがいない世界なんていても同じだった。その証拠に俺の世界は白と黒で染まっていた。モノトーン越しから色々な人が俺に言葉を投げかけてくれた。そのどれもが醜悪で醜くて見境なくて穢れていて俺は首を黙って横に振るだけだった。子どもはビンカンに何かを感じれるときがあると聞く。まさに俺はそのときその状態だったんだと思う。

そんな俺の肩を強く離さないように抱いてくれた人がいた。全てを取り仕切ってくれた土郎さんだ。

士郎さんは一言

『くるか?』

そう言ってくれた。それに黙って頷いたのを覚えている。

「やだよ、士郎さん。家に残りたいよ！」

士郎は困惑しながらも冷静に俊に悟らせる。

「俊君、君の気持は痛いほどわかる。けどね、君が高町家にくるといふことはあの家には住めないということなんだ」

「なんで? ねえ、なんで? 俺があの家に残っていないと父さんと母さんが困っちゃうよ?」

小さい子どもは一つ一つのことを理解しても前後の繋がりを理解していない場合が多い。まさに俊がその状態である。

自分が高町家に行くことはわかっている。しかしそれが家にいられなくなる。ということにつなげられないのだ。お泊り会のと きと同じように思っているのだ。2・3日行けば家に帰る。その頭の中で作られているのかもしれない。

士郎はゆっくりと優しく俊の目線に合わせてしゃべる。

「いいかい、俊君。君のお父さんとお母さんはもういないんだ。

この世にはいないんだ。世界中どこをさがしたってもういない。

君もみただろ？ 葬式を」

「けど父さんも母さんもお墓の中にはいなかったよ……？ それに約束したもん、父さんも母さんも必ず帰ってくるって。ほら、このひょっとこのお面をもつて待ってれば帰ってくるって」

士郎は思わず目をそらす。非常な現実には耐えられない子供に自分はどうか説き伏せればいいのか。このギリギリのところまで正気を保とうとしている子供になんとはいえいいのか。

『俊を頼むわ。俺はちよっくら笑わしてくるからさ』

そう言っ出て行った友人。自分だっ友人を失ってしまったんだ。だが、この子の場合は家族を失ってしまったんだ。一人で独りになってしまった子どもに自分はなんと声をかければいいんだろ？ なんと声をかけることが正解なんだろう。

「……そうだね、そう……しようか。お父さんが帰ってくるまでしばらくは高町家にしよう」

「うん！」

答えなんて出せるはずがなかった。こうして騙すことしかできなかった。大人は騙す生き物だ。昔TVで言われた言葉だったが、今日ほどこの言葉がしみ込んでくることはなかった。

父さんと母さんがいなくなっってから世界がおかしくなった。机もテレビも電柱も車も食器も床もガラスも色画用紙も本棚もミカンも

ゲームもなにもかも、白黒の世界になってしまった。会う人会う人、白と黒できていてまるで化け物と会話しているような気分になった。 土郎さんも桃子さんも恭也さんも美由紀さんも 全て平等に均等に化け物だった。

やはり自分は守られていたのだ。 偉大な父さんと母さんに。 だからその二人がいなくなって守ってくれる人がいなくなって、世界は弱い自分に牙を剥いてきた。

子どもながらにそう考えていたのを覚えている。

なにもかも嫌になった。 いっそ死にたいと思った。 自分には辛すぎる。 独りで生きていくのは辛すぎる。

だからひよつとこのお面片手に部屋の中でうずくまっていた。 こうしていれば、父さんと母さんが来てくれるかもしれない。 優しい目で俺のことを抱きしめてくれるかもしれない。

土郎さんは喫茶店を作ると言っていた。 桃子さんたちが喜んでいたのを覚えている。 自分には関係ないことだ。

コンコンと誰かが自分の部屋をノックする。 返事は返さない。 正確にはいうならば返事を返せない。 ここのところ喋ってなかったので、すっかり声の出し方を忘れてしまった。 どうやったら声を発することができるのか？ どうやったら横隔膜を震わせることができるのか？ 今の自分には全くわからなかった。 そして興味もほとんどなかった。 人間と人形の違いは“形”か“心”の違いだけと聞いたことがある。 もしそうならば、いまの自分はまさに人形だろう。

ゆっくりと瞼をおろす。今日もまた眠ってしまおう。そうすれば夢の中で二人に会えるかもしれないから。

そのとき、下を向いていた俺の前に白と黒で体を統一された、茶色の耳の猫が現れた。

「にゃーにゃー、こんなところでねていると風邪をひくにゃ？」

「……」

「どづしたにゃ？ だいじょうぶかにゃ？」

それは調子はずれの声だった。

その娘は、白黒の世界にいてもなお あのとときの姿のまま、俺に笑顔を向けていた。

変わらない笑顔で不変の笑顔で、どんな闇も明るく照らすようにどんな氷も溶かしてしまうように、笑顔で俺の正面に座っていた。

「……あ……」

「どづしたにゃ？」

「なんで……」

「ん？」

「……なんでかわらないの？ なんでなのはだけは……かわらないの……？」

死んでいた声が驚きによって戻ってきた。もう発することができないと思っていた声に戻ってきた。

なのは首をかしげる。

「かわらない……？ 俊くん何言ってるの？」

「だって……だって……」

この世界はモノクロで、全てが化け物になっていて生きる希望なんてなくて

震える手が、なのはへと近づく。その存在を確かめたく、その存在に触れたくて震える手でなのはへと近づく。そんな俺の手をなのははゆっくりと抱きしめてくれた。離さないように、守るように、強く強く握ってくれた。

「どうしたの？ なんで泣いてるの？ どこか痛いのか？」

「ううん……大丈夫……大丈夫だから……もう少しだけこのままに……」

なのはに触れるたびに触るたびに、暖かいものが体に浸透していく。

世界に色が満ちていく

世界が鮮やかに染められる

なのはを強く抱くたびに、握るたびに、感じるたびに、世界に色が

戻っていく。

零れ落ちる涙のしずく

溢れ出る想いの結晶

もう届かぬ親へと愛情

その全てがぐちゃぐちゃになり泣くという行為に終着される。

それでも、なのははずっと抱きしめた。泣き叫んでも喚いても黙って相槌を打ちながら聞く。

どれほど泣いただろうか、目は赤く腫れ声はかすれ鼻水で汚れている。やがてどちらからでもなく、そっと体を離す。

「おちついた？」

「……うん」

今更ながら恥ずかしくなって顔が赤くなるが、それを悟られたくない一心で顔を下に下げる。

「そのひよつと」……」

なのはが指を指す先には父さんからもらったひよつとこのお面。

いまならずんなり受け入れることができる。父さんと母さんは行方不明になったんだと。

決して死んだわけじゃない。だから、いつか会えると待っている。

「そのひょつとじ、面白いよね。なのは好きだよ、そのひょつとじ」

「そうなんだ。でも、おかしくない？ 例えば……俺がお面つけたりしても？」

「ううん、まったくおかしくないよ。だって、そのお面だけで笑える人がいるんだもん。それって、とってもすごいことだとは思うの。笑えるっていう行為は簡単なようでとっても難しいの。その難しいことをこんなに簡単にできるんだもん。それって一種の魔法みたいだね」

「魔法……」

『いいか、俊。俺たちはな、魔法使いだ。人が幸せになったとき、そこには笑顔が発生する。だが、笑顔つてのは存外難しいものなんだ。自分では笑顔を出すことは難しいんだ。だからこそ、俺みたいなのが必要なんだよ。シリアスだってコメディーに変えて悲劇だって喜劇にかえる。そんな奴が世界には必要なんだ』

昔、父さんが言っていた言葉を思い出す。

いまならわかる。父さんの言いたかったことが。

いまの俺にはそこまでの技量なんてないけども

「魔法使い……なってみようかな」

「うん！ なのはもねこちゃんといっしょに応援するよー！」

せめて目の前にいる、初恋の相手くらいは笑顔にしようと思った

と、まあこれが俺の思い出であり、高町なのはという女の子を好きになった瞬間なんだよな。　なのはは覚えていないかもしれないけど、俺の中では大切な思い出の一つでもある。

君の中の正義のヒーローはだれか？

そう聞かれたら俺は迷わず、『高町なのは』そう答えることができる。　それくらいのことをしてくれただ。　例え気まぐれだとしても、彼女が俺を救ってくれた事実はかわらない。

「あれ、俊くん。　まだ洗い物してるの？」

「結構な量をみんな食べたしな。　もうしばらくはかかるかもしれない」

「ふ〜ん……手伝おっか？」

「まじで？　それなら頼む」

ゲームをしている連中から抜け出してくれたなのはありがたい申し出をしてくる。　ちよつと洗い物が多いのでこれは素直に嬉しい。

カチャカチャと食器を洗う音だけが二人を支配する。

「なあ、なのは？」

「ん？」

「昔持ってた、猫のぬいぐるみってまだ持ってる？」

あのときから、猫のぬいぐるみを見る頻度が少なくなり、ついには見なくなってしまったからな。いまなにしてるんだらうか？

「ちゃんと実家のほうに飾ってあるよ。誰かさんの涙と鼻水でべとべとになってるけどね」

振り向き笑顔を浮かべるのは。

「白ちゃんも大変だな」

「まっただよだね」

お互い顔を見合わせながら、どちらからともなく肩をすくめる。

やっぱり、この思い出はスカさんに話すのは勿体ない思い出だな。

21・初恋語(後書き)

ねこかわいいよ、ねこ。

22・幼女ヴィヴィオ

わたがし雲が青色の海を悠々と泳いでいる。海には鳥が自由に滑空しており燦々と降り注ぐ太陽が肌を焦がす勢いで容赦なく襲ってくる。

俺はそんな太陽を眺めながら、庭で洗濯物を干していた。

「今日も二人のパンツはかわいいなあ……一つくらいとってもバレないのではないだろうか？」

この頃は色々と不幸が重なり、なのはとフェイトの警戒が強くなってきた。のだが、それをかいくぐって得られる下着こそ興奮するというものではないだろうか。そうに違いない。しかしここにあるものは既に洗濯してしまった下着だけ。こんなものでは俺の進るパトスを抑えることなんてできやしない。そう……使用済みの下着でない……！ 溢れ出るパトスは抑えることはできないのだ……！

そうと決まれば早速行動である。残りの洗濯物は自分のものだけなので適当に干す。ある程度シワを伸ばして洗濯バサミを使って物干しざおにかけたら、さっそく二人の部屋に行くことに。

ヴーヴー

「ん？ スカさんからじゃん。なんでこんなタイミングで。はい、もしもしスカさん？ いまから世界の滅亡よりも大事な用事があるから後にくれる？」

『おお、ひよつとこ君。突然だが幼女に興味はないかい？』

「詳しく聞こうか」

スカさんから興味をそそる単語が聞こえてきたときには知らないうちには知らなかった。

『うむ、ちよつと電話ではあれなので私の家に来てほしいのだが…』

…』

「んー、オツケーオツケー。すぐ行くよ」

スカさんの声が少しだけ重かったけど、どうしたんだらうか？

家の戸締りを済ましてからバイクに跨りスカさんの家へとやってくる。

インターホンを押して数分、いつぞやと同じようにウーノさんが出て迎えてくれた。

「お邪魔します、ウーノさん。スカさんはなにしてるの？」

「ちよつと外せない用事がありました……」

スリッパを差し出してくるウーノさんに頭を下げながら、ス力さん
って暇人じゃなかったのかと考える。 おかしいなあ……俺と同じ
無職だと思っただけだ。

ス力さんの部屋へと移動中、別の部屋から大きな丸メガネをかけた
女性で困った様子ででてきた。

「あ、ウーノ姉様。 私の一人亀甲縛り用の縄知りませんか？ ど
こかにいってしまったんですけど」

「クアットロ、お客様の前ですよ。 そういった発言は控えてくだ
さい」

「これは失礼しました。 あまり他人のことなど気にしない性格な
ので」

「そんなことだから、真夜中に一人亀甲縛りを路上で大変なこ
とになったのでしょう」

ウーノさんが溜息とともに額に手をおく。 なのはやフェイトが俺
のときにやる仕草と同じだ。 それが意味すること、それは『ダメ
だ、こいつ』というわけである。

「この方がドクターがよく話に出す男性ですか。 ……なんだか無
職のような顔をしていますね」

「そつちこそ、DMっぽい顔してるな。 調教でもしてやるつか？」

「心配なく。 あなたじゃ役不足ですわ」

「まあまあ、そこらへんにして。ひよっとこさん、ドクターがお待ちですよ。クアットロ、あなたは夕食の買い物にでも行ってください。縄は私が探しておきますから」

ウーノさんの言葉に納得した様子で、クアットロと呼ばれた女性は玄關のほうへと歩いて行った。まさかウーノさんにあんな妹？がいたとは……。

「ではひよっとこさん、行きましょう」

ウーノさんの言葉に頷きながら、スカさんの部屋へ歩いていく。

スカさんの部屋の前につくと中から1オクターブほど低いスカさんの声が聞こえてきた。

『レジアス、これ以上人造魔導師や戦闘機人の戦力運用はやめにならないかい？』

『何を言っているスカリエッティ。これ以上地上の戦力がなくなっていると思ってるのか？』

『地上の戦力が危ないことは知っているよ。でも……ほんとうにこれでいいんだろうか？これが正しいことなんだろうか？』

『何を世迷言を。貴様がそれを言える立場にあると思っているのか』

？ 私利私欲のために動いたお前が』

ここからでは誰と会話しているのか、どんな会話をしているのかわからないが……真剣な様子であることだけは声の低さでわかった。

ほんとうに入っているのだろうか？ 思わず躊躇ってしまう俺とは反対にウーノさんはトビラを軽くノックし、スカさんに俺がきたことを伝える。

『おお、ひよつとこ君。 入ってくれたまえ』

「お邪魔するよー、スカさん。 ……どしたの？ なんか疲れているみたいけど」

「これくらい、盗撮目的で完徹して作り上げたガジェットのとときと比べればどうということはないよ」

そういうスカさんの表情は少しだけ暗かった。

「ふ〜ん、そつか。 それでさ、電話の件なんだけど」

「おおっ！ そうだ、そうだ！ そのことなんだけどね。 君に……というよりも六課の人達を信じて頼みたいことがあるのだ。 簡単に言ってしまうえば、幼女を一人預かってほしい。 いや待ちたまえ、ひよつとこ君っ！？ そのいますぐプッシュしそうな携帯電話をまずは置くんだけ！」

スカさんから幼女の単語が出た瞬間に、携帯を取り出しおっさんの携帯にかけようとしたのだが……そこはスカさん、俺が打ち込むよりも早く制止させる。

「え〜……だってアレだろ？ 俺に犯罪の片棒を担がせようという魂胆だろ？」

「いやいやいやっ！？ 君は私が幼女を誘拐してきたというのかねっ！？」

なにを当たり前前のごとを。

『ねーねー、チンク。 あそこにいる人だ〜れ？ なんだか仕事してなさそうな顔してるね』

『いくら無職そんな顔をしているからといって、指を指しながら言うのはどうかと……』

「……スカさん。 もしかして俺を攻撃するためにわざわざ呼んだの？」

「いや……そういうわけではないのだが。 チンク、ヴィヴィオ君と一緒にこっちにきてくれないかい？」

『はい』

俺とウーノさんが出入りした扉から小さい女の子の二人組が入ってきた。 赤と翡翠色の厨二チックな目の色をした天真爛漫という言葉が似合いそうな幼女がどたと俺のほうに向かってくる。

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「こんにちは、ひよっとこです。 えらいね〜、自分のお名前が言

えるなんて」

ついつい頭を撫でてしまう。 ヴィヴィオと自己紹介してくれた幼女は気持ちよさそうに目を細めて笑っている。 なんだか小動物とコミュニケーションをとっているような気分になる。

「え〜っと、ウーノさんの妹かな？」

「そのチンクはウーノの妹だけど、君がいま撫でてしているヴィヴィオ君は違うよ。 そしてこの娘がいまさっき話題に出した女の子だ」

「この娘が？」

「うむ。 あまり長々と話しをしたくないので単刀直入にお願いするよ。 この娘を預かってくれないかね？」

その時のスカさんの目にはいつも遊び心なんて微塵も感じなかった。 スカさんは真剣なんだ、真剣に俺に対してお願いしてきたのだ。 やがて頭をゆっくりと下げる。 それにつられる形でウーノさんたちも頭を下げる。 正直、なにがなんだか全くわからない。 一人だけ感じる疎外感。 俺だけがフィールドに立っていないような……そんな感覚を覚える。

「なあスカさん。 理由は話してくれないのか？」

「いまはまだ……話せない。 ただ 私達といるよりもよっぽど幸せになれると思うんだ。 だって私は犯罪者なんだからな」

「幸せの定義なんて人それぞれだと思うけど。 それに俺だってなのはとフェイトがok出さないことには無理だよ。 あいつらの

ことだから、絶対にok出すだろうけどさ。それにこの娘自体はそれに納得してるのか？」

「それは大丈夫だよ。なにも会えないわけじゃないんだ。会おうと思えばいつでも会える距離にいるんだしね」

どうにも要領を得ない会話が続く。スカさんが何かを隠したい気持ちには伝わってくるのだが……

「ねーねー、ヴィヴィオお腹すいたー」

「ん？ あー、わるい。ビスコしか持ってないんだけど」

ポケットからビスコを取り出す。それをヴィヴィオは嬉しそうに受け取ると思いつきり袋を開けた。ことよってビスコが床へと落ちる。

止まる刻

ヴィヴィオの頬に伝わる一筋の涙。

あ、もう決壊寸前だ。

ここで泣かれても困るので予備にもってきたビスコを袋から破って手渡すことに。嬉しそうに受け取るヴィヴィオ。やはり幼女の笑顔というのは何よりも勝る宝である。

それにしてもどうするか……。これは俺一人では決めることができないし、一度帰ってから三人で話し合うとしよう。

「ちょっとだけ時間をくれ。三人で話し合うから」
腰かけていた椅子から立ち上がったところで、なにかが自分の手を引く張る違和感を覚えて振り返る。

「ねーねー、かえるの？ ヴィヴィオもつと欲しい」

「あー、ごめんな。それ家にしかないんだよ」

「だったらヴィヴィオもいく！」

「……………ん？」

なんだろう……いま三段飛ばしくらいで話が進んだような気がする。

「えーっと、君が欲しがってるビスコは家にしかないのはわかるよね？」

「うん！」

「それじゃ、俺が一旦家に帰ることもわかるよね？」

「うん！ ヴィヴィオもついていく！」

「まって、そこがおかしい。俺が君を連れて帰ったりなんかしたらおっさんが瞬時にやってくるから。撲殺どころの話じゃなくなるから」

流石のおっさんも釘バットで治せないから。

なんとかかして言い聞かせる。しかしそこは子ども特有の力、話をまったく聞いてくれないパワーで俺が根負けしてしまうことに。

どういう教育をしたらこんな娘になってしまっただ。この娘の将来が本気で心配になってきた。とりあえず、なのはとフェイトの二人に電話することに。

フェイトは仕事なのかつながらないので、なのはにかける。1
コールの後に口になにかを入れたままの幼馴染の声が届いてくる。

『もふえもふえ？ ほっしたの？ 仕事中心ふあんだけど』

「菓子を食うのが仕事ってある意味すごいよな。まあ、それはいいとして大変なんだ、なのは。真面目に聞いてくれ」

『へ？ あ……うん。どうしたの？』

「目の前に将来が心配で心配でたまらない子がいるんだけど」

『現在が詰んでる俊くんよりかは大分マシだね』

「はあ……」

『えっ！？ なにその溜息っ！？ 溜息つきたいのは私とフェイトちゃんのほっただよっ！』

「誰のおかげでお前らの下着が盗まれずに済んでると思ってるんだ？」

『誰のせいで私たちの下着がなくなってるか知ってる？』

たぶん家出でもしてるんじゃないだろうか？ 俺の部屋に

「まあ、それは置いておいて。今夜は少しだけ早く帰ってきてくれ。ついでにビスコも買ってきて」

『あー、うん。それじゃなるだけ早く帰ってくるね』

通話終了ボタンを押して一息つく。

なのはたちが帰ってくるまでビスコもつかないかな？

22・幼女ヴィヴィオ（後書き）

今回はそこまで暴走してないです。たまにはこんなのもアリというくらいです。

あと、少しだけ休憩していいですよね？

23・恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ！？

携帯の通話終了ボタンを押しながら、私はたったいままで会話していた人物を思い浮かべる。真面目な話だから帰ってきてほしい…そう言っていたがいったいどうしたんだろう？もしかしてついに就職する気になったのだろうか？いやいや、彼に限ってそんなことはない。だとしたらなんだろうか？

「うゝん……大事なお話しか。もしかして私達に関係することかな？」

私達に関係することならば大分絞られてくる。夕食のこととか、月1で開催される大掃除とか、実家に帰ってゆっくり過ごすとか。

でも……声色からしてそれはないと思う。それにそれらのことから家に帰ってきたときに言えばいいのだし。

「うむむ……余計にわからなくなっちゃったよ」

「ね、なのはちゃん。カービーのエアライドせえへん？丁度いい暇つぶしになると思うんやけど」

「わ！やるやる！　って、違うよねっ！？　ついつい流されそうになったけど、仕事場にゲーム機持ってくるなんておかしきよねっ！？」

「ぼーっと携帯のディスプレイ眺めてたなのはちゃんに言われたくないで」

「眺めてないもんっ！ 誤解を招くような言い方やめてくれるっ！」
ゲーム機をセットしながらからかうはやてに、なのはは思わず席を立ちながら否定する。

『な、なのはさん……困りますよ。お仕事の最中に私が写ってる待ち受け画像をみるなんて……』

「顔を赤くしながらこっちにこないでよっ！？ 私そっちの趣味がないっていつてるでしょっ!？」

「大丈夫です。私が教導してあげます！ 愛の共同作業で教導しましょう！」

書類を投げ捨てて迫ってくるスバルに、なのはは全力で逃げる。ドタバタと慌ただしい音が仕事場に響く

「ただいまー、いま帰ったよ」

「フェイトちゃん助けてっ！」

執務官の仕事から帰ってきたフェイトに勢いよく飛びつくなのは。フェイトは全身の体のバネを使いながら必死に受け止める。顔を上げたなのはには若干ながら涙を流した痕跡が残っている。エースオブエースに涙を流させるほどの部下の迫力と真剣度。なぜこれを訓練で発揮しないのか甚だ疑問を覚えるフェイトである。

「ど、どうしたのなのはっ!？」

「もういやだよっ！ おうち帰りたいよっ!！」

「なのはさんの泣き顔カワユス……。ぺろぺろしていいですかっ！？」

「落ちていてスバル！？ それもう犯罪者の域に達しようとしてるから！」

「フェイトちゃん、おうちかえろっよっ！」

フェイトの胸に顔を押し付けるなのは。ふとみると、はやては面白そうに自前のカメラでこの様子を撮っている。ここにその他の者がいなかったことだけがなのはにとつての救いだったかもしれない。もしこんな姿をみられたら、べつに見られてもいまままでと変わらないかもしれない。

幼子のようにフェイトに抱きつくなのはに、フェイトはトドメの一撃を食らわせた。

「でも、家に帰ったら俊がいるよ……？」

フェイトの　かいしんの　いちげき

エースオブエース　高町なのはは　たおれた

「さすがフェイトちゃんや。なのはちゃんに向かって効果抜群の一撃をためらいなく与えるなんて……恐ろしい娘やっ！」

倒れたなのはを必死に介抱するフェイトをみながら、はやてはそう呟いた。

なんとか管理局員に見つかることなくヴィヴィオを家に迎えることができた。いや、ほんとうはダメなことだと思っただけだ。

「わあ〜！ お家おっきいね！」

「だろ〜？ なのはとフェイトが頑張ってくれてるからな！」

「それじゃあ、おにいさんはなにしてるのぉ？」

「おにいさんは夢を追っかけているんだよ」

いまだたどり着かないどころか、見えてこない夢だけだ。

それでもヴィヴィオはこのフレーズが気に入ったらしく、手を叩いて喜んでくれた。

「ヴィヴィオも夢をおいかけろ〜！」

「ヴィヴィオ、夢ってのは追いかけるものじゃないんだよ。叶えるためのものなんだよ」

「でもおにいさんはおいかけてるんでしょ？」

「俺の夢はツンデレだからな」

「まだにデレを魅せてくれたことはないのだけど。」

「まあ、夢はいいじゃないか。それよりビスコ食べるか？ うまいぞ、ビスコ」

「たべるたべる！ ヴィヴィオ、ビスコ大好き！」

「そうかそうか。ビスコを食べるとなのはみたいになれるからな。頑張るんだぞ！」

「ん〜？ なのはってだ〜れ？」

ビスコを口に含んだまま、ヴィヴィオが首をかしげてくる。こういった仕草が似合うのもこの娘のすごいところだな。しかし、なのはがダレなのか、か。これは難しい。なんととっても自慢の幼馴染である。下手に貶してイメージをそこねたくないし、夕方には会うことになるのだからここはヴィヴィオが喜ぶような内容に脚色しないと……！

俺はゲームを取り出しポ モン図鑑を選択し調べる。幼馴染のイメージを貶すわけにはいかない……！！

「え〜っと、タイプは水・ひこうで入手方法はすごいつりざおかコイキングから地道に育てるのもアリかな。ものすごく凶暴でヴィヴィオみたいな娘が悪いことをすると、どこからともなくやってきて全身を引き裂いて帰っていくんだよ。口からはビームが出て

きて、そのビームはミッドを破壊するほどの力をもっているんだ」
なのはのイメージを貶すことなく、どちらかというを持ち上げる形
でヴィヴィオの目線に合わせて話したのだが 話し終えた瞬間に
ヴィヴィオに泣かれてしまった。

ごめん、なのは。 ヴィヴィオが求めてたのはギャラドスなのはじ
やなくて、高町なのはだったみたい。

23・恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ！？（後書き）

ほのぼのストーリーっぽくていいですね。

24・それでも俺はやってない。 というのは嘘だ

ヴィヴィオに色々な服を着せて遊んでいたら我が家のお姫様二人が帰宅する時間が近づいてきたので、すぐ隣で楽しそうにお絵かきしているヴィヴィオに確認を取ることに。 なんの確認かというと、これから行動する予定の確認である。

「ヴィヴィオー、さっき言った通りにするんだぞー」

「うん！ えっと、金髪のお姉ちゃんのところに駆け寄ればいいんだよね！」

「そうそう。 決して栗色の髪のお姉ちゃんには近づくなよ。 触れた瞬間溶けるからな」

「あう……ヴィヴィオきをつける……」

ヴィヴィオの中ではすでになのはが、空を飛び街を破壊し目と目が合った者を虐殺していくクリーチャーへと変貌していた。 幼馴染の俺としては小さな子どもにこんな恐ろしい誤解などしてほしくないのだが……しょうがないよな。 俺もたまたまに殺されそうになるし。

ヴィヴィオが俺のズボンを掴んだところで携帯からメールを受信する音が聞こえてきた。

『もうすぐかえるよー！ あと3分くらいかな』

「よし、それじゃヴィヴィオは先に玄関先で待機しておいてくれ。俺は着替えてくるから」

「はい！」

手をあげて元気よく駆け出すヴィヴィオ。　　やっぱ幼女はかわいいな。

そんなヴィヴィオを見送りながら俺は衣装部屋へと移動して、金髪長髪のカツラに青色のカラコンをつけ黒と白のフリルつきミニスカートを履き、黒ニーソで絶対領域をつくる。

ちなみにカラコンは目を悪くするので長時間つけることはオススメしないからな。

次に軽くファンデーションを塗り、口紅で可愛さを増していく。

つけまつげで目を大きく魅せて、最後にゴムでツインテールにする。

よくツインテールにすれば“ロリ”なんて言い方をしているが俺は絶対に認めないからな。　　おまえらだよ、18禁ビデオの出演者たち。

さてさてそれは置いといて、俺も準備ができたので玄関に向かうことに。

「じゃーん！　どうだ、ヴィヴィオ！」

「うん！　すっごくきもちわるい！」

ですよー。　若干ながら俺も思っていました。　だってべつに女顔でもなんでもないからね。　イケメンだって何しても似合うわけじゃないもんねー。

ニコニコ笑顔で言葉の暴力を飛ばしてくるヴィヴィオに、冷静にな

りながら返事を返す。 あかん、股間に変な汗かいてきた。

その時、グッドタイミングなのかバッドタイミングなのか分からないが、玄關の向こう側から二人の話し声が聞こえてくる。 とても楽しそうな声だ。 その声を聞いただけで俺の心は温まってくる。

ドアノブが回る音がして二人の女性が顔を出した。 一人は可憐な光翼、フェイト・T・ハラオウン。 六課のアイドル担当だ。 としてももう一人は恐怖の権化、高町なのは。 六課のオチ担当だ。

「わ~~~~い！ おかえり~~~~い！」

「えッ!? な、なに!? なんなのいきなりッ!?」

「わ~~~~い！ 会いたかったよ~~~~い！」

「ええッ!?」

フェイトが見えた瞬間に駆け出し飛びつくヴィヴィオ。 フェイトはヴィヴィオをしっかりと柔らかく受け止めながらも盛大にテンパっていた。

「ママー！ ママー！」

「えっ!? ちょっと!? ど、どうなってるのっ!?」

テンパりながら回りをわたわたと見回すフェイトは、そのまま待機していた俺と目が合った。 俺はそれを確認して、目に涙を浮かべながら『よよよ……』と泣き崩れる。

「かなしいわっ、フェイト。私達の隠し子を忘れるなんて……私とともに過ごした情熱でイスカンダルな一夜を忘れたというの！」

「な、なのはっ！？ どうすればいいのかなっ！ も、もしかして迷子とかっ！？」

「うん……迷子なのかな。でもこの娘、フェイトちゃんに懐いてるみたいだけど」

「あなたは私の大切な初めてを奪ったのよっ！ その罪、償ってもらうしかないのよっ！」

「ちょっと、まってよなのはっ！ ほんとうに私はこんなの知らないよ……」

「うん……ねえ、もしかしてママとパパとはぐれちゃったのかな？」

「ひいっ！？ 触ったら、ヴィヴィオ溶けちゃう！ 助けて！」

「……………そのバカ、いったい何をこの娘に吹き込んだのかな？」

「シカトされたあげく、いきなり俺が犯人扱いされるの！？」

渾身の演技を全て無視されたあげく、勝手にヴィヴィオに吹き込んだ犯人にされてしまった。まったく……なのはも仕事で疲れてるんだな。

フェイトに飛びつき抱きついたヴィヴィオはフェイトの足に引っ付

必死に弁明してる彼の声をBGMにしながら私はこの女の子に話を聞くことにした。

「え〜っと、私はフェイト・T・ハラオウンです。あなたのお名前は？」

「ヴィヴィオ！」

「そう、可愛い名前だね。それで、どうしてここに居るのかな？」

「え〜っと……おにいさんにつれてこられたの！」

「なのは！ 俊を完膚なきまでに叩きのめして！」

ヴィヴィオからおおよそ聞きたくない内容を聞きだしてしまった私は、ここからなのはに聞こえるほどの音量でそう頼んでしまった。

『それ絶対に誤解だから！？ 内容とかまったく聞いてないけど1000%誤解だって断言できるから！』

既に犯罪者の言葉など私の耳には届かない。俊ならいつかやあると思っていた……。だからこそ、なのはと二人でそれを止めようとしていたのに……。最低な人間だよ、俊は！

「使い方が正しいと銀河を守るほどの力と恰好よさがあるんだよ。アレは完全に使用例が間違ってるから、マネしちゃダメだよ?」

「うん!」

ヴィヴィオが可愛く元気に頷く。

そんなヴィヴィオを片手であやしながら、この娘が何故家にいるのか後で聞いたただそうと思う私であった。

24・それでも俺はやってない。 というのは嘘だ(後書き)

カラコンで目がより一層悪くなりました。 カラコンは僕には合わなかったのかな。

25・デッドorデッド

現在俺たちは夕食のすき焼きを食べていた。俺の顔はアソパソマン並みに腫れあがっており手なんて肩から上にあがらない状態になっている。おかしい。絶対におかしい。幼馴染というものは素敵でエロエロな展開になると相場が決まっているはずなのにこの二人はデレというものが一切ない。これは俺がエロエロなことをするゲームの世界ではなかったのか？

だがそんなことを言ってもはじまらない。いまにこのテクニクでこの二人が乱れる姿が目に見えぬ。そう……俺に懇願する姿がな！

「白菜の追加はまだかな？」

「あ、いますぐにもってきます」

……もう少しだけ、もう少しだけの辛抱だ……！

冷蔵庫から白菜を取り出して食べやすい大きさにカットし、食卓へと戻ってくる。

「白菜もってきました」

「ねえ、たまごもないんだけど」

「あ、少々おまちください」

向かい側のなのはがテーブルでコンコンと卵を割る仕草をしながら、

低い声で言ってくる。俺はその声に反応してすぐさま冷蔵庫に向かい卵をとってくる。

「どうぞ、なのは大明神さま」

「……はあ。ちゃんと反省してるの？」

「それはもう、猛反省してます。フェイトの砂丘よりも高く谷間よりも深く」

「……君の中の反省が何なのか知りたい」

卵を受け取ったなのは頼杖をつきながら上目使いで俺を見てきたのに対して、俺も誠心誠意答えたのに溜息が返ってきた。あんまり溜息ばかり吐くと幸せが逃げるぞ？

「はいヴィヴィオ。熱いから気をつけてね？」

「うん！ ヴィヴィオ、きをつける！」

なのはの隣にいるパツキン二人が仲良しそうにする光景が視界にはいる。パツキン（大）がパツキン（小）のお椀をとって鍋の中から肉と野菜を均等によそって渡す。パツキン（小）はそれを両手で受け取りながらニコニコ笑顔で復唱する。なんとも微笑ましい光景である。

「完全にハブられてるな」

「は、ハブられてないもん！ ちょっと君の相手をしていただけであって……本当は私にもこれくらい懐いてるもん」

「ほぐ。 さっきは溶けるとまで思われていたのに？」

「そ。 それは誤解だから大丈夫なの！ みててよね！ ヴィヴィオ、私が卵割ってあげるよ？」

「あう……あ、ありがとう……」

ニコニコ笑顔でヴィヴィオのお椀に俺からもらった卵を割ろうとするのにはヴィヴィオはお礼を言いながら、少しかお椀を自分のほうに引き寄せた。これが意味すること、それはヴィヴィオがなのはから卵を受け取りたくないということだ。

ヴィヴィオの態度を見て、笑顔を張りつかせたままなのははゆつくりと体を引いた。 まあ、あんな態度みせられたらしょうがないよな。

「……いまの光景は見てなかったことにしといたらいいの？」

「……うん」

消沈したまま首を縦に動かすなのは。 ちなみにフェイトはそんな二人のやりとりをみてオロオロするばかりである。

そもそも席順からして避けられてるということに気付かないのか？

いまの席順はこのようになっている。

俺

ヴィヴィオ・フェイト・なのは

どう考えてもヴィヴィオはなのはを避けているだろ。俺？俺は安定の一人だよ。みんなどう思う？家という空間で考えるなら両手に華だよ。でも横という空間で考えるならスツカラカンだよ。

まあ、そんなことは置いといて。

「エースオブエース破れたり、だな」

「こんな負け方嫌なんだけど……」

具が何も入っていない空のお椀をカツカツと刺しながら、なのはは一人で愚痴り始めた。

とりあえずそつとしておくことにして、冷蔵庫からうどんを取り出してくる。

「そもそも、俊くんがヴィヴィオにへんなことを吹き込まなければこんなことにはなっていないんだよね。そう考えると私の不幸はいつも俊くんが絡んでるような気がするんだ。ううん、べつに俊くんを責めるつもりなんて全くないんだよ？でもさ、たまに思うよね。俊くんはなんでなのはをイジめるんだらうって。毎日毎日、人の下着盗んでさ。頭おかしいよね。ううん、でも俊くんが頭がおかしいのは知ってるよ？子どもの頃からの付き合いだからね。一番長い付き合いだもんね。でもさ、たまに納得いかないことってあるんだよ。こっちにも意地つてもものがあるしね。これでもね、大変なんだよ？あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、怒ってもヘラヘラしちゃってさ。どれだけ私がディバイン・バスタ

「撃とうと思ったことか。けど、俊くんはそんなことおかまいなし。そもそもデリカシーがないんだよね。いまどきデリカシーのない男なんてモテないんだよ?」

台所から戻ってきたところで、ちょうどなのはの愚痴が一段落したみたいなので声をかけることに。

「なのは、うどん食う?」

「たべる!」

さつきとは打って変わった表情で目をキラキラさせながら肯定するのは。うんうん、わかるぞその気持ち。すき焼きのうどんって美味いよな。ところで愚痴ってどんな愚痴なんだろうか? どうせ俺に対する嫌味なんだろうけどさ。

うどんを三玉いれて蓋をすることに。

その間に俺は二人に話しをすることにした。もちろんこれからヴィヴィオをどうするかについての話だ。

「さて、二人とも。まずはヴィヴィオがここにいる理由を話す。そのうえでこれから俺たちのする行動を決めていくことにしたいんだけど、異論はないよな?」

「うん」

二人が肯定する。ヴィヴィオだけは器に残った食べ物に一生懸命で話に参加していない。けど、それが一番いいのかもしれない。

「それじゃ、まずなんでヴィヴィオがいるのかだが」

かいつまんで、要約してわかりやすく話していく。スカさんから預かったこと。ビスコの魔力でここについてきた。案の定、なのはもフェイトもビスコ辺りでもって微妙な顔をしていたのだが。

「まあ、俺が話せることはこれくらいかな。俺自身もスカさんからそこまで聞いてない、っていうか聞こうとしてもダメだったよ」

「もしかしてスカさんって多忙な人なのかな？ てつきり俊くんと同じ無職だと思ってたけど」

「というか、スカさんってスカリエッティに似てるよね」

「フェイトの気のせいじゃない？ それって次元犯罪者なんだからスカさんにそこまでできるとは思わないけど」

「……それもそうだね」

「とにかく、ヴィヴィオは此処で預かるってことで異論はないんだよね？」

俺の問いに二人とも頷く。わかってはいたけど……ほんと二人とも優しいよね。

だがここで大きな問題が一つでてくる。

その問題とは

「土郎さんやリンディさんになんて説明すればいいんだろうか……」

「「あつ……」」

預かっているだけとはいえ、ヴィヴィオはここで生活していくことになるんだ。スカさんは期限については何も述べなかった。ということは、最悪の場合、一生なんてことにもなりかねない。だとしたら様々な問題が出てくる。

やはり早めに話しておくべきだろうか……。

「やっぱり、話しておかないとまずいよね。最悪でもリンディさんには話しておかないと」

「いやいや、リンディさんだけじゃダメだろ。土郎さん達だって俺たちのこと心配してるんだから。だからこそ、俺たちはしょっちゅう海鳴にも帰って無事であることを伝えてるんだし」

「でも……お母さんになんて説明すればいいの？」

フェイトの言葉で軽くシミュレートしてみることに。

「あら、なのはちゃんとフェイト、久しぶりね。ついでに無職の君も」

「いつも思うのですが、俺にはリンディさん厳しいですよね」

「あなたが死んでくれたら優しくするわよ」

まったく意味ないですよ、それ。

玄関の前で軽くはない世間話をする。なのはとフェイトのおかげで若干リンディさんの顔にも優しさがある。俺単体のときは般若のような顔してるのにな。

「それで？ なにか困ったことでもあったのかしら？ 三人で訪ねてくるなんて」

「あ、そのことなんだけどね、お母さん？ ちょっと話しておきたいことがあって……」

フェイトのよそよそしい態度にリンディさんもなにか違和感に気付いたようだ……フェイトが喋っているので口を挟まないようだ。

「えっと 子どもをね、紹介しようと思って」

「死ぬな、俺が」

「うん、俊は死んじゃうね」

「フェイトちゃんの言い方も悪いとは思っけど」

三者三様の言葉を述べながらも俺たちが到達した答えは一つ。俺がリンディさんに殺されるという結末だ。俺自身もそんな未来が容易に想像できるわけで、死ぬしかないわけで、なんとも困ったことになった。

「それじゃなのはほうは？」

「うちもダメだと思うよ？　ねえ、俊くん」

なのはが俺に振ってくる。　俺はそれに大きく頷いた。

「そもそも髪からして違うしな。　それにもしそんなこと言ったものなら、俺は士郎さんと恭也さんに殺されるよ。　なのはのこと溺愛してるし。　ヴィヴィオの年齢はだいたい5歳くらいだろ？　逆算すると14歳だぞ？　そんなこと士郎さんや桃子さんが許すはずないだろ。　どこの14歳の母だよって話になってくる」

「……それじゃいつそのこと、話さないっていう選択は？」

「それはもつとダメだよ、フェイト。　俺たちはまだ19歳。　日本では未成年の部類に入ってしまうから、やっぱり士郎さんやリンデイさんには話したほうがいいと思うんだ。　ヴィヴィオはペットとは違うんだ。　やはりそれなりに報告とかも必要になってくるよ」

「うっっん……でも、報告した先に待ってるのは俊くんの死」

そこが一番の悩みだよな……。　もつとこう……ギャルゲやエロゲみたい簡単にいけばいいんだけど。

「くっくっん……」

三人が悩む中で、当人であるヴィヴィオだけが

「うっどん食べようよー！」

「元気に発言をしてるのであった。」

25 デッド・オーダーデッド(後書き)

次回は甘々にしていきたい。

『子どものサインはとても小さい。だから見過ごしてしまうことがある。それを反省し次に繋げるか、そうでないかで器が違ってくるのかもしれない』

結局のところ、俺たちの答えは“時期をみて話す”という無難な答えに落ち着いた。いま話したって混乱するだけだろうし、もしかしたらヴィヴィオだつてすぐにスカさんたちが引き取りにくるかもしれない。それにいま話にいったところでヴィヴィオとの生活だつて日が浅い。そんな状態で先方に報告したところで何を言われるかわかったもんじゃなしな。……いや、俺がボコられるのは確定事項なあんだけどさ。

兎にも角にも、これが俺たち三人が決めたことだ。

夕食を食べ終わった俺たちは俺だけを残して女子三名ともども風呂で体の疲れをゆっくり癒している最中だろう。

「それにしても、なのはがハブにされなくてよかったな」

風呂に入ると言い出したとき、ヴィヴィオは若干強張った顔をしたがフェイトの助力となのはの粘りでどうにかこうにか入浴へときぎつけたのだ。それにしてもなのは怖がられ過ぎたる。

洗い物を終えた俺はそのまま、マンガでも読もうと自室へ行く途中、あることに気が付いた。

「……そういえばヴィヴィオの服ってないよな。今晚のパジャマは俺が昔作ったメイド服でなんとかなるけど……さすがにメイド服で外に出すわけにはいかないよな」

そんなことすれば俺がおっさんに捕まってしまう。流石にそれだけは避けたい。

「ちよつとヴィヴィオに聞いてみようかな」

足を180°方向転換させて風呂場へと進むことにした。

風呂場へと訪れた俺を待っていたのは、先程まで衣服とした着用していたブラやパンツ、スカートにシャツ、といった聖骸布であった。ほのかに残る香り、若干嗅ぐことのできる汗、生暖かい感触。

そう 桃源郷は此処にあったのだ。 ちらりとすりガラスをみると、三人ともこちらに気付いている様子はない。シルエツトからして、なのはとフェイトがヴィヴィオの体を洗ってあげているようだ。 チャンス 到来

すばやくしゃがみこみ、あちらの視界にはいる面積を狭くする。そして自分の中で体内時間の操作を行う。これにより、殺し屋でもないかぎり俺の気配を察知することは難しくなる。しかしこれにだって限界はある。 だからこそ 最新の注意を払いながら最

高の速度で獲物を 狩る！

『えへへ〜！ 今度はヴィヴィオがフェイトママを洗ってあげる！
ヴィヴィオこれでも手でコスコスするの上手なんでよ！』

「それならばお兄さんの息子もコスコスしないかヴィヴィオ！」

ドス！

「ぎゃあああああ！ 目がああああああああああ！」

「まったく……油断も隙もあつたもんじゃないんだから！」

一瞬だけ見えた光景から推測すると、タオルで体を隠していていたのはから目つぶしつを喰らったようだ。指だけならまだいいが、今回は泡までつけてきたので失明しないか心配だ。全身の感覚を研ぎ澄まし心の目でこの場を視る。徐々に浮かび上がってくるシルエツト。前方になのは。横にヴィヴィオとフェイトか。肌がチリチリと焦げるような錯覚を覚えるので、どうやら二人ともかなり怒っているようだ。フェイソンなんてチェーンソー取り出しときそうである。

しかしながらここは長年付き合ってきた仲だ。軽いジョークの一つでも飛ばせば許してくれるはず……！

「フェイト、ほんといい体してるよな。なのはもう少し頑張れ
！」

まさかなのはが風呂場でサマーソルトしてくるとは思わなかったです。

サマーソルトを食らった俺はフルポッコにされながらもなんとか逃げることができた。息子のほうはフルポッキだ。しかし此処には現在ヴィヴィオだっている。紳士として幼女がいる空間で抜くのは斬首に値する行為なのでなんとか我慢する。

しょうがないので自室に引きこもってゲームでもやろうとしたところで風呂場の方向からドタドタとした足音が聞こえてきて

「おふるよかったよー！」

ヴィヴィオが飛びついてきた。　　いったいどうしたんだ？　　ちょっとテンション高くない？　　お姉さんたちにイケナイことでも教えられたのか？

などなど、思考しているとパジャマ姿のフェイトとなのはがタオルで髪についている水滴を縛りながら困った顔を浮かべていた。

「どしたの、ヴィヴィオ」

「たぶん眠くなってきたからテンション高いんじゃないかな？　　ほら、たまにあるじゃない。小さい子特有の」

「ああ、たまに魔法少女（笑）もなるよな」

「ねえ、魔法少女（笑）って私のことかな？　　知ってる？　　乙女ってね、いつまでも少女なんだよ？」

「……ぷっ」

「落ち着いて、なのは!?! 鈍器はダメだって!?!」

「離してフェイトちゃん! こいつに乙女の鉄槌を!」

「お兄ちゃんどいて! こいつ殺せない! (裏声)」

「バカにしてるでしょ!?! 私のことバカにしてるでしょ!?!」

なにをいまさら。

なのはがロヴィータ化している様はみていて面白い。俺がニヤニヤとフェイトがオロオロとしながらなのはを止めていると俺の膝でぐるぐる遊んでいたヴィヴィオが失速し、やがて動きを止めた。その様子に俺たちは動きを止めてヴィヴィオの顔を覗きこむ。

「……寝てるね」

「幼女の寝顔ってかわいいな」

「うーんと……今日はもう寝よっか?」

「うん、そうだね」

なのはとフェイトがあらかた拭き終わったタオルを受け取る。二人は洗面台のほうに足早に駆け出してドライヤーをかけるとクシで髪を梳きながら手を差し出してくる。

「はい、ちようだい」

「ごめん、キャットフード手元がないんだ」

「いらぬいよっ!？ そうじゃなくて、ヴィヴィオを預かるって言うてるの!」

「ああ、ヴィヴィオね。でも……離さないんだけど」

シツカリとズボンを握ってるヴィヴィオはなかなか離れてくれない。強引にほくことも可能なんだけど……それはなんか嫌なので実行には移したくない。

「それじゃ、俊くんの部屋に寝せる?」

「だめだよ、なのは。俊だよ? 危ないことになるのは明白だよ」

「あ、そうだね。やっぱいまの発言取り消しね」

俺の幼馴染たちがこんなにツンしかないわけがない。

といつても、俺はこれからやらなければいけない作業があるわけで部屋にヴィヴィオをいれることはできないんだよな。さて、どうしたものか。

考えこんでいると、ヴィヴィオが一人で俺の手を離し目が開いていない状態にもかかわらずトコトコと抱きついていく。もちろん、フェイトのほうに。

「俊くん、歯くいしばって?」

「…………え？」

いや…………うん。 なにかに当たりたい気持ちはわかるんだがな？
そこでサンドバックとして俺を起用するのはどうかと思うぞ？

なのはとフェイトの間に挟まれて寝ているヴィヴィオをみる。

「あんまりジロジロみないでよ。 セクハラだよー」

「俺のセクハラはもつと大々的だから大丈夫なの。 それよりヴィ
ヴィオってトイレいつたつて？ 俺のイメージでは小さい子って夜
寝る前はトイレに行くイメージがあるんだけど…………」

小さい子どもって夜は一人でトイレに行くのが怖いから、親と一緒に
にトイレに行ってから寝ると思っていたのだが…………。 実際、小さ
い頃のなのはがそれで漏らしたので強く思ってしまう。 それにヴ
ィヴィオって考えてみれば家にきてから一回もトイレにいったってない
よな？ それって健康的にも問題があるんじゃないか？

「うゝん…………どうなんだろう、フェイトちゃん」

「えっ！？ 私に振るの？ えゝっと、行くときはなのはか私を起
こすんじゃないかな？」

親指で顎を押しながら答えるフェイト。 言われてみれば確かにそ
うだな。

「それじゃ問題ないか。 んじゃ、おやすみ。 風邪引かないようにな」

「はい、おやすみー」

電気を消して部屋を出る。 今日だけは盗みは勘弁しておこう。

部屋に戻り、電気を点ける。 蛍光灯の人工光が部屋全体を支配して俺の娯楽グッズを起こす。 それらを全部一か所の所にまとめておき、棚からコスプレ衣装用の布を取り出す。 色は青と水色と白。 これだとある人物をモチーフにした衣装を作ることによしようと考えている。 できるだけ可愛く、外を歩く誰もが振り返るようなそんな服を作ろう。

道具一式を近くに置き、いざ開始する。 ヴィヴィオは喜んでくれるかな？

カッチコッチと時計の針だけけど聞こえてくる。 何時間もしたような、それでいて何分しか経っていないような、そんな時間の感覚があやふやになった錯覚に陥る。 時刻を確認すると深夜1時を若干過ぎたあたりである。 出来として30%。 本当に終わるのか？ そう一抹の不安がよぎるわけだが、まだまだ時間的には余裕があるしなんとかなるだろう。 立ち上がり、伸びをすると背中からバキバキと固まりをほぐすような音が聞こえる。

「うん……ヴィヴィオの様子でも見てくるか」

あの笑顔をもう一度みて、英気を養おう。 そう思った瞬間に家中

に響くような声で誰かが泣いた。

『うわああああん!!』

この声はいったい誰だ？

こんな高い声で泣く奴なんて家にいたっけ？

そもそもなんで泣いてるんだ？

疑問が頭を埋め尽くす。体は勝手に動き出す。

ドアを勢いよく開け、なのはとフェイトの相部屋のドアを蹴り開ける。

「あ、俊くん……起きてたんだ。　　というか、起きちゃったのかな………?」

部屋に入ってきた俺を見てなのはは困った笑みを浮かべた。

「え〜っと……もしかして?」

「うん。　　そのもしかして」

「だいじょーぶだよ、ヴィヴィオ。　　こんなこと、誰にでもあることだから」

なのはとフェイトに抱かれたまま、グズグズと泣いているヴィヴィオ。　　そして少し視線をずらした先には白いベッドが不自然なほど黄色くなっていた。

早い話が　ヴィヴィオが間に合わなかった、ということである。

考えてみれば当然なことである。　そう、これは当然な結果なんだ。だって、ヴィヴィオは一回も行ってないんだから。　この家に来て、何時間が経った？　かなりの時間が経ったはずだ。　夕食だつて食べた。　お茶だつて飲んだ。　もよおさないほうがおかしいのだ。

ヒックヒックと泣くヴィヴィオ。

なのはそんなヴィヴィオを優しく抱きしめ、背中をトントンと叩く。　安心させるように、落ち着かせるように。

「私、ヴィヴィオをシャワーにつれていくね」

その言葉に俺はただ頷くだけしかできなかった。

パタンと閉じるドア。　トントンと降りていく一人分の足音と、一人分の話し声。

それを聞きながら、俺はベッドに足を運んだ。

「きづいて……いたんだ。　ちょっと考えればわかることだよな。

だってヴィヴィオは小さい女の子だぜ？　それが突然俺たち大人3人の中に放り込まれてさ、緊張しないほうが無理な話なんだよな。

主張できないのは当たり前じゃないか。借りてきた猫のようにするのは当然じゃないか。用意周到なスカさんのことだ。『迷惑をかけちゃいけないよ?』そう言い聞かせたんだと思う。だからさ、賢いヴィヴィオはその言いつけを守ってたんだ。ヴィヴィオにとつて、トイレに行く、ということは迷惑行為につながったのかもしれない。誰かが案内しないといけない。誰かが付き添わないといけない。だから、ヴィヴィオは言い出せなかったのかも。しれない。本当は、本当は　もっとわがまま言いたかったのかも。しれない」

俺が渡したお絵かきより、アニメを視たかったのかも。しれない。

考え出したら止まらない。あいつが主張したのなんて、“うどんを食べたい”なんてささいなものだけだったんだぞ。

情けない

幼女を泣かせた自分が情けない

黙ろうとしても黙れない。小さい女の子の小さな小さな自己主張を流してしまつた自分が情けなくて、ヴィヴィオの泣き顔が頭から離れなくて、スカさんにウーノさんに申し訳なくて、マシンガンのように喋ることなどでなんとか保とうとする。

「紳士が聞いて呆れるぜ。だって」

喋る口が強制的に止められた。

「いまは、後片付けが先でしょ?」

俺の口元に自分の人差し指を置いて、ほほ笑みながら強制終了させるフェイト。

その笑顔でようやくわれにかえることができた。

「……ごめん。ちょっと取り乱しちゃって……」

「うん、大丈夫。私だってなのはだって気付かなかったんだもん。しょうがない、なんて言葉で片付ける気はないけど、優先事項がどれかくらいはわかるよね？」

その言葉に頷く。

そつだ、まずはここを片付けよう。そつでないと、ヴィヴィオが安心して寝れないじゃないか。

ヴィヴィオのメイド服を脱がした私は、いまだ泣いているヴィヴィオを抱いてシャワーのノズルを回した。お湯にかわるまで数秒。この時間がちょっと寒い。

「よつし、お湯にかわったね。ヴィヴィオ、体流そうね」

「……うん」

下を向いたまま首だけで返事するヴィヴィオ。

まあ、それもそつだよね。よく考えてみれば此処は他人の家だもんね。ヴィヴィオだって家で生活するようになってできないだろ

うし、ましてそこでもよおしたら……。

借りてきた猫のように黙ったままのヴィヴィオの体をスポンジで丁寧に洗う。するとヴィヴィオが少しだけモジモジしはじめた。

「くすぐりたい？」

「うん……」

「うにゃにゃー！」

「やー！ くすぐりたいよー！」

そこを重点的にこすると、ヴィヴィオは笑いながらこっちにスポンジを押し返してくる。ようやく笑ってくれたのが嬉しくて、ついヴィヴィオで遊んでしまう。

そんな笑いの中で一瞬だけ訪れる無音の空気

「ごめんなさい……おもしろしっちゃって……」

それはとてもとてもか細い声で

「ううん。 私たちもごめんね、気付いてあげることができなくて」

私はたまらず抱きしめた。

抱擁に嫌がることなく、身を任せるヴィヴィオ。

「あのね……？」

「な〜に？」

「スカさんがいつてたの。『いまから行くところはとつてもいい人がいるから大丈夫』つて。 ヴィヴィオのことを守ってくれるつて。 だからヴィヴィオ、いい子にしようと思つて、迷惑かけちゃいけないと思つて」

「そつか。 偉いね、ヴィヴィオ。 その年でいい子にしようなんて。 うちには19歳になつてもお子様のままの男性がいるから余計に思つちやうよ」

「でも……ヴィヴィオだめだったよ？ いい子にできなかつたよ？」

心配そうに不安そうに見上げるヴィヴィオ。 だから私はそれに満面の笑顔で答えることにした。

「いい子になんてしなくていいんだよ。 飾らない言葉で、飾らない行動で、飾らないわがままで、私達を困らせてくれたらいいんだよ」

私だつてそうだったんだから。

わがまま言つて、さんざん困らせて生きてきた。 それでも、まわりの大人たちは笑つて許してくれた。

大人になるにつれて、わがままなんて言えなくなる。 これも生きてきた中で身につけたことだ。 約数名、それに縛られない人たちもいるけど。 とにかく、こんな子どものときからわがままを言わない人生なんて、言えない人生なんてどこかで破綻するに決まつて

いる。

「だから　もっと甘えていいんだよ？」

「なのは……ママ？」

「ん？　どうしたの？」

「えへへ……なんでもない！　なのはママ！」

その後ヴィヴィオは私に抱きつきながら、“ママ”と連呼し続けた。ようやく言ってくれた言葉。聞きたかった言葉。こんなにもママと呼ばれることが嬉しいなんて思わなかったのが正直なところ、ヴィヴィオをこのまま自分の娘にしたいと思っってしまう、その考えは心の底にしまっておくことにした。

もう……そんなにはしゃいだら眠くなっちゃうよ？

新しいシーツをかけ、ベッドメイキングを完了させる。

これでヴィヴィオが帰ってきたときに不快な印象を抱くことはないはずだ。

「あの……ありがとうフェイト。助かったよ」

「こちらこそ、ありがとう。私一人じゃこんなに早くは終わらなかったよ」

フェイトと二人でペコペコと頭を下げ合う。

これから三人はまた眠るんだろうな。俺は作業の続きをするわけだが

「えっと……俺もういくよ。二人によろしく」

なんとなく居心地が悪く感じ、早々と退散を決め込むことにする。

手をあげてドアノブを回そうとしたところで、腕を引っ張られる感覚。 ついで誰かの胸に顔が当たる感触を感じた。

「えっと……フェイト？ その……胸が当たってるんだけど？」

「当ててるの。 まったく……俊はすぐ思いつめるんだから。 俊の悪い癖だよ、それ」

「そうはいつでも……俺の責任なんだし」

そこまでいったところでデコピンされた。 地味にうまくて痛い

「違うでしょ。 “私達”の責任だよ。 もっと頼ってよ、私となのはを」

いつもは息子が起きるはずなのに、ここのうとうとに限って起きてこない。 ほんと拗ねてるよな、こいつ。

ほんとうはいつも通りバカをやりたいのに、作業で疲れて元気がでない

だから、首を縦にも横にも振らなかった。

その後、なのはとヴィヴィオが帰ってくるまでフェイトと俺はこの状態のままだったのだった。

26・聖水（後書き）

ふる場でサマーソルトはかなり難しいと思う。

27・ターニングポイント

「できた……！」

長かった夜も終え、ついにヴィヴィオの服が完成した。個人的にはなかなかの出来なので、いまからこれをヴィヴィオが着てくれると思うとなんだか頬の緩みが止まらない。

さて、三人が起きてくるまで1時間ちょっとくらい。朝食の用意をしまつておこう。

味噌汁を作っていると、二階からトントンと階段を踏む音が三人分聞こえてくる。

『おっはよー！』

「うーい、おはよー。あれからよく眠れた？」

「ばっちりー！」

「ばっちりばっちりー！」

なのはのVサインに合わせてヴィヴィオもVサインを作る。なんだか二人とも一気に距離を詰めたな。うらやましい。

「それじゃ、顔洗ってちょ。もうすぐできるから」

『はい！』

三人娘の姦しい姫様たちは今日も元気なようである。

そんな三人を見送って、俺は最後の仕上げにとりかかった。

いつもの三人の光景にもう一人小さい姿が加わった。いうまでもなくヴィヴィオである。ヴィヴィオはその小さい体を一生懸命使って必死に味噌汁の中に入れてうどんを食べようとしている。ヴィヴィオがうどんを掴むと、うどんはそれをあざ笑うかのようにプツリと音をたてて箸から離れる。

「あう……」

「頑張つて、ヴィヴィオ。優しくだよ、優しく」

「大丈夫、ヴィヴィオならできるから！」

両側にいるフェイトとなのはが必死に声援を送る。ヴィヴィオはそれに頷いて、優しくそつと両手で水をすくうように掴みあげ、その大きく開けた口でうどんをすすった。

「うまいか？ ヴィヴィオ」

「うん！」

それはよかった。

両側にいる二人もパチパチと拍手を送る。 ヴィヴィオは照れ隠しのつもりなのか、フェイトやなのは手をしきりに掴んでは離す。 といった謎の行動をしていたりする。 子どもって見とくと面白いよな。

そうしてにぎやかな朝は過ぎていった。

朝食を食べたあとは、仕事にいくなのはとフェイトを二人で見送ることにする。

俺が作った弁当を手に二人は元気よく手を振ってくる。

「「いつてきまーす！」」

「「いつてらっしゃーい！」」

俺とヴィヴィオもそれに負けじと手を振り返す。 世間一般的にこの立ち位置が逆のように感じるのだが、そんなこと俺には関係ないことだ。 というか、無職の俺が元気に外に出ると大抵おっさんと追いかけっこになるのでいただけない。 いまはヴィヴィオだっているわけだし。

「さて、ヴィヴィオ。 君にプレゼントがある！」

「ほえ？ なにに？」

寝間着として渡した予備のメイド服を現在は着ているヴィヴィオだが、流石にご近所さんから変な目でみられそうだし、ヴィヴィオにはまだコスプレとか教えるのは違うような気がする。もう少ししてからの方がいい……かな。そこらへんはスカさんと相談でもしよう。

「まあまあ、それは見てからの楽しみである。 ささ、家に戻るぞ」

ヴィヴィオの背中を抱きながら、俺はいそいそと家に戻るのだった。

「あ、おかあさん？ うん、なのはだけど」

『あら、この時間に電話なんて珍しい……ことでもなかったわ。お仕事はどうしたの？』

「ふっふっふ……もちろん、サボってる」

このドヤ顔を並行世界の高町なのはが見たら頭を抱えるかもしれない。

『ダメよ。 お仕事はちゃんとしないと。 それで、きょうはどうしたの？ そろそろ海鳴に帰ってくる頃だったかしら？』

「うん、それは少し延期かな。ちょっと色々とバタバタしてて」

『へ。 なにかあったの?』

「うん。 子どもを預かってね」

そこまで言っ、なのはは昨日三人で決めたことを思い出す。 その内容は 時期をみて両親に話す ということであった。 そして今日は、預かって二日目。

いくらなんでも早すぎる。

そのことを思い出したのはだが時既に遅し。

『へ、どんな子かしら? 教育的には大丈夫? 彼がへんなことしない?』

既にマシンガンのように喋りだした母を止めれることはできなかった。

30分後

そこには茫然とした表情でトッポをかじっているなのはの姿があった。

そこに沈んだ様子で、フェイトがなのはを訪ねてやってきたのだが

「ああ、なのはもなんだ……」

「……うん。 どうしようか……」

素直な二人には隠し事は難しいようである。

一方その頃、ひよつとはとうとうと

「なあひよつとこ。 近所の通報で此処で夜中小さい子の叫び声が聞こえたらしいのだが……」

「塩でも喰らえ！」

「ちよつ!?! お前、逮捕するぞ!」

安定の下種であった。

玄関の前で押し問答ともつかない、わけのわからないことを5分ほど繰り返している。

ヴィヴィオを一人にしているのか? そう疑問を覚えるかもしれないが、様子を見に来たウーノがヴィヴィオのそばにいたのでそこは安心である。

「そんなことないつてば。 だいたい、俺が家にはいるんだぜ?」

「だからこそ警戒してるんだ」

「あゝ、それはわかるかも。ところでさ……飯に家に小さい子どもがいたらどうするの?」

「お前を逮捕するかな」

キラリと光るおっさんの瞳。その瞳にひよつとは冷や汗を流す。

……あかん。ここでヴィヴィオが出てきたら

「ねえねえ！ ウーノがこの服かわいってよ!」

玄関から勢いよく飛びつくヴィヴィオ。

「おっさん……言い訳をさせてくれ」

「とりあえず手錠かけてからな」

手早く右手に手錠をかけ、近くの鉄柵にもう一方をかけたおっさんは指を鳴らしながらひよつとこの話を聞き始めた。

ちなみにヴィヴィオは

「ウーノ！ あそぼー!」

さっさとウーノのところに遊びにいくのだった。

俺の話を聞き終えたおっさんは、俺を怒るわけでもなく顎に手を当てて考えはじめた。いつもはフルボッコにしてから考えるのに、

この逆順序は珍しい。

「どしたの、おっさん」

「いや、お前らだけで大丈夫かなと思ってな」

「大丈夫大丈夫。きつとうまくしてみせるさ。　　なんたって、預かっている身なんだからね。　　責任重大だし」

頭をかきながら、肩をすくめてみせる。　　細心の注意を払っているつもりだ。　　なにも問題はないはず。

だけとおっさんは、そんな俺の頭に思いっきりゲンコツを落とした。

「いつつっ！？　　なにすんだよ、おっさん！？」

睨む俺に対して、おっさんはそれよりも怖い顔で睨み返してくる。

「ばかもん。　　そんな“預かっている”なんて感覚捨てる。　　いいか？　　此処の家にいる間はお前たちが親みたいなものだ。　　絶対にその子の目の前で、“預かっている”なんて口にだすなよ？」

「……………うん。　　ごめんなさい」

おっさんは俺の返答に満足したのか、うんうんと首を縦に何回も振る。

「そついえば……………今日は非番の日だったよな。　　丁度暇だし、俺がお前に子育ての極意を教えてやるつ」

「おっさんの子育てなんて特殊すぎてアテにならねえよ」

おっさんからアッパーが飛んでくる。こいつ……いつか泣かせてやる！

「けどさ……なんか小さい子どもっていいよな。家が明るくなる」

朝の光景をずっと見ていた俺としてはそう感じるよりほかなかった。ヴィヴィオが笑うことで、二人も笑う。その笑顔はとても自然で、たった一つの笑顔だけで家中が明るくなるような。そんな錯覚に陥った。

「ああ、子どもはいいぞ。子どもに会うだけで疲れがぶつとぶ」

おっさんはうんうんと大仰に頷く。流石既婚者、話に重みがあるぜ。

「それにな、子どもがいると姿勢すらかわってくるんだよ。よく言うだろ？ 『子どもは親の背中をみて育つ』って。あんな迷信信じるつもりないけどよ……どうしてもシヤンとしてしまっただよな、これが」

「……………それほんとう？」

「ああ、本当だ」

「へ〜……。あ、おっさんここタバコ禁止だから」

「まじか？ すまんすまん」

「一服しようとするおっさんに声をかけると、片手で謝りながらすぐにポケットに戻す。」

「お前、どうすんだ？」

「どつするって……？」

「ここがお前のターニングポイントかもしれないぞ」

おっさんは全てをわかっているかのように、俺に誘導尋問してくる。

「そうだな……ちょっとヴィヴィオに恥ずかしげなく魅せられるような大人になってみようかな」

「まあ、いうのは簡単だがな。いつとくが、お前は一般人なんてもんじゃないからな？ 世間的に言えば犯罪者だ」

うっ……！ このおっさん、ズバズバと言ってくるな。

「まあ、否定しないよ。　　というかできないね」

「うむ。　お前が否定したらぶつとばすところだったぞ。　確かにお前は犯罪者だよ、でもな犯罪者には良い犯罪者と悪い犯罪者がいる」

「犯罪者に良い悪いなんてあんの？」

「わからん。　なんとなく言ってみただけだ。　でも……俺はそう思ってる」

「ふうん……それじゃ、良い大人と悪い大人の違いは？」

「さあな。それがわかれば苦労しないぞ。良い大人がなんなのかわかれば、他の奴はそのレールの上を走ればいいだけの話だからな。“良い大人がなんなのか？”それは死ぬ寸前に答えがでるんじゃないのか？」

確かに……そんなものなのかもしれない。

「それじゃ……ヴィヴィオに誇れるような大人になるには俺はなにすればいいと思う？」

「とりあえず変態的なところを治せ」

「それ……俺という個性が死ぬくない？」

致命的だぞ、それ。

それを聞いたおっさんはチツチツチと人差し指を左右に振り、頭を振った。正直なところ、この人差し指を折りたいです。

「バカだな、お前。頼み方つてもんがあるだろ。俺の場合嫁さんに土下座すれば大抵のことはしてくれるぞ？」

「……たしかに、俺は頼み方つてものを心得てなかったかもしれない」

神妙にしきりに頷くひよっとこ。

正直、問題点はそこではないのだが、彼ら二人は気付かない。

俺がどうやって頼み込もうと考えていると、横にいたおっさんが首をポキポキとならし、立ち上がった。尻についた草を叩きおとし俺のほうを向いてしゃべる

「まあ、それなりに頑張れよ。ひょっとしたらしくな」

そう一言だけ言っておっさんは帰って行った。

おっさん、手錠は？

尿意がそこまできてるんだけど。

27・ターニングポイント(後書き)

ここから少しずつ変わっていく……かもしれないし、そうでないかもしれない。

28・キチガイこそが俺である

ミッド市内の大きな一軒家の外でたつたいま19歳男性の人としての尊厳が失われつつあった。

「やばいってやばいって！ もうすぐそこまできてるぞ、尿意っ！
？ ヴィヴィオが間に合わなかったならまだわかるが、俺が間に合わないって洒落になんねえぞっ！？」

足を気持ち悪いほどにくねらせながらひよつとこは叫ぶ

「だれかー！ー！ 誰か返事してくれー！ー！」

10秒たつてから小さい足音が聞こえたかと思うと、玄関から俺が徹夜で作った不思議の国のア ス風衣装を身に纏ったヴィヴィオがチュッパチャップスを口にくわえたまままできた。

「うっ？ どしたの、おにいさん？」

「おおヴィヴィオ！ とりあえずチュッパチャップス食いながら走るなよ、危ないからな。 まあ、それはおいといて いますぐウーノさん呼んできてくれ！」

この手錠を解除できるとしたら、それはもうウーノさんくらいしか残ってない。 ヴィヴィオがなのはやフェイト並みに強ければ話は別だがそんなことありえないわけで、必然的にウーノさんになるわけ……でも俺は信じてる。 ウーノさんは良心の塊だ。 きつと俺を助けてくれるに違いない！

「あ、すみませんひよつとごさん。ドクターから電話がありましたて……なんでも『過去に戻るマシン作り続けるのも嫌だからメダット作るうと思うんだ。ちょっと手伝ってくれないかね?』とのことなんで、すみませんがごころへんで失礼します。引き続き、ヴィヴィオのことをよろしくお願いしますね」

「まって良心の塊さん!? 俺のメタビーもメダフォーース発射寸前なんですけど?! とういか、暴発寸前なんですけど!」

冗談じゃないっ! いまこの機会を逃したら、大変なことになるぞ。メダフォーースでこころいったいアンモニアでマカダミアなことになるぞっ!

「すみません……がんばってください!」

「まってええええええええええええ!」

俺の叫びもむなしく、ウーノさんは帰って行った。あとに残るは隣で座りながら行儀よくチップス(プリン味)を舐めているヴィヴィオと、制御棒の制御をしている俺だけである。とうとう俺はヴィヴィオの前で人としての尊厳とかなんとかを失うらしい。

「……いや、まてよ? ヴィヴィオにピッキング道具を持ってきてもらえば、まだ勝機はあるかもしれない。ヴィヴィオ! 俺の部屋からピッキングの道具を取ってきてくれ! あ、ついでにそのチップスチップスは置いてけ! 転んだら大変なことになるからな!」

「うん、わかった!」

ヴィヴィオは立ち上がりながら、俺の口にチャップスパチュアプスをねじ込む。いや、そこに置かなくてもいいと思うけどさ。

ヴィヴィオなりのダツシユで玄関に戻る途中

ガッ！

案の定というか、お約束というか、ヴィヴィオは進路上にあった石に躓いてこけてしまった。

「な、泣くなヴィヴィオっ！？ お前は強い子だ！ こんなことで泣いちゃダメだ！ ……でもいたいの？ んじゃ、もう泣いちゃえ！ おにいさんも一分後には漏らして泣いてると思うから！」

だんだん思考がマヒしてくる。もうなにもかまがどうでもよくなり……背徳感とある種の興奮で頭の中がぐるぐると、世界がぐるぐると回っているような錯覚に陥る。

すべてをぶちまけて楽になろう そう思ったとき、呆れと怒りがミックスされた女性の声が耳に届いた。

「なに……してるのかな、このバカは？」

「ヴィヴィオ。 泣いちゃダメ。 傷もそんなに痛いほどじゃないんだから、大丈夫だよ」

一人は俺の目の前で腕を組みながら仁王立ちで立っている高町なのは。そしてもう一人は泣いてるヴィヴィオを抱き上げてあやしているフェイト・T・ハラオウンである。

勝利の女神ははまだほほ笑んでいた。

絶望的な状況にもかかわらず、自然に息子の波状攻撃を止めることに成功する。このメダフォース、放つ場所はどこではないのだ……！

「助けてくれなのは！？ もうすぐくまずい状況なんだっ！ 俺のメタビーからメダフォースが発射されようとしている寸前なんだよ！ お前も嫌だよな、幼馴染が漏らしたところをみるなんて！？」

それまでジト目で“なにしてんだ、このバカ”みたいな眼差しでみていたのが『漏らす』という単語を聞いて合点がいった様子で俺のことをみてきた。どうでもいいので早く助けてください！

「べつに〜？ 私は小さい頃、誰かさんに見られたしね〜。あの時はと〜と〜と〜と〜つても、恥ずかしかつたけど。……誰かさんは笑ってたよね〜と〜？」

あ、勝利の女神が俺に中指立ててる。

「だ、誰だ！？ 俺の可愛いなのはを笑うなんて！」

「いや、勝手に恋人みたいな感じにするのやめてくれる？ まあ、それはそれとして……あのときは私も誰かさんも5歳だったよな。でもいまは19歳。この差はかなり大きいとおもうんだよな〜」

なのはは俺の周辺をくるくると回りながら、ドSじみた顔で俺のほうをみる。こいつ……絶対楽しんでやがるなっ……！！

「く……！！ なにが望みなんだ！？ 謝罪か！？ それなら既にし

「たはずだろ!？」

「え〜? ベつに私は、“君”とは一言もいってないんだけどな。まあ、勝手に謝罪したければどうぞ? それでね、私ちょっとだけ今日は失敗しちゃったの」

「失敗なんて誰にでもあるさっ! 俺なんて人生が失敗続きだからな!」

「うんうん、やっぱり失敗は誰にでもあるよね? それじゃ、ほんの些細な失敗なんだけど……それで被害が被ったとしても怒らないよね?」

「うんうん! 絶対に怒らないから! 俺がなのはを怒るわけないだろっ!? だから、早く手錠を解除してください!」

「……ほんとうに怒らない?」

「本当に怒らないっば!」

「それじゃ」

なのはは指を一つ鳴らす。すると、手錠は簡単にその役目を終えたかのように軽く爆発して消えてしまった。ちよつとだけ、なのはがカツコイイと思った。

なにはともあれ、手錠を解除してもらった俺はトイレに向かって全力ダッシュ。無事にメダフォースを発射し、身も心も爽やかになつてなのはたちがいるリビングへと向かうのであった。

「桃子さんと……リンディさんに……バレた……だっ!?」

「うん。おかあさん凄かったんだよ。すぐになのはから情報聞きだしたの」

「うちだって負けないよっ！　なのはより数分くらい早く聞き出したんだから！」

「いや、おかあさんのほうが」

「落ち着け二人とも！　いまは俺の命のほづが優先だろ!？」

「別段どうでもいいかな」

なんとというコンビネーション。鮮やかすぎて涙が出てくるぜ。

「まあ、ぶつちやけ桃子さんのほづはきっちり話をすればわかってくれるはずなんだ。問題は……リンディさんだよ」

「そついえばリンディさんにはかなり嫌われてるよね」

「16歳のとき、俺とリンディさんの仲をどうにかしようと考えて、クロノが色々と頑張ってくれたんだけど……俺がリンディさんの顔面にお茶をかけてしまって最悪の関係になってしまった」

「あの後大変だったんだよ？　反省してるの？」

「うん。まさかあんなところにコードがあるとは思わなかったよ。」

家中掃除したのに……」

嫌な思い出でも蘇ってきたのか、苦虫を10ほど嚙んだような顔をするひよっとこ。

「それより、どうするの？ このままじゃ死んじゃうよ？」

「うーむ……ここまできると、いつそのこと諦めの境地に達してきた。もうでたとこ勝負でいいや。いまはそれよりも重大なことがあるんだから」

「「重大なこと？」」

「うん。俺さ、まともな大人になってみようと思うんだ」

真剣なまなざしで、なのはとフェイトをみる。二人はそんな俺の様子をみて

「フェイトちゃん。頭の病院の電話番号ってわかる？」

「ちよっとまって。 いますぐ調べるから」

とても失礼な行動をとりはじめた。

「いやいやいや、ちよっとまってよ。 なに？ そんなに俺の発言っておかしいの？」

「おかしいどころじゃないよ。 もしかして別人？」

タウンページを取りにいったフェイトを見送ってから、なのはが俺

に懐疑な視線を向けてきた。 大変遺憾におもいます。

「いや、俺だつてな、ちゃんと考えたんだよ？ ヴィヴィオのために良い大人になろうってさ。 それでこうやって答えを出したわけよ」

そりゃあ、俺は犯罪者ですよ？ キチガイですよ？ まったく良い大人とか良い犯罪者とかになれるかどうかわからないけど、それでも俺なりに考えたわけで。

……あれ？ よく考えてみれば、俺みたいな奴が良い大人とか無理じゃね？

「あのねえ……良い大人になろうと思つてなれるんだつたら苦労しないよ。 そもそもだよ？ 君は息を吸うように迷惑行為をする人物でしょ？ それが良い大人になんてなれるわけないじゃん」

「……それは一理あるかも」

いや、一理どころじゃなく百理はあるかもしれん。

そもそも、よくよく考えてみれば……俺がいま述べた言葉って一般人が述べるような言葉じゃないか？

俺みたいな奴が述べる言葉じゃないよな？

俺みたいな奴はもっと……ろくでもないようなことをするよな。

例えば日常的な覗き、盗撮。 セクハラ発言にパイタッチ。 うん、ざっと考えてみてもこんなところだ。 さてさて、こんなことをし

ている奴が良い大人を演じる……？

何度も何度もイメージする。想像する。

良い大人を演じてる俺。仕事をして、ヴィヴィオを養って休日には四人で遊びに行く俺。

うん。実に良い大人だ。“世間一般的な”良い大人だよな。

……これって俺的には苦痛じゃないか？ セクハラもできない、なのはやフェイトとイチャイチャもできない。仕事という檻に囲まれて好き勝手にできやしない。そんなこと、俺に耐えられるか？

答えはNoだ。そんなことできないのは、俺が一番わかっている。

おっさんが言うように俺は犯罪者。そんな“世間一般的な”ことなんてできない。

じゃあ……どうすればいい？

「そもそも、君が良い大人になるなんて天地がひっくり返っても無駄だよ。できっこないよ」

そうそう……俺が良い大人なんて天地がひっくり返っても……ん？ ひっくり返す？

そのとき、俺の頭の中で一つの考えが浮かんでくる。

そうだ。俺は何を勘違いしていたんだ？ 俺みたいな奴が良い大

「ど、どうしたの……いきなり笑ったりして……!？」

「これが笑わずにいられるかつ!? 俺は肝心なことを忘れていたんだよ! 俺がヴィヴィオを良い方向に導くつ!? はっ! バカも休み休み言えつてもんだろ! 俺の近くには、こんなにも立派な人間がいるんだぜ、それに二人も! 管理局に勤めて、人々の平和を守る、そんな立派で愛嬌のある主人公気質な奴が二人もいるんだ! 俺はなにか勘違いしてたよ! 俺がヴィヴィオを良い方向に導くんじゃない! なのはとフェイトが良い方向に導くんだ! 俺はいつも通りに生活するだけでいい! それだけでヴィヴィオは立派になっていくんだからな!」

おっさんは言った。

『子どもは親の背中をみて育つ』と。 それはなにも良いところばかり魅せるのではないのではないか? 逆に悪いところをみせれば魅せるだけ、子は『こうはなりたくない』そう思って自分とは違う方向を歩むのではないだろうか? 仮にヴィヴィオがそうだとしたのなら……ヴィヴィオは俺の背中をみて『こうはなりたくない』と思ひ、自然になのはとフェイトの道を歩んでいく。俺が惚れた人達の方向へまっすぐに歩いていく。何も心配なんてしない。だって、その両側にはなのはとフェイトがいるんだから。

「主人公なんてやめだやめだ!! そんなちっちゃえ器に俺が収まるわけないだろ! 俺は誰の息子だ!? あの世界中を爆笑の渦に巻き込む、上矢かみや一の息子だろ!? ろくでもねえ男の息子だろ!? このろくでなさはDNAにまで染みついて離れねえだ! だったら、俺だつてろくでなく生きようじゃねえか、ヴィヴィオに見せつけようじゃねえか! 下種を見せつけようじゃねえか! 俺が

ちよつとだけ真面目になればシリアスになるんだからよ！」

俺の中で何かか吹っ切れる。 葛藤とか、責任とかそんなすべてものが泡と消える。

俺はただただ笑い転げる。

なのはがオロオロするのを尻目に笑い転げる。

何事かとフェイトとヴィヴィオが来るのを見ながら笑い転げる。

そして一緒になってヴィヴィオも笑い転げる。

これは 俺ごと、ひよつとこが 悲劇 深刻劇 哀話 悲話
悲運 不幸 などなどを無かったことにしてお送りする 非日常が
日常的な 喜劇 気楽 喜話 幸運 幸福 な物語である。

さて、キチガイによる物語 とくにご覧あれ

28・キチガイこそが俺である(後書き)

長かった序章もこれで終わりです。 ノンストップでここまでくる
ことができてよかったです。

さて パン通 スタート!

29 ・ ギャラドスでもわかるリリカル昔話

前回までのあらすじ

19歳無職が幼馴染たちとミッドで暮らしているときに、友人から一人の女の子を預かることに。その女の子のために真面目に良い大人になるうと努力する無職。しかしそんなことできるはずもなく、良い大人は幼馴染たちに任せて、自分は一人だけ好き勝手にするのであった。

「ねえねえ、むーじゅんってな〜に〜?」

「ほえ? むーじゅん?」

リビングで彼から借りたマンガを読んでいると、彼の部屋で遊んでいたヴィヴィオが2階から降りてきて私の足に飛びつきながら質問してきた。聞き返す間に膝に登って正面向きで座るヴィヴィオ。

「ねえ、フェイトちゃん。 むーじゅん、って誰?」

「え〜っと……ムー大陸の兵士の名前……とか?」

そんな一人はさすがの私でも特定できないんだけど。

「ねえねえ、なのはママ、フェイトママ、むーじゅんってどいつのこと?」

『え〜〜つと……』

頭だけ私とフェイトちゃんの方角に向きながら首をかしげて聞いてくるヴィヴィオ。私も首をかしげたい気分です。いや、本当にむーじゅんさんって誰なの？

「むーじゅん、じゃなくて矛盾な。ほら、高校のとき勉強しただろ？」

「あ、なんだ。矛盾のことね。一個人のことを聞かれてるのかと思ってビックリしちゃったよ」

2階から降りてきた彼がゲーム機をもちながら台所へ向かう。冷蔵庫からリンゴジュースを取り出しコップに4つ分注ぐと私たちに渡しながら椅子に座る。……ところで、いまのどうやったの？

「ヴィヴィオと弁護士が主人公のゲームしてたんだけどさ。なんか色々と気に入ったみたいで」

「むーじゅん！　なのはママはむーじゅんしてます！」

「と、まあさつきからこんな感じなんだよな。指さすヴィヴィオカワユス。パソコンの中にヴィヴィオフォルダ作っというてよかったです」

彼の戯言はいいとして……うーん、ヴィヴィオも色々と影響を受ける年ごろだしねー。私としてはあまり彼の近くにいてほしくないんだけど……。

「ところで、ヴィヴィオ。私のどこが矛盾してるのかな？」

「なのはママはむーじゅんしてるの!」

「ふふんっ。いい、ヴィヴィオ。そういうのはね、証拠品がないと意味ないんだよ?」

「……しょーこーひん?」

ヴィヴィオが首を60°傾けて、頭に?マークを浮かべる。

ちよつとだけからかつちやおつかな。

「そっだよ。証拠品がないとヴィヴィオが言ってることはなにも意味ないの」

「でも、おにいさんがなのはママはむーじゅんしてるって」

……カレが?

「フェイト裁判長! この証拠品をみてください!」

「えっ!? ここで私にふるの!??」

ヴィヴィオと目を合わせている隙に、彼はフェイトちゃんに何かを差し出していた。……ちよつとまって、あれって

「これは、高町なのはの部屋から押収したブラです」

「……で?」

「気付かないんですか？ フェイト裁判長。 それ、明らかに矛盾してるんですよ。 高町なのはのサイズと。 いいですか？ 本来高町なのはのサイズはそれよりももう少しダウンしてます。 それなのに、彼女は見栄を張って一段階アップしたブラを引出の中にいれていた。 それも、奥深くにですよ？ これが意味すること、それはなのはさん俺の下半身と上半身が分離するからあつい抱擁は勘弁してくださいいいいいいい！？」

「対象ヲ……殲滅スル……」

「ヴィヴィオ、こつちおいで」

上半身と下半身の中心に拳を叩き込み、そこからねじ切るように抱きつくのは。 それに悲鳴をあげながらタップするひよつとこ。 そんな現場にいるにもかかわらず、二人で仲良くリンゴジュースを飲んでるフェイトとヴィヴィオ。

今日も彼らは平和に過ごしているようだ。

「それで……矛盾の説明だったな。 そもそも、二人とも矛盾の由来って覚えてる？」

「高校のとき、誰かさんのせいで授業がロクにできなかった記憶しかないんだけど」

「右に同じ」

「高校のとき楽しかったよな。 教科担当の先生巻き込んでウノし

たり、ポーカー大会やったりして」

「ポーカーじゃアリサちゃん化け物並みの強さを誇ってたよね。君が負けたくらいだし」

「……いまだつたら勝てるぞ」

珍しく彼の頬を膨れる。まったく……負けず嫌いで子どもなんだから。まあ、勝率としては彼よりアリサちゃんが圧勝だったから気持ちはわからなくもないけど。

「けど、ヴィヴィオに矛盾の由来を教えるのは難しいんじゃないかな？ 5歳だよ？」

フェイトちゃんが手をあげながら話す。うん、確かに難しいよね。なのはだってチンプンカンブンだったんだから。

彼はフェイトちゃんの疑問にどこからか持ってきた伊達メガネをかけ、軽く笑ったあとに人差し指を立て

「ここで俺の登場ですよ。ギャラドスでもわかるリリカル昔話でヴィヴィオに説明しようと思う」

あれ……？ ちょくちょくと、不思議な単語がでてきたんだけど。

頬がヒクツと動くのがわかる。が、ここは我慢することに。そんな私の心境など知らずに彼はヴィヴィオに絵本を読み聞かせる要領で話しはじめたのだった。

むかしむかし、大きな大きな大陸に大陸全土を支配しているといつても過言ではない国がありました。その国の名は、パン・ツヌイダと呼ばれる国で男女比 4：6 きれいな水に美味しい空気、あふれる木々に穏やかな気候。とてもとても過ごしやすい国であったのです。王様の名前は、ひよつとこ王。とつてもカツコイイ王様でモテモテで毎晩毎晩給仕の者とアバンチュールな一夜を過ごすナイスガイでありました。

王の右腕と呼ばれる女が王に唐突にいました。

「なあ、王様。 わたし……胸をおつきくしたいんやけど……」

「諦める」

女は仕事をする王様の背後にまわり、バックドロップをきめます。

「すみません。 調子こいてました。 まじすんません。 ちよつと王様の役割になつたくらいで調子こいてました」

土下座でペコペコと謝るひよつとこ王。 なんと弱女王様である。

「わたしもきにしてるんやで。 やっぱ女の子は胸が大事やし。 生命力といつてもいいくらいや」

「んじゃお前もつすぐ死ぬな。 セミとどつちが早いかぐばッ!？」

「こんどいつたら齒折るで」

王様の側頭部に回し蹴りをきめる女性は、痙攣する王様を尻目に兵

に命令しました。

「ほなら、その商人とやらを呼んでもええで。 王様の了承はとれたみたいやし」

「いや……主はやて……じゃなくて、はやーて様。 それって了承とったというのですか？」

「ちゃんととってるで。 なあ、王様？」

「……もう、好きにしてください」

いじけてポケットから携帯ゲーム機を取り出すひよっとこ王。

「よーし、それじゃ了承もとれたし……その商人を王間に通すんや！」

ノリノリなはやーてに溜息をつきながら、兵士は商人を通すのであった。

「あーはいはい、商人ね、商人。 ぶっちゃけどうでもよくなってきたから早めに済ませようぜ」

玉座に座りながらも、めちやくちややる気がなくなった王様はどうでもよさそうに、兵士に銘じて商人を自分の前に登場させることにした。

右側にロリっ子の兵士を、左側にポニーテールの兵士が付き従うなか、二人の商人が王様の前に片膝をつきながら話し始めた。

「お会いできて光栄至極にございます。私の名前は、ギャラドスなのはと……ギャラドスなのは あれ？ ちよつとお！ ギャラドスって言おうとするとギャラドスに変換にされるんだけど！ どうなってるの！ これ！」

「お、おちついてなのは！ 王様の前だよ！？ えつと、失礼しました。私の名前は、フェイソンと申します。……フェイソンと……フェイソン……もうフェイソンでいいです」

栗色の髪をツインテールした女性、ギャラドスは一人で空中にむかつて抗議をはじめ、金髪のツインテールの女性、フェイソンはすでに悟りをひらいたように事務的な目をしていた。

そんな二人を目の前にして、はやーてが一步前にでて軽やかな笑顔を浮かべる。

「まあまあ、こっちの王様はすっかりやる気なくしたみたいやし

」

「商人、スリーサイズと愛用のパジャマ、シャンプーと石鹸のメーカーにパンツの色とシミの数、周期はどれくらいで訪れるのかを原稿用紙10枚で書いてくること」

「お前だまつとれや」

「ほむッ!？」

王様の顔面にためらいなく膝蹴りをするはやーて。鼻血で床が汚れるが、おつきの者も慣れていいのかほんわかおっとりした女性、シャ・マールがモップをもって床に落ちた血を拭きはじめる。それを横目にはやーては話す。

「ほんで、きょうはどんな要件できたん？ 商人なんやる？」

はやーての声にフェイソンは答える。すでに二人ともちゃんと姿勢を正しているところを見ると、根は真面目なのかもしれない。

「今日は私たちの国に伝わる最強のバస్తుップブラを是非王様にお見せしたく馳せ参じた次第です」

恭しく頭を下げるフェイソン。

「いや、そんなことどうでもいいから君のパンツが現在シミを作っているのかについて小一時間ほどはなそうじゃ」

「だまつとれ言ったやる！」

ゴキツと肩を脱臼させるはやーて。王様はあまりの痛さに床を転がり、シャ・マールが置いたバケツをひっくり返す。シャ・マールはにこにこ笑顔でひよつとこ王の顔面をモップで綺麗に磨いていく。

「ふむう……個人的にそのバస్తుップブラはきになるな。どんなものなんや？」

「はい、既に私達は二人とも身に付けております」

『おい、それって……もしかしたら合法的にあの二人のアレをみれるんじゃないか?』

どよどよ……ざわざわ……と王間が揺れる。

「おちつくんやッ! アホども! うちかてブラは着けとるで! うちかて美少女やないか!」

『……………』

「なんで黙るッ!?!?」

「ひっこめー! 無乳ー!」

「ぶちのめす! お前だけはぶちのめす!」

シャ・マールによってきれいに磨かれたひよつとこ王は、男兵士たちの集まりの中へ紛れ込みながらはやーてに向けて禁句を叫ぶ。

追いかけるはやーてに、逃げるひよつとこ王。

突如現れた魔法の糸に足を絡め捕られ転ぶひよつとこ王に、はやーては馬乗りになって顔を中心に殴っていく。その表情はもはや機械的で思わず男衆が3歩さがるほどであった。

やがて満足したのか、はやーては顔についた血を拭きながらフェイソンに改めて話す。

「それじゃ、いま二人とも最強のバస్తుップラはつけとるとい

ことか。……うん、確かにうちより胸が大きいし、これは買いかもしれへんや」

「まった!?!」

思案顔のはやーての後ろにいたひよつとこ王が部屋全体に震えるほどの声で叫んだ。ひよつとこ王は鼻血を垂らしながら、立ち上がりフェイスンをまっすぐみつめる。

「ちよつとまっつてほしい。フェイスン」

「は、はい。……なんですか?」

「一ついいかね。その最強のバストロップは、どれくらい最強なんだ?」

射るような視線でフェイスンを見るひよつとこ王。その視線にたじろきながらもフェイスンは答える。

「えーっと……私の見た目どおり、大陸で一番大きくなります」

「……それは誰にでも効果があるのか?」

「はい、間違いなく」

フェイスンの答えを聞いてひよつとこ王は肩をすくめる。

「ふう……。それは嘘だな。だって大陸一の大きさになるのなら、横の女性も君ぐらいの大きさになってなきゃおかしいじゃないか!」

「……ッ!? そ、それは……! たまたまこの女性の胸がブラをつけてもかわらないだけで……!」

「ねえ、フェイトちゃん。もちろん冗談だよな? ほんとはそんなこと思っていないよね? どうしていつもこういうときはなのはに攻撃が集中砲火で飛んでくるの?」

「異議あり!! フェイソン、それはおかしいよ。君は先ほどこう証言したじゃないか。『間違いなく、大陸一の巨乳になれます』と!」

フェイソンに向かって指さすひよつとこ王。

「……ぐッ!」

「さあ、君はこれをどう説明するんだい? 無乳であるはやーてに夢をもたせて罪は重いぞ?」

『ひよつとこ王が恰好よくみえるぞ……、流石王様だな……!』

『でも、はやーて様が釘バットもって素振りはじめたぞ……!』

『……ちらばひよつとこ王』

男衆がざわめく中、フェイソンは一言つぶやいた。

“私の負けですね……”と。

こうして世の中に一つの言葉がうまれた。

「と、まあこんなもんかな。　　って、どうしたの？　二人とも
すんごい微妙な顔してるけど」

「いや……そりゃ微妙な顔にもなるよ。　なに、この茶番」

「いやいや、これはあくまで昔のお話だから俺たちとは一切関係
ないよ。　いや、本当だつてば」

必死で首を横に振るひよつとこ。

それでも二人の顔はキツく、いつの間にか膝に座っていたヴィヴィ
才はとても楽しそうにニコニコと笑いながら指さすのであった。

「おにいさんに異議ありー！」

29・ギャラドスでもわかるリリカル昔話（後書き）

正直、なにやりたかったんだろう。書き終わった後に思いました。

30・おそばつくるよ！

三人にわかりやすく矛盾のお話しをしたら、二人からは微妙な顔をされ一人からは異議を申立てられる始末。　　いったいどうなってるんだろうね。

それはそれとして、いまは16:00。　　夕方とも呼べずお昼ともいえない時間帯のだが、俺たちは四人なかよくTVをみていた。　　内容はグルメ旅番組でミッドの美味しい料理屋を紹介しているみたいだ。

『このお店のおそばはミッドで一番おいしいと断言できるのでしよう！　　それに作る主人も20代後半の天才イケメン主人！　　これはお客様が絶えることがないのも頷けます！』

画面内では化粧気の強いリポーターが主人と蕎麦を交互にみながら何やら興奮している最中である。

「な〜にがミッドが一番だ。　　蕎麦庵のおやつさんの蕎麦のほうが美味いに決まってるんだろ」

「あそこはおいしいよね。　　あそこのえび天大好き！」

「私はかきあげとか好きかな。　　キャロとエリオにも食べさせたいんだけどな〜……」

蕎麦庵とは俺たち三人が見つけた、蕎麦専門のお食事処だ。　　蕎麦一筋30年のおやつさんが一から作る蕎麦は普段料理を作る俺でも

惚れるほどの腕前で、何度か店にお邪魔して習いに行ったほどだ。

「そういえば、あそこの主人って私達と同じ日本出身なんだよね？
なんかいまでも疑問に思っちゃうよ。地球には魔法技術とかな
いのに……よくミッドに来れたよね」

「さあな。俺たちだって全部知ってるわけじゃないからな。
俺たちが知らないだけで、おやっさんめちゃくちゃ凄い人かもしれ
ないぞ？」

「うーん……もしかしたらなのは達の先輩なのかもしれないね」

まあ、おやっさんのことだからそれはないかもしれないけど。

正座してるフェイトの膝の上に座っていたヴィヴィオが、俺の足を
トントンと叩いてくる。いちいち仕草が可愛い子だ。

「ヴィヴィオ、おそば食べたい！」

「え？ このイケメン主人の蕎麦？俺が気に入らないから此処に
は絶対いかないけど」

「ちーがーうー！」

「単純にお蕎麦食べたいんじゃないかな？ヴィヴィオお蕎麦食べ
たことないだろうし」

ヴィヴィオの頭を撫でながらフェイトが喋る。

ああ、なるほどね。そういうことか。

「でも、蕎麦庵って定休日じゃなかった？」

「ふえ……」

「ああ！　だ、大丈夫だよヴィヴィオ！　なのはママがなんとかするから！」

なのはが告げた残酷な答えにヴィヴィオは泣きそうになる。それに慌てたなのははできもしない約束をすることに。　　おいおい……定休日だっていっただろうが。

「あとはこの人がなんとかしてくれるから！」

「投げやりにもほどがあるだろう！？　数秒前の約束どうしたっ！？」

「うう……やっぱ、ダメ？」

ぐはっ！？　上目使いのなのはに思わず吐血する。　やはりというか、可愛い子がこういった仕草をすると効果抜群で死んでもいいとさえ思えてしまう。　それが惚れた相手ならなおさらだ。　なのはの場合、狙ってやっつけないから余計に刺激が……。　　ちなみに狙ってやっつてるのがはやてだ。　あいつは自分が可愛いのをわかってやっつてるからタチが悪い。

「まあ、おやつさんに電話して材料だけわけてもらえば、あとは家で作れるだろ。　簡単なものしかできないし、おやつさんの足元にも及ばない出来にはなるけどさ」

「うんうん！　それでもいいよ！　ね、ヴィヴィオ！」

「うん！」

なのはとヴィヴィオが二人してはしゃぐ。それをフェイトと見ながら、肩をすくめたあと携帯でおやっさんの番号にコールした。

「いや、ほんとすんません。　定休日なのにお邪魔しちゃって」

「まったくだよ、バカ男が。　こちら新しい蕎麦を作るのに忙しいんだぞ。　ほら、何人分だ？」

「えーっと」

「いまなら20人特価で安くできるが？」

「……足元みやがって。　おいくら？」

おやっさんは手をパーの形にして前に出す。　しかたなく持ってきた金額を手のひらに置くことに。

「足りないぞ」

「出世払い」

「お前、死んでも職につかないだろうが」

足りない金額はおっさんに請求させることにした。

蕎麦庵から大通りに移った俺は、大量の荷物を眺めながらどうしようかと頭をひねった。

「それにしても、20人分は重いぞ。流石の俺でも持てない……」
魔法でも使えれば楽なんだろうけど……いかんせん魔法を使えない身なので頼ることはできない。

俺が材料をみながら、どうしようかと悩んでいると奇跡的かつ偶然的に警官ルックスのおっさんが、見回りしながら歩いていた。おっさん、家に請求書くるけど頑張つて！しかしこれは素直に嬉しい。おっさんの超人的パワーなら20人分くらい軽くもてるはず……！

「あゝ！こんなところでミッドの一市民が困ってるぞ〜!?」

おっさん、こちらを振り向き俺の姿を確認して見回りに戻る。

「うわ〜！20人分の蕎麦の材料を抱え家に帰るなんて無理だよー！だれか助けてくれないかなー？」

おっさん、シカトしてタバコに火を点ける。

「こんな幼気いたいけで可愛い男が困ってるんだけどな〜？誰か助けてくれないかなー？」

おっさん、笑いながらこちらを指さす。

プチンッ

「学校で制服プレイが大好きな局員とつとこいやボケ！」

「まったく、都合のいいときだけ市民を名乗りおって」

「これぞほんとのご都合主義というやつさ」

「黙れ、ゴミ」

瞬歩できたとしか思えないが、俺が言葉を放った瞬間にはおっさんが傍にいて、やれやれ……と頭を抱えていた。ところでさ、いまためらいなく俺のことゴミっていったよな？

「それで、どうしたんだ。かなりの大荷物じゃないか」

「うちの姫が蕎麦を^ご所望だからさ、たったいま材料買ってきたんだよ」

「それにしても多くないか？ かなりの量あるぞ？」

「ついに子どもができたんだ。可愛い子どもたちが」

「逮捕する」

「いやあああああ！ おっさんが俺の胸を愛撫してるっっっっっっっ」

「っ」

「どう考えても手を握ってるだろ!？」

いや、それも聞きようによってはイケナイ場面になっちゃっただけどな。

閑話休題

「んじゃ、運んでくれ。俺はポケットに手を突っ込んで家まで歩くから」

「お前ももたんか、バカもん。まったく……やはりお前は変わらんかったな」

「やつは俺には、これが合ってるからさ。良い大人はなのはトフエイトに任せることにしたんだ」

「お前が良い大人になってくれればミッドも平和になったんだがな」

「とか言っちゃって、本当はおっさんには分かってたんだろ？」

俺がこの答えを出すことが。

おっさんは何も言わず、肩をすくめるだけにとどめた。

「まあ、それはそれとして。おっさんも食ってかね？ 20人分もあるからさ、人呼ばないと食べきれないんだよ」

俺となのはトフエイトとヴィヴィオ。ヴィヴィオが一人分食べれるとは思えないしな……。あ、スカさんとかはやてとか呼ぼう

かな。嬢ちゃんとスバルも、なのはを通して呼んでみよう。フ
イトもエリオとキヤロに食べさせたいとかいってたし。腕は違
うけど、材料は一緒だからなんとかなるだろう。

ここまで考えて、おっさんには家族があることを思い出す。帰っ
たら奥さんと娘さんとイチヤイチャしながら夕食食べるんだから、
俺が誘っちゃダメじゃん。いまの誘いなしの方向にもっていか
ない。

「あー、悪い。おっさん家族で夕ご飯食べるよな。やっぱりま
の誘い」

「なあ、ひよっとこ。嫁さんと娘が俺を置いて旅行に行ったんだ
けどよ……。どっかに独りで食べなくて済むところ知らないか…
…?」

「いまの誘い、ありの方向で」

おっさんがどんどん惨めになっている気がしないでもない。

おっちゃん…… (、 ……) ジェット……

(おっちゃん) …… (おっちゃん) …… 03

31 おそば準備してよ！

「おっさんが後ろからピクミンのようにストーカーのようにヤンデレ彼女のようについてくる。瞳の濁った狂喜の瞳で、紫色に変色した唇を舌なめずりし、凶器をもちながら狂喜に身を包まれながら狂気に体を預けながら俺の後ろをゆっくりとつかず離れずの距離を保ちつつ歩幅を合わせるように、手足を合わせるように呼吸を合わせるように瞬きを合わせる。次第に距離は詰められていく。彼の瞳は心は既に俺にしか向いていなかった」

「なに言ってるんだお前」

「……この人物をなのはとフェイトに変えるだけで俺はすごく幸福になれるのにな。おっさん物語にでてくんよ」

「お前が唐突に喋りだしたんだろうがッ!？」

「そんなことより、しりとりしようぜ。しりとの“し”」

「しね」

「ネカマ野郎」

「はげろ」 ヒジ打ち

「黙れ、円形脱毛ハゲ野郎」 足の小指踏む

おっさんがローキックを繰り出すので、俺も膝蹴りで応酬する。

ドスッ！ ガスッ！ バキッ！ ゴキッ！

『やんのかてめえ！』

「あのー……家の前でリアルファイトはやめてくれる？」

丁度家の前でリアルファイトしようとする俺たちを、玄関からなのはがめんどくさそうな目でみていた。そんな目で見つめられると素直におしゃべりできなくなるぜ。

「というか、その大量にある材料はなに？ もしかして全部蕎麦？」

「もしかしなくても全部蕎麦」

なのはがサンダルを足にひっかけながら俺のほうに向かってきたので、おっさんとともに材料を置く。なのはは20人分の蕎麦の材料をみながら

「なんでこんなに買ってきたの……？」

とつても怒った顔で俺のほうをみてきた。まあ、当たり前だよ。事前になのはから貰ったお金じゃこんなに買えないし、そもそもこんなに食べようとは思わないし。

なので俺は道中考えていた言い訳をすることに。

「違うんだ。灰色の蕎麦の妖精さんが潤んだ瞳でこちらをみてきたのでごめんなさい。ついついおやつさんにのせられました」

なのはさんが頬をヒクつかせながらこちらをみてきたので、即座に

謝ることにした。なのはさんは基本的に謝ったら許してくれる人だ。覗きは許してくれないけど。

「まあまあいいじゃん。また祝賀会のときみたいに人呼ぼうぜ。ヴィヴィオもウーノさんにスカさんに会いたいだろうし。というか、スカさんの場合は俺が会いたい。六課の面々も呼んで盛大に蕎麦パーティーしようぜ」

蕎麦パーティーなんてちょっと年寄くさいかもしれないけど、これはなかなか乙だと思う。問題は、大喰らいなスバルとエリオだ。蕎麦は20人分しかないので、全員に渡らせると残り少なくなってしまう。……うーん、おにぎりでも作るか。

「なのは、おにぎり作るの やっぱいいや。はやて先に呼んであいつに手伝いさせよ。あいつ料理作るのうまいしな」

「ねえ、それって言外に私がおにぎりも作れないっていいたいの？」

「なのはちゃんに問題です！ おにぎりを作る際に手につけるものなんでしょう？ 1 お酢 2 胡椒 3 コーンポタージュ！」

「4のお砂糖！」

なにいつてんだこいつ。

荷物を家の中に入れておっさんは、見回りに戻るといつて早々と来た道に戻ってしまった。ほんと、仕事好きだな、おっさん。この周辺は変人奇人が多いから大変だろうに。

ちなみになのははちょっと恥ずかしそうに顔を赤くさせながら、フ
エイトと二人でパソコンを使ってなにか調べていた。砂糖と塩を
間違えるなんてカワユイやつでしょ？ ヴィヴィオを二人の間に座
らせて『おいしそう〜！』なんて言いながら画面をみる二人。な
のはとフエイトもおいしそうです。あ、よだれが……。

「あぶねえあぶねえ。まだセットアップには早い時間だ。それ
はそうとはやてに連絡取らないと……」

携帯に入れてある電話帳を開く。

携帯の電話帳はフォルダごとに分けてある。何分、知人が多いも
ので。

「え〜っと……はやての番号は『おっぱい残念賞リスト』にに入れて
たよ〜な。あ、発見」

携帯のカメラに向かってアイドルばりのスマイルで横ピースをきめ
てるはやての顔写真を眺めながら、俺はコールした。

1コールのあとにはやての声が聞こえてくる。ん？ ちょっと騒
がしいな。もしかして、移動中か？

『おー？ どしたん？ いま、ヴィータとイケナイことしてるんや
けど』

「パンツ脱ぎ捨てた」

「きゃあああああああ！？」 なのはの頭に何か温かいものが

！？ フェイトちゃんにとって！ お願いとって！」

「む、無理だよなのはッ！？ これは特A級のロストロギアだよッ！？」

「パンツであれだけ騒げるなんて可愛いなあ。 あ、あいつら俺の幼馴染なんすよ！」

『だまつとれ、動くロストロギア』

「私の愛馬は凶暴でね……」

『ちっさ……』

こいついつか絶対泣かす。 ヒィヒィ泣いて懇願させる。

「それはそれとして、ちよいと家にきてくださいませ。 今日大量に蕎麦買ってきたから六課やスカさんたち呼んで蕎麦パーティーしようと思ってるんだ。 でもエリオとスバルいるじゃん？ このままでは絶対に足りないから、なんか作ってくれ」

『なるほどな。 ほなら今すぐ行くで。 食材も一緒に買ってくる。 蕎麦ってことは和風に仕上げるんやろ？ 今日の夕食は』

「流石はやて、話が早い。 頼めるか？」

『オツケーオツケー』

それだけ聞いて電話を切る。 するとちょうどいいタイミングでヴィオが俺の足にしがみついていた。 なにこの可愛い小動物

……あれ？ ヴィヴィオ？

「なあ、なのはにフェイト。六課の面々にヴィヴィオのこと
たっけ？」

『……あ』

パソコンの前で固まる二人。

そんな二人と俺の体を使って遊んでるヴィヴィオをみながら俺はあ
ることにきがついた。

ヴィヴィオ金髪だし、フェイトと俺の子どもとかいけるんじゃない？

31・おそは準備してよ！（後書き）

ノリノリなはやて。 可愛いなのフェイ。 思考がアレなひよっと
こ

32・おそばまだ!?

なのは達が固まるのは見ながら俺はヴィヴィオの耳をつまむ。こ
うするとヴィヴィオはこしょくつたいのか肩で耳をさする仕草をと
る。これがなんとも可愛らしい。

さて、そろそろはやてが此処にくる頃合いだと思っただが

ピンポン

「おー、ちょうどいいタイミングじゃねえか。　はいはい!」

足早に玄関に赴く。　ヴィヴィオも来客に興味あるらしくその小さ
い足で俺と一緒に併走しながら玄関までの距離を走る。　玄関のド
アノブをひねり開けた先には、幼馴染にして一番ウマが合うかもし
れない女、八神はやてが片手を上げながらこちらをニコニコとみて
いた。　黒に近い茶で、なのはやフェイトよりも短く揃えられた髪
だからか明朗快活というイメージをもつ。　実際明朗快活なのだが。
なのはやフェイトたちが所属している機動六課の部隊長でありな
がら、一番仕事をサボる女である。

「わるいな、付き合ってもらって」

「ええでー、それくらい」

手に持っていた買い物袋を受け取る。　野菜や肉、魚など色々を買
ってきたようだ。　人数が人数なのでかなりの量であるが……はた
してこれで足りるかな?　足りなかったら買いに行くか。

ドアを全開まで開け、はやてを中に招き入れる　　ところではやての視線が俺の下腹部に注目されていることに気が付いた。

「おいおい、はやて。　いくら俺とお前の仲だからって会ってすぐ合体はマズイって。　俺にはなのはとフェイトという心に決めた二人がいるんだからさ。　いや、はやてがどうしてもっていうのならしょうがないんだけどね？　俺もさ、なのはとフェイトのことを考えると心が痛いけど、しょうがないような気がするんだ。　うん。　ヤろうぜ？」

スマイルを浮かべてはやての手を握る　　直前に気付いたのだが、いつの間にから本ともが指が反対方向に曲げられていた。

「うおおおおおおおおッ!?　いつの間にか指が大変なことにッ!？」

「え?　どしたん?　あゝ、それ痛いで〜」

「お前だろっ!?　お前がやったんだろ!?　頭おかしいんじゃないかねのかっ!？」

「お前にだけは言われたくないわ」

はやてが溜息を吐きながら、俺の指に自分の手を包み込む。　それから数秒包み込んだあと、はやてがその手を離すと指はすっかり元通りに戻っていた。　おかえり、俺の指。

「……魔法ってすげえな」

「わたしが凄いや」

まあ確かにそうだけども。

「それより……さっきから気になってるんやけど……その娘、だれ？」

はやてが俺の下腹部を指さす。正確に言えばその近くにニコニコと俺の手を握りながらはやてを見ているヴィヴィオを指さす。

「ああ、この娘はヴィヴィオ。俺とフェイトの子どもでさ。ついにできたんだ！」

「時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課所属 八神はやて二等陸佐です。拉致監禁の罪で逮捕します。同行してもらえますね？」

「予想通りの反応ありがとう。そういうところ好きだぜ、はやて。それと冗談だから手錠つけないでくれるかな？」

「まあ……なんというか……新しい家族……かな？ ヴィヴィオ、このママたちよりもおっぱいが残念なお姉ちゃんに挨拶は？」

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「こんにちは。なのはちゃんとフェイトちゃんの幼馴染の八神はやてです。ヴィヴィオちゃん、よろしくな。えらいな。その年であいさつなんてできて。なのはちゃんとフェイトちゃんの教育がいいんやな。ミジンコ以下のゴミがいる家なのにこんなニコニコした笑顔を浮かべれるなんて……はあ、もらってええ？」

「その前に謝れよ、俺に」

「……え？」

なんでこいつは不思議そうな顔で俺のことは見ることができなんだ。

「残念ながら、ヴィヴィオはうちの天使なのであげられません。
なのは&フェイトとガチで戦う覚悟があればどうぞ」

「うっ……ガチはあかんで、ガチは。 アンタとならガチで戦うけど」

「……俺も一応、お前らが守る範囲の中にはいつてるからな？」

「管理局は人々の平和を守ります（ひよっとこは攻撃対象で）」

「どんな方向だよっ!？」

か弱い俺がすぐに負けちゃうじゃないか。

「はっは。まあ、冗談や。 ひよっとこの場合、周りがアレすぎて戦おうとも思わんで。 人外やら化け物やら変態やら魔物やらが攻めてくるかもしれへんしな」

「その内の7割が父さんの知り合いだけだな。 主に人外やら化け物やら魔物やら。 本当にすごいのは俺じゃなくて父さんだよ」

世界は広い。 なんて言葉があるが、あまりにも広すぎる。 そしてその中にはもちろん人じゃないモノたちも多く存在してる。 吸

血鬼や龍。 食人植物や人の姿をしてるけど明らかに人とは異質な存在。 そんな奴らが世界には堂々と跋扈していたりする。 俺が地球からでなければ知らなかったことだ。 そしてもっと知らなかったこと。 それは、父さんがそんな存在とも知り合いで友達だったということである。 色々と規格外だった存在だけど、どこまで規格外なら気が済むんだ……。 というか、父よ。 比喻ではなく本当に魔法使いなんて存在じゃなかったのか？

「ひよつとこより規格外な存在なんてうちには扱えんで……」

「……母は偉大だな」

笑顔を浮かべながら父さんにクラッチをきめていた母さんを思い出す。 もしかしたら母さんSSSランクだったかもしれない。

「まあそれはそうと……ずっと思ってたんやけどな？ そろそろパンツ履けよ」

「あれ？ やっぱズボン越してもパンツ履いてないのわかる？」

「当たり前や。 そんなもん一般常識やで」

彼と彼女の常識を世間一般的な常識にされると困るのが大半の意見である。

「いや、でもさ。 ミッドに来て驚いたことの一つだよ。 ズボン履いたままパンツだけ脱ぐ方法をみんなが会得してないってこと。 中学のときに男子は必修だったんだが……」

「わたしはスカートやからな。 そんなスキル必要ないで。 まあ、

習うのは自由だったけど」

「好んで習うほどでもないからなく、女子の場合」

うんうん、とふたりして頷く。

そんなとき、俺の袖をクイクイっと引く娘がいた。言うまでもなくヴィヴィオである。はやてと話し込んだじゃったし……退屈させたかな？

「あゝ、ごめんな。もう中にはいるから」

「ううん、ちがうの。ねえねえ、スカさんたちくるー？」

ああ、そういえばヴィヴィオはスカさんには会ってないもんな。そりゃスカさん達に一番会いたいのはヴィヴィオだよな。

無垢な瞳を見ながら、俺は携帯を取り出しスカさんの番号にかける。ちなみに顔写真は幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿である。

「あ、もしもし？ スカさん？」

『おお、ひよつとこ君か。どうしたのかね？』

「あー、ちょっとまって。いま代わるから。はいヴィヴィオ。スカさんだよ」

スカさんの声がいつも通りなのを確認し、ヴィヴィオに携帯を渡す。ヴィヴィオは携帯を受け取ると？マークを浮かべながらパンツを

もって狂喜乱舞しているスカさんの顔写真をマジマジとみていた。

「いやいや、ヴィヴィオ。あんまり見るとスカさん可哀相だから。ヴィヴィオに見せたくない一面がスカさんにもあるからさ」

例えば幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿とか。

俺はヴィヴィオの耳に携帯を当てる。

『ひよつとこ君？ どうしたんだい？ 返事がないなら私が書いた官能小説をだね』

「あ！ スカさんの声が聞こえるよ〜！」

『うおっほん！ やあ、ヴィヴィオ君。ちゃんと良い子にしているかな？ 私のほうは偉大な研究のレポートを書いていてね』

スカさん今更遅いよ。偉大なレポート＝官能小説という式が成り立ったよ。

「ほら、ヴィヴィオ。スカさんに、来てくれるか聞こうぜ」

「うん！ ねえねえ、スカさん？」

『なんだい、ヴィヴィオ君。おもちゃが欲しいのかい？ ちよつとまってくれないか。いま幼女が使っても問題ないおもちゃを作るから。大丈夫、ウーノが運んでくれると思うだろっし』

「い〜ら〜な〜い〜！」

スカさん少し黙ってくれよ。そう思った瞬間、俺の願いが届いたのかスカさんの電話口から床に倒れるような音が聞こえてきた。たぶん、ウーノさんあたりが黙らせたんだらうな。

「ほら、ヴィヴィオ。いまがチャンスだよ」

「うん！ ねえねえ、スカさん。おそばたべるー？」

「ん？ 蕎麦かい？ いや、今日の夕食で蕎麦は食べないが……。ウーノ、今日の夕食は？」

スカさんが隣にいるであろうウーノさんに献立の内容を聞く。なんだかヴィヴィオが泣きそうなんだけど……

俺はヴィヴィオの耳に当てていた携帯を自分の耳に当て、スカさんにヴィヴィオの真意を説明することに。

「違うよ、スカさん。ヴィヴィオが蕎麦を食べたいらしくてね。俺が大量に買ってきたんだ。その量があまりにも多いので知り合い呼んで蕎麦パーティーしようと思ったのさ。それでヴィヴィオは真つ先にスカさん達に来てほしくて電話したのさ」

『ヴィヴィオ君が私に……？』

「そつだよなー、ヴィヴィオ」

「うん！」

そりゃ俺なんかよりもよつぽど会いたいよな。家族みたいなもんだし。

「それでスカさんの返事は？」

俺の問いに電話越しからは沈黙が返ってくる。と、思った瞬間

『うっほおおおおおおおおおおおおお！！ 行く！
ヴィヴィオ君のお土産もって絶対にいかせてもらおう！！ ウーノ
！ すぐに準備だ！ まずは清潔感を出すために風呂へ！』

「「いつたあゝ……！」」

スカさんの大音量に俺とヴィヴィオは思わずうずくまる。スカさん
はしやぎすぎ。 気持ちはとてもわかるけど。

「それじゃスカさん、まってるよ」

『まってるくれたまえ！ 最近開発したメ ロットを颯爽と登場し
てくるから！』

管理局員がいるのによくやろうと思うな。 押収されて終わるぞ。
それかおっさんが破壊して終わるぞ。

はしゃぐスカさんの声を聞きながら終了ボタンを押す。

「よかったなヴィヴィオ。 スカさんたち来てくれるってよ！」

「わーい！ なのはママー！ フェイトママー！」

なのは達がまつ所へ走っていくヴィヴィオ。 ヴィヴィオの笑顔を
みると、こっちまで嬉しくなってくる。

そんなヴィヴィオの姿を見ながら、はやてをすっぽかしていたことに気が付いたのだが、とくに慌てることもなくはやてのほうに視線を向ける。

「どうだった？ ヴォルケンのみんなは来れるって？」

「もち。 たったいま電話で確認とってきたで。 エリオとキャロも一緒につれてくるから心配なしや。 スバルとティアはなのはちやんに電話させよ。 面白いことになりそうやし」

ピースするはやてにこちらもピースで返す。 用意がいいはやてのことだから、あの間に電話で確認してると思っていました。 そして同じことを考えてました。

「んじゃ、中にはいつてくれ。 期待してるぜ、はやて」

「まかしときー」

はやての手をとって中へと招く。

さてさて……あまり時間もないので早く作らないとな。

32・おそばまだ！？（後書き）

雲の上の存在

それがひょっとこの父親である

そういえば、みなさん中学時代に習ってないみたいですね。パン
ツだけ脱ぐ方法。ちよっと驚きました。

33・食べる前にスパイスを

台所にはやてと二人、材料の確認をしながら世間話をする。ちなみにヴィヴィオはなのはとフェイトの元へと一直線に走り、そのまま帰ってこない。大方、二人の間に挟まれながらパソコンでもしてるんだらうな。

「さて……作るものも決まったな。手打ち蕎麦だから蕎麦以外の料理ははやてに任せるけど、よろしくな」

「誰に言ってるんねん。わたしかて腕は落ちてへんよ」

腕まくりしながら力強く答えるはやて。はやてがここまで言うのだから実際に落ちてないんだらうな。むしろ上がったたりして。

はやてが準備する横で俺も蕎麦の準備をすることに。

買ってきた材料を台所にのせ、大きな大きな鉢をもってくる。

昔から蕎麦の基本は、一鉢、二延し、三包丁と呼ばれているそうで、その名前からもわかるとおり蕎麦の手順は大きく分けると3つからなる。1つ目が鉢にそば粉と水をいれ、こねまくって玉にすることだ。なんでも、このはじめての作業で蕎麦の良し悪しは決まってくるそうなので俺も一番気合がはいるところだ。ヴィヴィオとなのはとフェイトの喜ぶ顔がみたいしな。次に延しだが、延しは鉢で玉にしたものを麺棒を使って延ばしていく作業にあたる。このときに出来るだけ細くしておくといいみたいだ。しかしここで問題になってくるのが、玉のほうである。玉が均等に綺麗に丸くならないと延しの作業でうまく延ばすことができないみたいだ。

やはりそういつた意味でも、1の工程である鉢の作業はかなり重要なものだといえる。そして最後にまつているのが包丁でのカットである。これは一定の長さ太さになるように計算して切らなければいけない。

総合的にいうと、どれもこれもなかなか難しいわけで、それに加えて20人分をいっぺんに作るわけになるのだから

「こねるのが果てしなく難しい……！」

職人でもなんでもない俺は苦戦するわけですよ。いやはや、ちょっと分量が多すぎたかな……やはり四人分のほうがよかったかも……。

「わたしには視えるでー。みんなが誰かさんの作った蕎麦をおいしそうに食べる姿がなー」

「うっ、うるさいな。ちゃんとやりますよ！ いまのでコツ掴んだから！」

くそっ……今度もう一回習いに行こう。

水はたしながらこねていく。

はやては横で買ってきた魚の身を蒸らしたり、刺身、茶わん蒸し、ナスの山椒焼きに簡単浅漬け、冷奴、なんてもを作ってる最中である。たぶんかき揚げとか天ぷらとかの揚げ物系は食べる寸前で揚げるんだろつな。出来立てが一番うまいし。それにしても……あいかわらず料理の腕前やべえ……。

はやてを横目に必死にこねて玉にしてい。ここを失敗したら後の作業が全てダメになってしまうので流石の俺も真剣にならざるおえない。

「なー、ひよつとこ？」

「後にしてくれ。お兄さん真剣中なんだから」

「真剣に玉なんか転がして……」

やめろ、その表現

「なーなー、暇やから話でもしようや」

足で俺をつついてくる。こいつ……！ 余裕があるからって好き勝手してくれるな。いや、余裕がなくても好き勝手するけどさ。

あくまで目線と意識は玉に集中したままはやてとお喋りすることに。

「なんだよ。片手間で話せるような話題にしるよ？」

「え……。それじゃ、最近どうなん？ なのはちゃんとフエイトちゃんとは」

「子どもも出来て順風満帆な生活を送っております」

「という夢を見たひよつとこであった」

否定できないのが悲しいところだ。

「まあ、ぶつちやけ進展ないな……。いつも通りにヴィヴィオ
が加わっただけだよ」

「ふうん……。それにしてもよくもつな。なのはちゃんとフェイ
トちゃんへの愛情」

「残念ながら、この思いだけは偽りたくないのね」

「それで進展は？」

「……ないです」

「どんだけへタレなんや」

はやてが溜息を吐く。

「俺だつて困ってるよ、俺の未来予想図では今頃ギャルゲー主人公
のようにモテモテで家族公認で周囲公認のカップルになってるはず
なんだからさ」

「現状をみると可哀相すぎて涙が出てくるぞ」

「けど、俺だつて告白してるぜ？」

「TPOって知ってるか？」

「それくらい知ってるよ」

はやてが恐怖するように俺のことをみてくる。いや、TPOから
い知ってるから

「知っててそれなら真正のバカやで。 まったく……そんなことじゃ乙女心もわかってないやろ?」

「ぶっ……はやてが乙女心とかいいと思いますから、その手に持っている包丁をどうかしまってください」

ついつい笑った瞬間はやてが無表情で包丁を俺に向かって投擲しようとした。 なにこの人。 なのはより危ないぞ。

はやてはバカを見るような目で可哀相な目でイケメンの俺に説教でもするかのように指を突き付けて言ってきた。

「ええか? 女の子ってのはとっても繊細なんやで。 アンタみたいなバカとは違うんや。 もっと女の子の気持ちとかも汲み取らなあかんねん」

「たとえば?」

「え? え〜っと……そうやなあ……例えば、なのはちゃんとフェイトちゃんVS次元世界の全員とかになるとするやろ? それならどっちの味方をする?」

「勿論、なのはとフェイト」

「そういうことや」

「どっいっことだよ。」

「すみません。 乙女心のわからない俺に誰かはやての言いたいこと

を理論的に説明してください。

「そういつたことに乙女は弱いんやで。よく覚えておき」

ふむ……ようはアレか。味方がいないときに助けたら好感度が上がるぞ！ つてことでいいの？ なるほど、乙女心つてちよるいな。そんなんで落とせるなんて随分と股がゆるい女みたいだな。

「キヤー！ この人私を助けてくれた！ 抱いて！」 つてことだろ？ だとしたら乙女心なんてわからなくていいや。まあ、俺自身は当てはまつてるかもしれないけどさ。

「けど、自分で考えてなんやけど……次元世界丸々相手取るとなるとかなり大変なことになるな」。これを自分に置き換えるとかかなり苦しくなるで」

ふむ……確かにそうだよな。いくらはやてが強くても流石に次元世界相手はキツイだろ。けど、

「そのときは俺呼べよ」

「……は？」

「いや、だからさ。次元世界相手取るときは俺呼べよ。戦闘なんざできないけど、お前の隣で飯食つくくらいはできるだろ？」

ハトが豆鉄砲喰らったような顔でこちらをみてる。

「……なんで？」

「『……なんで？』 つてことはないだろ。なにその反応。ちよ

っとショックなんですけど」

「いや、だって。次元世界やで、次元世界。恐ろしいで？」

「ようはアレだろ？ 喧嘩相手が犬とか猫から次元世界にシフトチエンジンしたただけだろ？ 言っとくがな、はやて。俺はお前と、相手が変わったからといって手のひら返すような……そんな薄っぺらい関係を築いたなんて思ってないぞ」

「……へ、へ。そうなんか……。ふん……次元世界を相手取るんかー！ それは大変やな〜！」

拳動不審でワタワタしてるところ悪いが、戦うのお前だからな？俺は後方で洗濯物でも干しとくから。

「そ、それは嬉しいな〜！ ということはアレやる？ 相手になのはちゃんとフェイトちゃんがおってもこっち側にいてくれるわけやろ？」

はやてが前かがみになりながら、下から見上げる形で聞いてくる。

……あ、そういえばそうだよな。そんなことしたらなのはとフェイトと敵になるんじゃない。

「あ、やっぱりいまの話なしの方向で」

「ぺらっぺらの関係やんかっ！！」

「ほぐうっ！？」

はやてのラリアットで俺の頭がカチ割れそうになる。 流石管理局員……生身でも十分強い。

だつてしょうがないじゃん。 なのはとフェイトがあっち側にいるんだもん。

打ちつけた頭をさすりながら、はやてに文句言うことに。

「いってえーな！ バカ女！」

「バカはそつちやで！ いまの行いは最低や！ 脳みそ引きずり出すぞー！」

怒気のもつた声ではやてが俺を睨みつけてくる。

え？ ちょ、え？ そこまで怒ることなの？ いつもこんな感じのやり取りしてるじゃん！？

怒りが収まらない様子のはやて。 このまま魔力弾でも撃つのか
と思いきや、一度冷静になるためなのかコップに水を汲んで一息
で飲みほし、さっきまでの玄関でみたときの表情を浮かべながら近づいてきた。

「まあ……わたしがアンタに乙女心を期待したほうがバカやったで。 うんうん、人間モドキに人間のことを教えるのはとても難しいことやからね。 けどな？ このままじゃ、いかんと思うで。 幼馴染からのありがたい忠告やで？」

「ちょっとまって、人間モドキってどういうことだよ。 ちゃんとした人間だよ、俺は」

「そうやな、うんうん。ちゃんとした人間やもんな。でもな？
乙女心は理解できてへんやろ？」

「甘く見るなよ。ギャルゲーで鍛えたこの力があれば」

座ったまま、左手をグツと握りしめ自分の胸にもっていく。

その拳をはやてがそつと包み込むように握りしめた。

「ゲームだけじゃわからないことがあるんやで……？ たとえば
この心臓の鼓動の高鳴りとか」

「……え？」

はやての心臓に俺の手が触れる。ドクンツドクンツと脈打つ音が
否応なしに聞こえてくる。心臓の高鳴りが届いてくる。

「はや……て？ ちょっと、おまつ、それは洒落にならないって！？
俺にはなのはとフェイトという心に決めた人がいて」

「ブー。女の子の前で他の女の名前を出すのも禁止のタブー一つやで？」

はやての腕が俺の首に絡まる。離そうとしても引き離せない。

そのままはやてはゆっくりと俺に覆いかぶさる。手は俺の指を恋
人のように一本一本絡ませた状態になっている。

「いやっ！？ ちょっと、まじでダメだつてば！？」

「そんなに嫌なら引きはがせばええよ。わたしは魔法なんて使わずにただ乗ってるだけやし」

「いやでも……女性を引きはがすのは紳士じゃないというか……」

「ほんと、都合のいい脳みそやな。いつもは紳士とは逆ベクトルに位置するくせに」

クスクスと蠱惑的に笑うはやて。

「でも、これはわたしを引きはがさないっていう証拠として見てもええんやな？」

「いや……だから！　そもそも、お前のなんかじゃ力不足というやつでな」

「でも　ここはしっかり大きくしとるで？」

恋人絡みの左手を離し、俺の下腹部をなぞり、ふくらんでいる部分を触る。

「ふくん……力不足でも大きくなるんや？　随分と分別のない子やな」

ゆっくりと指を這わせるはやて。それが気持ちよくて、ちょっとだけムラムラしてくる。

おちつけっ！　俺の息子！　そして俺！　お前には好きな人がいるだろっ！

「なあ、俊？ キス してみようか」

「…………え？」

はやての顔がゆっくりと俺の顔におりていく。潤んだ瞳にわずかに震える唇。軽く朱がさしたその顔はいつもより数段可愛くみえて

「へー…………はやてちゃんとキスするんだ。へー…………。ヴィヴィオのことで相談しようと思ったんだけど。へー…………キスするんだ。

へー…………」

「おかしいなー。俊って、はやてと夕食作ってるはずだよね。

それがなんで二人して床に倒れ込んで、そんな指の絡め方までしてるんだろう。おかしいね、なのは」

「うん。おかしいよね。わたしはべつに俊くんがだれとキスしても構わないけどさ」

二人の登場に体が強張るのがわかる。

「や、やあ…………なのはにフェイト。いつからそこに…………？」

「さあ？ べつにいつからでもいいんじゃない？」

なのはよりも優しいフェイトから、心なしか冷めた声が発せられる。

「いや、二人ともこれは誤解なんだよっ！？ 俺はべつにやましい気持ちなんかまったくなくて」

「なんでそんなに慌てるの？ べつに私もフェイトちゃんも俊くんが誰となにしようが構わないよ？ むしろ祝辞を贈っちゃう」

「いや、だから聞いてくれ」

「だけどき、此処にはヴィヴィオがいること忘れてない？ 小さい女の子がいるのにそういったことをするのはよくないと思うんだよね。私はべつに構わないけど、あくまでヴィヴィオの教育上問題がでてくるよね？」

「いや」

「ヴィヴィオが悪い子になったら俊は責任取ってくれるの？ とれないよね？ ただでさえ人間的にダメな俊がヴィヴィオの責任なんて取れるわけないよね？ べつに俊がそういうことするのはいいよ？ 私もなのはも俊のことなんかどうでもいいから」

あくまで機械的になのはとフェイトは淡々と告げる。俺のことなど、どうでもいいということを強調して。

「あの 二人とも俺の話を聞いてください」

「話を聞く？ 誰の？」

「いや、だから俺の話を」

「それが話を聞いてほしい人の体勢なのかな？」

そこで気付く。　いまの俺の状態を。　端的かつ客観的にまとめると

はやてに馬乗りの体勢で乗っかられている

「いや、ち、違っただっ!?　これは　その　」

スルリと抜けてなのはとフェイトの前に立つ。

そんな俺になのはとフェイトは優しくほほ笑み

「「どうぞご勝手に。　私達はヴィヴィオと一緒に風呂に入りますから」「」

バシンツ!と平手一発。

それを置き土産に二人はその場を後にした。

二人が去った空間には、ぶたれたところをさすりながら去ったであろう方向を見る俺と

「ふむ……なんか大変なことになったな」

呑気にそんなことを言うはやてだけがいた。

はやての方に歩き、胸倉を掴む。

「どっしてくれんだよツ!?　お前のせいで振り向くどころかそっぽ向いたじゃねえか!?!」

「いや……わたしも二人があそこまで怒るとは思ってたなくて……」。

やっぱあれやな。 ヴィヴィオちゃんの教育上よくなかったみたいやで」

「知ってるよ！ そんなこと！ どうすんだよ、下手したら家を追い出されるかもしれないんだぞッ！？」

「まあ……ご愁傷様やな。 でも、それはわたしを断ればよかったわけやしなー。 それができなかったひよつとこが悪いとちゃうか？」

「うぐ……ッ！？」

確かに俺があっさりはやてをどかせることができればよかったのは確かだけど……。

はやての言葉にそれ以上反論できずに俺はただただ手をプルプルと震わすばかりである。

そんな俺をみてはやては小悪魔のように意地悪い笑みを浮かべてニヤニヤしていたのだった。

33・食べる前にスパイスを（後書き）

うんうん。 ヴィヴィオの教育上悪いもんね。

34・彼が此処にいる理由(前書き)

いつになったら蕎麦食うんだよ

34・彼が此処にいる理由

『この身、この心、すべてをささげよう』

水がタイルを穿つ音が聞こえてくる。大きな家の中にこれまた大きな風呂場。その中に大人二人と、子どもが一人。とても仲好さそうに洗いつこしたりはしゃいだりしていた。大人の二人の名前は、高町なのはとフェイト・T・ハラオウン。表面上はとつてもにこやかだ。そして子どもの名前はヴィヴィオ。碧眼と深紅な瞳のオッドアイが特徴的な天真爛漫な女の子。この家のアイドルである。

「ねえねえなのはママー?」

「なあに? ヴィヴィオ?」

「どうしてそんなに怒ってるの?」

メキッ!

なのはがもっていたアヒルの人形が深海に放り込まれたかのように圧縮される。

「べ、べつに怒ってないよ? ねえ、フェイトちゃん?」

「う、うん。 なのはと私を怒らせたら大したもんだよね!」

湯船につかっているフェイトに同意を求めるとフェイトも首を縦に

動かして、努めて明るく振る舞う。

そんな二人の様子をヴィヴィオはおかしそうにみていた。

なのははヴィヴィオの体を泡で満遍なくコーティングしながら先程の光景を思い出す。

自分の幼馴染が親友である八神はやたとキスする直前までいつていた光景を。

「べつに……なのははアレが誰とキスしても……関係ないからいいもん」

けど、普通に考えておかしくない？ 家にはヴィヴィオがいるんだよ？ これはあくまでヴィヴィオの教育上で問題がでてくることだと思っの。あくまでヴィヴィオの教育上でだよ？ じゃないと私がこんなに怒るはずないもんね。だって、相手はあの俊くんだよ？ 社会不適合者で人間的に問題があつて、いつつも私やフェイトちゃんにちよつかいとセクハラとかかけてくる。デリカシーの欠片も存在しない男なんだから。まあ、そんな人だからなのはやフェイトちゃんが引き取つてあげようと思つて、一緒に住んでるのに……俊くんつては、よりによつてはやてちゃんの誘惑にかかつてき。なに？ いつもの『はやてとか恋愛対象にはいらなわ』とか言つてるくせに、ちよつと女の子っぽいところ見せたらすぐに落ちるんですか？ 随分と弱い心ですね。なに？ いつも私やフェイトちゃんのこと『好き』とか言つてるくせに、あれも全部ウソつてわけですか？ だって、そうですよ。はやてちゃんには『好き』なんて言葉かけてないもんね。それなのに、あんなこと

になったってことはそういうことですよね？ あー、なんか腹立ってきた。家追い出そうかな……。

メキメキメキツ……！！

ギエピーー！ ギエピーー！

「な、なのはママ！？ アヒルさんが気持ち悪い声をあげて命乞いしてるよっ！？」

おっと、いけないいけない。なにアレのことで熱くなってるんだが。私としたことが、もっと精神の訓練しないといけないね。

「ねえー、ねえー。ママ？」

「ん？ どうしたの？」

「お兄さんって、どうして家にいるの？」

とつても答えづらい質問です。

「いや、それは……その……フェイトちゃん！」

「えっ！？ ここで私！？ えーっと、それは……その……ねえ？」

誰もいない空間に同意を向けるフェイトちゃん。そこには誰もいませんよ。

「あのね、ヴィヴィオ。 俊くんは普通の人じゃないの。 だから家にいるしかないの」

「うん、そうなの?」

「うん、そうなの」

「それじゃ、なんで此処にきたの? ママたちはお仕事なんですよー? お兄さんがそう言ったもん。それじゃ、お兄さんは?」

「えーっと……それは……」

ヴィヴィオの質問に答えられない。

そもそも、なんで俊くんって此処にいるんだっけ?

「なのは。俊が此処にいる理由だったら、アレだよ。私たちがミッドに行くことになってそのパーティーが開かれたあとに」

ああ、そうだった。今のいままでずっと忘れてきた。いや、忘れようとしていた。

フェイトちゃんの手紙で思い出す。

あれは、高校生活も終わりを迎えるときだった

「いやー、それにしてもなのはもついにミッドに行くんだねえ。毎日会えなくなるんだねえ」

「や、やめてよお姉ちゃんっ!?!? 髪ぐしゃぐしゃするの禁止っ!」

サイドポニーにした髪の毛を乱暴に触る姉を払いのける。嬉しい気持ちでいっぱいだが、髪の毛をいじるのはやめてほしい。

私こと高町なのはもうすぐ高校生活も終了して、ついに本格的に時空管路局にお勤めになります。 たぶん……高校時代とかわらずそこまで仕事回ってくるとは思いませんが。 どうしてか、いつも私の前であらかた片付いてたりするんです。 あとに残ってるのは細々として書類仕事だけ。 これは親友のフェイトちゃんにも言えることみたいです。 うーん……とっても不思議です。

「それにしても良かったわね、なのは。 ミッドのほうで住む家も見つかって。 大きな二階建ての家なんですって？」

「うん！ リンディさんが頑張ってくれたの！」

「ほんとありがとうございますリンディさん。 大変だったでしょうに……」

「いえいえ、大事な娘であるフェイトも一緒ですし、なのはちゃんには数々の恩義がありますわ。 私としても、是非二人には立派な家に住んでもらいたかったの」

フェイトちゃんのお義母さんであるリンディさんが、フェイトちゃんの頭を撫でながら言う。 フェイトちゃんはちょっと恥ずかしそうに、でも嬉しそうにしている。

「そういえば、グラムさんとこのはやてちゃんと他の皆もミッドに一齐に移動するのよね」

「うん、そうだよー。なんでもはやてちゃんが設立した部隊に皆ではいつて頑張るみたい。これから楽しみだねー！」

「でも……そうなると俊君は此処でお留守番かしら？」

「あつ……。そう……なるね……」

いつもふざけた、しかし極稀に真面目な自分の一番付き合いの長い幼馴染を思い出す。

上矢俊。海鳴一の問題児で、小中高と私は散々な被害を被ったことを覚えている。中学はまだ男女別だったけど、共学の高校になつてからがもうすさまじかった。私もどれだけ黒歴史を作ったことか……。

でもなんだかんだて、皆には人気がありクラスの破壊役にしてみとめ役なんてこともしていた。他の生徒たちからも人気はあったみたいだ。先生からも人気があるらしくよく職員室で名前が出ていた。処理対象として。

それはずっと傍にいた私だから胸を張っていえることなんだけど……
…そもそもなんで人気があつたんだろう？

前に、お父さんがお酒の席で『そういう星の元に生まれてるんだよ。上矢という家系の人たちはね。俊君のお父さんなんてもっと凄かったさ。あいつのカリスマ性は誰もが羨んだよ』そう俊くんに聞かせていたのを覚えている。俊くんのお父さんは俊くんが小さいときに飛行機事故で行方不明になった。それ以来、俊くんは高町家と自分の家を行ったりきたりしている。そんな中でもお父さんとお兄ちゃんには懐いてた。翠屋でバイトもして、たまに稽古

したりして……俊くんは俊くんで人生を謳歌していた。だから……私もフェイトちゃんも皆も俊くんは海鳴に残ると思っていた。俊くんとお別れなのは少しさびしいけど、べつに今生のお別れってわけでもないし……会いたいときはすぐ会えるし。だから、私はずっとミッドの家に住んでからの家事分担とか家事の仕方について頭の中で考えていた。

ヴィータちゃんが呼びに来るまでは。

突然、ヴィータちゃんが念話で私とフェイトちゃんを呼び出した。呼び出した先は道場で、その道場には既に先客がまっていた。

「あつ……はやてちゃん」

「おー、なのはちゃんにフェイトちゃん。いま面白いところやで面白そうにはやてちゃんが笑いながら指さした先には、お父さんと彼が正座で向かい合う形に座っていた。距離はおよそ1mくらいだろうか？」

「なんで俊がいるの？」

「まあまあ、フェイトちゃんそれはすぐにわかるで。ほら、そろそろ口にするで。バカのバカなりに考えたバカな答えが」

はやてちゃんが喋った瞬間、彼はお父さんに向かってこういった。

『俺をミッドにいかせてください』

その言葉は耳を疑うような言葉だった。

俺の前には真剣な表情で威圧感たっぷりの土郎さんが正座で俺と対面していた。正直、めちゃくちゃ怖い。学校の先生なんかよりも10000倍怖い。

それでも、どうしても、この学校の先生よりも10000倍怖いこの人に言わなければいけないことがあった。伝えなければいけないことがあった。だからこそ、俺はこうして土郎さんを誘ったんだ。

「俊君。それで、話つてのはなんだい？」

「はい」

心臓の鼓動が嫌になるくらい響いてくる。いまにも口から出そうなほど、吐き出しそうなほど、もう……なんとというか心臓が痛い。でも、それでも、それだからこそ、この痛みを抑えて俺は土郎さんに言わなければいけない。

「俺をミッドにいかせてください」

「ミッド………というと、なのは達がこれから行く新天地だね」

「はい。俺も二人についていきたいんです」

その俺の懇願を

「それはできない、俊君。 残念だけどね」

「士郎さんは跳ね除けた。 それもあっさりと迷うことなく。 『なにをいつてるんだ、こいつ』とでも言いたげに。」

「やっぱり……ダメ……ですか？」

「当たり前だよ。 君をそんなところへは行かせることはできない」

「ッ……！ ど、どうしてですか？」

「^{はい}一との約束で俺は君を頼まれたんだ。 そう簡単に頷くことはできないよ」

「で、でも」

なおも食い下がろうとする俺に、士郎さんは問う。

「では逆に俊君はどうしてそんなにミッドにいきたいんだ？ ベつに友達がいらないわけじゃないだろう。 勉強がついていけないということはない。 君の成績だって親代りである俺が確認してるんだからね。 それに君は翠屋でバイトだってしてる。 大学だって、友人であるアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にいるみたいだし、一人で寂しい思いなんてしないはずだ。 なのに、どうしてそこまでして君は行きたがる？」

「士郎さんの問いはもつともであった。 普通に考えてみればそうだろう。 バイトもして、友達関係も交友も広い。 大学ではアリサとすずかと一緒になって色々と大学生らしい生活を送ることだってできる。 でも それじゃダメなんだ。 そんな“普通”じゃダメ」

メなんだ。

「それにミッドは魔法があると聞いた。なのはやフェイトちゃん、それにその他の友人の人たちも魔法があるから行くのだろうか？」

「たしかに……なのはやフェイト、はやてやヴォルケンの皆は自分の力を世界に役立てたい。世界を平和にしたい、という志と信念でミッドに行くみたいです」

「それで？ 君は？ 世界の平和とか、世界の役に立つためにミッドに行くのかい？」

「いえ……それは……その……」

世界の平和。それはとつても素晴らしいことで、できるなら俺もやりたいものだ。なんせそこには親父が見てきた世界が広がってるだろうから。規模は違つかもしれないけど。

でも、俺の力ではそんなことできるはずもない。

だから俺は口ごもる。 土郎さんに言えなくて口ごもる。

「職はあるのかい？ 住む家は？ お金は？ まさか、その全てをなのはやフェイトちゃんに出してもらわなければならないだろう。だとしたら、それは男として最低の行為だぞ。 俊君」

「なっ、なんとかします！ 職も家も金も！ なんとかしてみせますから！」

「言うは易し行うは難し。 君にそんなことができるのか？ たし

か、君は学校からこんな評価を受けているようだね。『いざというときにはやる男』。大層な信頼されっぷりだね。でもな、それは裏を返せば『いざ、』というときがくるまでやらない男』なんだよ。そんな一本竹の橋を渡るような男をどう信じればいいんだ？俺は君のことは大抵知っているつもりだ。でもね　だからこそ、君をミッドにやることはできないよ」

「……」

「俺は君には真つ当な人生を歩んでほしいと思っているし、願っている。そして望んでいる」

ああ……この人に言っていることは痛いほどよくわかる。

「なのはたまたま魔法の素質があつて、魔法と出会い、自分の道を決めた」

体の奥底まで土郎さんの心配している声が届いてくる。『君も自分のために人生を歩んでみてはどうだ？』　そう聞こえてくる。

「君はたぶん、後悔しているのかもしれない。悔やんでいるのかもしれない。適当な言葉でなのはの味方をしたことを。でも、俺はそうは思わない。君の言葉がなくとも、なのははこの道を歩むと決めていたはずだ」

いつもいつもそうだった。肝心な時に、ふらつと横にきて俺に助言をしてくれたのはこの人だ。だからこそ、この人はこんなにも心を押し込めて冷徹に機械のように話しているんだろう。

「もう……いいんじゃないか？　誰かのためじゃなく、自分のため

に生きてみても……いいのではないか？ 俊君。 誰も君に何も言わないだろう。 それに、なのは達は言ったじゃないか。 『休みの日や、時間が空いたときは帰ってくる』と。 何も離れ離れになるわけじゃないんだ。 知っているだろう？ なのはのことは。 君が一番よく知っているはずだ。 なのはは約束を破らない。 こと、君も関係ある約束ならなおさら。 もう、休んでもいいんじゃないか？」

もう休め

その言葉が俺の体を支配する。

ああ……確かにそれもそうだ。 もともと、俺が勝手に決めた誓いと約束なんだから。 誰も困ることなんてないじゃないか。 そう

誰も困らない。

いや、一人だけ 困る男がいたな。 確かそいつの名前は上矢俊なんていったっけ？ ストーカーのように犯罪者のように執拗に高町なのはとフェイト・T・ハラオウンに引っ付く輩だったな。

けどまてよ？ 上矢俊なんて奴は死んだんじゃないか？ 確か小学校に上がるまえに両親の飛行機事故と同じタイミングで死んだんだよな。 人から人形へと成り下がったんだよな。

いや、思い出した。 そんな出来損ないの奴を救ってくれた少女がいたんだ。 たしか名前は高町なのはだったような気がする。 そいつが上矢俊という人物を立ち上がらせ、背中を押したんだ。 けど上矢俊はそれでも道に迷っているかのように、フラフラと亡者のように自分のやるべきことを見つけられないでいた。 いや、それが本当に正しいのかわからなかったんだ。 そして、そんな上矢俊

に答えをくれた少女がいた。それが、フェイト・テストロッサだったな。そうだ、道を示してくれたんだ。決して迷うことのない道を。フェイト・テストロッサは示してくれたんだ。

そんな彼女達をみて、俺はどんな想いを抱いたんだっけ？

憧れ？ 羨望？ 嫉妬？ 憎しみ？ 憎悪？ 嫌悪？ 愛？ 羞恥？

彼女達に何を見た？

理想？ 絶望？ 未来？ 過去？ 妄想？ 願望？

彼女達の何が見たい？

悲しみの顔？ 羞恥に悶える顔？ 泣いてる顔？ 恋人のような笑顔？

「 土郎さん……。男って、脆い生き物ですね。バカな生き物ですね」

「……………」

「 本当に、自分でも怖いんですけど。あの二人のためなら死んでもいいと思えるんです」

土郎さんの目がキツくなる

「 一度は死んだこの身を、絶望の淵に堕ちたこの身を掬い取って、救い上げてくれたのは高町なのはです。死ぬしかなかったときに人間から人形へと堕ちていくときにその手をしっかりと握ってくれ

たのが高町なのはなんです。震える背中を、怖くて竦みそうになる足を手を、そつと握ってくれたのが高町なのはなんです。あいつは俺に生きる希望をくれました。だけど俺は、ビビりで臆病で弱虫だから……それでも自分の歩む道が正しいのかわからなかった。そんなとき、フェイトに会い、進む道をもらいました。進む道を示してくれました。なにもできなかった自分に、お荷物だった自分に、あいつはそれでも進む道を示してくれたんです。あいつだって、大変だったはずなのに」

口が自分の制御下を外れて喋りだす。

「いま、あいつらは前に進むつもりです。新しい一步を踏み出しています。本当は……本当は俺もあの中に混ざりたい！なのはやフェイトやはやての横で肩を並べて歩きたい！二人のために戦って、二人を戦闘から守りたい！その身に降りかかる火の粉を全て払いたい！嫌われても！疎まれても！蔑まれても！あいつらを守りたい！……でも、俺には魔法の才能なんてなかった。ほんのかすかな使い物にならない魔力しかなかった。だから俺は、魔法で戦って守ることを諦めた。それと同時にあいつらの横を歩くのを止めました。だって、あいつらは前だけ向いて歩いていればいいから。その横列に俺がいたら皆心配して前に進むことができないから。だから俺は一番後ろにすることにしました。誰よりも後ろの最下位に、誰よりもみんなをみる事ができる最後方に行くことにしました。悔しくないわけじゃなかった。泣きたかった。嘆いたりもした。どうして俺には魔力がなかったのか。魔力があったら、マンガやゲームのような主人公になったかもしれないのに。そう思いました。でも俺はそんなことよりもなのはとフェイトの笑顔を見たかった。結局、俺の中にはそれしかなかったんです。自尊心なんてものは存在しなくて、ただただ、笑顔にしたい、という意味のない醜く自己中心的な答え

しか残っていないかったです。でも、俺にはそれだけあればよかった、十分だった。その答えがあれば俺は堂々と自信をもって後ろにいられた。なのはとフェイトが困ってれば、いつかされたように優しく背中を押して導けるように。なのはとフェイトが泣きそうなときは、後ろから叩いて振り向きざまに指をほつぺたに押し付けることができるように。なのはとフェイトが無意識に手を握る動作をすれば必ず握り返すことができるように。なのはとフェイトが膝を抱えてしゃがんだときは、後ろから声をかけることができるように。俺は後ろにしようと思いましたが

なにも、戦って守ることはしなくていいんだ。

「あいつらのためだったら、神でも悪魔でも魔王でも妖怪でも天使でも女神でも管理局でも相手になります。あいつらがいるなら、なんだってします。できることなら、全てやることができます。ただ あいつらのいなくなった世界になんてなんの興味もありません。その時は、1秒でも二人に会えるように舌を噛み千切って死ぬでしょう」

ああ……こりや士郎さん引いてるな。まあ、そりやそうか。こんな奴、はたからみれば頭のおかしい奴だからな。でも、それでもいい。それだっつかまわない。

だから宣言しよう。士郎さんの前だけでは素直になれるから

「あいつらが死んだとき！俺の命はそこまで構わない！！」

長い長い、俺の独壇場のスピーチが終わる。気持ち悪い、犯罪者予備軍まっしぐら。訴えられたら勝ち目なしのスピーチが終わる。

士郎さんはなにも言わない。黙ったまま、目をつぶるだけだ。

やがて口を開く。その答えは

「やはり許可はできない」

先程と変わらないものだった。

けど、俺には落胆もなにもなかった。

「そうですか。だったら俺は」

「ただし。当人たちからの許可が下りればそれは仕方がないことだ。こちらとしては止めようがないからね」

「……は？」

「せいぜい、頑張るんだぞ。俊君。しっかりな」

士郎さんは謎の言葉を残して、俺の肩を2・3叩くと道場を後にした。

そんな中、俺は一人ポツンと残された道場で呟いた。

「……許可……下りるわけないじゃん……」

八神はやてはおもむろに口を開いた。それは関心なのか、感嘆なのか嘲笑なのか落胆なのかわからなかったが、とにかく口を開いた。

「自分の恋愛面のことになる、性能とかその他もろもろ一気に落ちていくヘタレキング代表のくせに二人がいけないときにはこんなに見えるんやな……。まあ、二人ともいたわけなんやけど。それで？　なのはちゃんとフイイトちゃんはどうすんの？　まあ、もちろんあいつを連れていくなんて選択肢はないと思うけど」

こんな気持ち悪い男のストーカー気味で危ない発言をした後で、ついてきていいよ、なんてことはいくらなんでも言わないだろう……。そう思いながら二人のほうを見たのだが、

「ま、まあ……。あそこまでいうなら……。連れて行ってあげてもいいかな？」

「そ、そうだね……。幼馴染が死ぬのもなんか嫌だしね！」

「そ、そうそう！　私たちのせいで死なれちゃ困るもんね！　うん、これはいわば人命救助だよ！　時空管理局の局員としては当たり前のことだよね！」

「……………え？」

二人の親友の反応はとて予想外なものだった。

視線はまったく定まっておらず、あちらこちらに目を移し顔は若干先程よりも赤く、手なんか指を絡ませている始末。

どこかよかったのか？　先ほどの男の独りよがりのスピーチのどこが良かったのか？　あいつの気持ちは知っている。だけど、正直言ってあそこまで言い切ってしまうと一般人の常人の感覚からすれ

ばちょっと引いてしまつわけなのだが……

「る、留守番の犬くらいはできるだろうしね！」

「そ、そうそう！ 留守番の犬くらいはできるね！ あくまで犬だけどー！」

二人はまったく引かずにいた。

どうしてこうなった？

そんなとき、はやての腕をヴィータがちょんちょんとつつく。首をひねるはやてにヴィータは全てをわかつているような顔で言った。

「やっぱり女の子はうれしいもんだぞ。 あそこまで言ってくれと。 若干犯罪チックだけど」

そのヴィータの答えに、はやては首をひねるだけであった。

そして隣で打ち合わせをしてる二人を見て思う。

またミッドでもあいつの世話をすることになるのか……と。

当日、私たちは高町家に集まってからミッドに行くことになった。

アリスちゃんにすずかちゃんも駆けつけてくれた。 もつべき者は友達である。

私達はそれぞれ言葉を交わしながら、楽しく喋っていた。

その傍らで、彼だけがぎこちない笑みを浮かべていた。

「どうしたの？ 俊くん」

「いや、なんでもないよ。 これからの新天地では大変だろうな
……」と思つてさ

確かに彼の言うとおりにこれからとても忙しくなるだろう。 なん
せ、仕事と同時進行で家事もしていかなければならないのだから。
けど、それはとっても難しいことで、仕事で疲れたフェイトちゃ
んと私ではできないかもしれない。

「確かに家事は大変だよね。 手だつてただれるだろうし、洗濯
だつて毎日しないといけないんだから。 仕事と同時進行はきつそ
うだねー。 ねえ、フェイトちゃん？」

「うん、きつそうだよね」

そばにいたフェイトちゃんが同意する形で頷く。

「でも……しょうがないだろ。 家事だつて洗濯だつて誰かがやら
ないといけないんだからさ。 頑張つて二人で分担しながらやるし
かないだろ」

「え〜……でもなんか嫌だー」

「うん、私も家事とかしたくないかな。 お仕事だけに専念したい」

「まあ、その気持ちはわかるけど」

「だから」

さらになにか言おうとする彼の手をフェイトちゃんと二人、握りしめながら言った。

「私達と一緒にきてくれない？」

「……………ほわい？」

「だーからー、一緒にきてもいいよ、ってこと！」

状況を呑み込めてない彼に、私とフェイトちゃんは若干声を大きくして言った。

「……………ほんとに？　ほんとにきてもいいの……………？」

「ま、まあ……………死なれても困るしね。あくまで死なれたら困るから、私とフェイトちゃんは連れて行くことにしたんだからね！　そこ勘違いしちゃダメだよ！」

「う、うん……………」

「絶対だよ？　私やフェイトちゃんが違う理由で連れていく、なんてことありえないからね！」

「お、おう……………」

そしてその30分後、私達はミッドの家に行くことになったのだ。

これが、彼が家にいる理由である。

「なのはママ!? フェイトママ!? タイルに頭打ち付けたらとつても痛いよ!?!」

「うわあああああああああん! 今まで封印していた私の黒歴史がああああ!」

どうしてあのとき、あんな発言をしてしまったのだろうか? いや、べつに彼が来るのはよかったのだが……それにしてもあんまりなセリフではなかったか? これでは、まるで

「私が俊くんのこと好き、みたいなことになっちゃうじゃん!?!? いま流行のツンデレみたいじゃん!?!?」

「うー……なんであるとき、もうちょっと考えて発言しなかったんだろっね……」

あの時、あの場所で、あの場面を見なければ、彼が此処にくることはなかっただろう。いつもはダメダメで、でも極稀に真面目になって、日常的にセクハラ発言するのに、肝心なときには全くといっていいほど言ってくれない。魔導師じゃなく、魔法使いの彼。あの場面はいまにもレイジングハートの中に入っている。フェイトちゃんもバルディッシュの中に入れてほしい。あんなことを言ってくれた彼だから、私もフェイトちゃんもまだ家に置いてあげてるんだよ? 本当なら追い出しているのに。でも

だからこそ、鼻の下伸ばしてはやてちゃんの誘惑に耐えれなかった
罪は重いよね？

34・彼が此処にいる理由（後書き）

笑顔にする方向性が間違っているとしかいえない。

そして掘り下げれば掘り下げただけ犯罪者へと近づいていく。ど

うしてこうなった。

ツだとむしろはいた後のほうが価値が出てくるんですよ。これが下着の魅力ですね！」

「どうでもいいから、振り回して遊んでないで返してよっ!?!?」
この世界に上司の下着で遊ぶ部下がいるのっ!?!?」

近寄って下着を取り返す。 いや、なんで上目使いで服を脱ごうとしているの? ティアの中では下着を奪い返すとokのサインなの?

「ところで、二人ともよくきたね。 まだ呼んでないのに」

お風呂に入った後に電話で呼ぼうとしていたんだけど……もしかして誰かが連絡していたとか?

「あ、そろそろお食事会の誘いがあると思って勝手にきました」

「うちにたかるのやめてくれないっ!?!?」

下着を身に着け、衣服をちゃんと着替え、皆が待っている大きな畳部屋へと私達はやってきた。

「おー、なのはちゃんたち。 もう出来とるで。 あとはこれを並べるだけや」

エプロン姿のはやてちゃんが茶わん蒸しを置いて席につく。

「え〜っと、それじゃ私達は」

周りを見渡す。 ウーノさんやスカさん、交番のおじさんにエリオとキヤロ、ヴィータちゃんにシグナムさんにシャマルさんにザフィーラさん。 みんな並んで座っており空いてなさそう。

「あ、スカさんだ〜！ わーい！ スカさ〜ん！」

「おお……ヴィヴィオ君。 また会うことができうれしいよ……」

「ん〜？ スカさんどうしたの〜？ 元氣ないよー？」

「いやなに……私が開発に成功したメダ ットを一管理局員に指一本で壊されるとね……。 やっぱり、科学者として心に傷が……」

「安心しいや。 おじさんは奇人変人が多いここらへんの担当やで？ 戦闘能力もズバ抜けとるで」

「……なら何故、ミッドでおまわりさんなんかを……？」

「逆に考えるんや。 そんな戦闘能力が高い人を配置しないとけないほど、ここらへんの奴らは手強いんよ」

「いったい、私たちの住んでいるここらへんの近隣は魔窟か何かなんだろうか。」

「まあ、魔窟なんだろうけど。」

「それはそれとして」

「ねえ、フェイトちゃん。 席が彼の横しか空いてないよ？ ぞ、ぞ、ぞ」

どうする?」

「ま、まあ、行くしかない……よね」

先程自分の黒歴史を思い出したのでかなり恥ずかしかつたのだが……これはしょうがない。席が空いてないなら彼の隣に座るしかないわけで、べつに彼なんかどうでもいいけど、しょうがない彼の横に座る。

ちょうど、彼を挟んで私とフェイトちゃんが座っている状態だ。これもしょうがない。私とフェイトちゃんが隣になると怪しい噂が飛び交うのでしょうがない。

「よっし! みんな席についたねー! それじゃ、かんぱーい!」

『かんぱーい!』

フェイトちゃんが乾杯の音頭を取ると、みんなもあらかじめ用意されていたグラスを手に取り隣の人なんかとカチンツと合わせていく。

「それじゃ、フェイトちゃんかんぱーい!」

「かんぱーい!」

彼の目の前でフェイトちゃんとグラスを合わせる。彼はずっとキョロキョロと辺りを見回していた。

「あいつはどこのキョロちゃんなんや。いくらなんでもキョロキ

「ヨロしすぎやで」

「というか、あの人あんなキャラでしたっけ？ キャラがブレブレじゃないですか？ ナックルボール並みにブレてませんか？」

「あいつ真剣真面目な雰囲気だと戦闘力5のゴミになるしな。いつもの53万くらいなのに一気に5になるしな」

「なるほど。 銀河の不動産屋から一気にランクダウンしますね」

「高校時代はヘタレキングと呼ばれていた」

「ヘタキンですか。 なんか霊とか呼び出せそうですね」

「悪霊くらいしかこんと思うけどな」

三人の動向を見守りながら、ティアと二人で話す。 うーん、自分で作ったからかもしれないけど茶わん蒸しがなかなかの美味だ。

「それにしても、ひよっとこさんって料理や家事とか得意なんですよね？」

「まあなー。 なかなかうまいもんやで」

「それじゃ、その力をなのはさんとフェイトさんのために役立てたいから、仕事をしないんですか？」

「いや、面接で全て落とされる」

ティアの顔が歪む。 あいつに限って、そんな美しい話になるわけ

ないやる。第一、家事は午前中に終わらせることができる。つて豪語してたのあいつやから、ただ単に仕事先がないだけやな。

「まあ、あいつは『変態的キチガイ病』やからな。社会もそんなに甘くないで」

六課の部隊長が『社会は甘くない』と語ってもそこまで説得力はないのだが。

「ただまあ、なのはちゃんの実家である喫茶店翠屋ではちゃんとバイトしてみたいやね」

あれも確か士郎さんがいたからだった気がする。なんというか……あいつは高町家の犬なのではないかと疑いたくなる。

「はあ……色々と可哀そうな人なんですな」

「とくに頭がな」

隣には、なのはとフェイトが座っている。先ほどまで風呂にいたせいだろう、ほのかに香る石鹸の香りが鼻孔をくすぐってしょうがない。

けど、このままでは埒があかない。

「な、なあなのはとフェイト？ その……さっきのことなんだけども……？」

「ああ、誰かさんが鼻の下伸ばしてたやつ？」
「関係を修復できそうにない。」

ここからどうすれば、あの関係に戻れるんだ。

「いや、あれは……だから……アレだよ。誤解なんだ」

「へー、そうなんだ。でも、はやてちゃんみてニヤニヤしてたよね？　もしかして、はやてちゃんがタイプなの？」

「それはねえわ」

前のほうからフォークが飛んでくる。だが甘い！　それを予測していた俺はすかさず顔をずらし　小さい魔力弾を喰らった。

「おう……おう……！？」

たまらず顔を押さえ、土下座の体勢で痛みが引くまでまつ。　なんともんぶつけやがるんだ、あのポンポコ女！

「だ、大丈夫！？」

「だ、大丈夫……。もう、アレだから。全然平気だから。べつに泣いてないよ？　俺泣かせたらたいしたもんだから。あ、まっつて、タンマ。そこ、魔力弾を展開させない」

ヴォルケンやスバルやティアなどが魔力弾を展開させていたのでやめさせる。　どういう神経してたら俺に魔力弾をぶつけようと思うんだ。

「そういえばさ、この蕎麦1から作ったんでしょ？」

なのはが聞いてくるので

「まあなー」

明後日の方向をみながら返事を返す。

「ふーん」

なのはも力ない返事で返した。

会話終了

これが恋人なんかだと、そのあとに『おいしいよ』なんて言葉があるんだろうけど、そこはほら。あるわけないじゃん？ 言ってる悲しくなるけど。

ふとみると、なのはとフェイトがもじもじでした。……もしかしてトイレ？

「あ、二人とも。 トイレなら」

「「その……お蕎麦、おいしいよ」「

「僕の口にかけてください」

また症状が発症した。しかも今回は一人称が俺から僕に変わるといふなかなかの力である。

そして二人は、なんだかもう……いますぐにでも俺をぶち殺しそうなほど睨んでいた。

「いや、違うんだ。 違わないけど違うんだ。 確かにそういったプレイもしてみたいけど、いまは違うんだ。 もっと具体的にいうのであれば、トイレを清掃中において二人が漏らすか漏らさないかの瀬戸際を楽しみたい、なんて欲求もあったりするけど違うんだ」

正直、捕まってもおかしくないと思った。

二人は無言で立ち上がった後、立ち去り際にビンタを一発づつかまして、はやてたちの輪の中にはいっていく。

……まあ、悪いのは俺だよね。

35・最後はサツパリと(後書き)

サクッと終わらせる

36・脱・無職

怒涛のような一年が過ぎ去った　気がする。　まあ、実質一か月とちよつとしか過ぎ去ってないわけなんだけど。

俺はいまだに無職を続けている。　まあ、俺みたいな人間を雇ってくれる酔狂な人物なんていないだろうからそれはいいんだけど、いま俺の目の前で起こっている出来事を見るならばそろそろ本格的に仕事を見つけないければと思ってきた。

「へー、『幼馴染と結婚！　二人の純愛に乾杯ッ！』かー。　素敵だねー、この二人」

「ほんとだねー。　さぞかし素敵な幼馴染だったんだろうね。　お金もあって優しくて甲斐性があつて。　やっぱり……幼馴染ってすごいな。　この人、お嫁さんのために一生懸命頑張ったらしいよ」

大好きなのはとフェイトが雑誌をみながらそう呟く。　それは本当に二人だけの会話であつて、声量も俺に遠慮してくれているのかとつても小さかつたわけなんだけど、

「が……は……ッ!？」

無職で金なくてキチガイで甲斐性もない幼馴染には痛恨の一撃だった。　即死系の技にもほどがある。

「きゃあー!?!　どうしたの、いきなり吐血なんかしてッ!？」

なのはが駆け寄ってくる。

「いや、ちょっと……いま銀行強盗のプランを練ってて……まっ
てね。君たちに素敵なプレゼントを用意するからさ！」

「いやいやいやいやっ!? そのプレゼント絶対に君の保釈金
の手紙だからっ!」

あ、捕まったら保釈金払ってくれるんだ。それはそれで嬉しいか
ぎりです。

「あ、なのは! もう仕事に行く時間だよっ!?!」

「え、ほんとっ!?! それじゃ仕事行ってくるから、捕まっちゃダ
メだよっ!」

「善処する!」

この会話が世間一般的にみてズレているのは承知である。

「さて、ヴィヴィオ。 って、ヴィヴィオく?」

さっきまで俺が貸したゲームで遊んでいた小さな姫君は、ちょっと
目を離れた際に見失ってしまった。だが、もうそんなことで慌て
る俺ではない。

「ヴィヴィオの体から発せられるフェロモンをたどっていけば……」
ヴィヴィオのフェロモンを頼りに庭へと出ると、ヴィヴィオがしゃ
がみこんでいた。

「おいヴィヴィオっ!? どうした!? 気分悪くなったのか!？」

「あー、お兄さん! ほら! なんかネコさんみつけたよー!」

慌てて駆け寄る俺に、こちらを向いたヴィヴィオはお日様のような笑顔を浮かべながら、なにかを俺にみせてきた。それは又イグルミのようであり、色は白、確かにネコと言われればネコだが、ちょっと違うような気もする。なんだ、これ?

俺がヴィヴィオの手からその物体を受け取ると、

「やあ、キミがこの子の親なのかい? ボクはQべえ。さっそくだけど、この子を魔法少女にしたいんだ。どうか君からも言っ
てあげて」

「ほおおおおおおおおおっ、わちゃあー!」

渾身の力で、腰を使って、腕にうねりを加えて、喋るネコもどきを庭に叩きつける。

めり込む物体。 喜ぶヴィヴィオ。 冷や汗を流す俺。

やがて額の汗をぬぐった俺は、ヴィヴィオに向き直って目線を合わせながら言った。

「ヴィヴィオ、いまの見なかったことにしよう。 な?」

「え? なんでー?」

「あいつに絡まれると厄介だから。もう、なんか色々とメンドイことになるからさ」

「はいー！」

ヴィヴィオの聞き分けがよくて本当に助かった。

「ああ、そういえばヴィヴィオ。いまからはやてお姉ちゃんの所に行くぞー」

ちよつと用事ができてしまった。これははやてにしか頼めない用事である。

「えー？ お仕事じゃないのー？」

「大丈夫。たぶんゲームかパソコンしてるから」

こうして俺とヴィヴィオは、ミッドにあるはやての家に行くことになった。

「はやえもん。僕に職を恵んでください」

「シヤマル、塩」

「はい」

「まって！？ 俺の話聞いてからにしてー！」

予想通りはやては家でパソコンをしていた。といっても、なんか書類をしているみたいだったが。俺はそんなはやての目の前で土下座をしながら職をくださいと叫んでいた。

家の中心で職探しを叫ぶ

まったくもって意味がわからない。

ちなみに俺も親として、ヴィヴィオにこの姿を見られたくないと思
い、ヴィータの部屋で遊ばせている。あの二人が隣に並ぶと姉妹
のようでも可愛らしい。そうヴィータにいたら『きめえん
だよ、ロリコンが』と唾を吐かれながらいわれた。お前の貧弱ボ
ディーには興味ねえよ。

「まあ、とりあえず理由を聞こうか」

はやてがテーブルにヒジをつきながら女王様のように、俺を見下す。

「あの……俺には椅子ないの？」

「ほしい？」

「うん」

「ほら、ここに空気があるやろ？」

「誰が空気椅子が欲しいと聞いたっ!？」

なんなの、この子。まじでなんなの。

「まあ、アレだよ。ほら、俺ってば、シャイボーイじゃん？」

「ヘタレやな」

「シャイボーイね、シャイボーイ。ジャリボーイでもいいよ。

俺はなのはとフェイトが好きなのよ。けど、どんなに好きでも言ってるだけじゃダメだと思うんだ。やっぱり行動したほうがいいと思う。けど俺には金がない。はじめは銀行強盗も考えたけど、二人に迷惑はかけたくないんでやっぱり地道にバイトしようと思った。まあ、モノで釣るのはよくないと思うけど、目に見える形で感謝の気持ちを現したいんだ。だからこそ、俺はプレゼントを買って二人のお礼を言いたい」

「ほんで？」

「バイト紹介してください」

はやてが溜息をついた。後ろにいたシャマルさんも困った顔を浮かべている。あれ？二人ともどうしたんだろうか？

「ま、まあ……少しは成長したみたいですから。はやてちゃん、ここは協力してあげても」

お、シャマル先生良いこといった！

「うん……まあ、そうやな。こいつがバイトをするだけでも海鳴にいる人も私達も少しは安心するか。よし！お姉さんが一肌脱いだろ！」

「あ、できるならパンツだけずりおろした状態で、スカートはミニ服は下半身が隠れない程度の長さの服を着てくれるとうれしいんだけど」

「だれが本当に脱ぐっていった!」

はやて、この頃攻撃力上がってない?

ズレた顎を直しながら、そう思わざるおえなかった。

36・脱・無職（後書き）

ついにひよっとこが本気になる

37・ゲリピーはイントロピーを凌駕する

「腹が……とてつもなく痛い……」

はやえもんからバイトを紹介してもらおうように頼んでから二日が過ぎた。色々と俺よりもちゃんとした人脈があるはやえもんのことだ。きつと俺がそれなりにサボれてお金がもらえる仕事を探してくれているに違いない。でも、やっぱり一生懸命バイトして沢山金集めたほうがいいかもしれない。まあ、それはそうとしていまの俺は大変危険な状態である。なにが危険かというと主に腹が危険なことになっている。

それは朝のことだった。

俺が冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで飲んでいる途中、二階から降りてきたのはが言った。

『あ、その牛乳腐ってたよ。ヴィヴィオが飲もうとしてたから止めたけど。　　もー！　　ちゃんとしてよね！　　冷蔵庫の管理、キミの仕事でしょー！』

指を突き付けるのははそれはとてもとても可愛かったのだが、

「いまの俺にはその可愛さを楽しむ余裕が全くないわけで……」

もう30分はトイレにいるような気がする。このままではトイレのひょっとこさんになってしまう。　　七不思議として語り継がれて

「うん、がんばる……」

応援はとても嬉しいが、場所が場所なだけに顔を覆いたくなる。なんで俺は普通の場所では応援されねえんだよ。

やがて玄関から二人のそろそろとした声が聞こえ、ヴィヴィオの元気な『いつてらっしゃーい！』の声が聞こえた。ヴィヴィオは元気だな。俺の穴は騒ぎすぎて疲れているのに。

どうしたものか……そう思っていると、突然二日前庭に埋めたネコもどきが俺の前に立っていた。いや、しゃがんでいたのほうが正しいかもしれない。

「やあ、奇遇だね。こんなところで会うなんて。ボクとキミとは縁があるような気がするんだ」

「そうか。だったらお前も腐った牛乳飲んでこい」

とつかネコもどきは庭に埋めたはずじゃ？

「それは遠慮しておくよ。そういえば、キミがボクを埋めたところなんだけど、そのままだと庭が可哀相だからちゃんと元に戻しておいたよ。それでもボクは優しいほうなんだ。なんだったらキミの願いも叶えてあげてもいいんだよ？」

「それじゃ俺の下痢をかわってくれ」

「キミの願いはエントロピーを凌駕したよ」

「ゲリピーはエントロピーを凌駕するのか」

そりゃ学生がもつとも恐怖することだもんな、下痢。

「というか何しにきたんだ？ ヴィヴィオやなのはやフェイトに手出したらマジで殺すからな」

「そこは大丈夫だよ。ボクの対象はキミに移ったからね」

それはそれで嫌なんだけど。お前にかかると碌なことにならねえだろ。

「そもそも、ボクは間違っていた。魔法少女だからといって、少女にこだわることはなかったんだよ！」

「いや、こだわれよ」

男がやっても意味ねえよ。ゾンビ狩るしかできねえよ。

「だから、ボクはキミと契約を結ぼうと思っただ！」

「人の話聞いてた？」

我が家の姫様が被害を被るくらいなら俺が被害を被るほうがいいんだけどさ、トイレの中で叫ぶな。

「はいはい、考えとくよ」

嘘だけど

「それじゃダメなんだ！　ボクはいますぐキミと契約しないとダメなんだよっ！」

「えー……なんでそんなに焦ってんの？」

俺の問いにネコもどきは、首を項垂れながら小さくボソボソと喋りだした。

「ボク先輩にケルベロスのケロちゃん先輩っていう人（？）がいるんだ……。ケロちゃん先輩はとってもエリートですぐに魔法少女と契約して、大活躍。それに比べてボクは「紙とって」はいどろぞろ。それに比べてボクは、まったく違う魔法少女とばかり契約して……。ついにケロちゃん先輩に怒られちゃってさ……。だからボクは決めたんだ。ケロちゃん先輩を超えるために旅に出ることにした！　そしてボクはキミにたどり着いたんだ！」

「大丈夫大丈夫。それただの通過点だから、本当の終着点に案内してやるよ」

「ほんとうっ!？」

尻を拭き、流して手を洗いトイレから出る。　ただいま、そしてただいま。

「さて、お前が目指した終着点につれてってやるよ」

俺はネコもどきを抱き上げながら、ヴィヴィオとともに家を出た。

フエイトの手作り朝食を食べた俺は、ヴィヴィオと手をつなぎながらとある店にやってきた。

「猫井兔^{ねいこじゆ}さん。珍しい動物つれてきましたよ」

「あら、いつもいつもありがとうとおねえ、ひよつとこくん。あら、この娘が噂の女の子？」

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「えらいわねえ〜！ あいさつできるなんて！ なのはちゃんとフエイトちゃんの教育の賜物ね！」

緑髪をドリル風にし、年もそろそろ三十路まじかなのにもかかわらず、ふりふりピンクのスカートを履いているこの女性。この人の名前は猫井兔さん。ミッドでペットショップを営んでいる。猫のお姉さんの愛称で親しまれている（小さい子たちから）。

俺は抱き上げていたネコもどきを猫井さんに預けることに。

「ほら、ここがお前の終着点だ。あ、猫井さん。こいつは非売品のしといてくださいね」

「あら？ そうなのねえ。わかったわね」

まあ、誰かが間違っ買って買うと大変だしな。

「ねえねえ！ ヴィヴィオ、犬さん触りたい！」

ジャンプするヴィヴィオの頭をよしよしと撫で、俺はそのままヴィ

ヴィオと犬と戯れることにした。

『ちよつとまっつてっ!?!? このままじゃ、ケロちゃん先輩に怒られるよっ!?!?』

知らねえよ。

37. ゲリピーはエントローピーを凌駕する（後書き）

いままでで一番訳が分からなかったタイトルだと思う。
次回から、ひよっとこのバイトがはじまる予感がします。

38・ラブホテル・性王教会

はやえもんからバイト紹介の電話がついにきた。流石ははやえもん、頼んで5日目にはもうみつ付けてくれたみたいだ。やはりもつべきものは友達だな。

だが、ここでひとつだけ問題ができてきた。端的にいうのであれば、はやえもんが紹介してくれたバイトの名前がありえないほどに100%の確率で、18歳未満禁止の場所であった。むしろ俺は何故、どうして、どのようにして、はやえもんがこの場所に接点を持ち、この場所を用意したのか気になるところであった。もしも、それ相応の理由があるとするのなら俺ははやえもんを更生させなければならない。

一度深呼吸して、携帯に届いたメールをみる。

「……………」

うん、やはり何度読んでも

『バイト場所決まったで。性王教会や』

ラブホテルじゃねえか。

ミッドの道をバイクで飛ばす。性王教会の場所はミッドの北部に

あるらしく、歩いていくにはちょっと遠い場所である。ちなみに今回は俺一人。流石にヴィヴィオをラブホテルなんかには連れていけないし、そもそも俺がそんなところでバイトなんかできるはずもなく（なのはとフェイトの二人が怖い）はやえもんには悪いのだが、今回のバイト紹介は断るろうと思いついて、バイクを飛ばしているところである。いやはやしかし……はやえもんのことも気になるのでやはりどうしたものか……。

そんなことを思いながら飛ばしていくと、なんとも緑溢れる自然のいい場所についた。もしか、性王教会は野外プレイが一番人気なのかもしれない。

「……いや、でも……これ……ラブホテルっぽくはないよな……」

目の前には普通に教会が建ってあった。もしかこれもカモフラージュの偽造工作なのか？ ミッドの変態たちはどこまでエロに正直なんだ。だが、ここまで教会っぽいと

「あ、あなたが騎士はやての紹介できたひよつとこさんですね。はじめまして、私はシャツハ・ヌエラと申します」

「マップ・ヌーブラとは流石ラブホテルですね。もうなんか、エロトークが当たり前ですよ、って感じですね」

マップさんが青筋を立てて笑顔を浮かべている。もしか、この人はただの受付嬢だったのか？ いや、普通に考えて受付嬢だよな。いかんいかん、謝らなければ。

「すみません、マップ・ヌーブラさん。まだマップにもなっていないのに……挨拶なんかしちゃって……」

「どんな謝り方なんですかつ!? 私はシャツハです! マッパではありません!」

「え? でも、ここってラブホテルじゃ……?」

「……は?」

どうやら、俺とこの人ではかなりのズレが生じているらしい。

「いや、だって、はやてから“性王教会”だと教えられたんですが……」

「ええ、此処は“聖王教会”ですよ? 騎士はやてからも、あなたが来ることを聞いております」

うん、だよな。 やっぱり、性王教会だよな。

「ちなみに、はやえもんいます?」

「騎士はやてですか? ええ、あなたを待っていますよ」

「部屋の番号を教えてください」

「え?」

「え?」

俺の言葉にマッパさん改めシャツハさんが困惑したような顔を浮かべる。正直、困惑しているのはこっちも同じだった。

友人である八神はやてがこんなラブホテルの人達とも知り合いで、あげくの果てには部屋で俺のことを待っているだなんて。 いや、後半にかけては最高なんですけど。 ほら、なのはとフェイトが怒るかもしれないじゃん。 というか、確実に追い出されるんだよね。

「まあ、とりあえず二人が待つ部屋へといきましょうか」

マツパさんが俺の手を引いて、性王教会へと入っていく。

いきなり3 とは……。俺のカルピスが枯れなきやいいけど。

「騙しやがったな！？ レズ女！？」

「いや、レズやないし。 騙してもないし。 ちゃんと聖王教会つて送ったやろ」

マツパさんと廊下を歩き、たどり着いた先は他の部屋の扉よりも一層綺麗な扉であった。 こんなところではやてが待ってるのか。 などなど思いながら、男として女を悲しませちゃいけないという義務もあり、ズボンをおろした状態で扉を開くと なんか見知らぬ人とはやてが普通に楽しく談笑していた。 裸とかじゃなくて私服で。 テーブルには紅茶をクッキーを置きながら。 なんかエロイ雰囲気なんて微塵もない状態であった。

そんな中、はやえもんは見知らぬ女性よりも一足先に俺に気付き

「なにしてんの？」

そう冷ややかな目で聞いてきた。

「いや……あの……ここ、アレだろ？ バイト先なんだろ？ 性王教会なんだよな？」

「そつやで、此処があんたのバイト先の聖王教会や」

「なんか教会つぽいよな。 ベットもないし」

「は？ だって、教会やで？ それに此処にベットとか意味わからんやろ」

普通に考えればそうなんだけど、なんせ此処はラブホテル。 そのラブホテルという枠組みからとらえればこの様子のほうがおかしい光景ではないのだろうか？

はやえもんテーブルを挟んで座っている金髪の女性に目をやる。

なんだかおっとりとしていてthe・お姉さんという感じである。

まさに教会で賛美歌なんか歌っていきそうだ。 ただまあ、こんな人でもラブホテルにいるのだから世の中とはなかなかどうして……わからぬものである。（こんなでたらめな嘘を並べている俺が言えた義理じゃないけれど。）

「……はやえもん、一つ聞いてもいい？」

そろそろ、なんとなくだけでも、此処がもしかしたらラブホテルじゃないということ懸念がでてきた。 ので、早速頼れる女、はやえもん聞くことに。

「此処、ラブホテルじゃないの？」

そして、あのセリフへとつながるのである。

「ごめんな。なんかわたしとコレとでちよつとした手違いがあつたみたいや」

「いえ……それはいいのですが……あの人、大丈夫なんですか？」

「まあ、頭は大丈夫やないけど。そこそこ使えると思うで」

正座しながら二人の話を聞く。はやえもんの話によると、性王教会の誤字は単なる打ち間違いらしい。お前はそもそも日常生活でそんなにメールに性を打つのか。と聞きたくはなるのだが……まあ、あいつのことだから日常生活で使っているのだろう。主にヴオルケンに向かって。

「えーっと、ひよっとこさんですね。はやてから話は聞いているのですが、なんでも幼馴染にプレゼントを渡したい……このことですが」

「ええそうなんですよ。なのはとフェイトとって言うんですけど、これがもうめちゃくちや可愛くて、なのはなんて鯉の中の鯉なんですよ。いわゆる鯉の王様なんですよ。いや、最近進化したので竜になりましたね。それにフェイトなんですが、これがまた可愛くって、もうなんとというか嫁にしたい女性No.1に輝くと個人的に思ってますよ」

「それで、此処にバイトにきたんですね？」

「はい。 けど、すっかりラブホテルと思ってまして……その、本当は断るつもりで来たんですよ」

「あははっ……。 ら、ラブホテル……ですか」

女性が冷や汗を流しながら笑う。 まあ、たしかにちゃんとした教会がラブホテルなんて思われてたらたまったもんじゃないよな。 そんなたまったもんじゃないことを、いま俺はさらりとぶちまけたわけだけど。

「え〜つと……それじゃ、どうします？ はやての紹介ですから、私達のほうはあなたを受け入れる体制はできているのですが」

なんともまあ、これはありがたい。 ラブホテルなんて誤解していた男を受け入れてくれるなんて。

だがここで俺はある問題に直面した。

ヴィヴィオ……どうしようか。

いや、誰かに預けるって選択もないことはないが……うん。 なによりヴィヴィオの姿をみれないのが俺の心に多大なダメージを与えるわけだし。

「すみません。 ちょっとしたお願いがあるのですが……」

そろりそろり……といった感じで手をあげる。 いやはや、どうい

えばいいものか。

「はい？　なんですか？」

女性は優しい笑みで、教師の真似事のように指をさしてくる。

「えっと　バイトに娘を同伴させてもよろしいでしょうか？」

女性の笑みが消えた瞬間であった。

39 バイト一回目

『ふむふむ……ひよっとこ君がついにバイトか。なんかさみしくなるね』

「アンタは俺の父親か」

『まあ、同士であることにはかわりないがね。それはともかく、ヴィヴィオ君はどうするのだい？ 私は君が無職で暇人だとばかり思っていたので、バイトをされるとヴィヴィオ君の面倒をみてくれる者が……』

「ああ、そのことなんだけどさ。バイト先の人がヴィヴィオも同伴していいよって許可くれたんだ。ほんと、話がわかる人だよな」

まあ、これもどれもなにもかもはやえもんのお陰なんだけどな。アイツにはいつかちゃんとお礼でもしようかな

さてさて、現在の時刻は午前9時。愛する二人も仕事という名の遊びに行き、愛しのヴィヴィオは隣でアニメを鑑賞中。アニメの中身は、頭にアンパンのつけたパンが自分の自己犠牲精神で自分の顔を引き千切りながらそれを他人食わせるという残酷な話だ。訂正、正義の英雄アンパンマンが人間の敵であるバイキンの親玉を倒すアニメである。俺も小さい頃になのはと二人で見てたのを覚えている。そしてなのはが俺に向かってアンパンチしたのも覚えている。あいつは忘れているかもしれないが、俺はいつまでも覚えているからな。

そして俺はというと、そんなアニメをヴィヴィオがみている横でスカさんと携帯でお喋り中。友達っていいな。

『ほう……ヴィヴィオ君も同伴していいところか。中々に緩い規制なところであるね。……面白い、私も同席しよう』

「いや……俺バイトしにいくんだったら。マジで人生かけてるんだって。遊びにいくわけじゃないんだよ？」

『無論、ひよつとこ君の邪魔はしないよ。私はヴィヴィオ君と遊んでおくからね』

ただ遊びたいだけじゃねえか。

性王教会改め聖王教会。これが俺のバイト先である。ミッドの北部に位置しており、昨日の説明によると次元世界でも最大規模の宗教らしい。そして“聖王教会”とあるように、なんでも“聖王”と呼ばれていた人物が実在するらしい。キリストみたいな感じだろうか？ にはともあれ、この聖王教会、何故そこまで次元世界最大規模の宗派にまで発展したかという点、ひとえに規制が緩い……というのが挙げられている。確かに宗教に属している身でありながら、規制が緩いつてのはいいな。そしてこの聖王教会。管理局とも良好な関係を築いているらしく、たびたび管理局の局長が教会へと足を運びにくるみたいだ。ほとんどはやえもんの受け売りだけ。

「さて……準備はいいかヴィヴィオ。バイト先、いわば俺の命を握っている人なんだから間違っても怒らせちゃダメだぞ？」

「うん！」

「スカさんも大丈夫？」

『ふむ……ここが聖王教会か……。ちょうどシスター服を生で見
ていたと思っていたのだよ！ あわよくば！ 私は修道服を持ち
帰るぞ！』

「まあ、持ち帰るのは勝手だが、後でウーノさんと謝りこいよ」

三回転半ひねりで教会へと逝くスカさんを見送って、俺はヴィヴィ
オと手をつなぎながら、店長ともいえる方。カリムさんの所へ向
かった。

『すみません、そこの方。 ちょっと、裏のほうでお話しを伺って
も？』

スカさんは兵士に連れられてその場を後にした。

三回転半ひねりで教会へ向かうという奇行を見過ごすはずがねえよ
な。

「あの……えっ……！？ ちょっと……！？ えっ……！？ ひよっ
とごさんの仰っていた娘さんってこの娘なんですか……？」

「ええ、そうですよ。 フェイトとの間に出来た子どもなんです。
なー？ ヴィヴィオ？」

「ちがうよー」

この頃ヴィヴィオが俺の言うことを聞いてくれなくなってきた。これが噂の反抗期というやつか……！　なのはとフェイトもしっかりとヴィヴィオを教育しているようで安心である。

ヴィヴィオは俺の手を離れ、金髪にヘッドバンドをしているカリムさんの所までトコトコと歩いていくと、

「こんにちは！　ヴィヴィオです！　お兄さんがお世話になります
！」

と、丁寧なお辞儀とあいさつを述べた。……なんだろう。年上として立つ立場がなくなってきたのだが……。　なのはとフェイトはちよつとヴィヴィオに真面目に教育をさせすぎているようで不安になってきた。　これでは俺の家での居場所がなくなってしまう。

カリムさんは、頬をヒクつかせながら、だけれども大人の対応で歌のお姉さんを彷彿とさせる笑顔を浮かべて

「こんにちは、カリム・グラシアです。　こちらこそ、お兄さんをお世話しますね」

なんだか会話がおかしいような気がする。　まるで俺がペットのようだ。　ところでカリムさんってガンダムにはのってないのかな？　教会の地下にガンダムがあったり。　でもイギリス代表候補生のようでもあるし……俺はいったいどうすればいいのか？

「そついえば、カリムさん」

「はい？」

「カリムさんって、ガンダムパイロットとかイギリス代表候補生とかにはならないんですか？」

「……えっ」

引かれた。思いつきり引かれた。具体的に言うならば、3歩後ずさりするほどの引かれっぷりである。これが惹かれっぷりならば俺はハーレム主人公になれたのに。

「ところでカリムさん。ヴィヴィオをみて驚いていましたが、どうしたんですか？　もしかして生き別れの妹とか？　それとも、誰かとの子ども」

「ひょっとこさん。そういった冗談は命を短くするので気を付けたほうがいいですよ？」

「すみません、マップさん……。全力を尽くします、セクハラの」

「いやいやいやっ！？　方向が間違ってますよっ！？　それに私はシャツハです！」

後ろから暗殺者よろしく俺の咽喉元にナイフを置いたマップさんに、若干かすれた声で返事をする。マップさんはわかってくれたのか、ナイフを仕舞いながらも律儀に突っこみまでしてくれた。なにこの職場。面白い。

マップさんと遊んでいると、ヴィヴィオに目を向けていたカリムさ

んがこちらに目を向けていた。それも真剣な表情で。

「……ひょっとこさん。この娘は、大丈夫ですか？」

「えーっと……質問が質問になってないみたいなんですけど。その、どういうことですか？」

頭のほうなら大丈夫だと確信している。俺の頭は既に終わっていると確信している。なんとも嫌な確信であるが。

「ですから……とにかく！ 大丈夫なんですか！」

……え？ なんで俺が怒られるの？ か、どうかはともかくとして、どうやらカリムさんはヴィヴィオのことが心配らしい。確かにその心配はもつともだと思う。なんせ連れてきたのが俺なんだから、これがなのはやフェイトが連れてきたんなら安心して任せることができると思うんだけどね。

「安心してください。ヴィヴィオは大丈夫ですよ。こいつの笑顔を見れば一発でわかると思います」

俺がそういうと、カリムさんは一度ヴィヴィオをみた後に何か呟いた。その声はまるで自分に言い聞かせるようで、まったくこちらまで声が届かなかったが、読唇術を心得ている俺にはわかる。カリムさんはこういったはずだ。

『……トイレしたい』

カリムさんはどれだけ我慢していたんだろう。あまり溜め込むのもよくないのだが、これは女性のデリケートな問題だ。深くは追

及しないでおこう。六課の面々の場合、話は変わってくるのだが。とくにいつもツンツンしているロヴィータ辺りに、『も、もう……漏れそうなんだけど……』とか言わせて、それでもトイレに行かさないうで置くとどんな表情を浮かべるのかとても見物である。

閑話休題

「それでカリムさん。俺の仕事ってなんですか？あまりできそうなのがあるとは思えないのですが……。それこそ、修道服を直すとかシスターをミスターに変えるとか。チップスターに変えるとかできないんですよね」

「女性を男性やお菓子に変えないでください。というかそれできたら人間の域超えてますよね？」

「いつから俺が人間だと錯覚していた？」

「なん……ですって……!？」

「カリムさん。死神バトルマンガ読んでるんですか」

「いやっ、これはその……!？えっと、私は教会から週3の割合でしか外へ出られなくて……」

「結構出てますよ、それ」

「その……ほとんど……マンガを買いにいくんですよ」

「照れられても困るんですが」

いいのか、聖王教会。 トップが週3の割合でマンガ買いにいつてるぞ！ お前らそれでいいのかっ！？

閑話休題

「それで、仕事のお話に戻りますが。 ひょっとそこさんには聖王教会の清掃をやってもらおうとおもいます」

「あ、俺でもできそうな簡単なお仕事ですね」

「終わったらシャツハが順々に見ていく予定となっております」

まあ、軽い検査くらいならどうとこといことは

「なお、シャツハの確認方法は顕微鏡を使つての検査となります」

「なにその検査っ！？ どう足搔いても絶望じゃねえかっ！？」

鬼姑もビツクリだよ。

「ええ冗談です。 姑のように血眼になってホコリを探すだけです
から」

「はっはっは、カリムさんも冗談がうまいですね〜！」

「……………」

「か、カリム……………さん？」

「……………え、ええ。 もちろん、冗談ですよ……………」

「だったらなんで顔を背けるんですかっ!？」

さて、ここからが俺のバイト一回目である。 ヴィヴィオが来てからひよっとこのお面は極力つけないようにしていたのだが、いざつけてみるとやはり落ち着く。 さかなクンがさかなを乗せているのが正装であるように、俺の正装はひよっとこのお面のようだ。 なんとなく安心する。

「それではひよっとこさん。 今日には廊下の掃除をしてもらいます」

「まあそれはいいんですけど……。 ヴィヴィオ？ カリムさんと一緒にまってるんじゃないかな？」

「いや〜！ ヴィヴィオも遊びたいー！」

遊びじゃないんだけどな……。

「ヴィヴィオ？ お兄さんはこれからお仕事しないといけないんですよ。 スカさんみたいに三回転半ひねりとかして遊んでる場合じゃないの」

……：そういうえば三回転半ひねりして華麗な退場を決めたスカさんは今頃何をしているんだろうか。 ウーノさんが溜息を吐いている光景が目に見えかぶ。

「お仕事お？ どんなお仕事するのー？」

「お掃除だよ、お掃除」

「お掃除するの？ ヴィヴィオもする！」

「だめ」

「あう……」

両手を上げて、“掃除するアピール”をするヴィヴィオ。俺はそんなヴィヴィオのなんとも健気で可愛い要望を却下することに。却下されたヴィヴィオは、上げていた両手をゆっくりとおろし、目に涙をためながら俺の方を見つめる。目が物語っている。

『だめ？』

と。小さい女の子の、それもなのはとフェイトと同じくらい可愛いヴィヴィオの頼みは俺だって頷きたいところであるが……それはいくらなんでも都合が良すぎる。これがミッドの知り合いの店ならどうとでもなるのだが。

ヴィヴィオの同じ目線まで膝を折り、ゆっくりと喋ることに。なのはやフェイトのようにゆっくりと優しく話しかけることを心掛けて。

「あのな、ヴィヴィオ。お兄さんはいまからバイトをすんだよ。

此処を一生懸命お掃除して、その報酬をしてお金をもらうんだ。ここまではわかるか？」

「うん……」

「よっし。それで、お兄さんはいまから一生懸命バイトすることになったんだ。だから、ヴィヴィオがいると」

「……ヴィヴィオ……邪魔なの……?」

「ヴィヴィオも一緒にお掃除するか?」

「うん! ヴィヴィオもする!」

たまにはヴィヴィオと一緒に掃除するのもいいよな。うん、べつにヴィヴィオが泣きそうだからとかの理由じゃないから。ただ、ちよつとだけヴィヴィオと掃除したくなっただんだ。

喜ぶヴィヴィオの頭を撫で、マツパさんと向き合つ。

「え〜つと……その……ヴィヴィオもよろしいですか?」

「ええ、かまいませんよ」

マツパさんはとても慈愛に満ちた、まるで自分の子どもの成長を喜ぶ母親のような笑顔でこちらをみていた。

「ははっ……。 すいません」

「ふふっ、よく懐いているようですね」

「そりゃ家族ですから」

家族。改めて口に出すと、なんともこっぴどく思えてきて頬が若干赤くなる。

「お兄さん、お顔真っ赤だよ？ どうしたの？」

「なんでもないよ。ほら、ヴィヴィオもお掃除するんならこのメイド服に着替えておいで」

「はい！」

トタトタとメイド服をもって手近な部屋へ入るヴィヴィオ。

「……あの、どうしてメイド服が懐から出てきたんですか……？」

「それは聞かないお約束ですよ」

さてさて、ヴィヴィオも私服からメイド服へとメタモルフォーゼして、ついに俺らは本当に清掃をはじめた。といっても、仕事自体はなかなかシンプルでありモップで床を往復したり、箒でゴミを掃くくらいなものである。ヴィヴィオもこの作業にすぐに慣れそして飽きた。

「お兄さん、あそぼー！」

「だーめ。ここを終わらすのが先だ」

「うー！」

俺の足をぼかぼかと叩くヴィヴィオ。はっはっは、かわゆいやつめ。

それにしても、ヴィヴィオはあっさりと飽きてしまった。個人的にはもうちょっとだけでもつと思っていたのだが……やっぱり子どもだな、なんて実感させられる。

そういう俺もこう単調な作業ばかりだと飽きがくる。掃除も6割ほど終わったのでここらでヴィヴィオで遊ぶことにしよう。

「まあ、確かにこう単調作業だと飽きがくるな」

「えっ！？ それじゃ遊ぶの！」

「でも、何して遊ぶ？ 二人だからしりとりとかしかできないぞ？」

「うん！ いいよー！」

「それじゃあ……リン！」

「えーつと、えーつと……」「ミミ虫ー！」

「……し、しまつま」

「えーつと、マダオ！」

「……お酢」

「スチール缶のように軽い男！」

「……」「アラ」

「楽しんで生活しているヒモ男！」

「ちょっとまってヴィヴィオ。そんな言葉の数々をどこで覚えてきたの？」

おかしい。色々とおかしい。具体的に言うと、ヴィヴィオがこんな言葉を覚えているのがおかしい。誰だ、愛しいヴィヴィオにこんな言葉を教えたのは。

そんな俺の胸の内を知ってか知らずか、ヴィヴィオは笑顔でこう答えた。

「えつとね！　なのはママとフェイトママ！　全部お兄さんなんだつて！」

「へー……そうなのか……。　なのはとフェイトがねー……」

あの二人が普段俺のことをどう思っているのかがわかる有効な時間であった。

バイト始まりから3時間。　指定された場所の掃除が終わったわけだが……やはりここは好感度upをはかって他の場所もしたほうがいいかな？

なんてことを思いながら、ヴィヴィオと二人床に座って頭をひねりながら考えていると、コツンコツンと床を鳴らしながらマップさんがやってきた。

「ども、マツパさん。　とりあえず指定された場所は終わりましたよ」

「シャツハです。　今度間違えたら首折りますよ。　それにしても結構お早いのですね。　普通はもう少しかかるはずなんですけど…」

「俺は普通じゃないですしね。　それに掃除なら毎日家でやってますし。　そこそこ自信はありますよ」

「ふむ……どれどれ」

俺の話聞いたマツパさんは、床に正座で座り八チミチを壺から取るように指で床をなぞる。　ちよつとだけエロスを感じる。

指でなぞったマツパさんは、その指をじっくりと見て

「うん！　これならこれから掃除を頼んでも大丈夫そうですね！」

と、許しをくれた。　よかった、顕微鏡で見られなくて。

「ヴィヴィオも頑張ったよー！　えへへ、えらい？」

「ええ、とつてもえらいですよ！　よく頑張りました！　あ、お礼にアメあげます」

「わーい！　みてみて、お兄さん！　アメもらったよ！」

「よかったな。　ちゃんとお礼いうんだぞ」

俺の言葉に頷いて、ヴィヴィオはマツパさんに頭を下げる。マツパさんはそんなヴィヴィオの行動が可愛くてしょうがないのか、執拗に頭を撫でる。……俺も息子も執拗過多で撫でてほしいものだ。

「あ、ひよつとごさん。昨日の部屋にきてください。そこでお話があるようですから」

マツパさんに連れられてまたしてもカリムさんのところに行くことに。

コンコンとノックしてカリムさんの返事をまつ。

『あ、はい。ひよつとごさんですね。どうぞ入ってきてください』

「いつから俺がひよつとごだと錯覚していた」

「なん……ですって……!?!」

いつまでやるんだ、このくだり。

「そういえば、ひよつとごさん、ひよつとごのお面つけてますね。似合ってますよ」

「お面に似合ってるものにもあるんですか？ でも カリムさんのような綺麗な人に言われると、嬉しいですね。カリムさんも似合ってますよ。その金髪に綺麗なドレス。まるで有象無象のゴ

「ミの山から出てきたまばゆい光を放つダイヤのようだ」

「そ、そんな……。もう……照れちゃいます。でも、そう言っ
てもらえたのははじめてで……。あ、あれ？ やだ、私ったら顔
が熱く……」

「可愛い人だ」

「あっ……ダメ……！」

「楽しいですか？ ひよっところさん」

「それはもう」

「……辛くなったら、いつでも此処に来てくださいね。私はあな
たの味方ですから」

幼子を抱くようにカリムさんに抱かれた。味方を得たと同時に何
かを失った気がしないでもない。もともとそこまでもってないん
ですけどね。それにしてもカリムさんはとてもいい匂いがする。
なのはやフェイトほどではないが、クラクラと脳を犯すような刺
激をうける。夜に会ったら暴走するかもしれない。

「ところで、俺に何の用ですか？」

いつまでたってもカリムさんは俺を抱きしめてそうなので要件を聞
くことに。

カリムさんは、ハッと何かに気付いたように俺から離れた。……
おいしいことをした。あと一秒ほど時間があれば完全に完璧にカリ

ムさんの匂いとサイズをインプットできたのに。

「そうそう、ひよっとこさん。あなたの給料のことでお呼びしたのです」

「ああ、確かに給料のことは大切ですよ。俺もこれはシビアにいかないよ」

まあ、俺がシビアになったところで何も意味はないわけだけだが。

カリムさんは頷いて、指を一本たてた。

「これでどうでしょう？ 一応、はやてとは月一の契約なんですけど」

はやては俺のマネージャーか何かなのか？

「一万ですか。無理を承知でお願いしたいのですが、せめて五万に」

「あ、いえ。十万という意味ですよ？」

「結婚しよう、カリムさん」

「お断りします」

カリムさんはビックリの早さで即答した。もう少し具体的に言うのなら、“結婚”という単語が出てきた瞬間にカリムさんは“お断りします”と言い放った。実質、俺が言い終わると一緒のタイミングでカリムさんも言い終わった形だ。そこまでして俺と結婚し

たくないんですね。

まあそれはおいといて、

「週何で働けばいいんですか？ 基本的に午後からならあいてますけど」

午前中に家事を終わらせて、午後からバイトなら問題ない。

「そうですねえ……一応、週4〜5を予定してます。全部平日で」

「まあ、月10万ならそれくらいじゃないといけませんよね」

勤務時間的にそれでも足りないくらいなただけど。

「内容は今日やってもらったのと変わりません。基本的に掃除で、あとは細々とした誰にでもできる雑用をやってもらいますね」

「わかりました」

カリムさんの言葉に頷く。掃除と雑務なら俺でもできるし、これで月10万ならそこそこの貴金属だって買える。ヴィヴィオにだって何か買ってあげたいし、これから頑張るか。

そのあとは、俺とカリムさんで取り留めもないアニメや漫画の話をしてヴィヴィオと二人で教会を後にした。

その途中

「あ、ウーノさん。スカさんの引き取りですか？」

「ええ。 まったく……あの人は何がしたいんだが」

「発明のストレスでもたまってるんじゃないですか？」

「あー……確かにありそうですね」

苦笑するウーノさんに一礼して、俺とヴィヴィオは今度こそ教会を後にしたのだった。

40・おっさん、事件です！

バイトをはじめてから一週間が経った。仕事にも慣れ（といって掃除なので、慣れるもないのだが）聖王教会の人達ともコンタクトを取る機会が増えたりと、順風満帆とんとん拍子で仕事場との距離も詰めることとなった。中でもマツパさんとカリムさんはヴィオの面倒をよくみてくれ、なおかつヴィオもそれに嫌がることなく逆に嬉しそうに遊んだりしているので、俺としても仕事に集中できた。二人には本当に感謝しっぱなしである。

現在俺は聖王教会の図書室にいる。いや、流石に図書室というと幼稚になるから……書庫とでも言い換えようか。広さとしては学校の図書室と大差ないし、書庫と呼べるほどのものではないのだが。しかしながら聖王教会だけあって扱っているものが違いすぎる。ざっと見た感じ、古代ベルカのことについての古文書なんか沢山あった。今日の俺の仕事はその古文書やらなんやらのホコリをとったり、渡された紙のとおりの本を並べていたり……と、あんがい簡単なことである。ちなみにヴィオは小さなテーブルで家から持ってきたマンガ（俺のものである）を一生懸命読んでいる。（その隣にはヴォルケンで一番まともかもしれない人がいるので安心だ）読書をするのはいいことだ。それがマンガであろうと、かわらない。そう思いたいものだね。

まあ、それはいいとして

「どうしてお前がいるんだよっ！ 仕事はどうした、仕事はっ!？」

「大丈夫。うちの部下たちは優秀やからな。そして六課の仕事もそこまでないし」

「それが異常なんだよっ！　なんでお前ら仕事ないのっ!？」

「うーん……萌え担当やからかな？」

「……前から思ってたけど、お前ら異常だよな。　並行世界のおまえらブチキれるぞ」

「戦いとか面倒やで。　アンタもよく言ってたたる？　『戦うこと自体が何かを失うことだからダメ』だって」

「……そんなこと言ったかな？」

「言ったで」

最近物忘れが激しくて覚えていない。　うーん……言ったような気がしないでもない。　……いや、やっぱり覚えてねえよ。

この会話からもわかるように、俺の前には、いや“前”というのは正しくないな。　俺の“横”には親友である八神はやてが一緒にあって本の整理を行っていた。

「それでバイト開始から一週間やけど、どんな感じなん？」

「どんな感じっていわれてもなあ……。　まあ、好感触ではあると思うよ。　ミスもしてないし、へマもしてないし」

「変態行動は？」

「したいけどマップさんがナイフでチラチラと脅してくるので行動

できねえ」

「ダウト」

「正解」

流石はやて。 あっさり俺の嘘を見抜いてくるな。

はやてはやれやれ……と言わんばかりに肩をすくめ、

「アンタがナイフくらいでビビるわけないやろ。 大方、給料に響くから、なんてことを考えているとみたで」

「大正解。 とりあえず最初の一月間はおとなしくしておくよ」

バイトの場合、本当ははじめの一月間は給料が出ないのだが……カリムさんの好意とはやえもんの尽力で、一月間働けばすぐに給料がでることになった。 まあ、あくまで一月間続いた場合なんだけど……流石の俺でも一月間くらいは余裕である。

「それにしてもがんばるな。 三日くらいで終わると思っていたんやけど……」

はやては少しだけ意地悪そうな顔でこちらを見る。

確かに普段の俺なら、そうなんだけど……

「はやえもんが俺のために折角セットしてくれたバイトだからな。 ここでクビなんてことになったら、俺はお前に顔向けできないし、お前もお前で立場が悪くなるだろ？」

俺のせいではやての立場が悪くなるのはいただけない。こいつは俺と違って管理局員なわけだし、下手したら管理局の信用も若干ながら落ちるかもしれない。それだけはなんとしてでも避けたいしな。あそこには、なのは・フェイト・はやて・ヴォルケン・嬢ちゃん・スバル・エリオ・キャロ・ユーノ・クロノ etc. . . 沢山の知り合いが働いているわけだ。全員が俺と関係者なわけだし、トバッチリとかごめんだぜ。

「……ふん。一応、考えてはいるんやな」

「まあな。お前の顔に泥を塗ったりはしないよ」

「それなら日常的に逮捕されるのもやめてくれへん？　いつもなのはちゃんとフェイトちゃんが頭抱えてるで？」

「あいつらの困った顔大好きなんだ」

怒った顔も笑った顔も大好きだ。泣いている顔はちょっとだけ。

俺とはやては話しながらも、どんどんと本を整理していく。要領のいいはやては俺より倍のスピードでどんどん片付けていく。……こいつやべえ。

「それにしても、こいつった古文書とか昔の伝記物とか、どこまでが真実なんだろうな」

「うん……6割嘘ってとこやない？　きつと真実のところはしょーもないところやと思っで」

「例えば？」

「遊び人だった。とか」

確かにそれはしょーもない。精子が枯れて死ぬ。いや、既に死んでるか。

「まあ、三次元なんて当てにならないしな」

「でたな、二次元大好きキモオタ野郎」

「三次元でも好きな奴らはいるからな？」

確かにミクちゃん大好きだけど。一人で一心不乱にギャルゲーとかするけれど。なのはとフェイトに土下座してお金貰って好きな声優さんのライブとかいくけどさ。

はやてはそんな俺を横目で疑わしそうに見る。これが本場の捜査官の疑いの目か。 やってもいないことを喋りたくなってくるな。

「ふくん……例えば？」

「は？」

「だから、例えば好きな人ってダレなん？」

こいつは何をそんなに詰め寄っているんだ。俺に詰め寄る前に本棚に詰めこめ。なんてことは言えるわけもなく、はやての要望通りに列挙することに。

「なのは・フェイト・ヴィヴィオ・両親・はやて・高町家・おっさん・スカさん・ウーノさん・ヴォルケン・リンディさん・クロノ・ユーノ・とかかな。まあ、結構知り合いはいるし、そいつらも全員好きだけだな。ざっと上げた感じ、そんなとこだな」

「それ列挙は、どういう順番であげられたん？」

「……あん？」

「だから、いまの列挙順はどういった法則に基づいてあげられたのか、聞いてるんや」

「すまん、はやて。お前の言いたいことがいまいちわからない。」

「いや、わかったところでわからないと思うけど。」

「え〜っと、頭に浮かびあがってきた順かな」

その言葉に満足してきたのか、はやては一人でに頷いていた。うちの幼馴染たちはよく摩訶不思議な行動をとることが多い。なのはしかりフェイトしかしはやてしかり。一番まともな俺はそれを外野から楽しむわけだ。嘘だけだ。

はやては自分の世界に入ったようで、無言で手だけを動かす。と、思いきや、たまに拳をこちらに飛ばしてくるので何がしたいのかわからない。無言だからって俺を殴っていいわけじゃないからな？

そんなこんなで1時間後。

だいたいの本の整理も終わり、ヴィヴィオがシャルマル先生に抱かれ

ながら寝ている様子を眺めながら俺は一冊の本を手に取った。ちなみにはやてはシャドーボクシングをしている。書庫でシャドーボクシングをするな。それとも少しスカートを一ヒラヒラにしろ。ピッタリタイトスカートとか似合わないから。なのはとフェイトのは俺が勝手に魔改造してフリルのついた可愛らしい感じのスカートにしたから。『恥ずかしく履けない！』なんて言っただけで仕事場には履いていかないけど。あれ絶対、こういう意味だぜ。『私にこれを履くのは、君と二人だけのときだよ……？』絶対こうに決まってるだろ！マジ可愛すぎ！すごい幸せものだぜ！……最近俺のことを、『ゴ……ねえ、キミ』とか呼ぶようになったけど。それ明らかに、“ゴミ”って言おうとしたよね？そう突っこみたいけど、肯定されたら二人の下着を甘辛煮にして食べてしまいたいので、聞くことができない。無論、いつか甘辛煮はチャレンジしたいが。

閑話休題

俺は本をと手に取って、パラパラとめくっていく。本当に偶然発見したのだが、ありえないことなのだが、あつてはならないことなのだが、不可能なことなのだが、世界の法則を無視したあげく、神に喧嘩でも売っているようなものなのだが

「この人物だけ、他の文字と違って読めるんだよね。しかもありえない苗字が」

その人物の名はKAMIEYAと書かれていた。父さん、明らかにこれアンタだろ。過去とか未来とか笑いながら飛びこえていく奴なんてアンタくらいしかいねえぞ。

なんとも微妙な気持ちである。書いてあることはまったくもって

わからないが、どうせロクでもないことが書かれているに違いない。
おかしい。こういったものって、普通はめちゃくちゃ誇れるこ
とだと思っのに。

「KAMIYAって、あんたのことじゃないの？ あんたの性も上
矢やる？」

はやてが唐突に復活してきた。 シャドーボクシングはどうした。

「まあ……そうなんだけど。これはきつとおそらく確定的に不変
の理をもって、父さんなんだろうっけどな」

「けど、なんでローマ字で書いたんやる。漢字でもいいと思うの
にな。ほら、案外カツコイイで、上矢って。なんか妖怪の山に
ある神社のパチモンみたいやけど」

「俺だって早苗ちゃん大好きだよ。それとお前は褒めてんのかバ
カにしてんのかどっちなんだ」

「上矢は褒めるけど、ひよっとこはバカにしとるで」

「夕チ悪いなおいつ!？」

「でも、陰口なんてマネ絶対せんで。うちは堂々と言う。この
ゴミ虫が」

「堂々と言えば許されると思ってるのかお前っ!？」

こいつも昔は可愛かったのに……。いまも可愛いけど。悔しい
のであまり口に出したくない。まあ、俺もイケメンだけどな!

海鳴一のイケメンと呼ばれたくらいだぜ！　そしてこいつとだけは付き合いたくないランキングNo.1に輝いた男でもあるんだぜ！
……………涙が出てきた……………。

まあそんなことはどうでもいいとして（どうでもよくないが）、多分きつとおそらく、このKAMIYAは

「昔のかみやなんだと思う」

だから父さんは、わざわざKAMIYAと書いたのかもしれない。

いつの日か、俺がこの本をみてもわからないように。あの旧姓を俺に見せないように、きつとローマ字にしたんだと思う。

「昔のかみや？　なんなん、それ」

「まあ、俺も詳しくは知らないし、知ろうとも思わないけどさ。上矢になる前に、別のかみやがあったらしいよ」

「……………謎かけ？」

「さあ？　本当に俺も知らないんだって。　10年前に少しだけ教えてもらった程度だよ」

理想を追い、醜く歪んだ世界で、力だけを求め、少女の手を拒み、独りで生き、絶対に勝てない存在達に立ち向かう、絶対的な敗北者にして、バットエンドを決められた最大の被害者

「アイツに教えられたくらいだよ」

「ふうん……。その人とはそれ以来会ってないの？」

「うん。なんせ俺と違って忙しい奴だからな」

変な方向に忙しい奴だよ。アイツの考え方も理解できなくはないけどな。

「まあ、アレだな。古文書なんて信用するに値しないし、べつにどうでもいいけどな。10割嘘なんてこともあるわけだしさ」

「たしかになー。アンタならどうするん？ こういった本を書くとき。10割嘘の二次元大好き人間なら」

「2割真実で2割嘘。残りの6割は真偽不明かな。それと、三次元だって好きだからな、俺は」

なんで俺が二次元しか興味ないみたいになってんだよ。いらぬ誤解を与えるんじゃない。

「なのはちゃんとフェイトちゃんが大好きの間違いちゃうんか？」

「あとお前とヴィヴィオな」

本を棚に戻し、伸びをする。そろそろバイトを終わるとするか。

カリムさん達とはやて・シャマル先生と別れを告げ、スヤスヤ寝ているヴィヴィオをおぶったまま家路につく。流石にバイクを使うわけにもいかず、タクシーを使用することに。バイクは明日にで

も回収すればいいや。

タクシーの運ちゃんに料金を渡し、見慣れた場所に降り立つ。

「うーん……夕食の買い物しようか、それともヴィヴィオを家に運ぶのか先か……。 いったい、どうしたもんか」

ヴィヴィオを背中におぶったまま、俺が大通りで佇んでいると後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。

「ん？ ひよつとこじゃないか、どうしたんだこんなところで？」

「おお、指でメダロット破壊した化け物ことおっさんじゃねえか。見回りか？」

「まあな。 お前を先頭に奇人変人がこちら辺は多いからな。 お前が死んでくれれば俺の仕事も減るんだけどな」

「俺の死に場所は決まってるんで、それは勘弁願いたいところだ」

「ところで、お前なにしてる？ またよからぬことを企んでいないだろうな？」

「なんで、俺〓よからぬこと。 になつてんだよ。 ただ、バイトの帰りだよ」

『ひよつとこがバイトだってっ！？』

「市民が全員振り返るほどのことなのかっ！？」

「いうよ！ 幻視なくてもそれくらいいうよ！」

おっさんとのやり取りの最中、俺の前に小さな女の子が不安そうに立っていた。そして、不安そうなまま、俺にこんなことを言ってきた。

「大丈夫……？ 脅されてるの？」

「だいじょうぶだよー。お兄さん、脅されてないからねー。自発的に動いてるだけだからねー？」

なんで俺は小さい女の子にこんなに心配されないといけないんだ。

「ふーむ……しかし、本当にお前がバイトとはな……。いつたい、なにがあつたんだ？ 場合によっては、市民皆が動く事態になるかもしれないぞ」

「気持ちは嬉しいが、管理局が慌てるからやめてくれ。まあ、何があつたというよりは、何かをあげたい。からバイトをしてるわけだよ」

「ほー」

おっさんが頷いて、市民も頷く。なにこの連帯感。

「それで？ できそうなのか？」

「なんとか一か月はもたせないと。そうしないと、給料もらえないんだよな。そのあとのことは決めかねてる」

「まあ、お前の場合一か月が関の山だと思っけどな！」

『たしかにな!』

おっさんに皆が同意するように叫ぶ。　うるさいな、と思っ反面、嬉しいと思った。

だから俺は自然に笑顔を浮かべた。　いつの間にか、笑顔を浮かべることとなっっていた。

素直にありがとう、なんて、おっさんや皆に対して言いつらいから、いつもの冗談めかしてみんなに言う。

「まったく……覚悟しとけよ！　俺のバイトが終わったら、全員の家に宅配テロしてやるからな！」

そしてその三日後、俺はバイトを辞めることになっただ。

41・新しいバイト先

俺がバイトをはじめたきつかけは、高町なのはとフェイト・T・ハラウンにお礼がしたいからである。そのために、はやえもんに頼み、此処聖王教会を紹介してもらった。バイト経験は高校時代になのはの両親が経営している喫茶店くらいなものであったが、バイト内容が清掃及び雑用だったので、そこまで苦勞することなく、客観的にみればかなり楽にバイトできていると思う。雇ってくれた人がとてもいい人であったのもそれに拍車をかけているのだと思う。聖王教会のトップにして、管理局にも多大な影響力をもつらしい、アニメとマンガ大好きな女性、カリムさん。いつも素っ裸で堂々と教会内を歩いているマツパさん。この二人は、とても優しく非常に見習いたいほどの人格者である。ヴィヴィオが懐いているのがいい証拠である。教会内でたまに会う人も、いい人ばかりで、バイト始めてから10日しか経ってないが、俺は少しだけ愛着とでもいうか、なんというか、ともかくそうだったものが芽生え始めていた。まあ、そろそろなのはとフェイトが俺を疑いの眼差しでみているわけだが。

それはともかくとして、そんな良い人達ばかりの聖王教会で、終わればよかったのだが、そうはいかないものである。これから起こることに關しては、誰が悪いわけでもない。強いていうなら、運が悪かった。と、言うべきである。

いつものように、バイトの清掃を終えた俺は、いつまでも来ないマツパさんのことが心配ではないけど、なんとなく心配という体を装

って、ヴィヴィオと二人でカリムさんの私室に行こうとしていた。カリムさんの私室にはすぐについた。何分、ここでは問題行動など起こしていけないのでガードが甘いなんてもんじゃない。いまなら顔パスも余裕である。

さてさて、そんなこんなで私室についた俺の耳に入ってきたのは、カリムさんと初老の男くらの話し声。初老の男のほうがかリムさんに怒っているようで、それをカリムさんはかわしている、といった感じだ。

「ん〜？ どうしたの〜？」

「んー。なんか話し合いをしているみたいだね。ちょっと待ってな。お兄さんはもう少し詳しく聞いてみるから」

詳しく聞いて、なんだか面白そうなことになってたらパイ生地もって乱入でもしにしよう。

そう思いながら、耳を扉に近づける。そこから聞こえてきたのは、なんとも面白くないものであった。

曰く、ヴィヴィオを引き取らせる。

簡潔かつ簡単に言っ飛ばせば、そんな感じの内容である。

なんとも面白くない。ちっとも面白くない。誰がそんなふざけたことをぬかしているのか。どうせ愛玩にでも使うんだろ、このロリコン野郎が。

カリムさんはずっとこの言葉を述べていた。

却下します。

それはいつもと違う声色で、なんだか天使が魔王にでもなった瞬間を目撃したときのようであった。

どうしたものか、と俺はここで考える。

もしも俺がここに残っていたら、いずれこのロリコン野郎とヴィヴィオが会う可能性がでくる。しかしながら、俺がここでバイトを辞めてしまうと、二人へのプレゼントが渡せなくなる。

「ねえねえ、まだダメなのー?」

待ちかねたヴィヴィオが俺の袖を引っ張りながら、そんなことをいつてくる。

ヴィヴィオは俺の袖が伸びるのを気にせず、むしろ楽しそうに袖を伸ばして遊んでいた。その笑顔をみた瞬間、俺の行動は決まった。

その前にヴィヴィオの許可を取ることによつて。

「なあヴィヴィオ?」

「なーにー?」

「お兄さん、無職に戻っちゃうけどいいかな?」

「ん〜? いいよー!」

自分自身、卑怯な手を使ったと思っている。 ヴィヴィオが断るわけないとわかって、こんなことを言っているんだから。 だけど、それでも、最低限の言質は取った。

俺はヴィヴィオを後ろに下がらせて、確実性を出すためにそばに置いてあった結構な値段のしそつな壺を思いっきり、力の限り叩きつけた。

ガシャンッ！！

と、音をたてて壊れる壺。 そして扉の内側から現れるカリムさんとマツパさんと初老のロリコン野郎。 啞然とする三人をよそに、俺は笑いながらこういった。

「すみませ〜ん、壺割ったんで、責任とってこのバイトやめます。

あ、請求書はこの住所にでもお願いします」

おっさんの住所をカリムさんに渡し、俺はヴィヴィオを連れてその場を後にすることに。 ヴィヴィオは、ただただ変わらない笑顔でカリムさんとシャツハさんに手を振っていた。

外に出てバイクに乗る直前、思い出したかのように、はやてにメールを送っていた。

文面は簡単なものだ。

『バイトやめたったww』

なんともふざけたメールである。

今日は大事な来客の日だというのに、あいつからメールがきた。こんな忙しい日に限ってなんでメールしてくるんや。もっと暇な日にでもメールしてこい。なんてことを思いながら、メールの文面を見る。

『バイトやめたったww』

「ふざけんなこら!!」

「はやてちゃんどうしたのっ!? いきなり携帯床に投げつけたりして!？」

「あんたの夫、屑過ぎるで!!」

「夫なんていないんですけど!？」

隣で一緒に来客の用意をしていたなのはちゃんに向かって叫ぶけど、なのはちゃんはそれより大きな声で叫んだ。

「ふう……まあ、なんとか落ち着いた」

「いやこっちは落ち着かないんですけどっ!? 夫ってだれなのっ!?!? もしかしてうちのペットのこと言ってるのっ!?!」

今度はなのはちゃんが盛大にオロオロする側になったけど、見ていて楽しいので止めないでおこう。

「まあ、べつになのはとフェイトのペットとかどうでもいいけどよ。それより大丈夫なのか？ ミゼットのばーちゃん此処にくるんだろ？ 卒倒するかもしれないぞ」

「まあ、それは大丈夫やと思うで。毎回、報告書出してるし、ちやんとokもらつとるし。今回は日本の昔からの遊びを教えるほしいらしくて来るみたいやで」

「ふ〜ん……。それじゃゲートボールでも教えようかな」

ヴィータもすっかり乗り気みたいやな。まあ、可愛がってもらってたし、ヴィータも嬉しいか。

それはそれとして、あいつのメール文面なんなん？ バイト辞めたって、よっぽどのがない限りやめないと思うし……。

でも

「あいつにあそこはむかんし、ちよつとだけ安心したかな」

はあ……。聖王教会に謝りにいかなんとな。

「やつべ……。給料もらえねえじゃん。いまから聖王教会に給料もらいに襲撃しようかな」

そんなことしたら俺が返り討ちにあうわけだが。

それにしてもどうしよう。出て行ったはいいけど、既にバイトの

アテがない。 〓なのはとフェイトのプレゼント買うお金がない。
これはなんとというか……銀行襲撃フラグじゃないか？

信号をまちながら、ヴィヴィオと二人ネズミの国のテーマ曲を歌っている、横にいたばあさんが持っている荷物をぶちまけた。

「……あの、大丈夫ですか？」

「え、ええ……。 ちょっと、荷物が多かったみたいね」

「えっと、手伝いますよ。 ヴィヴィオはお婆さんと一緒に信号渡ろうな」。 俺は荷物運ぶから」

「はい！」

「おやおや……。 お若いのにえらいねえ」

「おばあちゃん、おててつなごう！」

「はいはい」

ヴィヴィオがお婆さんと手をつないで、青信号を手をあげながら渡るのを確認して俺もぶちまけられた荷物を持って信号を渡る。 ちよつと時間がかかって赤信号になっちゃったけど、車に乗っている人達もクラクションを鳴らすことなく黙って待っていてくれた。 なんともありがたい限りである。

渡りおえて、お婆さんはこちらを振り返り一礼する。

「お若いのに感心だねえ。 助かりましたよ」

「いえいえ、女性に優しくするのは当たり前ですよ」

「あら、口がうまいのね。こんな年寄にまで色目を使うのかしら？」

「僕の守備範囲はゆりかごから墓場までなので、問題ないです。ただ、そちらは絶頂した瞬間に卒倒して黙祷することになりそうですが」

そんなことになったら、俺が殺人犯として逮捕されてしまう。

お婆さんの口が若干引き攣っている。

「あら、もう時間だね。私は行くところがあるので失礼することにするよ。ありがとうね、おじょうちゃん」

「ヴィヴィオだよー！」

「あら、ヴィヴィオちゃんっていうの？ 私はミゼットですよ」

「あくしゅー！」

「はい、握手」

うちの天使の力でお婆さんも骨抜きである。それにしても……ヴィヴィオが名乗ったからには俺も名乗らないといけないよな。

「えっと、俺の……僕の名前は上矢俊です」

そのとき、すこしだけお婆さんの目に力がこもった。

……まあ、見なかったことにしよう。お婆さんも追及する様子もないし。

「それで、ミゼットさん。目的地まで送りましょうか？　これからずっと暇でして」

「あら、お仕事はしてないのですか？」

「残念ながら、いましがたクビになったところです。もともと、彼女たちに養ってもらっている身ですから、生活には苦勞しませんが……ちよつと買いたいものがあつただけに無念だなー、なんてことは思つてます」

「買いたいものですか」

「ええ、彼女たちにプレゼントをと思ひまして。まあ……折り紙で作つたネックレスでもあげるとしますよ」

こつこつのは心がこもつていれば大丈夫。ただの現実逃避なんだけどな。

お婆さんは、そんな俺をみながら笑つた。そして、

「二人も幸せ者ですね。そして、一坊やもいい息子をもつたものです。あなた自身も、はやてちゃんから聞いたとおりの人でした」
そついった。

『ミゼットさまー!』

前から管理局の制服を着た男どもがこちらに走ってきた。正しくはミゼットさんに向かって走ってきた。男たちは息を切らせながらやってくると、2・3ミゼットさんと話したあと、ミゼットさんを囲む形で歩き出した。そのときに、俺に一礼することも忘れていない。紳士にもほどがあるぜ。

ミゼットさんを見送ったあと、本格的に家に帰ることにしたのだが、

「俺を笑いにきたのか、おっさん。笑いたいなら笑えよ! さあ!」

「なにを自暴自棄になってるんだ、気持ち悪い。ヴィヴィオちゃんに危ない人を見る目でみているぞ」

おっさんに捕まった。パトロール中のおっさんに捕まった。

「離してよ! あなたとの関係はもう修復できないのっ!」

「修復もなにも捕まる側と捕まえる側だからなっ!? 修復もなにもねえよっ!」

「そうやってあなたは私達を騙してきたのよ! ヴィヴィオだつてまだ小さいのっ! あんな女と浮気したあげく、私達を捨てるなんて!」

『うわあー……最低な人』

『おいおい、あれがこころへんを守る管理局員だつてよ』

『まだ子どもも小さいのに、サイテー』

『あんな大人にだけはなりたくない』

『制服プレイが大好きらしいぞ。もしかして円光とかもしてんじやねえか？』

「このケダモノ！」

「黙つとけお前！？ なんなんだよ、この市民の連帯感！？ 普通に考えて俺とコイツでは子どもなんて無理だつてことがわかるだろっ！？」

「魔法も奇跡もあるんだよ？」

「いるかこんな奇跡！」

まあ、俺もこんな奇跡いらないけどな。でも、おっさん。密かにあなたの趣味嗜好がバレてるぞ。

閑話休題

「それで、お前バイトは？ まだバイトの時間じゃないのか？」

「俺のバイト時間まで調べてるなんて……。ごめんな、俺には心に決めた人がいるから」

「そつちにもっていくな。お前の顔面粉砕するぞ」

みなさん、これがミッドの平和を守る男の言葉ですよ。どう思います？

俺は頬を掻きながらバイトについての質問にこう答える。

「辞めたった」

「は？」

「だーかーらー、バイト辞めたった」

「……どうして？」

「セクハラして、高価な壺割ったから、辞めたった」

「……給料は？」

「ないよ」

なるだけ感情を出さないように勤めて機械的に平坦に喋る。壺を割ったのは事実だし、カリムさんにセクハラしたのも本当のことなので、俺は喋っていいはず。なのに、おっさんは自分の息子が試験に落ちたときのような顔をしていた。有大抵に言えば悲しい顔をしていた。

「………そつか。それなら、しょうがないな。セクハラして、壺割ったならしょうがない」

「うん、しょうがないよ」

それでもおっさんは、俺の頭を無造作に乱暴にグリグリと掻きまわす。せつかくセットした髪もこれでは台無しだ。

おっさんは続けて言う。

「もともと、お前のような犯罪者で人格ひん曲がっている奴をバイトとして採用したほうがおかしいんだよ。お前には向いてない。好き勝手にできないバイトなんて向いてないさ。お前の個性を殺してまでするバイトなんて つまらない」

「……うっさいな。それは俺の勝手だろ……。個性を殺したつていい、俺は金を稼げればよかったんだよ。バイトをお膳立てしてくれたはやてにも申し訳ないことしたさ」

「そうか？ たぶん、お膳立てした奴も内心では喜んでるぞ？ お前のバイトの現状をみて、そう確信すると思うけどな。一度でも来なかったか？ その子が」

「……そういえば、きたな。はやて。あいつがそこまで俺のことを思っているのか？ いや、思ってるんだろうな。あいつなら、きつと。」

「……でも、俺は結果としてあいつの信頼を裏切ったよ。バイト辞めたんだし」

どんなことを言っても後の祭りだ。バイトを辞めた事実が変わらない。

「バイトなら、またやればいいだけの話だろ？」

おっさんは優しく諭す。

「わかってるさ、でも……俺を雇ってくれる狂ってる人なんてそう
そういないもん」

もし俺を雇ってくれる人がいるというのなら　それはきっと変人
であり、奇人である。

そう言った俺の顔を、正しくは頭を掴み　後ろに向けた。

首をひねったとか、完璧に変な音がしたとか、そんなことが気にな
らないほどの光景が目の前に広がっていた。　そこには、ありえな
い光景が広がっていた。

『やっぱりクビになったかひよつとこ！　お前これから暇だろつ！
俺の店手伝わねえか！？』

『ひよつとこ君、君は高校は卒業しているらしいね。　ちよつと地
球式の勉強法というのを教えてくれないか？』

『ひよつとこく〜ん！　赤ペン先生やる気ない〜？』

『ひよつとこ！　お前パン好きだろ！　ちよつくら手伝え！』

『君の交友関係の広さを活かしたバイトを頼みたいのだが』

そこには、ミッドの　俺の知り合いの人達が、変わらない笑顔で、

当たり前前の笑顔で、俺のことを指さしながら笑って、それでいてバイトの勧誘をしてくれていた。

茫然と唾然とする俺に、おっさんは笑いながら言う。

「驚いたか？ 皆、お前が家事に専念してるのかと思って、バイトの勧誘できなかったみたいだぞ？ 昨日お前の知り合いの人達に話したら、こぞってお前を引き抜こうとしていたさ」

「はっは……ありえねえだろ……」

「ありえない？ おいおい、お前はさっき言っただろ？ 魔法も奇跡もあるんだぜ？ 魔法や奇跡に比べれば、お前のバイト先なんて簡単に見つかるぞ。ちなみに、俺もお前にバイトを頼んでやるよ。お前にピッタリのバイトがあるんでな」

とんつと押された背中。それによろけながら、俺はミッドの皆の前に立った。

『よお！ クビ男！』

「はは、うっせーよ」

ほんと、こいつらなんで俺がクビになったのに、嬉しそうにしてるんだよ。

まったく……俺はこんな初歩的なことを忘れていたらしい。説明書の一番初めに書かれていることを読み飛ばしたらしい。

だって

「あー……その……俺を雇ってください！」

『馬車馬のように働けよ！』

『休憩したらぶちのめすからな！』

『ゲイバーにも来なさいよ！』

『目指せ！ 無職脱出！』

勝手気ままにそれぞれが言う。それをまったく不快とは思わないし、それよりも先に自然と笑みが零れていた。

まったく……忘れていたよ。

だってミッドは 奇人・変人が多いんだった。

42・視察？

「少年、本当にダイエットしたいのであればコココーラからダイエットトコココーラに変えたくらいでは痩せんぞ。せめて、一日1kmでもいいからランニングすることからはじめろ」

「え……。でも、ランニングとか苦手で……」

「それならば朝の女子高生とかOLとか追いかけて。結構いけるもんだぞ」

「はあ……」

聖王教会のバイトを辞めたのが二日前。現在の俺は、ミッドでバイトを転々としているのが現状である。日給はその店によって決まっており、給料が高い店もあれば微々たるところもある。が、聖王教会のときとは違い、自分を隠すことなどせずにバイトできるので結構楽しい。

「まあ、というわけでこのコーラは没収だ。お前は水でも飲んでけ」

そういつて、カゴに入っていたコーラを取り出しそれと引き換えに“おいしいみず”を入れて、金額を表示し、金をもらい、おつりを返す。少年はなにか釈然としない顔ではあるものの、俺が手を振ると振り返って店を後にした。

「ふっ……。また一人ミッドの少年を救ってしまったか……」

「営業妨害だ馬鹿者。　なんで店側のお前が営業妨害してるんだ。いい加減、ちゃんとしねえて目ん玉抉るぞ」

今日のバイト先はコンビニ。　そこで一日中レジ打ちをしている。

レジ打ちは高校時代に散々やってきたので慣れたものだ。　もう一秒間に12万連打くらい余裕である。　今回はヴィヴィオをスカさん宅に預けてます。　流石にコンビニはヴィヴィオには早すぎる。　なんせ18禁本が平然とあるのだから。　ヴィヴィオの教育的に、俺の生命的に、二つの意味で二人から殺される。

「それにしても……コンビニって儲かるのな。　チラッと帳簿みたけど、結構金あったぞ」

「なんでお前はそうやってすぐに人の帳簿とかみるかなあっ!？」

金髪ドレッドヘアのコンビニ店長、あながいいい 餡貝善々さんがワナワナ震えながら叫ぶ。

あ、そろそろポテト揚げる時間だ。

ポテトを油の中に入れて、時間を計りながら餡貝さんとお喋りを続ける。

「しかし、アレですね。　ほんとありがとございます。　バイトの件」

「……まあ、動機がなんにしてもお前が働こうと思ったのなら、手伝いくらいはしてやるさ。　それに、お前がバイトしてくれるならその分ミッドも平和になるだろうしな」

俺はミッドの負の親玉かよ。

「ところで、お前はどれくらい金がいるんだ？」

「え〜っと……10万ほどですかね」

「それはまた結構な大金だな。一か月じゃ無理じゃねえか？」

「そこが問題なんですよね〜……」

あんまりバイト期間が長いと二人に勘付かれる。(というか、既に二人は疑惑の目を俺に向けているのだ。近々、なにかアクションを起こしてくるかもしれない) これ以上、時間をかけると俺のビックリドッキリプレゼント大作戦が泡と消えてしまう。それだけは避けないと。

「一気に稼げるバイトがあればいいけどさ」

「キャサリンの所で稼げば？」

「いや、キャサリンはちょっと……。俺が喰われかねない」

キャサリンまじで恐ろしいから。リアルで怖いから。キャサリン見た後だと並の犯罪者とかマジで可愛くみえるから。可愛い女性がちょっと部下に怒ったくらいで魔王とかマジ甘いから、そんなの魔王じゃねえから。そんなのゴブリンもいいところだから。

「まあ……確かにキャサリンはねえな」

「万単位で給料くれるなら考えるけどさ。流石にキャサリンも万単位では出さないだろう」

「いや……わかんねえぞ？　もしかしたら……なんてこともあるかもしれない」

うーん……確かにありそうでこわい。

ヴーヴー！

「ん？　メールだ。誰だろう」

「裏で弄ってこい」

「裏でオ　ニーしてこいとかアンタ最低だな！」

「お前の考えのほうが一番最低だ！？」

「まったく……バイト中にメールなんてKYな奴だな」

バイト中に携帯持ち歩いている俺が言えた義理じゃないのだが、というより俺はこのメールの送信者を1%も怒ることができないわけだが。とはいうものの、俺にメールをしてくる人物なんて限られてくる。知り合いは人外が多いし、変態共はあまり携帯をもたないし、管理局の本部の奴らは仕事だろうし、ミッドの市民は俺がバイトということを知っているの、このメールの送信者はきっとおそらく六課の誰かだと思う。そして六課の面々で俺にメールを送る人物なんてなのはかフェイトしかありえないわけで、きつとその

内容は甘いものだど

送信者・はやえもん

内容・ちよつと話があるんやけど

「さーで、バイトバイト」

開いた携帯をパタンと閉じる。

『おい、ひよつとこー！ 飲み物の補充たのむー！ 倉庫から取
つてきてくれー！』

「うーい！」

鮎貝さんからの指示に返事を返し、裏の倉庫にいき飲み物のダンボ
ールを取る。

ヴーヴー！

ポケットにいれた携帯がバイブ音と振動で俺の股間のすぐそばで暴
れまわる。 とんだじゃじゃ馬ファンシーベイバーだぜ。

一応、携帯を取り出して確認することに。

着信あり・はやえもん

「さーで、飲み物を運んでいれればいいんだよな」

大き目のダンボールを三箱取り出して、店内に戻る。

そこで待っていたのは、受話器片手にレジをみている鮎貝さんの姿であった。

鮎貝さんは俺に受話器を差し出しながら言った。

「おー、ひよつとこ。お前の友達が呼んでるみたいだぞ。どうでもいいけど、店にまでかけてくるような彼女とは……お前も案外ラブラブじゃねえか。ただ、店までかけてくる奴は面倒だからな。店を巻き込まないでくれよ〜?」

俺は黙って受話器を受け取ることに。鮎貝さんは仕事をしに、裏へと引っ込む。

「……はい、ひよつとこだけど」

『お、やっと出たか。どした? なんか声が暗いで?』

「お前のせいだよっ!?! 昨日メールでバイト中はメールしないって約束しただろっ!?!」

『だから電話してるんや』

「意味わかんねえよっ!?! どんな理屈だよっ!?! それに店長にお前が俺の彼女だと誤解されてるんですけどっ! どうしてくれるんだっ!?!」

『なんなら、本当になっただげよっか? 料理もできて、おだてもいい、管理局でも一目置かれてる、こんなに可愛いお嫁さんそうそっおらんで〜?』

「確かにお前は料理もできて、おだてもよくて、管理局でも一目置かれて、可愛いけど、俺にはなのはとフェイトがいるんで他を当たってくれ！それに俺は彼女と言ったはずだ、なんでお嫁さんにラックアップしてるんだよっ！？」

『責任……とつてよね……？』

「なんの責任っ！？」

受話器越しに、はやての笑い声が聞こえる。

『それで？ なんで出てくれなかったん？ ちょっと傷ついたで。

真面目なところ』

「うっ……すまん。いや、俺もお前とは例え電話越しだとしても、文面だけの会話だとしても、お前とならいつまでもしていたいけど……」

『……けどっ』

「その……聖王教会のことで……さ。若干ながら罪悪感が」

おっさんは気にしなくていいとは言ったけど。やはりはやてには申し訳ない。

「とある人に“気にしなくてもいいんじゃないか？”とは言われたけど、やっぱり罪悪感はあるわけよ」

『まだそんなこと考えてたん？ それについては昨日話したのに』

ええ、確かに話したとも。

『聖王教会側も、“申し訳ない”って謝ってるし、こっちは大丈夫や』

「そっか……。それじゃ、なんで電話してきたんだ？」

『……暇だから』

「仕事しろ」

『え〜……いやや』

「子どもかお前はっ!？」

なんでこんな奴が魔導師ランクSSなんだろうな。世の中狂ってやがる。

『いや、私もね？ 仕事しようと思ったけど、そもそも仕事がないんよ。ほら、六課って基本的に遊んでるし、その分他の、主に上層部の方達が頑張っているわけだから』

「聞きよつによつては、お前らの部署最悪の部署だな」

『人間最悪のアンタに言われたくないで。まあ、そんなわけで暇なんよ』

「ふ〜ん……。まあ俺は暇じゃないから。そろそろ切るぞ？」

『え〜！ もう切るん！？ もっとお喋りしよーや！ じゃないと
アンタが私の純潔を奪ったってなのはちゃんとフェイトちゃんに言
いふらすでー！』

「なにその限定仕様っ！？ 俺が死ぬからやめて！ そしてデマを
これ以上言わないでくれっ！？」

『それじゃ、もっと喋ろうよー』

「う〜ん、まあ客が来るまでの時間だけなら融通利くと思っけど。
それまででいい？」

『オツケーオツケー。 それじゃ 』

はやてが話を振るところでトビラが開き、客が入店してきた。

「あ、悪い。 客来たから切るな」

『はっ！？』

ガチャン と、受話器を置いたところで、タイミングを見計らっ
たかのように客がカゴと一緒に商品を提出する。 俺はそのカゴに
はいつていた商品名を口に出しながら、はやてには悪いことしたな
〜、なんて考えるのであった。

電話の向こうから、あいつの冷静な声が返ってきたと思ったら、つ
ぎの瞬間には電話は切られていた。

「……………」

携帯をじっと見つめること1分。 どうせ見ても折り返してかかってくることはないの、そっと閉じることにした。

「……………おもしろくな」

あいつがバイトだってことはわかっている わかっているけど、こっちは暇なんだから少しくらい遊んでもええやん。 いつもはあつちがひっかきまわすのに。

「はやてちゃん。書類ここにおいときますよー？」

シヤマルが書類をわたしの机に置く。 うへえ……………丁度いいタイミングで仕事が……………。

目の前の書類に辟易する が、ふと頭の中にあることを思いついた。

「なあシヤマル」

「はい？ なんですか？」

「あいつのバイト先って、あそこのお巡りさんに聞いたらわかるかな？」

「うーん、そうですね。 たぶんわかると思いますけど」

「そっかそっかー」

ポケットに入れた携帯を取り出して、電話帳から魔導師ランクSS
Sだろつと名高いあの人を選びコールすることに。

2コールのあと、電話に出た人物に挨拶して、さっそくあいつの明
日のバイト先を聞きだした。

明日はちょうど、蕎麦庵というお食事処みたいやし……昼休憩にで
もいこうかな。

「どうしたんですか、はやてちゃん？　なんだか嬉しそうですけど

……」

「んー？　なんでもあらへんよー」

43・キャツサリ〜ン!

今日のバイトは依然にもお世話になった蕎麦庵である。レジ打ちと給仕が俺の主な仕事となる。蕎麦庵は日本出身の店長が一から本格的に作るだけあって味は抜群、のどごしも最高で、昼にもなる常連さんでいっぱいになる。蕎麦庵のいいところは、静かにゆったりとした気分であまい蕎麦を食えるところにあると個人的には思っているし、光景としても概ねそんな感じの光景が広がっているのだが 今日ばかりは違っていた。なぜなら

「おそばもってきましたよー!」

「ほっほ、お嬢ちゃん。ありがとうございます。これはお礼だよ」

「やったあー! みてみて、お兄さん! ヴィヴィオ、アメもらったよ!」

「よかったな〜ヴィヴィオ。ほら、おばあちゃんとおじいちゃんにお礼言おうな」

「うん! おばあちゃん、おじいちゃん、ありがとうございます!」

「ほっほっほ、ひょっとこくんにはもったいないほどできた娘さんだね」

「はは、母親が次元世界一最高だからだと思いますよ。ささ、冷めないうちにどうぞ」

「そうだねえ、それじゃおじいさん、いただくとしようかね」

「そうじゃなあ」

熱々の月見そばを二人で食べるのをみて、俺はもう一つの席に向かう。ヴィヴィオはというと、そんなご老人二人の様子をずっとみていたら、小さい子用のお椀に蕎麦を移して頂いてちゃっかりご馳走になっている。うーん……これが男性なら殴るけど、ご老人の方だと完璧にお祖父ちゃんお婆ちゃん孫の凶式が成り立っているので、微笑ましい光景にかわるな。まあ、お二人が迷惑でないのであればいいんだけど。あーヴィヴィオは天使だなー！

「ちょっと店員さん？ わたしの山菜蕎麦がまだなんやけど」

「三歳でも食ってる」

「いや、ヴィヴィオちゃんまでが限界やな」

向かった先のテーブルでいい感じの作りの笑顔を浮かべている（俗にいう営業用笑顔）八神はやてが俺に向かってクレームをいれくる。

「まあまあはやてちゃん。お店も混んでますし、ゆっくり待ちましょよ」

「それもそうやねー。まあ、わたしも食べてすぐ帰るわけじゃないし……店員さん、いつまでもまってあげるで！」

「……………いや、席が詰まるから食ったら早くでていけよ。というか、なんでお前とシヤマル先生が此処にいるわけ？ 仕事は？」

「今日の朝終わらせてきた」

「サボリで有名なお前がっ!?!」

思わず驚く。 いや……だって……サボリで有名なお前が……ねえ。

八神はやたとシャルル先生。 いずれも俺の友人であり、なにかと俺のことを手伝ってくれる人達で、関係は良好(そう思いたい)。

たまにゲームのことやマンガのことで喧嘩することもあるけど、それ以外はいたって普通の交友関係である。 しかしながら、この二人。 管理局のエリートだというのだから、驚きである。 二人だけじゃなく、幼馴染の高町なのはにフェイト・T・ハラオウンも同じエリートだというのだからもうなにがなんだが……。 もっと言えば、俺の知人の皆さん、管理局で働いている奴ら全員がエリートみたいなものである。 これがアニメの世界ならば、『この集団って勝ち組すぎるよな』とか言われるに違いない。 まあ、ぶつちやけその通りだと思っただけだね。 可愛くってエリートとか反則級だろ。 だが、俺だって無職のニートだ。 『だからなんだよ』そう突っこみが入ることくらいわかっている、わかっているが言わせてくれ。 語感的にはエリートもニートもそう変わらないので、俺も勝ち組ではないか? 案外俺とこいつらがここまで関係を持っているのも当然かもしれない。 同族的な意味で。 本当は逆ベクトルなのだが。

などと、長々とツラツラと怪電波を飛ばしたのはいいのだが

「で、なんできたの?」

こいつらの意図が全くわからない。ので、何回目になるかわからない質問をするのだが、決まって答えは

「ん〜？ お昼食べに来ただけやよ〜」

という解答である。

まったく……なにを考えているんだか

ふとおやつさんが俺を呼ぶ声が聞こえてくる。 どうやら注文の品ができたみたいだ。

「とりあえず、話はあとで聞かせてもらおうからな」

そうはやてに指さして、俺はピークを捌くのであった。 ちなみに天使はお戯れ中である。

「で？ なにしにきたわけ？」

ピークも過ぎ、ようやくおやつさんから休憩の許可をもらったのでその足ではやての正面に位置する席に座りながら話しかける。 ちなみに天使は奥の部屋でお昼寝中である。 もう好き放題のやりた放題だ。 でもヴィヴィオだからそれでオツケー！ だって可愛いもん！

「アンタがサボってないか見に来たんよ」

「あー、なるほどなー……」

確かによくサボるもんな俺。

「でも、今回はサボるわけにもいかないからな。　これでも本気でやってるぜ？」

「まあ……それはさつきから見えてわかったけど。　そろそろなのはちゃんとフェイトちゃんを騙しながらバイト続けるのも難しくなってきたんとちゃう？」

「うっ……！　それは……ちょっと思ってきた。　この頃、妙に二人の目も厳しいし……」

なにも悪いことしていないのに罪悪感が発生するんだよな……。　恐るべし、二人のパワー！

はやては、山菜蕎麦を食べながら、シヤマル先生は天ぷら蕎麦を食べながら考える。

「もういつそのこと、お二人には話したらどうですか？　そのほうがひょっとこさんも気楽にバイトをすることができそうですし」

「シヤマル、それは無理やで。　こいつの性格上、二人には秘密にしておいて、最後の最後でプレゼントを渡す　みたいなプランがでているはずや。　最後の最後で種明かしをするのが大好きな人種やもんな、自分」

「まあな。　最後の最後で『おいおい……うそだろ……』とか、『ふざけんなよ』みたいなとか結構好きだぜ。　だからはやてが言ったように、二人には秘密にしておいて最後の最後で種明かしみたい

なのが好きなんだよね。　そうしたほうが、なんかいいような気がするし」

「うーん……そういうものなんですか？」

「そういうものですよ」

「でも、ひょっとこさんがいきなりプレゼントなんかくれたりしたら、まずは夢じゃないかと疑ったあと、どこから盗品してきたのか、又はどこから強奪してきたのか、そういったことを先に考えそうですね！」

『……………』

「えっ！？　あれっ！？　お二人ともどうしましたっ!？」

シヤマル先生の話でふと思った。　……いや、シヤマル先生が述べたことはあくまで一例ではあるのだが、必ずしもそうなるとは限らないんだが　　そうなる確率が結構高い。　なんたって渡す相手がああ二人であり、渡す奴が俺である。　ありえない話ではないどころか、十分にありえる話である。

「……………どうしよう。　そこらへん全く考えていなかった……………」

「うーん……確かにシヤマルの言っていることはもっともやな」

認めたくはないが……………。

「ま、まあ……………なんとかなるさ！　うん、勢いでいけばなんとかなるよー……………」

「な〜んか怪しいな〜。でも、久しぶりやな。アンタのこんな頑張ってる姿をみるのわ」

ふいにはやてが呆れた声から、優しい声色にかわった。みると顔もほほ笑んでいて、一瞬だけ胸の鼓動が早くなったのを自分でも自覚した。

「今日な？ 本当はアンタの頑張ってる姿を見に来たんよ。無職でカスでゴミなアンタが頑張るところなんて滅多にみられないしな」
「喧嘩売ってるのか、それとも褒めてるのか、そうとう迷う言葉だな」

「大丈夫、バカにしてるから」

「表でろっ!」

アへらせてやる。

でも、とはやては続ける。

「こつやって頑張ってる時のアンタ、やっぱりカツコイイで」

そういって、笑ったはやての顔は、あまりにも普段のときとギャップがありすぎて、なんだか戸惑った後、俺はなんとも思わずネタに走ってしまった。

「バーカ。俺が普段から頑張ったから、物語的にハーレムになっ
てしまうじゃないか」

「ふうん。それじゃ、わたしも隣におるん？」

「……………まあ、そこは考えておく」

つつい直視することができずに、頬を掻きながら視線をそらす。

いや、玄関の入口のほうに目を向ける。

そこには携帯をこちらに向けながら、一心不乱に写メをとるスバルと嬢ちゃんがいた。

『あ』

『やばいバレたよっ！？ ティア逃げよう！』

「ちよっ！？ お前らまてっ！」

逃げる二人をなんとか捕まえて帰ってくる頃には、俺の休憩時間も終わっていた。

……………飯、食いそびれたな

「なるほどなるほど。プレゼントですか、頑張りますねひよっと
こさんも」

「まあ、なのはちゃんとフェイトちゃんのためやしなー。ところ
で、スバルとティアどうしておったん？」

「えっと、ティアとたまにはお昼外で食べようか、って話になりまして。そしたらなのはさんとフェイトさんからおいしいお蕎麦屋さんを教えて頂いたので、寄ってみたところ……はやてさんとひよっとこさんがいい雰囲気でしたので……つい写メを」

「ついで写メをとってらいかんでー」

「いたいたいいたいっ！？ ごめんなさい、はやてさんっ！ 写メは消しますからっ！？」

「私たちは管理局員やでー？」

「でもはやてさんだつて十分局員にあるまじき行為を平然とやっている気がいたいですっ！？ もういいませんからヘッドロックは勘弁してくださいっ！？」

メキメキと音をたてていたスバルを離すはやて。隣のティアはその光景をみながら、冷や汗をかいた。

「（流石はやてさん……。あのひよっとこさんをフルボッコにするだけの力はある……）」

そう思いつつ、後ろに隠れるスバルの相手をすることに。

「まあいまのはアンタが悪いわね」

「いやいやいやっ！？ 写メ撮ったのティアじゃんっ！？ なにすまし顔で自分は関係ないですアピールしてるのっ！？ ティアはやっぱり関係者だからねっ！？」

なんのことだかサツパリわからない。 ついに友人は頭までアレになっちゃったのか……。

「おーい、注文とりにきたぞー。 なにがいい？ あ、そういえばはやて。 シヤマル先生はどこいった？」

「シヤマルならヴィヴィオちゃんのとこ行ったで」

「あーなるほどな。 まあ、もうすぐしたらお昼寝中のヴィヴィオ起きだすから、それまではすることないと思うけど。 シヤマル先生には感謝し尽したりないな」

「わたしにはないの？」

「勿論あるぜ？ 聖王教会紹介してくれたしさ。 まあ……お前とカリムさんには悪いことしちゃったけど」

「それはべつにええよ。 私も聖王教会側も気にしてないし。 それより、聖王教会側がまたバイトにきてくれたってさ。 今度は日給で」

「まじで？ それならヴィヴィオ預けて行くのもアリだな。 あー、でもメンドイことになりそうだしな。 考えておくよ」

注文をとりにきたひょっとこさんは、そのままはやてさんと話し込む。 あの……私たちの注文は？

「えーっと、すみません。 注文いいですか？」

「あっ！ わるいわるい、ささっ注文どうぞ」

手を軽くあげて、拳手の形で質問してみるとひよつとこさんは、いま気付いた様子で困った顔をしながら注文を促してくる。この人、完全に忘れてたな……。もしかしてひよつとこさんは、飲食店のバイトだと話し込んでんじやうタイプなのかも。

「え〜つと、私はざるそばをお願いします。スバルは注文決まった？」

「え〜つと、ここからここまで全部」

そういつて端から端まで指さすスバル。

これには注文をとるひよつとこさんの手も止まる。

「え〜つとさ、スバル。金はある？」

「あ、はい！ ほら、このとおり！」

「うーん……これじゃ三つまでしか頼めないぞ？」

スバルのサイフを覗き込んだひよつとこさんは金額を確かめると、諦めるといわんばかりに言った。ちなみにスバルのナイフの名刺入れにはなのはさんが笑顔で写っている写真がはいっている。もつと言うのであれば、私のサイフにはその写真は入っているし、合同部屋にはなのはさんのプロマイドやポスターも張ってある（全て自作）。

「まあ、その中で好きなものを三つ注文してくれ」

「うー……」

泣く泣く三つ注文するスバル。　しかしながらこればかりはしょうがない。

『おやつさーん！　あれ？　おやつさーん？　クソツパゲー！』

『死にてえのか、お前』

『うおあつ！？　いるなら返事しろよ！？　いきなり文化包丁で刺すことないだろ！？』

『お前をみるとついな……』

……あの人もあの人で色々とすごいなあ。

「おにいーさん……だつこー」

「はいはい」

お昼寝から目覚めたヴィヴィオが両手を上げながら、俺に抱っこをせがんでくる。　なんとも可愛らしいかぎりである。　もちろん俺は断ることなく、その小さな体躯を抱き上げ背中をトントンと軽く叩いていく。

そしてそうしながら、付き添ってくれたシャマル先生にお礼をいうことに。

「すみません、シャル先生。 ヴィヴィオのおもりもさせてしまつて……本当なら俺がこんな状態ですから、スカさんかなのは達に預けるべきなんです……。 スカさんのほうはこのところ発明に忙しいらしく、頼りになるウーノさんもそれに付き添う形で。 なのはたちのほうは、まあ……俺のことがありまして。 はあ……ヴィヴィオにも迷惑かけるな、ごめんなーヴィヴィオ」

「うー……トンボさんだよー……」

ヴィヴィオは二度目の眠りの旅にいったみたいだ。

シャル先生はクスクスと笑う。

「いいんじゃないですか？ 六課で預かるよりも、此処の方たちのほうが色々と個性があつてヴィヴィオちゃんも面白いでしょうし。 この年ではなかなかお蕎麦屋さんの給仕なんてできませんよ？」

「……言われてみれば、そんな気がしますね。 うん、ヴィヴィオが楽しんでくれるのならそれでいいか」

うん、それでいいや。

『ひよつとこさーん！ 注文追加お願いしまーす！』

「あ？ あいつ金ないのに、なにしてんだ？ すいません、シャル先生。 少しの間だけヴィヴィオをみてもらえませんか？」

「ええいいですよ。 いつてらっしゃい、ひよつとこさん」

手を振るシャル先生にこちらも振り返しながら、俺を呼ぶスバル

の元へ。

「注文つてお前……金は？」

「はやてさんが一食だけおごつてくれるみたいです！」

「口止め料や。　いつとくけど借しやでこれわ。　いつか返してもらうから」

「はいはい。　それで注文は？」

スバルの注文を紙にボールペンを走らせおやつさんのところにもっていく。

昼のピークを過ぎると、客もほとんどなくなりこちらとしても仕事をしなくて済む……なんてことにはならないのだが、それでも少しばかりの時間はとれるようになるのでこちらとしてもありがたい。

なんてことを思いながら、注文の品の出来上がりをまっついていると此処で見かけるには珍しい人物が暖簾をくぐりながら姿を現した。

その人物は誰かを探すそぶりをみせながらキョロキョロとしたあと、俺の姿を確認して真っ先にこちらに向かってきた。

「よお、おっさん。　遅い昼飯でも食いにきたのか？」

「いや、ある人からお前を呼ばれてな。　ほれ、携帯」

そういつて自分の携帯を投げ渡すおっさん。　今日のバイト先、蕎

麦庵では携帯をポケットにいれたままバイトなんてしてたらおやつさんに殺されるので、携帯は家に置いてきたのだ。万が一バイブ音が鳴るうものなら俺の命もそこで尽きてしまう。

携帯を耳に押し当てながら、俺に用があるやつなんて誰がいるかな？ そつ自問自答して返事する。

「はい？ お電話代わりました。 どなたですか？」

『あつらくん！ その声はダーリンね〜！』

ピッ

「おっさん……いまの声って……」

「その……すまん……。一応、先輩にあたる人だしな。あの人も昔はすごかったんだぞ」

自然に声のトーンが下がる。おっさんも俺の声のトーンに気付いたのか、気まずそうに、バツが悪そうに、珍しく言い訳じみたセリフを吐く。

「それは過去の栄光だろツ！ いいんだよ、過去の栄光なんてさっ！ 大事なのは現在なんだよっ！」

「いや……でも……お前のことを心配してるみたいだしさ……」

「知らねえよっ！？ 俺はこいつに喰われかけたんだぞっ！？」

おっさんに詰め寄ったところで、手のひらに振動音の感触が。

「……3万くらい」

『なかなか厳しいわね』

「まあ、残り7万だからな。なんとかしてみせるよ」

俺は早々と早急にいち早く誰よりも早く風よりも光よりも早くこの電話を切りたかった。

なぜならば、キャサリンがこの後言うであろうセリフがなんとなくわかっていたから。

確信のない確信。　しかしながら、俺のこの予感

『それじゃ、ウチのお店で働こうか』

「お断りします」

あっさりと当たるのであった。勿論、このキャサリンの提案だけはなんとしてでも却下しておきたい。これだけは却下しなければ、俺の穴が大変なことになるからだ。

『あら、どうして？　ダーリンはお金が必要なんですよ？』

「必要だけど、かなり必要だけど、アンタの店でだけは働きたくないんだよ！」

『5万』

「ぐっ　！？」

『ダーリンの働きしだいでは、もっと増えるからしれないわよ。夜の10:00から深夜00:00まで働くだけで5万。ダーリンとしても咽から手がでるほどいい仕事だけ思うんだけど』

「た、確かにいい仕事だけどな……」

『それに今回は、ダーリンを襲わないって約束するから。ね？』

「本当だろうか？」

『もちろんよ』

「……護衛を一人、つけさせてもらう」

『もう！ 私達のこと信用してないのねっ！ もう怒っちゃうわ！
ぷんぷん！』

だれがお前みたいな変態野郎を信じるか。それにぷんぷんなんてぶりっ子アイドルみたいなことやめろ。アンタはどう考えてもぷんぷんよりぶりよぶりよのほうが似合ってるから。

「はあ……。まあ、これも金のためだ。いくよ、バイト。いかないよ、ヤンデレよろしくアンタの裸付きメールを延々と送られそうだし」

『心配しないでダーリン！ バイトにきても裸メールは送ってあげるから！』

「いるかボケ！」

キャサリンと軽く仕事の内容を聞いたあとに、携帯を閉じておっさんに返す 途中でおっさんに依頼することに。

「おっさん、明日のバイトはお前もこい。 道連れだ」

「うえっ！？ なんで俺までっ！？」

「俺が喰われるかもしれないだろっ！？ 相手はキャサリンだぞ！？ いまは引退したけど、現役時代は魔力量Eでありながら魔導師ランクAAAの『砕き鉄塊の拳』トールハンマーと呼ばれたキャサリンだぞ！？ 俺には荷が重すぎる！」

「……まあ、確かに俺にも責任はあるし……。 しょうがない、逝ってやるよ」

おっさんは何か諦めの境地に達しながらも頑なに頷いた。 表情は死地に赴く戦士である。

そんなとき、嬢ちゃんが俺の袖を引っ張りながら質問してきた。

「あのーひよっとこさん。 その……キャサリンって誰ですか？」

まあ、その困惑した顔と恐怖している表情は至極真つ当な反応といえよう。 しかしながら、俺自身もそこまでキャサリンのを知っているわけではない。 知っていることとすれば、魔力量はEでありながら、魔導師ランクはAAAという、時空管理局でも異彩を放ち異才を用いていた男である。

「なんとというか……お前らの大先輩だよ。 下手したらカリスマと

「いう点では、はやてやなのはやフェイト以上の力をもつ人かもな」

「まあ、その人は現在、ゲイバーというかオカマバーを開いているわけだけど。」

4 4 ・ホモと女装と深夜のテンション

最近、彼の様子がおかしい。いや、おかしいという点だけを抜き出せば彼は元からおかしいのだが、もつと言えば彼の存在自体おかしい話なのだが とにかく、最近の彼はおかしいのである。料理・炊事・洗濯・家事どれか一つでも劣っているわけでもなく、むしろこの頃前よりもうまくなっている気がするけど……それでも直観的に幼馴染の坎的に長年隣に傍にいる身としては、最近の彼はおかしい気がする。何故私がこうもおかしいと思うのか、それはいくつか理由がある。

一つ目は、彼が部屋に籠り出したこと。

べつに引きこもりの心配をしているわけじゃなく、というか部屋から出なくてもべつに問題はないのだが、最近の彼は部屋に籠ってノートに何かを写したり、パソコンで何かを調べたり、電卓で執拗に何かを計算したりと、一人で作業していることが多い。必然的に私たちと遊ぶ機会も減っているわけだ。べつに遊ぶ機会は減ってもいいけど……それがいつまでも続いたり、一人で何かコソコソしているのを見るとそれはそれで寂しい気がする。そう 尻尾を振っていたペットがある日を境に突然よそよそしくなつたみたいな感じだ。 なぐんか……私とフェイトちゃん以外の人に尻尾を振っている気がしなくもない。

二つ目は、ヴィヴィオがウェイトレスさんのマネをしだしたりすると慌てて止めにはいることだ。

普段のヴィヴィオはメイド服を着ていたり、不思議な国のアス風

衣装を着ているので私もフェイトちゃんも可愛らしくヴィヴィオの動作をみているのだが、彼だけは違っていて『こ、こらヴィヴィオ！？ 家ではダメだって！？』とヴィヴィオを止める始末。ヴィヴィオもヴィヴィオでそれに何も文句も言わずに『えへへ〜。かわいい？』となぜか止められたことに上機嫌。まるで私とフェイトちゃんを差し置いて、二人で何かをしているみたいだ。二人してなにかを隠している 彼が私に対して隠し事？

「そんなのダメー……！！」

『うわっ！？ いきなりどうしたんですかなのはさんっ！？』

ガラッ！ と回転椅子が倒れる音と部下が私を呼ぶ声で我にかえる。

「あっ、えーっと……にやんでもにやいよ、にやんでも」

「なのは、ネコ語になってるよ！？ 大丈夫！？」

「う、うん。 大丈夫」

フェイトちゃんが私のほうに近づいてくる。もしかしたらフェイトちゃんも私と同じような考えをもっているかもしれない……。

「フェイトちゃん、ちょっといい？」

「え？ どうしたの？」

「う、うん……。 えーっと、さ。 ちょっと話したいことがあるから休憩室にいかない？」

「え？ べつにいいけど……」

そうして私はフェイトちゃんを連れだって休憩室に行く。途中後ろのほうで、

『なのはさんとフェイトさんの百合でレズでイケナイ展開に……！』

『ティア！ カメラの準備はできてるよ！』

とのなんとも嘆かわしく、情けない自分の部下の声が聞こえてきたので

「あ、ヴィータちゃん。ちょっと二人に訓練お願い」

「あー、いいぜ。おいスバルとティア。カメラなんてもってないで行くぞ」

『なのはさんのイケズー！』

いや、訓練も大事だからね？

「それではのは。どうしたの？」

休憩室でフェイトちゃんとアイスココアを片手に対面に向かい合う。

「うん。近頃、アレが変だと思わない？」

「アレ？ ……あ、俊のこと？ うん、確かに変だとは思っかな」

「だ、だよね！？ やっぱり変だよね！？」

「ちよつ、なのは顔が近いよ！？ ま、まあ……なんだか少しよそよそしい感じはするし、最近は部屋にこもってパソコンで何かしてるよね」

「そうなんだよ！ 私達に隠れてなんかコソコソしてるじゃん！？ それって どう思う！？」

「え？ べつにいいんじゃない？」

「へ？」

フェイトちゃんの意外な言葉で拍子抜けする。

あ、あれ？ フェイトちゃんなら『ダメだと思うかな』って言うと思っただけ……。

「……え？ フェイトちゃんはそれでいいの……？」

「うん……。べつにいいってわけじゃないけど、俊が何か自分で頑張ってるみたいだし、私はなにも口出しはしないかな？ ヴィオオも巻き込んでるみたいだけど、危ないことはしてないみたいだしね」

「うっ……確かにそれはそうだけど……。でもでもでも！ フェイトちゃんは心配じゃないのっ！？ 懐いていたペットがふいによそよそしくなったんだよ！？」

「お、おちついてなのは!? 顔が近いって!? た、確かに心配ではあるけど、俊なら大丈夫だよ。人外レベルの人たちが周囲には沢山いるし、俊だって一般人よりかよっぽど強いし」

「た、たしかに強いのに知ってるし、そこらへんは心配してないけど……。ええと、そういうことじゃなくて……。この頃遊ぶ機会とか減ったし……。私達以外の女の人と会ったりとか……。そう言ったこともあるわけで」

「え〜つと、なのは? もしかして寂しいとか?」

「へっ!? そ、そんなわけないじゃん! ただ私は、ペットがなにか間違いを起こしたら去勢させないといけないことと、相手方の心的外傷と今後の将来を心配してるの! だから……。え〜つと、その……。とにかく、これは一度問いただしたほうがいいと思うんだ!」

多少強引ではあったものの、私の結論をフェイトちゃんに聞いてもらう。フェイトちゃんは顎に手を当てて1分ほど考えたあと、

「……たしかにそれはいいかもしれないね」

と、納得してくれた。うん、やっぱり問いただしたほうがいいよね。だって、去勢するかしないかの瀬戸際なんだから。

夕食も終わり、お風呂に入り、あとは寝るまでだらだらしているだけの時間が過ぎていく中、彼はこそそと玄関へと向かっていた。

私とフェイトちゃんは目で合図して、ヴィヴィオをつれて彼の後ろをついていく。彼が玄関のドアへと手をかけた瞬間

「どこにいくのかな？ よかったらなのは達にも教えてほしいかも。ねえ、フェイトちゃん？」

「そうだね、なのは。出かけるには些か遅い時間だよ、俊」

分かりやすく肩をビクリと震わせ、彼はぎこちなく首を動かしたあと、ぎこちない笑みでというよりも引き攣った笑みでいまにも泣きそうな笑みを浮かべていた。

「や、やあ二人とも。奇遇だね、こんな所で会うなんて」

「いや玄関だから会おうと思えばいつでも会えるよ。って、そういうことじゃなくていまから何処に行くのかな？」

「えーっと、コンビニに行ってきます」

「なにか買うものがあるの？」

「ベビーパウダー買ってくる」

「まって、この家の年齢でベビーパウダー使う人はいないんだけど」

「俺がフェイトのおっぱいをチューチューしながらベビーパウダーがついた手でなのはにアールを弄ってもらっただ」

「絶対に行かせないよっ！？　いまの会話で君の特殊な性癖とか全部無視してあげるけど、絶対に外へと出さないからね！？」

ガシツと彼の肩を掴む。　フェイトちゃんも同様に唇が青紫になり

なのは達の制止を振り切る形で逃走し、俺はいまキャサリンのバイト先『あなたの穴にインサート』の店内で掃除をしていた。店名からして、綺麗でケバケバした女性が多い　と思うだろうが、実はその逆でゴテゴテとしたガチムチっぽい人達で女装してお酌をするというなんとも近づきたく絵面が展開されていたりする。しかも全員、元管理局員。いずれも現役時代に腕を鳴らした猛者たちなのだが、そんな男たちの前でもこの人物は別格であった。鋼鉄にして鋼殻、『砕き鉄塊の拳』トロールハンマーと呼ばれた男。名前はキャサリン。本名　岩尾管狗さん。いわおくたく魔力量はあえてランクにするとしたらEランク、しかしながら魔導師ランクはAAAランク。そんな人がいま

「ダーリンってばほんとかわいいわ〜！　食べちゃいたいくらい」

俺の尻を執拗以上に愛撫していた。ズボン越しからとかじゃなく、パンツ越しに、愛撫　というよりもより正確に表すのなら　俺の尻をわしづかみしていた。

擬音で表現するのなら、ぐにぐに！　という感じだ。

「あの……何度もいうように俺はキャサリンのダーリンでもないし、死んでもお断りだし、俺の尻をわしづかみにするな！」

「でも可愛いわな〜！　普段は変態行為を日常的に繰り返すあなたが、ふりふりのミニスカメイド服で髪を強引にツインテールにして男性用縞パンをはいて顔を赤くしているダーリンはすごく可愛いわよ」

「べつにふりふりのミニスカメイド服を着ることに抵抗はないし、男性用縞パンを履くことに対しても抵抗はまったくないし、ツインテールもたまに遊びでやってるから全然いいけども　それよりもなによりも、アンタら従業員の俺を見る目が怖いんだよ!？」

だから俺は来たくなかったのだ……！　そもそも、この人は初対面からしてもおかしかった。　おっさんに紹介されてキャサリンに会ったとき、初対面にもかかわらず個室に連れ込まれたのは悪い思い出だ。　しかもこの人、強引ではなく紳士的に服を脱がそうとする。　引き千切るんじゃないかと、執事がお嬢様に服を召すときのように、もう色々怖い。　けど　この人のカリスマ性だけは本物だ。　なんたって、此処の従業員全員　キャサリンの元部下なんだから。

そして俺のいまの現状は、先も述べたようにふりふりのメイド服（俺がよくなのはやフェイトに着させようとするタイプの奴。　メイド喫茶とかで多いかな）に、男性用縞パン。　ちなみに白と青色である。　そして髪はツインテールにしている。　ツインテールといっても、横からちょこんと出ているだけなのだが、これでも立派なツインテールだから問題はないはずだ。

「にしてもまあ……よくもこんなに人がくるもんですな。　潰れてもなんらおかしくないのに」

「リピーターが多いのよお。　それに　男同士のほうがワイワイガヤガヤできるでしょ？　女と飲むとね、どうしても男ってのは恰好つけたくなる生き物なのよ。　それが男の本能的な行動欲求なのでも、そんなことしたらストレスたまるでしょ？　そういったストレスを感じた人達は此処には集まってくるのよ」

「なんか麻薬みたいですね」

「この世は麻薬で満ちてるわ。ダーリンの大好きなアニメやマンガ、ゲームだって麻薬といえは麻薬なのよ？ 違いのは合法か違法かだけ」

「なるほどな。だとしたら、恋も麻薬ってことか？」

「そうよお。恋以上に中毒性が高いものないわね。だって失っても、また戻ってくるのが恋愛なんだから。人間である以上、切っても切れないわね」

パワプロでも恋の病になると練習できないしな。恋って恐ろしいぜ。

『キャツサリン！ 俺の相手してよお〜！』

「はいはい！ いま行くわぁん！ あ、ダーリンもいきましょ？」

「えッ！？ 俺はいいよ！？ 掃除してるから！」

「でも、せっかく可愛いんだからいきましょうよお〜！」

「だーかーらー！」

「6万に上げてもいいんだけど……。ダーリン乗り気じゃないし」

「なにぼさつとしてんだキャサリン！ 客をまたせるな！」

「うふ、そういう素直なところ大好きよ」

やめろ 離せ 近寄るな

「ハローハロー、山ちゃん。最近調子はどうなの？　っと、その前に紹介しとくわあ！　私のダーリンであるカナよ！」

「え？　何勝手に源氏名つけてんだよ、変態ガチムチ女装野郎」

「6万欲しくないのかしら？」

「はじめまして〜！　カナです　！　カナは此処でのバイトは今日初めてなのでちよっぴり緊張していますう〜……。みなさんよろしくお願いします！」

人は金が絡むと外道に堕ちるとよく聞くが、まさかナチュラルに外道で下種の俺がここまで堕ちるとは思わなかった。でも　こんなときのために裏声というか、萌え声が出せるように練習しといてよかったぜ……！

「へ〜、カナちゃんか〜！　キミかわいいねえ……。ちよつとこつち来てお酌してくれない？」

「あ、はい！」

愛想を振りまきつつ、手で呼ぶ客の隣に移動する。その時にちらりと店内を見回すと、おっさんが従業員のみんなに慰められている光景が目に入った。……普段から色々大変だもんな……。俺が半分

を占めてそうだけど。

客の隣に座ると、酔っているのか俺の尻を撫でてきた。そして俺の耳たぶを噛んできた。

「おいてめえ、酔ってるからつてなにしてもいいと思つなよ。い
ますぐその手をひっこめねえと手切り落とすぞ」

『おっふおん！』

「も、もお〜！ やめてくらしやいよお〜！ エッチっ〜！」

「カナちゃんかわいいなあ〜！ お尻もぶにぶにだし、どう？ お
酒とか」

「あ、カナは未成年なのでお酒は飲めないんです〜！」

「え？ まじで？ カナちゃんは何歳かな？」

「永遠の17歳です」

張り倒したい。客とか関係なく、いますぐこの場でこいつを張り倒したい。テーブルに置いてあるペーパーナイフを使って刺殺したい。

「そ、そういえば山さんはどんな仕事をしてるんですかあ？ カナ
もっと山さんのこと知りたいなあ〜」

ちょっと甘えた声でそう聞くと、山さんはデレデレしながら答える
と思つたのだが、海も真っ青なほどの青さと海溝ほどの暗さで答え

はじめた。

「しがない漫画家だよ。以前は少年ジャプで連載してたんだけど……いまは人気もなく持ち込みマンガもことごとくボツ食らってるよ……」

……あれ？　もしかしたら地雷踏んだかな……？

山さんは俺の肩を掴みながら、というか、ぎゅっと抱きしめながら叫び始めた。

「カナちゃん！　俺はダメなマンガ家なんだよっ！　どうしようもないほどダメな人間なんだ！」

そっいいながら、俺の胸を揉む山さん。　そっいいながら、俺の尻を撫でまわす山さん。　そっいいながら、俺の匂いをスーハーシューハーと嗅ぐ山さん。

超絶に気持ち悪いです、本当にありがとございました。

しかしながら、この人が本当にマンガ家で連載していたというのであれば、俺はこの人の連載マンガを読んだことがある。　というか、ファンである。　タッチが柔らかく女の子がエロイのだ。　健全なのにエロイのだ。

俺はもう一度、あの作品を読みみたい。　あのタッチの女の子を再びみたい。

だから、山さんの肩を掴みそつと剥がし、満面の笑顔で一ファンとしてお願いした。

「カナは山さんの作品をずっと読んでました。そして好きでした。カナはもう一度、山さんの作品を読みたいです。だからお願い、カナのために、描いて?」

「カ、カナ……ちゃん……」

「はい?」

山さんが下を向いてわなわなと震える。かと思つと、

「結婚しよおおおおおおおおお! 一生幸せにするからあああああああ!」

「ちよつ!? 俺男だつてば!」

「一向に構わん! むしろそれがいい! カナちゃんのような可愛い美少女がいてたまるか!」

「いや構えよつ!」

血走つた目で俺を押し倒す山さん。しかし山さんはこの人を忘れていた。オーナーである、キャサリンを。

「山さん、ちよつと度が過ぎたわねえ。個室にいきましょうか?」

キャサリンは俺の名を呼ぶ山さんを個室へと連れて行った。

俺はというと、その間にテーブルを他の従業員に任せて店の端へと

非難した。

このバイトもやがて終わりを迎える。店自体はまだまだ続くが、俺はこれからバイト終了までの30分間をのんびりと過ごすことにした。ちなみにおっさんは酔いつぶれてる。お前、あれだけ行きたくないと言っていたのに、一番楽しそうだったぞ。

何気なく窓の外をみる。既に暗い常闇が辺りを支配しており、夜行性動物が本来の力を発揮するときがきたようだ。

チン

「飲むかい、カナちゃん」

「どうも。それとカナちゃんはやめてくださいよ」

「それじゃシユンちゃん？ ひょっとこちゃんは可愛くないし」

「……カナでいいです」

あぶねえ……一瞬寒気がしたぞ!?

軽く身震いしたのち、持ってきてくれたグラスに手をつける。

「カルピスですか」

「いまのキミが白濁液を飲む姿を想像すると……勃起がとまらんぞ」

「そのチ コへし折るぞ」

カルピスを飲む俺。それを写める男。どうみても変態の図である。

「つて、おい!？ 写めるなよ!？」

「大丈夫大丈夫。あとでちゃんと送るから」

「いや送られてもリアクションに困るんだけど!？」

これで抜くことができたらプロすぎるだろ。いくらなんでも自身女装姿では抜けないぞ。

「でも結構いい感じだぜ？ ほら」

そういつて俺にみせる。……なるほど、確かにこれはアリだな。

訂正、どうやら俺は自分の女装姿でも抜ける男であった。

「それにしてもすまん、隊長が いや、キャサリンがお前を巻き込んでよ。本当は掃除だけのはずなのに」

「べつにいいよ、給料が上がるんだ。それ相応のリスクがつきものだろ？」

かなりハイリスクではあったが。

そういうと、男は笑った。ニッコリと穏やかに。女装姿で。

「やっぱり、お前は面白い男だよ。なあ、キャサリンがなんでオカマバーを開いているか知ってるか？」

「さあ？　あまり知りたくもない話題だが、その雰囲気から察するに色々とあったり？」

「そう、色々とあったりしたんだよ。　キャサリンが辞めたのは丁度10年前さ」

当時、というと俺たちからしてみれば10年前。　キャサリンは犯罪者がその名を聞いたら二重の意味で縮み上がるほどの魔導師であったらしい。　一つは魔導師ランクが高く、強いこと。　もう一つは男色系男子であること。　その二つは犯罪者たちにキャサリンの名を広めたことだという。　特に後者の理由は相当大きいことであった。

そしてこれが一番驚いたことなのだが、なんとキャサリンは海ではなく陸のほう、つまりミッドの平和を守っていたのだ。　陥れるためではなく、知識としては陸は海より劣っていると聞いたことがある。　それに優秀な魔導師は海に行くとも聞いた。　（ちなみになのは達は海である）　そんな中でキャサリンだけは陸にずっといたそう。　しかしながら、理由を聞いてみたところ、その理由がなんとキャサリンらしくて面白かった。

『だってパンツが見えちゃうじゃない！』

いや、お前ふんどしだろ。

そう当時の人々は突っこんでいたに違いない。俺なら間違いない。そう突っこむ。

こんな人がカリスマ性抜群とはにわかには信じられない話であるが、部下の皆さん、つまり現従業員たちは口を揃えてこう言った。

『あの人は性別が男か女か迷子になっていても、生き様だけは漢だよ』

そしてこんなエピソードを教えてくれた。

一昔前、ミッドで凶悪犯罪者がやってきた。陸の者たちは市民を守るために必死になって戦うが、相手はランクでいうとSクラス。

とても陸で敵う相手でもなく、海のほうもランクがランクなだけに人材を出すことに抵抗があつたらしい。

一人、一人、また一人と局員は倒れ、ミッドがパニックになるなかその男はいつものように、散歩でもするかのように、小さい子どもにアメをあげながら、その自慢の拳で敵を蹴散らしつつ犯罪者のボスの前にたつた。

いつものふんどしスタイルで。舐めまわすように見つめながら。

『おい、その変態。なにしにきたんだ？』

ボスは問う。

『色男探しにきたの』

キャサリンはそう答えたらしい。

ボスはまだ15歳くらいの子どもで、管理局を悪と決めつけた中二病を発症させた子であった。

『魔力量もAAで魔導師ランクがSの俺に勝てるのかよ？ お前ランクは？』

『魔導師としてのランクならAAAよ。魔力的にはEくらいだったかしらね』

ボスは笑う。嘲笑する。

小馬鹿にしたように話しかける。

『ランクが俺より下じゃないかよ、雑魚が！』

そついいながらキャサリンと戦い 結果、キャサリンの圧勝らしかった。

魔法もなにも使わずに、キャサリンは相手を鉄拳で征したのだった。そしてキャサリンは言った。魔導師を全否定するであろう発言を口にした。しかしながら、キャサリンの言葉で救われる者もいたかもしれない。

キャサリンはこういったのである。

『魔力なんてただのお飾り。それに頼って戦うような奴なんか、怖くもなんともないわよ。魔力ありきでしか何もできない魔導師なんてクソくらえ』

「それって……管理局に喧嘩売ってますよね……？　大丈夫なんですか？」

「まあ、大丈夫だったらしいぞ」

「というか、キャサリンもう少し早くこれなかったの？」

「便秘らしくな、5時間くらいトイレにいたからさ。　完全に戦力から外してた」

締まらねえ話になったなあ……。

「あの人は常に自分の行動で示してくれたんだよ。　誰よりも臆することなく、誰よりも早く一歩進んでくれたんだ。　だからこそ俺たちはあの人が好きなんだ。　あの人と一緒にいたいんだよ」

「……ちよつとだけ、わかる気がするよ……」

俺自身も少なからず、そういったところがあるからな。

基本的に俺は外道で根性が腐ってて性格も最悪な男である。　だからこそ、魔力量がA以上あって、魔導師ランクもA以上あるやつが、『ランクなんてものはただの飾りなんですよ。　頭の固い連中たちにはそれがわからないんです』

なんてことをほざいていると、それはもう俺の脳内ではただの嫌味

にしか聞こえないわけである

『お前それ、ランクのことを気にしている女の子の目の前で言えんの？』

と、問いただしたくなるような男なのだが、

「なんか格好いいな……キャサリン」

「ああ、最高に格好いいよ」

なんだかキャサリンの喋ったセリフだと、なんとなく格好よく感じ
てしまう。 たぶん、本当に拳のみで戦うからこそだろう。 魔力
なんてものに頼らずに。 魔導師としては三流で、人間として一流
の男なのだろう。

奥のトビラがふいに開き、中から目下の話題であるキャサリンが出
てきた。

「あらあごめんなさいね、ダーリン！ はい、お給料。 そ・れ・
と」

チュ

「これは気持ちよ、気持ち」

「どう考えても頬にキスマークがついてるんですけど、気持ち悪い
くらい赤くて大きなキスマークが俺の頬についてるんですけど」

給料の袋をもらう瞬間に頬に当たった感触がおぞましくて今日は寝

れないかもしれない。

俺は寝転がっているおっさんを肩に腕を通しながら抱き上げ、キャサリンにずっと疑問に思っていた質問をぶつけることに。

キャサリンのエピソードはわかった。 名台詞もわかった。 ただ

「なんでキャサリンは管理局を辞めたんだ？ いまならおっさんとの二枚看板なのに」

いまのミッドは大変治安がよく、治安が良すぎるどころではゴキブリが出てきたくらいで近隣住民がパニックになるほどである。

だがしかし 犯罪なんて争いなんていつ起こるのかわからない。

だから、戦力はもっと多いほうがいいだろうに。

そういった意味も込めて発した質問だったが、キャサリンはまるで子どもをあやすように俺の頭に手を置いたあと、笑顔のままこついった。

「私には、局で働くよりも、みんなでわいわい騒げる場所で好きなときに好きなお酒を飲むほうがあってるのよ」

そう答えた。

そして続けざまにこついった。

「頼むわよ」

そんなセリフは本来ならば、時空管理局に勤めていて、なおかつエースオブエースやらなんやら言われているエリート集団の俺の友人たちに言うべきセリフであって、こんな無職にいうことではないのだが、その瞳があまりにも真剣だったもので、俺もついつい答えてしまった。

「当たり前ですよ。俺は自宅ミゼットを守る警備員ガーディアンですよ？」

その答えをきいて、キャサリンはただただほほ笑むだけだった。

泥酔状態のおつさんを家まで送ったと、猛ダツシユで帰宅したのが、時刻は1:30。良い子は寝ている時間である。そして我が家基本的に俺を除いて良い子、というか良すぎる子たちなのでとつくに三人仲良く川の字で寝ているものだと思っていたのだが、意外や意外。なんとまあ、リビングの電気が点いていた。

シルエットからして、なのはであることはわかった。

玄関にいき、ポケットをまさぐり鍵がないことにきづく。そういえば、あときは意気消沈して出かけて行ったから鍵なんか持たなかったな。ヴィヴィオとフェイトが寝ているのでインターホンを鳴らすわけにもいかず、どうしようかと悩んでいると、内側から鍵をあける音がして

「……………随分と遅くまで、ベビーパウダーを買ってたんだね……………」

「や、やあ、ただいま。ちょっと高級品のやつを買ってさ」

「ふうん……それで？ なにも持ってないけど」

「帰宅途中に食べちゃった」

「ベビーパウダーは食べ物じゃないからねっ!？」

「ちよっ 晚いんだから大きな声はダメだろ」

「あう……」

近隣住民の確認するのは。誰もなにも反応がないことを確認して、俺はなのはに入れてもらうことにした。

玄関

「ずっとまっつてくれたの……?」

「べつにキミを待ってたわけじゃないよ。書類仕事をしてたらこんな時間になってただけなの。それでふいに外でキミの気配を感じたから玄関にきただけ」

「あれ？ でも書類仕事は六課で終わらせたっていったよな?」

「ま、間違えたの! ゲームしてたらこんな時間になってたの!」
なにをそんなにムキになってるんだ。

「ま、まあいいや。俺はもう寝るから、ゲームもほどほどにな」

なのはにそういつて立ち去る　立ち去ろうとしたのだが、腕をギョッと掴まれ制止させられる。

「ホ、ホットミルクでも……飲んでいかない？」

うん……正直いまの気分としては寝たいのだが。　めちゃくちゃ寝たいのだが。

それでも　俺を見つめるのが可愛すぎて、ついつい頷いてしまった。

台所に置いてある電子レンジを使ってミルクを温める。

何故こんなことをしているのか？　それは一重に彼の行いを問いたすためである。　だからこそ、彼とゆっくり喋ることのできる場所を作ったのだが

「なーんか、取り方によっては、私がアレのことを気にしてるみたいな取り方だよね……」

まったく言っていないほど、全然彼のことは意識していないわけだけど。　そもそもありえないわけだけど。

「おまたせー。　って、もしかして寝てるの？」

リビングに戻ってみると、彼はソファアームに座ったまま寝ていた。

「もう、せっかくのホットミルクが台無しだよ」

テーブルにホットミルクをおいたあと、彼の隣に移動する。 いや、ここは強引にホットミルクを飲ませるといふ手も……。

「……………だよ……………」

「え？ 何かいった？」

彼の寝言に反応する私。 しかし彼はそれ以上寝言をいうことはない。

なので私はもう少しだけ、顔を近づけることにした。 べつにこれに他意はない。 ただなんとなく、近づいてみただけだ。 そしてなんとなく言ってみた。

「ねえ……………俊くん。 なのはは心配してるんだよ？ コソコソするのは、あまりよろしくないけど、この際目を瞑ってあげる。 いかはちゃんと打ち明けてくれるって信じてるから。 でも 俊くんはお人よしでなんだかんだ言いながら、人を助けようとする人だから、知らず知らずのうちに巻き込まれたりして、そのたびになのはがどれだけ心配してるか分かってるの？ 絶対わかってないでしょ？ ううん、わかるはずないものね。 だってキミはいつも私達を優先しようとするから。 私達が一番だから。 それはとっても嬉しいことだけど……………でも、俊くんが思っていることはなのは達だっと思ってるんだよ？ ずっと隣で笑ってほしいの。 ずっと隣で笑顔でいてほしいの。 手を伸ばせば掴んでくれるんだよ？ しゃがんでいたら声をかけてくれるんでしょ？ ねえ俊くん」

これは深夜のテンションが巻き起こした、一種の魔法。 だって普段の私はこんなこと考えてもいないんだから。

「最近は遊ぶ機会も減ってるし、一緒に過ごす時間も短いよね。あんまりこんな状態が続くと、なのは泣いちゃうよ？ いいの？好きな人を泣かしちゃって？」

いまの自分はとても意地悪な女の子だと思う。だって、彼の気持ちを手玉にとるようなことをしているのだから。

「そんなのダメだと思うんだ。一度好きになったからには、ね？だから 離れないですよ……」

腕に力がこもり、その拍子に彼が目を覚ました。

「……ん……もしかして俺寝てた……？」

「う、うん。 ちょっとの間だけね」

「そっか……。 いや、いま夢でなのはが泣いてる夢みだからさ、駆け出して行ったら目を覚ました。 うーん、あの世界の俺には頑張ってもらいたいものだ」

「それ夢なんですよ？」

「夢ってのは、必ずしも空想なんかじゃないと思うんだ。 どころか違う世界の光景を映画のように見ているもんだと思ってるよ」

「あ、そう考えるとちょっとすてきかも」

「だろ？」

彼の笑いに合わせて私も笑う。

彼はテーブルに置いたホットミルクに気付き、

「飲んでいい？」

と、聞いてくる。

もちろんわたしは笑って答えた。

「どうぞ」

彼はそのままホットミルクを取り、ゆっくりと飲んでいく。

その温かさのせいなのか、少しばかり頬を緩める　ところで気が付いた。

彼の頬になにか赤いマークがついていることに。

「ねえ、このマークどうしたの？　出かける前はなかったと思うんだけど」

「へっ！？　いや、これは……その……なんでもないよ、なんでも！」

「ふん、……なんか怪しいなー。　もうちょっとみせて」

彼の声を無視してもっとよく見る凝視する。　手でゴシゴシと拭いたのか、かなり消えかかっているけど

「こねってさ……キスマークだよね？」

私の中で、何かが切れる音がした。

彼を庭に放り出した後、私はフェイトちゃんとヴィヴィオが寝ている私室に帰ってきた。もう夜も遅い時間帯だ、はやく寝ないと……。

「あれ……なのは？ もういいの？」

「あ、フェイトちゃん……起きてたんだ」

「うん、ビンタの音がここまで聞こえていたよ」

「それは俊くんが悪いよ。頬にキスマークなんてつけて帰ってきたんだから」

「えっ！？ それほんと！？ ちょっと詳しく聞かせて！」

44・ホモと女装と深夜のテンション（後書き）

なんというか、カオス回

45・水毛疑惑

深夜庭に追い出された俺は、そのまま朝方まで延々と草むしりをしていたわけだが、これがなんともまあハマってしまい……いまは若干楽しんで草むしりをしているのが現状。こんなことでもないとなかなか草むしりをしようと思わないのでこれはラッキーととらえるべきか。

いや

「おはよう、どスケベ女たらし」

「お、おはようございます、なのはさん……フェイトさん」

部屋の窓から俺を呼ぶふたりの声と顔をみたのなら、これはきつとおそらくラッキーとは思えないだろう。俺は庭でしゃがみながら草むしり、対してあちら側は部屋から俺を見ているので、必然的に俺を見下す形になる。見下すといっても、舐めてかかっているみたいなおはなしは一切ない。どちらかというところ、完璧に殺しにきてる感じがした。正直、怖すぎてチビりそう。

「あ、あのさ……なのはさん？ 昨日のことなんだけど、ちょっと誤解があったかな、なんて個人的には思うんだよね……」

「へ……誤解？ どんな？」

「いや、それは言えないけど……」

言ったらバイトのことは知られてしまうし、バイトのことを知られるとプレゼントのことまで言わなくちゃならなくなる。それは本当に勘弁願いたい。

「私達に言えないようなことをしてきたんでしょ？ たらし」

「信じてたのに……」

「いやほんと誤解なんだつてばっ！？ フェイトもそんな悲しい顔をしてないで信じてよ!？」

結局、俺は二人の誤解を解くことができないまま二人を見送り、ヴィオと一緒にバイトにでかけた。今日のバイト先はペットシヨップである。あのネコもどきを預けたところだ。

「やあシュン。 やつとキミも魔法少女になる決意を固めてくれたんだね」

「そろそろ自分の世界に帰れよ。 ゲームもでるだろうが」

「そういうキミこそ劇場版とゲームがでてるじゃないか。 三期は尺の問題がありそうだけど」

「流石に三期の劇場版は厳しい気がするけどな。 というかそれ並行世界の話だろ。 熱血萌え燃えバトルアニメの話だろ。 この世界には関係ねえよ」

「それにしても並行世界の彼女たちは大変だね。大きな傷を負ったり、上司にバインドで縛られたあげく魔力弾ぶつけられたりさ」

「残念ながら並行世界まで関与しようと思わないのでこの話題はここまでにしよう」

「キミはいつだってそうだ。　そうやって逃げてばかり。　かみやが聞いて呆れるよ」

「かみやは父さんが捨てたから俺は関係ないの」

ネコもどきはこの前と変わらないカゴにいれられて、客寄せパンダのような立ち位置にいた。　ヴィヴィオは熱心にふれあいコーナーで子犬や子猫・ハムスターなんかと戯れている。　めっちゃ可愛い、最高に可愛い。

「それにしても、キミは元いた世界に帰れといったけど、だったらこのカゴから出してくれないかな。　正直迷惑なんだよね、ボクのまわりにはいつも小さな子どもが集まって、触ろうとしてくるんだ。　正直迷惑だよ」

「エサ食いながら言われても説得力がないんだが」

お前傍から見たら完全に可愛い小動物だもん。　性格は殺したくなるほどアレだけど。

「ボクはこの環境を認めたくはないよ。　けど、ボクがこうしているのと売り上げが伸びるみたいだからね」

「お前いいところあるんだな」

「高級なエサをもらうためだよ」

「ふうん……。それでも、お前のおかげで売り上げが伸びて、猫井さんが喜んで、お前の愛らしさで子どもが楽しそうにしているわけだ。私利私欲でここまで他人を笑顔にできるなんて、お前は最高かもしれないな。まさに可愛いは正義だよ」

「それならボクと契約をしてくれないかな？」

「それは断る」

ネコもどきと喋っていると、前のほうからピンク色の髪をしたツインテールの女の子がやってきた。見た感じ中学2年生くらいだろうか？

「いらっしやいませ、なにをお探しでしょうか？」

「あつ えつと……。Qべえをみにきたのですが……」

「お嬢ちゃん、命を粗末にしちゃいけないよ」

ピンク髪のツインテールは困った顔をしながらも、若干俺を避けつつネコもどきのほうに顔を向けた。確かにネコもどきは性格を抜けばマスコットの可愛さがあるからなく。ちょっとだけ気持ちいはわかるかもしれない。

「キミはまたきたのかい？ ほんと飽きないね」

おい、勝手にしゃべるなよ!？

そう思ったが、女の子のほうも気にしてない様子でネコもどきと喋りだしたので、俺はそつとその場を後にしてヴィヴィオのほうに足を向けた。人間関係って面倒だもんな。

30分後

「よおネコもどき。相談はお済かい？」

「相談つてほどのことじゃないよ。ただ人間という生き物はやはり理解できないよ。自分が嫌な思いをするのであれば関わらなければいいだけの話じゃないか。友情とか愛とか友達とか、ボクにはまったくわからない感情であり、わかりたくもない感情だね」

「当たり前であり、お前の言うとおりだよ。恋愛とか友情とか友達とか愛とか、所詮いらぬものなのさ。結局のところ、どんなに頑張つても世界は“自分”と“自分以外”でしか成り立たない」

「……キミがそんなことをいうとはね。ボクはキミのことを誤解していたかもしれないよ。キミは意外と冷めている人間なんだね」

「まさか。俺ほど萌えている男はいないさ。けど、不思議に思わないか、Qべえ。そんないらぬガラクタを人は必至に集めるし、笑顔で決して離そうとしない」

「だからボクからいわせればキミたちは理解できないんだ。何故そうまでしてガラクタを欲しがるんだい？」

「決まってるだろ。人が欠陥品のガラクタであり不完全だからだよ。だからこそ人は自分にはない部分を補う」

「なんとも情けない話だね」

「情けない？ 俺は誇らしく思うよ。完全なんて無価値に等しい」

遠くのほうで、猫井さんが俺を呼ぶ声が聞こえてきた。俺はそれに返事をして走る。その際に、ネコもどきを小さく呟いた。

『あの子……仲直りできたかな？』

お前も見事に不完全の仲間入りだな、ネコもどき。

ひよつとこがペットショップでバイトしている間、彼女達もまた六課で仕事をしていた。

「最っ低！ 家にヴィヴィオがいるのにもかかわらず、変なお店行くななんて最低だよ！」

「まあなのはちゃん……ちょっと落ち着いたほうがいいんちゃう……？ ほら、フェイトちゃんは今にも落ち着いているわけやし」

「おいはやて。フェイトが一心不乱にナイフを研いでいるんだけど」

「落ち着くんやフェイトちゃん!? 流石に殺人はあかんで!？」

まあ、仕事とは名ばかりな愚痴大会ではあるのだが。

「大丈夫だよ、はやて。足の神経を切るだけだから」

「それ家から出られへんで!？」

目が結構本気なフェイトにはやては本気で恐怖する。

ちなみにいまの仕事場には、なのは・フェイト・はやて・ヴィータ・シヤマル・スバル・ティアがいるわけなのだが、そんなことなどお構いなくなのははたまりにたまつた鬱憤を吐き出す。

「飼い犬に手を噛まれた気分だよ」

「で、でもアレちゃう? アイツが本当にそんなお店に行ったとは……。そ、そもそもアイツはなのはちゃんフェイトちゃんloveなんやし」

「いいや、アレの口から吐かれる言葉は嘘が多いし、すぐ調子乗るからね。行ったとしても不思議じゃないよ」

「……まあ、確かに嘘をよくつくな。あいつの存在自体が嘘みたいなもんやし」

ちよつと納得するはやて。

しかしながら、はやては何故そんな店にひよつとこが行ったのか、大凡の検討がついてるので、今回ばかりはひよつとこのフォローに

回ることにした。恩を売つとくと、後々いいことが起こりそうな
気もするし。

そんな中、なのはの話を聞いていたティアが疑問の？マークを浮か
べながらなのはに聞いた。

「でも、なのはさんってひょっとこさんのこと興味ないんですよね
？ いつも軽くあしらってますし。それでもこんなに怒るってこ
とは、ちょっとは気があるんですか……？」

そういつた途端、ティアはバインドで縛られていた。

目の前にはなのはの身も竦むような冷たい視線が、

「……ティア、そういう問題じゃないんだよ？ 恋愛感情とかじゃ
ないの。ただ ペットの躰はきちんとしないといけないでしょ
？」

「そうだよ、ティア。ペットの躰ができないで執務官なんて勤ま
らないよ。これは恋愛感情とかじゃないよ」

なのはとフェイトに至近距離から、凍てつくような視線をもちに喰
らい、コクコクと頷くティア。その頷きに満足したのか、バイン
ドを解く。ティアにとって、憧れであり大好きなのはにこんな
ことをされては、少々堪えるどころか恐怖の種が植えつけられたこ
とだろう。

「はあはあ………なんてゾクゾクするいい目つきなの………！ やばっ、
いきそう。 すいません、ちょっとトイレでイってきます」

そんなことはなかった。

トイレに行くために席を立ったティアを微妙な表情で見送ったヴィータは、改めてフェイトとなのはに向き直る。

「まあ、アイツには何か考え事でもあるんじゃないか？　なのはが言ったように、アイツは二人の犬みたいなものだから、真っ先に二人にいうはずだぜ？　それを言わないってことは、アイツにも考えがあるのかもしれない」

「うっ……、そ、そうかな？」

「うんうん、そうかもしれへんで！　だからフェイトちゃんもなのはちゃんもあまり気に留めない方がいいかもしれんで！」

はやての力強い声で、二人もしぶしぶながら納得する。　フェイトも研いでいたナイフを机の中にしてしまう。

なのはとフェイトは、『少し怒りすぎたかもね……』と、反省し、帰ったらしっかりと事情を聞こうと誓う。

はやてはその二人の結論に、心の中でひよっとこに謝りながらも張りつかせた笑顔でその場を取り繕う。　ヴィータとシャルは二人でおかしを食べ、ティアはトイレから帰ってこない。

そして、スバルは

「でもひよっとこさんが行った所って、オカマバーなんですよね？」

とんでもない爆弾を投げ込んだ。

上矢俊にホモ疑惑が発生した瞬間であった。

夕方

「ねえねえ、お兄さんネコさんほしいよあ〜！」

「う〜ん……そうはいつでもペットの世話って難しいから、ヴィヴィオじゃちよつと……」

「え〜！ ヴィヴィオできるもん！」

「それじゃ、なのはにネコミミつけてもらうから、それで我慢するのは？」

「なのはママはモフモフしてないもん！」

なのはがモフモフしてたら怖いけどな。毛深いなんてレベルじゃねえよ。あ、でも下の毛は……まあ処理してるか。今度それとなく聞いてみよう。『そういえば、なのはって下の毛の具合はどうなんだい？』みたいな感じで。

「まあペットのことにかんしては、二人の意見を聞かないとなんともいえないなあ〜」

「それじゃママたちがいいって言ったらネコさんいいの？」

「う〜ん……ok出すとは考えにくいけどな〜……」

ヴィヴィオと二人、台所で夕食を作りながら話す。ペットシヨップのふれあいコーナーでネコのかわいさに目覚めたヴィヴィオは、珍しく強く俺にネコを飼いたいとせがんでくる。うんうん、こんなに自己主張してくれるとは嬉しいぞ。俺もヴィヴィオを応援したいけど……ペットは難しいからな。やっぱりここはなのはにネコミミをみつけもらうしか

『ただいまー』

玄関から二人の声が聞こえてきた。なんだかちよつとだけ気持ちが悪くなるのか、声が暗いけど……どうしたんだ？

朝の一件もあつたので、正直怖くて足が向かないと思つていたので、男は単純な生き物らしく、二人の声のトーンを聞いた俺は無意識に玄関まで歩いてきた。

「おかえりなのはママ、フェイトママ！」

ヴィヴィオが二人に飛びつく。二人はヴィヴィオを体全体をつかみ、優しく受け止める。

「ただいまー、ヴィヴィオ！」

なのはがヴィヴィオに抱きつく。ああ、可愛いなあ……！

と、思っているとフェイトが俺の脇をチョンチョンとつつき、リビングに誘導する。

何が何だかわからないが、取り合えずついていく。……もしか、

リビングでプレイするんですか！？ 近くになのはとヴィヴィオがいるってのに始めるんですか！？ いや、むしろいるからこそ始めるんですか！ 立ちバツクでいいんですね！？

もつどきどきわくわくアドベンチャーである。 フェイトのおっぱいはでっかい宝島である。 掴んじゃうぞ、そのドラゴンボール。

「ねえ、俊」

ふいにフェイトが話しかけてきた。

「ふえっ？」

妄想爆走中の俺は、なんとも情けない声をあげたが、フェイトはかまわずに 俺の手を握りしめ、自分の胸に置きながら涙声で言った。

「男同士はやっぱりダメだよ！」

「わけがわからないよ」

何を言ってるんだ、この娘。 手を握られたときの俺の羞恥とテレをいまずぐ返せ。

「あの……え？ え……？ ちょっ、え？」

「俊の特殊すぎる性癖は私もなのはもわかってるし、許容することもできるよ？ でも、流石に男同士はダメだと思っんだ。 ほら、やっぱり女の子同士ならなんか大丈夫だけど、男同士なら一気に世間の風当たりも強くなるっていうか。 確かに昨今では、そういう

カップリングもおかしくはないけどやっぱりまだまだ辛いものがあると思うんだ」

「ごめん、本当にフェイトの言いたいことがわからないんですけど。俺がいつホモになったの。確かに男もいいけど、それは二次元の話であって三次元には全く興味なんてないんだけど」

「ううん、口ではそういつても、俊の体は正直だよ」

こんなところで、そんなエロチックなセリフで聞けるとは思わなかった。掲げているテーマが俺のホモ疑惑じゃなかったら、絶対にフェイトと性行為突入してるだろ、これ。シチュ的にフェイトが俺の体をSっぽく責めてるところだろ。

「いや、体も何も現状として俺は三次元のむさい男共に興味なんてないわけで。というかあったら問題だろ。ミッド中に俺とおっさんの薄い本が出回るだろ。明らかに俺が受けて出回るだろ」

仮に出回っていたら俺は自殺してしまうかもしれない。けど、そうしたら二人と一緒にいられないわけで

そう考え始めた俺に、フェイトは涙声で魅力的に感情的に煽情的に蠱惑的に俺に語る。

「私じゃ、魅力不足かな……？」

甘く悪魔のような囁き。

女神が俺に問いかける。

その瞬間

「もう辛抱できん!!」

俺はフェイトに襲い掛かり バインドに捕まった。

周りを見回すと、なのはがちょっと安心したような、それでいてちよっとムっとしたような顔でレイジングハートを構えていた。

……え？ もしかして3P？ ついにフェイトのおっぱい揉みながらなのはにベビーパウダーつきの手でアナル弄られるの？

なのはとフェイトがコソコソとなにかを話しはじめ、こちらにくる。

なんかいいシチュなので、俺もちょっとモジモジしながら瞳を潤ませながらいった。

「その……優しくしてね？」

とても優しい動作で、当たる瞬間だけ速度が何十倍にも上がる魔力弾を撃ち込まれた。

……とりあえず、このホモ疑惑が払拭されたのと、昨日の件もつやむやにできたのでよかった……かな？

46・サーカス団

今日をもってこのバイトも終わる。それも意味すること、つまりは俺のバイト代がついに10万に達するということだ。長かった。予定通りならば今頃はプレゼントを渡し終えているはずなのだが、ちよいと狂ってしまいこのような時期になってしまった。のだが、それもこれもいまではいい思い出だ。

「ということでおっさん、早く1万くれ。それで10万になるから」

「いや、働けよ。交番にきてすぐにバイト料要求する奴がどこにいるんだ」

「ちっ、クソ使えねえ社員だな」

「お前くらいだぞ、社員を目の前にして堂々と暴言吐く人物は」

いや、俺よりもっとすごい奴いるぞ。あの六課に対してババア発言した猛者がいるからな。結果ははやてに瀕死の状態まで追い込まれてたけど。

それはさておき、

「今日のバイトってなんなの？」

「その前に、あの女の子はちゃんと信頼できるところに預けたか？」

「シヤマル先生に事情を話したら、快く引き受けてくれた」

「それならよし。それじゃ、今日のバイト先に行くぞ」

「だからバイト先どこだよ。変態女子高生大好き野郎」

「黙ってついてこい、変態キチガイゴミクス野郎」

こんな調子で口喧嘩しながらバイト先まで行きました。

何でも言うつようだが、ミッドは他の世界よりかはるかに治安がよいと言える。それは強力な抑止力として管理局がすぐに駆けつけることができるからであり、ミッドの極一部（主に俺たちが住んでる周り）の奴らがキチガイ的に強いからである。

世界的にみても、（この場合の世界的とは遍く次元世界のことだ）犯罪の件数が年々減っている。これは管理局の上層部や、一般局員が頑張ってくれているおかげだろう。

しかしながら、だからといって、犯罪がなくなるなんてことはありえないわけである。捕まえる者がいれば、その対極となる捕まえられる者がいるわけだから。

世界とは相応にして、調整されている。バランスをわきまえている。

善と悪

幸福と不幸

男性と女性

どちらか一方が増すことがあっても、どちらか一方が消えることはない。

幸福の中に不幸があるように

不幸の中に幸福があるように

善の中に悪があるように

悪の中に善があるように

世界はそうやって作られている。

だからこそ、正義と平和を掲げる管理局は凄いなと思うし、大変だと思う。そして 報われないな、とも思う。だって、この世に悪は消えないから。それでもなお、世界を平和にするために管理局は存在する。決して、支配でもなく、管理でもなく、人々が平和に過ごせるように存在する。

だったら、その人々に 犯罪者というカテゴリーに位置する人間たちは入っているのだろうか？

「と、いう疑問があるんだけどぶっちゃけどうなのよ？」

「お前がもし魔導師ランクSSSでも、そんな考え方をもっているかぎり主人公にはなれないだろうな。 次元犯罪者や犯罪者だって、

一度でも助けを求めたのなら、それは俺たちにとっては助ける側の存在になるわけだ」

「裏切られたらどうすんの？」

「笑って殴り倒すくらいの心の広さが無いとな」

「その考え方、嫌いじゃないぜ」

そういえば俺の近くにもそんな奴らが沢山いたわ。主人公気質のあいつらが。

まあ、だからといって

「犯罪者の説得を俺に任せるなよ!？」

場所はミッドの郊外。ちょっとやんちゃな奴らが集まる場所だ。

ミッドで唯一、犯罪者がいる場所といっても差し支えない。

おっさんは困った顔で、頬を掻きながら答える。

「いやー、な。俺も連中がただの犯罪者ならボコって連れて行けば済む話なんだけどよ。……こいつらの犯罪歴が問題なんだ」

「えー……そんな奴らの説得しなきゃなんねえの？」

「まあ、害はないからな」

おっさんと俺はスタスタと歩いていく。

やがて大きな広場にでる。

そこには

「俺は小さい女の子と男の子の喧嘩止めてやったぞ！ すんげえ悪い犯罪しちゃったぜww あいつらモジモジしながら“ごめんなさい”だつてよ！ 互いに嫌な奴に謝らせるとか俺って犯罪者の鏡じゃねえかww」

「俺なんて道で立ち往生してる婆さんをおぶったぜww あのババア泣きながらお礼言つてやがったww 優しくなきゃいけない年寄を泣かすとか俺ってば鬼畜じゃねww」

「俺なんて学校中の窓清掃してやったわww 翌日見に行ったら、学校にいる全員が窓という窓をみていたぜww おかげで授業が遅れたらしいぞw 未来の若者の勉強時間を奪ったww」

世紀末みたいな奴らが恰好に似合わず、いい話をしていた。なにこいつら、ちよつと可愛いぞ。

「あ？ なんだよおっさん。 また来たのかよ？ 俺らは犯罪者だからな、おっさんのいうことなんか聞かないぞ」

広場の中心で連中の話を聞いていた、俺より頭一つ分背の高い男がおっさんに気付き話しかける。 そのおかげで、連中も気付きこちらに振り向く。 見事なまでに世紀末。 ここなどくると、黒髪でミクちゃんのTシャツ着てる俺が浮いているようだ。

「安心しろひよつとこ。 お前はミッドの市内にいても浮いてる存在だから。 まあ、それはそれとして、いつまで犯罪者ごっこを続

けるつもりだ？」

「ごっごじゃねえよ！ 俺たちは犯罪者なんだからよあ！」

『そつだそつだ！』

「…………おっさん、説明頼む」

「まあ…………見ての通りだ。 犯罪者に憧れていてな、此処にいる連中全員とも、犯罪に手を染めようとしてるんだが…………元が善人すぎて犯罪者になれてないんだよ」

「さっきの話を聞く限りだと、すごい皆いい奴そつだもんな。見た目は世紀末だけど」

「とりあえず見た目だけでも形作っただろうな」

なんかおっさんが呆れている。 いや、そりゃ呆れたくもなるか。 いうなれば、犯罪者ごっごこという名のボランティアだもんな。 それで駆り出されてたんじゃ、おちおち変態も捕まえれない。

「とりあえず…………あちらさんは自分のことを犯罪者って言ってるんだから捕まえてあげれば？」

「それができないから困ってるんだよ。 こいつらの悪行を教えるやろうか？」

軽く頷く。

「ひったくりした男を集団で取り押さえリンチする。 ちなみにリ

ンチの内容はくすぐりの刑」

「まあ……くすぐりは確かにつらいよな」

「朝早くから全員でゴミ拾い。本人たち曰く『俺たちの声で騒音妨害してやる』らしいのだが、朝の6：00から7：30までの間なのでとくに意味なし」

「俺とつくに起きてるしな」

「足腰のおぼつかない老人たちのために自ら買い物を買ってでる。その際にお菓子を買ってサイフの中身を軽くしようと思論むが、その金額が1000円のため老人たちは逆にお駄賃として当然と思っている」

「1000円ってヴィヴィオがお菓子を買っていい金額と同じなんだけど」

「小さい子どもがいる共働き夫婦のために、小さい子どもの面倒をみる。炊事洗濯と一通りこなし、なおかつ子どもの面倒もみるので夫婦からは感謝されている。なお、なにも盗んでいかないうえにお金も受け取らない」

「完全にボランティアだな」

まだ色々とありそうだが、おっさんは語るのを止める。もう面倒そうだ。

なのでこちら側から尋ねることにした。

「え〜っと、要するにこいつら的には犯罪行為をしているつもりなんだが、世間的に見れば慈善事業であって、おっさんは逮捕することできない。しかしながら、こいつらはこいつらで、全ての行いを犯罪行為だと思っっているわけか」

「そついつことだ」

なんともめんどくさい。

「それで？ 俺はどうすればいいの？」

「こいつらを止める」

「なんで？」

「こいつらのご両親たちが申し訳ない顔で謝りにくるからだ」

「うわぁー……それきついな」

こいつら自身は悪いこととしてなくても、それでもおっさんは形として出勤しないわけにはいかないよな。 あちら側は立派な犯罪行為だと宣言してるんだから。

「と、いうわけで見事説得できたならば1万だ。 頑張ってくれ。

俺はここらで見えておくから」

そついつておっさんは、タバコを取り出し一服はじめる。 すると、連中の中の一人がおっさんに「すみません、此処は禁煙なんですけど……」と申し訳ない顔で謝ってくる。

おっさんは慌てて携帯灰皿にタバコをいれ謝る。

「まあ、とりあえず説得はしてみるか」

なんか溜息がでてきた。

というか、ミッドで唯一の犯罪者の巣がこんなにも善良な市民たちだったとは……。

ミッド平和にもほどがあるだろ。

「はじめまして、ひょっとこです。まあ、そこで座って、出され
たお茶飲んでるボンクラ局員のかわりにきたんだけど……おたくの
お名前は？」

「水納侘須家流だ」
みなたすけ

もう名前からして善人のオーラがある。

俺なんて俊だぞ。すんげえこの名前に誇りもってるけど、顔文字
にすると（・・・）こんな感じになるからな。

そもそも顔文字にする意味はないのだが。

「え〜つと、おたくは犯罪行為をやりたいんですか？」

「もちろんだ！」

「どっして?」

「恰好いいから! 犯罪者って憧れるじゃん?」

お前は中二病患者か。

「そして女子どもを泣かせたい! な! みんな!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!』

「そっかあゝ。でも、管理局にはすんげえ怖い人いるよ?」

「俺たちはあえて魔導師ランクにするならばDはあるんだぜ?」

「管理局にはオーバースやSSがいるよ?」

「……………え?」

なんで鳩が豆鉄砲喰らったような顔してるんだよ。

「……………すみません、それほんとですか?」

「うん。ちなみに管理局にはエースオブエースと呼ばれる人がいるんだけどさ、その人はギャラドスなんだよね。あ、ギャラドスって知ってる? 村とかで争いごとをしてると、どこからともなくやってきて村を壊滅状態に追い込んで去っていくんだけどさ、そのエースもすごい極太レーザー放って惑星一つ破壊したんだよね」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタッ!!

ものすごい勢いで皆が震えだした。

なのは……やっぱお前すげえや。

いや、流石に惑星は破壊してないけどさ。幼馴染の骨は何でも破壊してるけど。

「エースオブエースはね？ 残虐非道で極悪鬼畜。血も涙もないエースでさ。人を人だと思っただけでなくて、犯罪者が泣いて謝っても冷たい目で……その罪、死をもって償え」とか言っちゃう人なんだよね。もう生身の戦闘でもすぐくてさ。19歳男性の幼馴染に平気でビンタしてその幼馴染口切ったからね。幼馴染泣いてたからね」

「あの……私的なことはいってませんでした？」

「黙れ小僧！ 貴様にスナップがきいたビンタの痛さがわかるかッ！」

「うっ、すいません……」

「まあ、あんたらの気持ちもわかるんだけどね。ただなあ……俺みたいな真性マジキチじゃないとこの先犯罪行為とかきついよ？」

ちよっとこの人たちには本当の犯罪行為とか無理そうだし。ご両親も心配？とかしてるみたいだし。

あれ？ そういえば、

「そういえば、女子どもを泣かしたいんだよね？ だったら、こん

なに人数いるんだからサーカス団でもやればよくな？」

『サーカス……団？』

『おお！ それいいな！』

おっさんが興味を示したらしくこちらにくる。

「お前面白いこと考えるじゃねえか！ いいな、サーカス団！」

「だろ？ 身体的にもなんとかいけそうだし、練習すればどうにかなるかも。知り合いにサーカス団の団長いるからちよっと相談して、もし指導ができるのであればその方向で行こうかな」

「あの……俺たち犯罪者になりたんだけど……」

困ったような顔で俺たちをみる自称犯罪者。

「何言ってるんだ、サーカスをするならあんたらは“時間を盗む”ことになるんだぜ？ 次元犯罪者だってマネできないことだぜ？」

演目中は、客席の人達の時間を自分たちに全て集結させるんだ。これ以上、すごい犯罪がどこにある。

「泣かせたいんだろ？ 女どもを」

その一言が決めてとなり、自称犯罪者たちはサーカス団を結成することになった。

晴れておっさんから1万をもらい、ヴィヴィオを預かってもらった
シヤマル先生にうまい棒をおごったあと、仲良く手をつなぎながら
帰ってきた。

「おかえり、二人とも」

「お、なのはが早いなんて珍しいな。生理？」

「それ平気で聞くこと？　ちなみに違います！」

「なのはママー！　モフモフして〜！」

「はい、モッフモフー！」

「きゃー！　かわいいー！」

なのは……それホコリをとる掃除道具なんだけど……。

新品を使ってくれたのでまだよかったけど、使用済みのをヴィヴィ
オに押し当てたらとんでもないことになってたよな。

「ところでフェイトは？　一緒じゃないの？」

「うん、ちょっとキミに確かめたいことがあってね。　“エー
スオブエースはね？　残虐非道で極悪鬼畜。　血も涙もないエース
でさ。　人を人だと思ってなくて、犯罪者が泣いて謝っても冷たい
目で”……その罪、死をもって償え」とか言っちゃう人なんだよね
”」

ビクツと体が反応する。

「これに聞き覚えはないかな……？」

「違うんだツ！？ 俺はこんなこと微塵も思っただけでなくて、むしろ俺だけはなのはの本性知ってるっというか！？」

「私さ……。今日、管理局の本部に行ってきたんだけど。会う人会う人に最敬礼されるし、妙に避けられるから、何事かと思って調べてみたら やっぱりキミにいきついたよ」

なのはの底冷えするような声。 もうヴィヴィオなんて泣き出しそうだ。

俺は努めて明るく振る舞いながら、ガクガクと震える足を押さえつけて笑顔でいった。

「俺はなのはの全てを受け入れるよ」

「それじゃ、これも受け止めてね？」

スナップを利かせてビンタを打つ練習をするのは。 もう泣く寸前で俺をみるヴィヴィオ。 そんなヴィヴィオに笑いかけながら、俺はいった。

「ヴィヴィオ。 よくみておけ！ これが、男の勇姿だあああああああああああああ！」

土下座は失敗に終わった。

47・ありがとう

「プレゼント代貯まったから、プレゼント買いにきた」

「勝手にいけばよかったやん。なんでわたしがアンタの買い物に付き合わないといけないの？」

「俺たち幼馴染だろ？」

「幼馴染やめるわ」

「幼馴染ってやめれる仕組みだっけ!？」

土曜日の午後、なのはとフェイトがヴィヴィオをつれてスカさんの家に遊びにいったので、その際にはやてを呼び出し二人でデパートに買い物にきた。ウーノさんたちとケーキ作るんだって。

「それで、なに買うか決めてんの？」

「ネックレスを買おうかな……と。まあ、レイハヤバルがあるし、本当はもうちよっと違うのがいいんだろうけど。これがどうしても思い浮かばなくなってる。とりあえず自分なりに調べて、ネックレスにしてみました」

「プレゼントが思い浮かばないとかアホちゃうか。というか、モテモテやったんだろ？ 自称イケメン」

「モテたのは確かだけど、付き合ったことはないかな。ほら、嫉

妬とか起こりそうじゃん？」

「アンタのことが大好きだった男性体育教師（26）とかか……」

「やめて！ 俺の過去のトラウマが蘇ってくる！」

あの人ガチな方だったからな。 もう色々と頭おかしかったからな。
軽くヤンデレただからな。

「まあ、それはともかくとして とりあえず店に行こうか」

かくして俺とはやては、ネックレスを買いに行くのであった。蛇足であるが、はやての水色のキャミソールと白のフレアスカート姿がちよつと可愛いです。

1階の案内図を見る限り、貴金属店は5階にあるみたいだ。

エスカレーターを使って上がることにする。

はやてを一段上にしてエスカレーターで上がっていく。 はやては俺がスカートを覗くのではないかと疑ったのか、体を横にした。あまいぞはやて。 既に絶妙な角度で、お前のパンツなど盗撮してるわ。 ほう……黒とはなかなかアダルトティーな色で

「なあ、記憶がなくなるのと、メモリーがなくなるのは、どっちが身体的苦痛を味わうと思う？」

すぐに盗撮写真を消した。

「……………いや、お断りします」

一瞬何言ってるかわからなかった。平然とトラップ仕掛けてくるあたり、こいつはなのはとフェイトよりもよっぽど怖い。

「あれ〜？　いまの“間”はなにかなー？　俊」

はやてが意地悪そうな笑みを浮かべて、こちらに近づき、腕に抱きついてくる。

「はやて、当たってるのか当たってないのが微妙だから、お前にはその技は無理だよ」

「歯というのはな、壊れれば壊れるだけ、新しいのが生えてきて、その歯自体はその前の歯よりも強靱になるんよ」

「それアーン！　魚人族だから！　人間の俺はそんなにしょっちゅうは生えてこないから！」

「でも知り合いにいるんやろ？」

「知り合いにいるからって俺の種族まで変わるわけないだろ！？　お前なにいつてんの！？」

これがエリート捜査官なのか！？　お前家宅捜査のときに証拠そっちのけでエロ本とか探す人種だろ！　あ、魚人族の知り合いはいるけどアーンはいないよ？

でもまあ　ちょっとだけ当たったし……

「じちそうさまでした」

と、小さく聞こえない程度に呟いたのであった。

閑話休題

「うーん、どれがいいと思う？　というか、腕に抱きつくなってば」

「まあまあええやん。嫌なら引きはがせばいいだけなんやし。

それはそれとして……やつぱりネックレスなら二人のイメージカラーとか、二人をイメージできるものがええんとちゃう？」

「なるほど。　なのはならギャラドスやコイキングというわけか」

「そろそろ対戦のときになのはちゃん（コイキング）使うのやめてくれへん？　笑って勝負ができないんや」

「お前最低だな。　幼馴染の姿みて笑うなんて！」

「アンタの行いのほうがよっぽど最低やで！？」

愛情故、仕方なし

「うーん、やつぱりなのはは星かな？　スターライトブレイカーというネタ技もあるし」

「次元世界広しといえど、なのはちゃんのスターライトブレイカーをネタ技といえるのはアンタだけやと思うで」

「そんでもってフェイトは雷とか？」

「いや〜、雷はちょっとダメちゃう？ もう少し可愛くしたほうが」

「ん〜。 おっばいとか？」

「普段からどこを見ているのかがわかるセリフやな」

いや〜、それは男ですもん。

店員さんが俺とはやての会話を困ったような顔で聞いている。きつと声をかけづらいらっさろつな。俺が店員なら無視確定だけど。

しかしイメージか。

二人のことをイメージする。

様々な表情と、これまでの記憶がよみがえる。

14年前のあの日のこと

10年前のあの日のこと

そして、俺が彼女達に対する感情と、彼女たちをみた感想

「ああ、調べておいてよかった」

やっぱりgoogleさん最強だったわ

プレゼントを買った、（正確に言つと頼んだ）俺たちは、そのまま最上階でお昼を食べることにした。

「ひょっとこはお子様ランチが大好きやったっけ？」

「一言もいつてねえだろ。あの旗が大好きだつて言ったんだよ」

「小さい子どもの気を引くために使用してんのに、大きい子どもが引つかかるとは夢にも思つてないだろうなあ」

「ちなみになのはも注文しようとしてたぞ」

「あの娘は大丈夫なんか!？」

たぶん、きつと、おそらく、大丈夫じゃない。

「それで、なに食べる？ お金もないやろうし、お姉さんがおごつてあげるよ。好きなもの注文してどーぞ」

「え？ まじで!？ それじゃはやてのアワビ」

ドンッ!

「いめんなさい、調子にのりました」

「よろしい」

テーブルが陥没するほどの破壊力とか勘弁願いたいのですが。

「ん〜っと、それじゃウニトロ丼にしようかな」

「はいはい。わたしは……生パスタモツツアレラチーズとトマトソースにしようかな」

「ちょっとまってはやて。俺のサイフにゴムがあるから」

はやてはスルーして店員に注文した。一人でゴム掲げてる俺がバカみたいだ。

注文した品がくるまでの間、はやてと軽く世間話することに。

「六課は順調？ 喧嘩とかしてないか？」

「いや、みんな楽しくやつてるで。喧嘩とかは全くないけど、強いてあげるなら……ティアの暴走が止まらないってところやるか」

「嬢ちゃんはいつも通りだよ。まあ嬢ちゃんにとって、なのははお姉ちゃんみたいな感覚だしな」

「お兄ちゃんのほうがダメダメやからな」

「うるっさいな……。嬢ちゃんにはバレてないんだから教えるなよ？ どこから聞きだしかについては目を瞑るから」

「はいはい。それじゃ今度はこっちが質問や。バイトはどうだった？」

はやての質問と同時に、食前に頼んだ飲み物がくる。はやて側にはアイスティー。俺のほうにはコーラだ。

ストローを入れ、コーラを飲み答える。

「聖王教会はそれなりに楽しめたよ。教会の人達も優しくかったし、面白い人ばかりだった。カリムさんやマツパさんも俺とヴィヴィオの面倒をよくみてくれていたし」

「結局辞めたわけやけどな」

アメリカンよろしく肩を軽く上下に動かし首を振りながら答える。

「なのは神とフェイト神を崇めてたから、天罰が喰らったのかもな。でもまあ、カリムさんはその後も携帯で連絡を取り合えるくらいには修復したし、問題ないと思うよ」

「ふん……おもしろくな」

「ん？」

「え？ わたし何かいった？」

小首を傾げるはやて。

「え？ なにかいま言わなかった？」

「べつに？」

「あ、まじか。いま声が聞こえたような気がするけど」

「気のせいやな」

なんだ、気のせいか。

その時丁度よく料理が運ばれてくる。

俺の前にはウニトロ丼、はやての前には生パスタモッツァレラチーズとトマトソース。

食べながらも、俺とはやての会話は尽きない。

「久しぶりに家に泊まってええ？ 今度の土日あたり」

「いいけど、仕事は？」

「終わってるとおもつで。 だから八神ファミリー全員でいけるやろ」

「まゝた大所帯になるんか。 飯の時間が大変そうだな。 主に作る側が」

「手伝ってあげようか？」

「まさか。 客人は客人らしく遊んどけ。 女同士、積る話もあるだろうからさ。 期待には応えてやるさ」

ロヴェータあたりにはキャットフードでもあげよう。 いや、あいつウサギ好きだし、ニンジン一本あげとこう。 『お前、これで野菜オニオンしてみるよ』とか言ったらしてくれるかもしれないし。

「まあ、なのは達も予定はないだろうから土日はお泊りということだ」

「そうやね。 あゝ、楽しみやなー！」

早くも泊まりのスケジュールを立てるはやてであった。

「それじゃ、ちょっとネックレス取ってくるからまってくれ」

「はいよー」

はやてをエスカレーター付近に残し、俺は先ほどプレゼントを注文した店に足早に駆ける。

「すみません、先程注文をお願いしたものでんですけど……」

「あ、注文の品できてますよ！ すぐにもってきますね」

若い姉ちゃん店員が元気な声で奥に引っ込む。

少し手持ち無沙汰になり、レジの横に目をやる。 そこには俺が注文したものよりも少しだけ小さいサイズではあるがネックレスがあった。

その中の一つに目をやる。

目をやって、そのまま手に取る。

そのとき、奥へと引っ込んでいた姉ちゃんが注文品をもってきて清算を開始したので、

「あ、すみません。これも一緒にいいですか？」

「いいですよー。それじゃ、これも合わせまして合計で10万2千円になります」

「たりないねえ……。すみません、ちょっとまけてくれませんか？」

そういうと、姉ちゃんは困ったような顔で首を横に振った。

「こちらも商売なので、それはちょっと……」

「そこをなんとか頼みます！地球の花を模したアクセサリーが売ってるのなんてこちらへんだけなんですよ！ここじゃないと手に入らないっていうか」

「ええ、確かにそれがお店の自慢ですし……。でも、お店としては」

渋る姉ちゃん。しょうがない 使いたくはないが

俺は姉ちゃんに耳打ちする。姉ちゃんは顔を赤くしながら頷き、本当にこっそりと2千円の文字を消してくれた。

「いまの約束、守ってくださいよ？」

「当たり前ですよ。ここに俺の電話番号を記しておきますね」

サラサラと白い紙に携帯番号を書く。もちろん、おっさんの携帯

番号だ。おっさん便利すぎ。

手を振って別れ、急いではやての所に戻る。

「おまたせ！ それじゃ、帰るか」

手を差し出すが、はやてはその手を掴まず、スネを無言でコツコツとガツガツと蹴ってきた。

「いたツ！？ え、ちよつ え！？」

「……………ばーか」

はやてはそれだけ言って、俺を残してさっさと帰って行った。

その夜、シヤマル先生に電話したところ、はやては俺との電話に出たくないといっているらしい。どうやら俺は嫌われたらしい。

「あのー…………俺ってなにかしたんですかね？」

『うーん。 なにかしたからはやてちゃんは怒ってるんじゃないですか？』

「でも、覚えがないんですけど…………」

『だからはやてちゃんに乙女心がわからないと言われてるんですよ。』

『屑男』

心なしかシャルマル先生の言葉に棘を感じる。　なんか心が痛くなってきた。

「えーっと……俺、はやてに渡したい物があるんですけど」

『ふむふむ。　あ、はやてちゃんからの伝言です。　“トラックに轢かれて転生でもしてろ、バカ”とのことです』

「転生者になるつもりはないんですけど」

『まあ、そういうことですから今日はもうこないてください』

ガチャリと切られる電話。　……シャルマル先生、かなり怒ってたよな。

溜息を吐きながら、手のひらにもっていたものをポケットにいれる。

『ただいまー！』

丁度いいタイミングで我が家の姫君たちが帰ってくる。　玄関までお出迎えする俺。

「おかえりー。　どうだった？」

「すごく楽しかったよ！！　スカさんが生クリームを全身にぬりぬりして遊んでたの！」

「スカさんブレねえな」

ウーノさんがストレスで倒れないといいけど。

「俊くんは今日なにしてたの？」

「ん〜っと、デパートにいつてきた」

「ふ〜ん。アニメトは行かなかったんだ」

「今回はね」

カリムさんと行く予定だし。

「それで二人はどうだった？ ケーキ作り」

そう聞く俺に二人はとつてもにこやかな笑みで、女の子のようにしやぎながら

「たのしかったよ！！」

そう答えた。二人がこんなに嬉しそうにしていると、俺まで笑顔になってくる。

三人の話を聞きながら、リビングへ。なんでもウーノさんには、どMの妹のほかにも沢山妹がいるらしく、とつても賑やかなものになったらしい。う〜ん、ちょっと会ってみたい。

ふとソファをみると、ヴィヴィオが半分夢の中へと旅立っていた。夕食食べてないし起こしたほうがいいかな？ でも寝顔もかわい
いし……。

「あ、そうだ。二人に渡すものがあつたんだ」

そう、今にも思い出したかのように言いながら、部屋に用意していたプレゼントを取ってくる。

「え〜つとさ、二人とも」

「」「どうしたの?」「」

改まる俺に二人も席を立つ。そして向かう会う俺となのは&フェイト。

うう……緊張する……。

「そ、その……これ!」

背中に隠していたプレゼントを渡す。赤い包み紙に可愛いピンクのリボンがなのは。赤い包み紙に可愛い黄色がフェイト。

「へ? なにこれ?」

「ま、まあ開けてみるよ」

二人は疑問符を浮かべながらも丁寧に剥がし

「わあ! これ、ネックレス!？」

「すごい……! これもしかして日本の花を模してるの!？」

「う、うん……。デパートのお店で売ってあるんだ。レジには花言葉辞典とかも置いてあって、それをみながら店員に注文できる

んだよ」

「つけてもいいー!？」

「お、おう」

なのはとフェイトがつけ、くるくると一回転し、互いに寝める。

と、こちらを二人して見つけ

「に、似合う……?」

ちよつと上目使いで聞いてきた。

「ぐはっ……!」

萌え死んだ。　これは萌え死んだ。

「ちよっ!？　いま吐血したよね!？　大丈夫なの!？」

「なのは、フェイト……かわいすぎ……」

それを呟くのが精いっぱいだった。

二人は一通りしゃいでから、

「　あれ？　もしかして、これを買ったためにコソコソとしてたの
?」

と、核心をついてきた。

もういまさら隠す必要もないので頷く。

「まあ、はやてにバイト紹介してもらったり。ミッドの人達のを借りてバイトしたり」

「俊くんバイトしたの!? 迷惑かけなかった!? 挨拶できた!? 泣かなかった!？」

「お前は俺の母さんか!? そんなことあるわけないだろ!？」

「で、でも……社会不適合者の俊がバイトだなんて……」

二人の俺に対する評価がわかった瞬間だった。

「でも……喜んでもらえてよかったよ」

こんな笑顔が見れたんだ。 頑張ったかいがあった。

アワアワと慌てながら、先方にどうやって謝ろうか相談している二人を強引にこっちに向けさせる。 勢いが大事だぞ! 俺!

二人を見つめる俺。

俺を見つめる二人。

見つけていたら何を言おうとしたか忘れてしまった。

「あの……どうしたの?」

「いや……その……。ごほんっ！　俺と一緒にいてくれてありがとう。二人を好きになってよかったです。その　これからも、俺と一緒にいてくれますか？」

俺の言葉にフェイトとなのはは顔を見合わせ、ふふつと笑った。

するりと俺から離れるなのは。　フェイトはおもむろに俺の顔を覆う。

「あの……フェイトさん……？」

「黙ってて」

「はい……」

なにがなにやらわからなかったが、言つとおりにする。

ガサガサ、ゴソゴソと何かを漁る音と、台所に向かう足音。　そして、

「フェイトちゃん。　もういいよ」

「うん」

フェイトの目隠しから解放された俺を待っていたのは

「「あ〜ん？」」

フォークにケーキを突き刺し、差し出すのはとフェイトがいた。

「……へ？」

「もう！ あ〜ん、ってば！ ほら、口あけて！」

「あ、うん」

操り人形のように口を開けると、そこに二人がケーキを運ぶ。

咀嚼する俺。

ふんわりとした生クリームと柔らかいスポンジケーキ、甘酸っぱいイチゴが口の中に広がって

「うまい……。うまいよこれ！」

思わず声を大にして叫んだ。

「「イエーイ！！」」

ハイタッチする二人。こんなにうまいケーキ作れたんだ！

「えへへ……。そういえば、さっき俊くんが言っていた答えだけ
ど」

「あ、それはもう」

「これが答えだよ、俊」

言い終わる前に、両頬に柔らかいものが触れる。

「私達以外に、キミを受け入れる所なんてあるとは思えないしね。あつてもまあ……手におえないと思うけど」

そついつて笑顔を魅せる二人に、俺の心臓が爆発した。

深夜11時。

幸せ気分でそのまま寝たかったが、どうしてもいかなければならぬ場所があった。

「はあ……気後れしてしまう」

玄関を軽くノックする。インターホンは使わない。

『ひよつとこなら首が飛ぶが……貴様は誰だ』

「残念でした、ひよつとこちゃんでした！」

シュツ！ 玄関からいきなり伸びてくる剣

「あぶな！？ いま完全に心臓狙いにきてただろ！？」

「主はやてからお前を家に入れると言われてたのでな」

「うぐツ……！？ そもそも、なんであいつは怒ってんだよ……」

「わからん。ただまあ帰れ。お前を切りたくて切りたくてしょうがないんだ」

「お前古代ベルカでは暴れん坊爆乳シグシグと言われてたたる」

「斬刑に処す」

「ごめんなさい!？」

シグシグが本気になってきたので、慌てて逃げる。 結局、はやてには会えずじまいか。

「あれ？ ひよつとこやん。 なにしてるん？」

と、思っていたら家の前でバツタリあった。

「いや、お前こそなにしてんだ？」

「わたしは、夜の散歩や」

「はあ!？ はやて一人でか!？ 危ないにもほどがあるだろ!？
ここらはミッドの変人たちの巣窟なんだから、お前一人で夜歩きは危険だぞ」

「でもなあ〜……。 夜の散歩は気持ちええし」

「心配だから俺を呼べ。 いや、呼んでくれ。 呼んでください。
一緒に歩くから。 いっただろ？ お前が呼ぶなら俺はすぐに駆けつけるって」

「……………まあ、考えとくわ。 ……歩くときは携帯に電話いれるから」

はやての言葉に大きく頷く。 実際は変人は多いけど、皆紳士で安全なだけだな。 俺より危険人物はいないのかもしれない。

はやては伸びをして、大きく息を吸い込んだ後、俺に話しかけてきた。

「それで？ なんのようなん？」

「いや……これを渡そうと思ってな」

ポケットにいれていたものをはやてに渡す。

「……え？ これ、わたしに？」

「まあな。 そのー、 ずっと俺のこと助けてくれてありがとう。 はやてがいなかったら、俺はダメだったと思う。 はやてに会えて ほんとうによかったよ」

作り笑顔じゃない、飾らない笑顔じゃない、素直な笑顔ではやてに言った。

はやては周囲をキョロキョロと見回したあと

「そ、そうなんか……。 ま、まあ頑張ったのはアンタやからな！ お疲れ様！ あ、それじゃお風呂入らんといけんし、もう帰るで」

と、マシンガンよろしく早口で家の中へとはいつていった。

「あいつ……早口言葉はやそうだな……」

幼馴染に新たな発見を見出しながら、俺は帰るのであった。

「いやー、久しぶりのお泊り会やけど、こっつ話しているとやっぱ濃い生活を送ってるやな〜、って実感するぞ」

「うん、濃すぎる毎日だね。ずっと喋りっぱなしだったから飲み物ほしいかも」

「あ、私も」

今日ははやてちゃんたちがお泊り会にきた。夕食を食べて、お風呂にはいって、パジャマに着替えて、女の子特有のパジャマパーティーと洒落込んだのはいいけど、六課設立から一昨日までのことを皆で振り返ったのが悪かった。濃すぎて濃すぎて……。

コンコンとノックする音、私が返事すると彼が飲み物をもってはいってきた。

「おまえらもう月曜日に変わったぞ？ 仕事は？」

「中止！ー！ー」

『さんせいー！ー！』

「いやはやてちゃん仕事はちゃんとしようよ!?　なんでみんなして賛成してるの!?!?」

堂々と中止と言い切るはやてちゃんはある意味すごい。

「あ、フェイト。　エリオとキャロは客室に寝かせたけど、それでいい?　ザッフィーついてるし大丈夫だと思うけど」

「うん、ありがとう」

彼とフェイトちゃんが話してる間に、皆はグラスを取り、飲み物を飲む。

「おっ、なかなかいけるやん」

「だろ?　色々なフルーツミキサーにかけて、フレッシュジュースにしてみた」

「おいひょっとこ。　あたしのだけ何か白い液体が浮いてるんだが」

「俺の精液　もとい、コンデンスミルクをいれておいた、冗談ですからスイングはやめてください!?!?」

「まったく、責任もってお前のと代えろ」

「へいへい。　うっさいババアだ……」

「久々に切れちゃったよ……。　ちょっとついてこい……」

ヴィータちゃんが、彼の首根つこを掴んで引きずる。抵抗する彼
だけど、シグナムさんが華麗にミゾをヒジ打ち動きを止める。

……相変わらず、ヴォルケンの皆は彼に容赦ないなあ……。

ドナドナよろしく白目むきながら連行される彼。

「ねえ、俊くん。ちょっと聞きたかったんだけどさ。俊くんが
くれた、ネックレスの花ってなんなの？ その言葉は？」

ずっと聞きたかったこの質問。土日とも、彼は忙しそうに動き回
っていたので聞くタイミングが見当たらなかったのだ。

ドアに頭をぶつけながらも、強引にヴィータちゃんによって外へと
連行されそうになる彼だが、律儀に答えてくれた。

「あーっと、あんまり恥ずかしいから花言葉は言わない。なのは
はサルトリイバラ、フェイトは葛クサ、はやてはコマツナギ。あとは
個人で調べること！」

「おい、ゴミクズ。誰が喋っていいと許可したんだ？」

「ええ！？ いつの間にか俺の人権がなくなってるんだけど！？」

「お前そもそも人間だったけ？」

「……生物の観点から見ると、人間だと思っ」

そんな二人のやり取りを聞きながら、携帯で何気なく調べる。そ
して出てきた花言葉に思わず顔がほころんだ。

まったく……恥ずかしいってば。

「あ！俺も考えたんだけどさ、これまでの俺たちの生活をちょっとフィクション混ぜながら本を書いてみようぜ！」

「また、バカなこといいだした。」

「それで、タイトルは？」

「“パンツ脱いたら通報された”とか」

『ボツ』

私達の生活もそうだけど、そのタイトルがミッドに出回るとか恐ろしすぎる。

これから本格的に夏になりですけど、ずっと監視でいられますように。

おやすみなさい

47・ありがとう(後書き)

これで第一部が終了です。

次から第二部です。

48・英霊になったとしても誰にも呼ばれないと思う

「いまなら英霊を呼び出せる気がする」

「は？ 英霊って、あの英霊？」

「そうそう、あの英霊」

リビングで向かい合いながらPSPで英雄の霊を召喚して戦う格闘ゲームをしていると、彼が唐突に言い出した。そろそろお薬の間だっけ？

「いや、そもそも英霊呼び出してどうするの？」

「ドッキリのプラカードを掲げてそのまま帰らせる」

「最悪にもほどがある！？ それ絶対怒られるよね！？」

「ランサー、自害せよ」

「ちよっぴりうまい！？」

流石暇人。

「でも呼び出すには媒体が必要だよ？ それはどうやって調達してくるの？」

「俺のパンツでどうにかならないかな？」

「ならないよ！ なにをどう間違ったらキミのパンツが宝具になるの！？」

「でも特A級ロストロギアだろ？」

「……そういえばそうだった」

はやてちゃん以上に動くロストロギアだった。

「あれ？ でも、キミの下着を媒体にするなら、未来のキミがくるんじゃない？」

「ふっ…… 士郎VSアーチャーの完全再現か」

「パンツ片手に大人が本気で戦ってる姿とかシユールすぎて泣きたくなってくるんだけど」

「何度も見てきた…… 香水の臭いがきつい45歳独身女性渡辺さんの裸も 加齢臭のする50歳独身女性青山さんの裸も 自称18歳実年齢40歳の板垣さんの裸も 俺自身が拒んでも見せられた……！ 俺が望んだものはそんなことではなかった……！ 俺はそんなものの為に……！ 守護者になどなったのではない……！！！」

「アーチャー お前、後悔してるのか。 お前には負けない！

誰かに負けるのはいい……、けど、自分には負けられない……！」

「もうやめて……！ 私の好きなシーンをこれ以上汚さないで……！」

いいよ！ どっちが勝ってもむなし勝利しか残らないよ！ この

戦い！

「こういう設定にすると、これがとても悲しくなってくるよな」

それは本当に小さな願いで

それさえも世界は叶えることはなくて

それでもキミは理想を夢見て

馬鹿みたいに夢を語って

最後は裏切り続ける世界に絶望したのでした

「それただ単にモテなかったただけだから！？ 世界のせいしちやダメだから！？」

「先代たちから託されたユメがある。童貞卒業というユメだ。それを目指して続けていれば、いつか世界の全てを救う事が出来るだろう、と思い込んでいた」

「自意識過剰も甚だしいよ！！ それで救える世界なんてキミの世界だけでしょ！？ 管理局バカにしてんの！？」

「そんな愚かな自分が、酷く滑稽に思えて…… その愚かな自分の人生を消そうと思ったんだ」

「そのまま死んでよ！」

「全てを救うことができれば自分の童貞も救われると思ったんだ」

「なに恰好つけてんの！？ 全然恰好よくないからね！？」

「こんな世界を夢見たんじゃない……」

「もうやめて！？」

「結局誰一人、会うことがなかった……」

「会う人全員に避けられたんだね」

「童貞の末路がこれが ところで間違っただろう」

「たぶん小学校に上がるくらいじゃないかな」

「どこで想ってしまったのだろう」

「いや……想うのはいいと思うけど……」

「過ちが生まれた場所 始まりの思いが あの時の誓いこそが、
全ての過ち それは、叶うはずのない望みなのに また願って
しまった。 30歳にして、願ってしまった」

「もうやめてよお……。心が折れそうだよ……」

「奇跡があるとするならば、童貞を否定することは可能なのだろうか。 傾く下腹部、ゴムか生かの選択肢……。 年を経ることに遠

ざかる理想郷。世界はそれほど残酷で、いつも嘲笑しながら見ていた。自分はそれほど愚かだった。貫くことはなく、ただただ股間と右手を擦り切れるほどコスっていた。嘆き、苦しみ、モーターをじっと見つめ、やがて精子は枯れていった」

「もうゲームの続きしよ。ね？今度は私がアーチャー使おうかな？なんて言ってみたり」

股間にはオナホが装着されている

オナ禁はせずに 一日3回は当たり前

幾たびの戦場を妄想して16年

ただの一度の前進はなく

ただ一度のピストンでラブドールは無残にも破裂する

彼の者は常に独り USB連動オナホを片手に勝利に酔う。

故にソープに意味はなく、その股間は きっとインポになっていた。

固有結界 “ 不可能な股間と無限のオナホ ”

「……………言つべきことは？」

「答えは得たよ、なのは。オレ、謝ってくる」

「いつてらっしやい」

彼の頭が本気で心配になってきた。

48・英霊になったとしても誰にも呼ばれないと思う(後書き)

この早さを言える

いじめなれこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663y/>

パンツ脱いたら通報された

2012年1月12日00時58分発行